ＩＳ　もう一つの翼

緋星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　もう一つの翼

【Ｎコード】
Ｎ５２１５Ｕ

【作者名】
緋星

【あらすじ】
ＩＳ、それは女性のみが装着する事が出来る世界最強の兵器。それを装着できる唯一の男、織斑一夏。しかし、ＩＳを装着できる男が世界にもう一人だけ存在していた・・・
これはＩＳ―インフィニット・ストラトス―の二次創作、オリジナルストーリーです。作者の妄想が現世に流失した物です。もし「俺のＩＳを汚すんじゃねぇ！この豚が！」という人は絶対にクリックしない様にしましょう。もし「オリジナル？面白い、見せてみろ」という人は覚悟完了してからクリックするようにお願いします。

考えてた設定が変わったために本文がほんの少しだけ変わりました。

設定1（前書き）

どうもこんにちは、緋星と申すものでございます。今回、初作品ということで拙い文章や誤字脱字が多く、あらゆる意味でペーペーな作品になるかもしれませんが、どうかどうか生温かい眼で見守って居てくださいm（＿＿）m

設定1

さて、今回の作品はＩＳ―インフィニット・ストラトス―のオリジナルストーリーということで、オリキャラとオリＩＳの説明をしておきたいと思います。

黒瀬零司　―クロセ　レイジ―
十七歳　（今年で十八になる）
身長：一夏よりも３ｃｍくらい高い
体重：身長と比例
ＩＳ適正：Ａ

主人公。織斑一夏同様にＩＳを使える男。少し長めの黒髪と青っぽい黒眼の少年。両親は日本人だが、祖母がドイツ人であり、いわゆるクォーター。

出身も日本だが七年前にドイツに渡り、そちらで生活していた。実際は一夏よりも早くＩＳを動かせていたが、ドイツがその情報を独占する為に世界に公表されていなかった存在。

ドイツに渡ってすぐに研究施設に隔離され、そこで死と隣り合わせの戦闘訓練を受けることにより卓越した戦闘能力を得ている。そしてその二年後に織斑千冬に研究施設から連れ出され、彼女の愛弟子としてＩＳの修業を積んでいた。

その二つの出来事とずば抜けたセンスから、単純戦闘、ＩＳ操縦者、双方共に他者を圧倒するほどの実力を得た。しかしその後、妹の奏を人質に取られた為にドイツ軍に入隊。奏を取り戻すという目的を持ち、戦場では多大な戦果を叩き出し、数年で大尉にまで昇進した。

しかし、その数年後に軍を退役して、ＩＳに対するトラウマを抱えたまま日本へと帰国した。

そして現在、自身の師であった織斑千冬からの連絡を受けて、日本政府から保護されるような形でＩＳ学園へと入学した。

性格は気さくで明るく、社交的。ただ大切な人や守りたいものが危険に陥ると、自分の身を投げ出してでも守ろうとする、よく言えば勇敢、悪く言えば無謀な面も持ち合わせており、妹の奏からはよく「無茶だけはするな」と言われている。

因みにルックスも良く、年上らしい余裕が垣間見えるところから入学当初は一夏ともども多大な人気を誇っていたが、今のところ学園の女子達には「頼れるお兄さん」的な立ち位置に落ち着いている。

作者コメント

キャラ的には俺の理想の兄貴像をモチーフにして描いてみました。優しく、頼れる、強い兄貴。社交性がある為に結構誰とでも絡める万能キャラでもあります。現に専用機持ち達とも仲が良いですから、なんという八方美人、世の中そんなに甘くないって？　わかってますよそんなこと。ドイツ人とのクォーターというのは最初は完全に俺の趣味でした。ドイツ、カッコいいよね。ドイツの科学力は世界一ィィィィィィ！！

因みに最初期の設定では一夏と箒で三角関係をやろうとしたのはここだけの話。

黒瀬奏　―クロセ　カナデ―

十五歳

零司の妹。天才児であり、現代における第三世代ＩＳの開発に大きく関わっている少女。生まれつき身体が弱く、主にベッドの上での生活を余儀なくされている。

篠ノ乃束とはＩＳ開発の関係で知り合い、かなり気に入られている様子（かーなんと愛称で呼ばれている）。

結構なブラコンであり、第三世代ＩＳの開発に関わったのは零司がＩＳを乗れると知ったからである。病弱な身体でありながらも何故か身体はスクスクと成長し、大人しい性格のせいもあってか、かなり大人びて見えてしまっており（零司と並んで見ると姉ではと勘違いされてしまうほど）、本人は少しそれを気にしている。

作者コメント

妹可愛いよ、妹。作者も妹欲しかったな・・・大概、このセリフを妹がいる人の前で言うと「妹なんてロクなもんじゃない」って言いますよね。いいんです、ロクなもんじゃなくても。俺は妹がほしい、ただ単純な理由だが（ｒｙ

彼女もある意味、理想の妹を描いてみたつもりです。天才っていうのは単純に束さんと絡めるキャラが欲しかったからです。後悔はしていない。まあ、重要人物であることは確かなので、今後の展開に期待ですね。

オリジナルＩＳ

黒天　－コクテン－

零司の搭乗する漆黒の第三世代。全身装甲に大型ハイパーセンサーといった、現段階の第三世代とは大きく形の違ったＩＳ。基本性能は他の第三世代と比べて平均的だが、この機体特有の『改良領域』の操作と他の追随を許さないほどの大量『拡張領域』によりあらゆる戦闘に最も適した状態で戦うことが可能となっている。加えて零司自身のＩＳ操縦の腕が良い為、現段階ではＩＳ学園内でも最強クラスの戦闘力を誇っている。

基本武装

アサルトライフル『Ａｎｎａ』×１

ショットガン『Ｄａｌｉａ』×１

大型近接ブレード『Ｖｉｃｔｏｒ』×１

ハンドガン『Ｌｉｓａ』×２

小型パイルバンカー『Ｄｅｎｉｓ』×２

作者コメント

正直、この機体を考えるのに苦労しました。主人公の機体ということで、何か派手さないと味気ない。けれどもあまり効率の悪い戦い方をするような性格ではないし・・・といった感じです。結果、効率を取ってこうなりました。ある意味、妥協案ってやつですね、ハハッ・・・ハァ。

でも、まだ単一使用が出てきていませんので、そちらで派手にやらせていただきますよ。

因みに機体のモチーフはＡＣ４のアーリアです。レイレナード製はカッコいい。

設定１（後書き）

は～い、今のところはこの二名だけですね。いやぁ、設定も拙いですね（；一ω一）。ですが、もしこんなオリキャラ、今後出るであろうオリＩＳ、そしてそれにより展開されるオリジナルストーリー、もし許してもらえるなら一目でいいので見てもらいたいと思います・・・まあ、ただの願望なんですが（＾ω＾；）。

それでは、次はプロローグで会いましょう　（＾ω＾）ノシ

プロローグ（前書き）

ついに始まってしまいました。文才のない文章をお見せしますが、どうか汚物を見るような眼で見ないで・・・（ノω＼）

プロローグ

季節は春、桜の花が蕾から花開くのも時間の問題であろう三月下旬。
そんな時期、日本の地方都市のベッドタウンとして建設された街のとある一軒家。二階建てであり、一家庭が住めるくらいの広さはあり、一人暮らしとして使うには勿体ない様な家だ。

「ふぅ～・・・すっきりすっきりっと・・・」

そんな家のバスルームからパンツ一丁姿で出ると、俺は全身にへばりついたシャワーの残り湯をバスタオルで吹き取りながらリビングに向かい、近場の椅子に腰を下ろした。そしてやる事も無いので目の前にあるテーブルの上に転がっていたチャンネルを手に取り、テレビの電源を入れる。

「――からです。学園から卒業式を終えて、三年生が卒業生として学園から出てきました！」

電源が入るとニュースが始まり、ニュースキャスターの後ろに映し出されているそこには学園と本島を繋ぐモノレール駅から大量の女子が出てくるのが見えた。制服の作りを見るに、どうやらその女子達はＩＳ学園の卒業生のようだ。

ＩＳ、それは宇宙空間での運用を思案されて作られたマルチフォーム・スーツ。正式名称は『インフィニット・ストラトス』。まあ、宇宙での運用なんて言われていたのはもう何年も前の話であり、『製作者』の意図から外れたそれは圧倒的な性能を持てあまし、とある点に行きついた。それは『兵器』だ。戦争兵器として、ＩＳの性能はもはや既存の兵器の性能を遥かに上回っていた。各国が望んだ、

まさに理想の兵器だったのだ。

それを危険と見た各政府は『アラスカ条約』を締結し、ＩＳを競技用として『スポーツ』とする事によって落ち着いた。

「しっかしまぁ、本当に女ばっかりだな・・・当然だけどさ」

当然、と言うのはＩＳの・・・ある意味欠陥ともいえる特性があるからだ。このＩＳ、何と女しか扱う事が出来ないのだ。

何故このような特性を持っている、否、何故『製作者』はこのような特性をＩＳに付けたのか。真相は定かではないが、問い詰める者ももうおらず、それが常識として世界に知れている。かに言う俺もそこまで疑問に思っていない。

「疑問に思うほどでもないしな・・・それに――」

それに俺は知っている。その常識が完全ではない事を知っている。全てと言わずとも、この世の出来事には大概例外が存在するものだ。

・・・プルルルッ・・・プルルルッ・・・

「・・・・ん？」

そんな事を考えていると不意に音が聞こえた。それは俺の携帯電話だった（着信音は１）。

「誰からだ？」

首を傾げて、電話へと向かう。正直、俺は自分の電話が鳴った事に

驚いていた。時刻は丁度正午を回った頃、時間としては電話が来ても何の不思議も無い時間帯だが問題はこれが俺の携帯電話だと言う事だ。俺はこの携帯電話の番号を知っている人物は少なく、必然的に限られており、その人物達はどれも二度と電話の来ないであろうと思っていた人物達だったからだ。

「これは・・・」

手に取って、着信を知らせる液晶画面を見てさらに驚きを大きくした。俺は少し戸惑いながらも、着信のボタンを押して携帯電話を耳にあてた。

「・・・もしもし?」

『出るのが遅い』

出ると早々に不機嫌そうな声が飛んだ・・・いきなりお叱りですか、相変わらず変わってないなこの人・・・

「すいませんね、風呂上がりだったもんで」

『こんな時間に風呂とは、お前は乙女か・・・』

そんな呆れ声で言われてもな、汗かいたらシャワーだって浴びるだろう。ちなみに汗は倉庫整理のバイトで掻いたものだ。

『まあ、それはそうと・・・久しぶりだな、零司』

ふと声色が優しくなる。俺は無意識に入っていた肩の力を抜いて、少し緩む頬を掻きながら返事を返した。

「お久しぶりです、千冬さん」

電話の相手は織斑千冬さん。俺の知り合いであり、恩師でもある人物だった。しかし、今更俺に何の用なのだろうか。

「一体どうしたんですか？俺なんかに電話なんて・・・それに今は卒業式の片付けとかで忙しいんじゃないですか？」

『卒業式か・・・見てたのか？』

「テレビでやってますよ。さすがに卒業式の現場に居合わせた訳じゃないです」

『だろうな、今何処に居る？』

「家です」

『家？そんなものあったのか？』

「あー、ほら妹の・・・奏の持ちものの家ですよ。千冬さんも来たことあるでしょ」

『あれか・・・まあ、身を隠すにはいいかもな』

妹の持ちモノ。はたから訊いたら首を傾げるような言葉だが俺の事情を知っている千冬さんはただ納得したのか、そう呟いた。

「まあ、そんな話はいいとして・・・結局何用ですか？」

『ああ、そうだったな。では単刀直入に言おう』

「はい、どうぞ」

『ＩＳ学園に来い、零司』

・・・・・・はい？今、このお方は何とおっしゃいましたか？

「・・・・今、何と？」

『ＩＳ学園に来い、と言ったんだ。同じ事を言わせるな』

いや、いやいやいやいや。訊き間違いかと訊き返したくなるような内容を言っておいてそんなこと言わんで下さいよ。どうしていきなりそんな事を言い出すんですか。

「ＩＳ学園って、またなんで急にそんな・・・」

『実はな、お前の情報がドイツから日本に流れたらしい』

「・・・え？」

お前の情報、という言葉を訊いて頭の中が一瞬で冴えてきた。ドイツにある俺の情報、その上に千冬さんが取り上げるほどの事と言うと一つしか思い浮かばない。

「それって・・・」

『ああ、お前がＩＳを使えるという情報だ』

やっぱりか。ため息を吐きながら頭を抱える。俺、黒瀬零司は男である。生物学的にも精製心的にも正真正銘、まっとうは健全男子である。それなのに『ＩＳを使えるという情報』がドイツから流出するなんて、その情報自体おかしいんじゃないかと思う人間も多いだろう。だが、それは紛れもない真実なのだ。先に話した例外の話。それはこういう事だ。

そう、俺は『世界で初めてＩＳを使った男』なのだ。

『政府側としては情報の信憑性を確かめた後にお前を即刻、ＩＳ学園へと強制連行するらしい』

「つまり俺にＩＳ学園に来いってのはその手間を省けさせろってことですか？」

『根掘り葉掘り聞かれるとお前にとって厄介な事しかないだろう。どちらにしろ、ここには来ることになるんだ。準備はしておけ』

話を聞いて、俺は黙りこんだ。条件としては正直、悪いものではない。一人暮らしでの金銭関係も気にしないでいい上に寝どこまで用意してくれるのだ。

「千冬さん、でも俺は・・・」

だが、俺には決定的に駄目な点が一つだけあった。どうしても駄目な点が・・・これがある限り、俺は・・・

『構わんさ』

「え？」

『お前のアレは精神的な問題だ。直そうとすれば直せる』

「だけど・・・」

『お前の精神状態も大分落ち着いてきただろう・・・大丈夫さ』

「・・・・・・」

千冬さんからこんな優しい言葉を掛けられるのはもしかして初めてかもしれない。それだけこの人は俺に期待してくれているのだろうか・・・

『それに・・・お前はどうなんだ?』

「俺?」

『ああ、お前はもうＩＳには乗りたくないか?』

その言葉を訊いて俺は無言で左手を握り締め――

「乗りたいです・・・」

――と答えた。

『・・・分かった、手続きはこちらで済ませる。すぐに迎えの者を送るから来るまでお前は準備してそこに待機していろ』

そう言うと電話が切れた。俺は携帯電話は持ったまま、さっきまで座っていた椅子に腰を下ろす。まさか、再びＩＳに関わる事になる

とは思わなかった。だがこれが望まれた事であるなら、丁度いいのかもしれない。

「色々と吹っ切れるかもな」

横へ視線を移す。そこには一つの写真立て。四人の女・・・俺と同年代くらいの女子達が作りの同じ黒い服を着て、俺と一緒に映っている。

「さてと・・・じゃあ準備するか」

写真への一瞥を終えて、腰を上げると携帯電話の電話帳を開いて、とある人物を呼び出す。一、二秒程度の呼び出しで相手はすぐに電話に出てくれた。

『もしもし、お兄ちゃんですか？』

「奏、俺ＩＳ学園に行くことになったよ」

『ええ！？』

「だからこの家を空ける事になるから、そこんとこよろしく」

『そ、そんないきなり・・・ちゃんと説明をして――』

プツンッ。長い文句は後で訊くことにして電話を切り、俺は自室へと向かう。その足取りは少し高揚を孕んだように軽く感じていた。

プロローグ（後書き）

というわけで、プロローグです。う～ん、なんか駄目だな（；＾ω＾）。正直、もっとしっかり描きたいのですが色々用事が重なっちゃいまして、その合間に描いているのでクオリティはあまり期待できないですね（言い訳乙）。あと千冬姉のキャラ、なんか違うかも・・・もう一回小説読み直すかな（；―ω―）。ま、こんな感じで続けさせていただこうと思います（作者の限界が来るまでは）。それでは、またです～（＾ω＾）ノシ

ＥＰ１　花咲く学園（前書き）

一話投稿です。どれだけの人が見てくださっているかわからないけど、遅くなって申し訳ないｍ（＿＿）ｍ。ちなみに時間系列と展開は原作に沿って行くつもりですよ（＾ω＾）。

ＥＰ１　花咲く学園

「全員揃ってますねー。それじゃあＳＨＲ始めますよー」

ニコニコと笑顔を浮かべる副担任の女性教師、山田真耶先生。大きめなのかダボついた服に黒ぶち眼鏡をかけた、年上ながら可愛らしいという言葉が似合う感じの先生だな。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「・・・・・・」

礼儀正しく挨拶をするが、クラスの人間は誰一人として返事を返さない。ちょっと可哀そうだなと思った俺は控えめに返事を返すことにした。

「・・・よろしくお願いします、山田先生」

「あ・・・は、はい！よろしくお願いします、黒瀬君！」

一瞬、焦った表情になった山田先生は再び笑顔を浮かべ、頭を下げた。だが教室を支配する緊張感は抜ける事無く、精神的プレッシャーとして俺に襲い掛かってくる。それはどうしてかというと・・・クラスメイト達がこちらを直視しているからである。

「じゃあ、事項紹介をお願いします。出席番号順で」

しかもクラスメイト達とは一人二人ではなく、ほぼ全員である。この学園はＩＳ学園。つまりＩＳの乗り手を育てる学園だ。となれば、

無論学園には女子しかおらず、しかもその女子達はうら若き十五歳の乙女達だ。そこに男子という異物を放り込んだら、こうなるだろうとは薄々感じていたが・・・まさかここまでとは・・・初めて日本に入ってきたパンダってのはこういう気分だったんだろうな。しかしまあ、こういうところにも例外というものが存在するわけで・・・・

「織斑君、織斑一夏君っ」

「は、はいっ！」

山田先生に大声で呼ばれたとある生徒が裏返った声で返事をした。名前は織斑一夏。この人物こそが、例外だ。

その例外たる由縁は俺と同じだ。織斑一夏は男だということだ。

俺と同じ、ＩＳを扱うことのできる男。世界で二人だけという内の一人だ。そう、この世界でＩＳを動かせる男というのは、今のところ俺と彼しかいない。どうして二人だけなのか、理由は分からないが、実際そうなのだ。その件でどうこう言ってくる奴もいるかもしれないが、事実なのだから仕方ない。

「あの、大声出しちゃってごめんなさい。でも自己紹介は出席番号順で、『あ』から始まって今は『お』の織斑君なんだよね。だからね、自己紹介てくれないかな？ダメかな？」

最初に挨拶を返したのが良かったのか知らないが、頭を下げる山田先生は思った以上に取り乱すこともなく、困った顔をしていた。

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・っていうか自己紹介し

ますから先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですね?約束ですよ、絶対ですよ?」

そう言って織斑の手を握って詰め寄る。山田先生、熱心なのはいいですけど、織斑が苦笑してますよ。

そうして事項紹介をする為に織斑は椅子から立ち上がった。そしてまるで喉に物が詰まったような表情を浮かべた。クラス中の視線（俺を除く）が一気に織斑へと収束した。

「・・・・・・」

ふと織斑がこちらに視線を向けた。まるで救いを求めているようにも見える。そりゃそうだろうなぁ、こんな視線に晒されたら、一般の人間なら精神的にクルものがあるだろう。俺だって、あんなの嫌だし・・・なので俺は

（がんばれよ）

と親指を立てておくことにした。すまんな織斑、俺にできる事はこれくらいしかない。

「グッ・・・えー・・・えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう言って儀礼的に頭を下げ、上げる。そして周囲から『もっと喋ってよ』的な空気になってしまった。頑張れ織斑、男の見せどころだ。

「以上です！」

だが織斑のトドメの一言によって、その空気は打ち壊された。たぶん、本当に話のネタがなかったんだろう・・・だが、これはヒドイ。見ろよ、山田先生涙目になってるぞ。

そう思った次の瞬間――

パァンッ!!

「いっ――――!?」

出席簿が織斑の頭に落ちてきた。いや、落ちてきたっていっても何もないところから現れたなんて心霊現象的なことではなく、普通に出席簿でぶん殴られたんだけどな。

「・・・・」

振り返る織斑はギョッとした顔をした。背後にいた人物。黒いスーツにタイトスカート、すらりとした長身に美しいボディライン。まさしく最高潮クラスのスタイルを持ち、それとは不釣り合いな肉食動物のような吊り目をした、そんな女性だった。

「げぇっ、関羽!?」

パァン。出席簿チョップが追加された。しかし、関羽か・・・・若干うなずけてしまう自分がここにいる・・・

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

少しハスキーな声。しかし自分の弟だろうに、そんな乱暴に扱って

やるなよ・・・

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

織斑先生。この単語で分かるかもしれないが、彼女は織斑一夏の姉、織斑千冬。俺をこの場所へと引き摺り・・・オホン、避難させた人物でもある。

「い、いえっ。担任ですから、これくらいはしないと・・・」

千冬さんが現れたことで少し落ち着いたのか、少しはにかんで熱っぽい声で答えた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ないものには出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

う～む、教師とは思えない宣言。やっぱり教師よりも教官の方が向いてると思うぞ、千冬さん。

「キャーーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

一人の女子の声を口火にクラス全体から黄色い声援が湧いた。きゃいきゃいと騒ぐ女子達に対して、千冬さんは心底うっとうしそうな顔をしていた。

「・・・毎年、よくこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か?私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

どうやら本気でうっとうしがっているようだ。昔からこの人、騒がれるのは好きじゃないみたいだったしな・・・

「でもこれも人徳なんだから素直に受け取っておけばいいのにね・・・全くもったいない。その美貌くらいもったいない」

「聞こえてるぞ、黒瀬」

そう言うと千冬さんは俺の事を睨んでいた。おお怖い、さすがはドイツでは冷将と呼ばれた教官殿だ。今でも若干身震いするぜ・・・

「あれ、聞こえてたんですか。こっそり言ったつもりだったんですけど」

「残念ながら私は地獄耳なんだ・・・誰かさんのおかげでな」

誰かさん・・・・それって俺の事か?そんな馬鹿な、俺は千冬さんの悪口を両手で数える程度しか言ったことないぞ。

「そんな濡れ衣ですよ、千冬さん――」

「織斑先生と呼べ、この馬鹿者が」

パアンッ!鋭い一撃が俺の頭蓋を揺らし、脳にまで振動を響かせる。ああ、なんか痛いけど・・・懐かしいね、これ。

「まったく・・・で、織斑」

「え？」

「自己紹介もまともにできんのか、お前は」

「いや、でも千冬姉、俺は――」

「だから織斑先生と呼べ」

織斑の頭にも俺と同じ一撃がさらに追加された。実の弟にも容赦ないのね、この人・・・実の弟だからか？

「お前達二人は私の事を織斑先生と呼ぶ、そこからまず始めろ。この馬鹿二人が」

「「・・・はい、織斑先生」」

俺と織斑は二人揃って頭を下げた。そしてそんな事をしていると、教室から驚きの色を含んだ声が上がった。

「え？・・・織斑君って、あの千冬様の弟・・・？」

「それに黒瀬君もどうも千冬様と妙に親しそうだし・・・知り合いなのかしら」

「世界でＩＳを使える二人だけの男で千冬様の関係者なんだ・・・なんだか運命的！」

あれま、なんだかすっかり盛り上がって来てしまった。さすがは噂

に五月蠅い年頃の女子。こういうのは大好物と見える。

まあ千冬さんで騒ぐなら、なんでこっちは騒がないのかっていう人物もいるんだがね。

「・・・・・・」

チラッと左前の方に座っている女子へと視線を向ける。篠ノ之箒、凛とした顔立ちに釣り上がった目は千冬さんほどではないが気の強い娘なのだという事を物語っている。この少女はかの篠ノ乃束の妹さんだ。むしろ千冬さんの事を騒ぐよりもこっちで騒ぐと俺は思うんだが・・・やっぱりＩＳ世界大会元日本代表選手としての知名度があるからかね。

キーンコーンカーンコーン・・・

そんな事を思っているとチャイムが教室に鳴り響いた。どうやらＳＨＲは終了らしい。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で身体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんというか本当に教官ってかんじだな。しかも鬼のつく教官。冷血で鬼教官な教師・・・やべえな、さっそくこの学校から逃げ出したくなってきた・・・

「はい、じゃあ一時間目はここまでです」

一時間目のＩＳ基礎理論授業が終わり、山田先生は次の授業の用意を取りに一旦、教室から出て行った。そんな山田先生を横目で見ながら俺は――

「・・・くぁ」

欠伸を噛み殺していた。いや、別に寝不足とかではない。昨日だって十一時には就寝した。これでもかってくらい健康的な就寝時間だった。しかし、人間は退屈になるとどうも欠伸が出てしまう生物なのだ。退屈というのも、別に山田先生の授業が下手なわけではない（むしろとても分かりやすく、授業説明はむしろ上手い）。ただ俺はもうすでにＩＳを使っていた訳であり、基礎知識は全て揃っている。欠伸をするなんて失礼ではあると理解しているが知っている事をただ話されても退屈になるのはいささか仕方のない事なのだ。

「しっかしまあ・・・凄いな、こりゃ」

まあ授業の事はさておき、今は休み時間。欠伸をしようが構わない時間だが、どうも周りからの視線が気になってしまい、少し落ち着かない。

その視線はクラスからものも多いが、クラスの外からも感じる。見るとクラスの外に女子生徒達が押し掛けて来ている。どうやら俺と織斑の噂を聞きつけてきた他のクラスや上級生達のようだ。この学園には女子生徒しかいない上に彼女らはおそらく前の学校もＩＳ学習を組み入れた女子校だったのだろう。だとすれば今までの学園生活で男子に免疫を持たなかった彼女らにとって男子というのは新鮮であり、興味の対象としてこれ以上のものはない。

「・・・そんなんだったら話しかけてくれた方がまだマシなんだがな」

ま、それが出来ないから廊下でひしめき合っているのだろうけど・・・

「織斑とでも話そうかと思ったが・・・いないし」

唯一同じ男子である織斑は篠ノ之に呼ばれて何処かへ行ってしまった。せっかくの幼馴染同士の再会を邪魔するほど俺も無粋な事はしたくないが、ちょっと声くらい掛けておきたかったな、同じ男子として。

「あ・・・」

なんて事をしていると、不意に隣の席から声が上がり、足ものに何かぶつかった感触を感じた。見てみると、そこには消しゴムが一つ。どうやら次の授業の準備をしていて落としてしまったようだ。俺はそれを拾い上げると、警戒されぬようにできるだけ柔和な笑みを浮かべて、隣の席に座っていた青い短髪の女子へと差し出す。

「君のだろ？・・・えっと、青嶋さん」

「う、うん・・・あ、ありがとう・・・」

照れたように頬を朱色に染めて、何故かカチコチとした感じでゆっくりと頭を下げながら俺から消しゴムを受け取る女子、青嶋さん。なんというか本当に男子に対しての免疫が無いんだな、ここの生徒は。

「・・・そんなに固くなる事はないぞ？」

「え・・・い、いやあの・・・わ、私は普通だよ・・・あは、あはは」

笑いが完全に引き攣っている。こんな感じなのか？ここでは男子に対する反応はこれが正常なのか？

「そうか・・・ま、あんまり固くならずに力を抜いていこうぜ」

あんまりしつこくしてもアレだろうから、そう告げて俺は再び前を向く。ああ、織斑は幸運だな。同じクラスに幼馴染が居るんだから・・・なんか自己紹介の時は全く助けてくれなかったみたいだけど・・・

「友達とか作れるのかねぇ・・・この状況で」

「ちょっと、よろしくて？」

今後の学園生活を思い浮かべて、少し肩を落としていると背後から声がした。だがおそらくそれは俺に対してではないだろう。

「そこのあなた、聞こえてますの？」

おい、誰だよ。無視してないで反応してやれよ。これじゃちょっと可哀想だろ。

「あの・・・黒瀬君」

おや、青嶋が声をかけて来てくれた。なんだ、ちゃんと話しかけて

くれるなんて勇気のある娘じゃないか、お兄さん見直しちゃったよ。

「うん？なんだ？」

「あの、セシリアさんが呼んでる・・・みたいなんだけど」

「・・・え？」

首だけで振り返ると、そこには腕組みをしてこちらを睨んでいる女子が一人。肌が若干白く、青い瞳を見るところ白人だろう。ロールの掛った金髪がとても綺麗な少女だった。ただ彼女の全身から溢れ出す『オーラ』の様なものだろうか、それによってなんだか性格がある程度分かってしまった。

彼女はいわゆる、『今時の女子』なのだろう。

ＩＳにおける女性優遇の所為で男性を見下すようになってしまった、そんな女。当たり前の形なのだろうけど、俺はちょっと行き過ぎていると思うところがある。しかし時代がそうなれば、人間も変わってしまう。今の時代はそういう時代なのだ。

「ああ、悪い。てっきり俺じゃない人に話しかけてるものかと・・・」

「まったく、他人に注意されて気付くなんてどういうことですの？私に話しかけられるだけで光栄だというのに・・・それ相応の態度を取ってほしいものですわね」

そう、こんな感じ。無意味に偉そうで、それでいて本当に自分の方が偉いと思っている。いやだね、こういうのは。だけどそこでちゃんと対応しないとね。

「そうだね、そういう対応したいね。でも名前も名乗らない相手に礼儀を言われるのはちょっとね」
礼儀は大事だよ、礼儀は。どこぞの国じゃ不敬罪って言われて首飛ばされちゃうんだからね。それってイギリスだっけ？
「・・・私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生にして、入試主席のこの私を！？」
名前セシリアって言うのか、主席なんて凄いじゃないか・・・・って――
「代表候補生？・・・・君が？」
「な、なんですの！！その反応は！！」
単純に驚いて訊き返してしまった。こんな近くに代表候補生が居るとは思えなかった。そしてどうやらさっきの発言は彼女――オルコットの神経を逆撫でしてしまったらしい。
「あなた・・・私を愚弄しましたわね！！あなた程度の、つい先日までＩＳに関わりもしなかった一平民のクセに！！」
いやぁ、今まで関わってないって言ったら完全に嘘になっちゃうんですけど・・・黙ってなきゃならんな。一応、俺は織斑と同じタイミングで見つかったＩＳ操縦者だからな。下手な言動は避けなければ。
「いや、別に愚弄したとかそういう意味じゃ――」

「決闘!!決闘ですわ!!」

「はいぃ?」

駄目だ、この娘完全に頭に血が上っちゃってるな。全然俺の話が通ってない。

「ちょっとＩＳについて教授して差し上げようと思ったら・・・許せませんわ!!」

「あー・・・とりあえず落ち着いてくれ。これじゃまともに話もできん」

「あなたから喧嘩を売っておいて何を――!!」

キーンコーンカーンコーン

話の間を割る様にして二限目の授業開始のチャイムが鳴り響いた。

「くっ・・・!良いですこと!?私に対する愚弄は決して許しません!!その罪は償ってもらいますわ!!」

「あ、おいちょっ――」

俺の制止も虚しく、オルコットは自分の席へと戻って行ってしまった。結局、変に誤解されたままになってしまった。ううむ、なんというか間の良いと言うか、悪いというか・・・

「・・・初日からなんか面倒な事になりそうだ・・・・」

「授業始めるぞ、席に着け」

ため息混じりの呟きは千冬さんの凛々しい声によって、かき消されて行った。

「それではこの時間は実践で使用する各種武器の特性について説明する」

教壇には山田先生ではなく、千冬さんが立っている。三時間目、オルコットからの追及を逃れてどうにか普通に授業を送っている。しかし千冬さん、教壇に立っても様になっているな。教師よりも教官とか言ったけど、こっちも似合っている。つまり教える側が似合っているという事なのだろう。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

授業を進めようとして、ふと思い出したように千冬さんが言う。クラス対抗戦？

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。なるほど、クラス対抗戦か。なかなか面白いかもしれない。確かに競争させることで向上心を生ませるのは正論だ。さてはて、誰が推薦されるのか・・・

「はい、織斑君を推薦します！！」

ですよね～、織斑君一択ですよね～。

「私もそれがいいと思います」

おお、どんどん織斑が推薦されて行く。こりゃ織斑安定だな。こちらに飛び火する事はないだろう。

「では織斑一夏・・・他にいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

ワンテンポ遅れて驚いたのか、立ち上がると視線の一斉射撃をくらう織斑。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！！俺はそんなのやらな――」

「俺も織斑がいいと思います」

「なぁ！？」

俺が手を上げて言うと、織斑は「この裏切り者！」といった感じに俺の事を見てきた。残念だったな、織斑。俺の安定した学園生活の為に生贄になってくれたまえ。

「自薦他薦を問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。

選ばれた以上は覚悟しろ」

「いや、でも――」

「腹決めろ、織斑。それでも男か」

「推薦したお前が言うな！！」

非難をしてくる織斑に笑いを返す。それに織斑の方がクラス代表選も盛り上がるだろう。なんてったって千冬さんの弟だ。『モンド・グロッソ』での試合張りに活躍してくれとは言わないが、いい試合が見れるんじゃないかと俺はひそかに期待している。

「あの・・・黒瀬君がいいと思います」

そうそう、俺なんかよりも絶対に織斑の方がいい試合を・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・え？」

俺の名字を口走った人物を見る為に首を横に曲げる。青嶋がしっかりと右手を上げていた。

「じゃあ私も黒瀬君にします！」

「私も！」

「は？え？ちょ？」

青嶋の一言から一気に感染するかのように次々に俺の名前が挙がっ

て行く。

「では黒瀬零司・・・他には？」

「ちょっ、ちょっと待った！！」

立ち上がって、何事もなかったように事を進めようとする千冬さんにストップを呼び掛ける。千冬さんは二度目の作業障害にうんざりしているのか、呆れたように俺を見て言った。

「立つな、座れ。同じ事を言わせるな。それでもお前は黒瀬か」

「いや、その理由は意味わかんないんですけどそれはいいとして！！俺はやりたくなんかーー」

「腹決めろよ、黒瀬。日本男児だろ？」

織斑は仕返しと言わんばかりにニヤリと笑った。おのれ、してやったみたいな顔しやがってこの野郎。

「さて、他にはいないのか？いないならこの二人から決める事になるがーー」

「待ってください！！」

ああ、そして聞き覚えのある声が聞こえる。このタイミングで何を言い出すのですか、オルコットさんよう。頼むから変に場を引っかき回してくれるなよ・・・

「代表候補生の私がいるというのに、何故そこの二人にまかせるの

ですの！！納得いきませんわ！！そんなこと！！」

だったらとっとと自薦すればいいのに・・・と思うのは俺だけだろうか。

「物珍しいという理由でこんな極東の猿がクラス代表なんて言い恥さらし！！実力的にいえば私、セシリア・オルコットがクラス代表者となるのは当然の理！！男なんかにクラス代表なんて務まるはずありませんもの！！」

ますますヒートアップして言葉を荒げるオルコット。猿とは言ってくれる。お前も同じ人間だろうが・・・高貴なイギリス人にはそうは見えないのかね。

「私こそ、このクラスでの実力がトップであるセシリア・オルコットこそがクラス代表者にふさわしいのですわ！！」

しかしよく喋る奴だ。ここまで言われたら、気が短い奴じゃなくてもキレそうになるぞ。そう、横で今にも怒りを出してしまいそうな織斑の様にな。

「くっ・・・」

「織斑、落ち着け」

何か言おうとする織斑に声をかけ、制止させると、俺はオルコットの方へと向く。

「オルコット、そいつはちょっと言い過ぎだろ」

「なにがですの？」

「何がって、それくらいわかるだろ。常識が無いわけじゃあるまいし・・・・」

「ですから、何がですの？私は別段、間違ったことを言ってないと思いましてよ？」

またそんな高慢な態度を・・・・ふー、仕方ない。あんまりイメージ悪くしたくないんだが・・・織斑を止めておいてこれじゃあ格好もつかんしな。一度、うつむき加減に大きくため息を吐いてから、オルコットへと視線を戻す。

「・・・いい加減にしろよ、英人（ブリテン）」

「・・・ッ！？」

睨みつける俺を見て、オルコットが数歩後ずさりした。ああ、やっぱりな。こんな反応すると思ったよ・・・ま、止めんけど。

「常識の分別もできないのか、お前は。確かに今は男女不平等の時代だ。女は有能、男は無能と考える奴もいるかもしれない。だがな、人間として言っていい事と悪い事くらいも理解できないのか？それこそ、まさに人間になれない猿だろうに」

「なっ・・・この私を猿ですって！？」

「礼儀も解さな、その理由も理解しない・・・礼儀の意識もない奴なんて猿も同然だろ？それとも高貴なイギリスでは礼儀を教わらなかったか？」

「い、言わせておけば・・・・！？」

ギリギリと歯ぎしりの音が聞こえて来そうなくらいに怒り心頭といった表情をしているオルコットを見て、俺は内心後悔していた。完全に火に油注いでるな、俺。

「いいですわ！！礼儀正しく行きましょう・・・決闘ですわ！！」

「手袋は必要かい？」

その返答で対戦を受けると認識したのか、オルコットは不敵な笑いを浮かべた。おおよそ、代表候補生の自分には絶対に勝てないと思っているのだろう。

「素人と実力者の違いを見せて付けてやりますわ・・・言っておきますけど、苦しいからといってワザと負けたりしないように」

「そうだな。ワザと負けたらお前のプライドも許さんだろうし・・・やる時は俺も本気でやってやる」

「良い心がけですわね。せいぜい、足掻くが良いですわ」

「それでいいな・・・織斑」

「・・・ああ」

少し悔しそうな顔をしていたが、織斑は俺の提案に頷いてくれた。それを見て、千冬さんが声を上げる。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。黒瀬とオルコットはそれぞれ用意しておくように・・・それとオルコット」

「な、なんですか？」

千冬さんが名前を呼ぶとオルコットは少し身を固くして応えた。そんな彼女と俺を一瞥しながら千冬さんは続ける。

「感情が高ぶっていたのは分かるが、仮にも相手は年上だ。敬語くらいは使えるようにしておけ」

「え・・・？」

オルコット以外のクラスメイトも全員、俺の事を見た。ああ、そう言えば自己紹介とかしてないから分かんないのか。

「お前らもだ、一応黒瀬は十七歳・・・お前らよりも二つ年上の先輩だ。気に食わないくても敬語くらいは使っておけ。それでは授業を始める」

ぱんっと手を打って千冬さんは話を締めた。俺はクラスメイトの驚愕の視線を受けながらも席に着く。

（ＩＳを動かすのは一年と数カ月ぶりだが・・・やれない事はないさ）

そんな事を思いながら俺は教科書を開いた。

「黒瀬、ちょっと来い」

四時間目が終わり、教室から出ようとする千冬さんに名前を呼ばれた。俺は席を立ち上がって教室から出ると千冬さんの後ろに着いて黙って歩き出し、しばらくして校舎裏の中庭にまでやって来た。

「どういうつもりだ」

中庭に着いた途端に千冬さんは口を開いてそう言った。俺はそんな千冬さんに対して肩をすくめて応えた。

「どういうつもりも何も・・・織斑を止める為ですよ」

「止める為・・・」

「そうです。さすがに素人が代表候補生とぶつかるのは・・・勝敗は見えていますし」

「つまり、お前は織斑を助けるつもりでやったと・・・」

「そういうことです」

これは真意だ。実際、織斑をあのまま止めなかったらそのまま俺みたいに戦う流れになっていただろう。だとしたら織斑の敗北は必須。初戦から敗北をくらうってのはメンタル的にもあまりよろしくない。だから俺が代わりを買って出たのだ。

「つまり・・・お前なら勝てると言いたいのか？」

「どうでしょう・・・機体性能も知らない、こっちに回ってくる機体も知らない・・・結局そこはやってみないとわかりませんね」

俺の応えを聞いて、千冬さんは俺を見ていたその鋭い瞳を閉じると嘆息交じりに額に手を当てた。

「・・・何分だ」

「何がです？」

「とぼけるな・・・お前の制限時間だ」

「・・・・五分・・・いえ、八分ですかね」

「そうか・・・」

短く応えて、千冬さんは額から手を離す。制限時間、その言葉が何を意味するのか。その真意を理解しているのであえて言うまい。

「・・・ＩＳの手配と同時に何か手を考えておく・・・それまでお前は絶対にＩＳには乗るな」

真剣そのものの表情で千冬さんはそう告げると身を翻し、中庭から姿を消した。俺はその背中を見えなくなるまで眺めた後、何気なく空を見上げた。

「なんか初日から大変な事なって来たな・・・・」

代表候補生との試合か・・・まさか初日からこんな事が決まるとは思ってもみなかった。どのような試合になるのか、まだ予測もできない。だが、一つだけ確実な事がある。

ようやく・・・・ようやく俺は・・・・

「ようやくこの空に・・・・帰る事が出来るんだ」

ＥＰ１　Ｅｎｄ

EP1　花咲く学園（後書き）

今回はここまで。いやあ、変なところで区切って申し訳ないです（；－ω－）。それに投稿も時間空いちゃったし・・・いえ、別に遊んでたわけではないんです。ただジナイータが倒せなくて・・・仕方なかったんです！（おい）。いやぁ、ＬＲはマジ鬼畜だわ・・・・・（；＾ω＾）。てなわけで（どんなわけだ）、今回はここまでです。次回からはちょっとだけペースが上がるかもしれません。もしも次を待っている人が万が一、いや億が一いれば期待して待っていてくれるとうれしいです。それでは、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ２　残り時間：一週間（前書き）

宣言通り、早めに投稿したよ！！焦った結果、もの凄い駄文だよ！！本末転倒なんだよトウマ！！／（＾〇＾）／

EP2　残り時間：一週間

「今日の授業はここまでだ。基礎だからといって復習を怠るな・・・特に織斑、お前は良くやっておく様に」

「・・・はい」

千冬さんの辛辣な言葉に落としていた肩をより一層縮み込ませ、返事をした。千冬さんのセリフでわかる様に、今は放課後だ。そこでぐったりとうなだれる織斑と違い、しっかりと授業内容を頭に入れていた。正直、基礎知識のオンパレードなので完全に復習の域なのだが、一週間後に決まったオルコットとの試合。それに対しての気合いの入れ直しといったところだ。

「大丈夫か、織斑」

「黒瀬・・・さん」

一瞬、つっかえた後にさん付けで俺の名前を呼ぶ。午前中の千冬さんの言葉が響いてるな、こりゃ。

「・・・そんな固くなるなよ」

「いや、でも年上なんですし・・・」

「俺が話辛いんだよ・・・この学校で唯一の男友達がこんなんじゃ、今後やり辛いだろ。俺もお前も・・・それに年上の言う事は訊いておけ」

俺がそう言うと、織斑は考えているのか少し黙り、そして頷いた。

「・・・わかったよ、そうさせてもらうよ黒瀬」

「零司でいい」

「ああ、零司・・・俺も一夏でいいぜ」

「ああ、よろしくな一夏・・・で、授業の方はどうだった」

訊くと織斑は露骨にげんなりという表情を浮かべて、再び机にうなだれた。

「しょ、正直意味がわからん・・・・なんでこんなにややこしいんだよ・・・」

織斑は教科書をペラペラとめくった後にため息交じりに言った。今日の授業がわからんか・・・なるほど、入学前の参考書を捨てたってのは冗談じゃないらしいな。なんでそんな事をするかね。

「だけどな、そいつはお前が悪いだろ。古い電話帳と間違えるってどういうことだ」

「いや、だって厚さ的にほぼ電話帳だろ、あれ・・・・・っていうか、黒瀬はわかったのか」

「モチのロンだ」

その返答に織斑・・・一夏は目を丸くして俺を見た。いや、参考書で勉強とかはしてないけどさ・・・全部前もって知ってる事だし。

「まあ俺は知り合いにＩＳの関係者がいたしな。そこからちょいと教えもらったのを頭の隅っこに残しておいただけだ」

「なるほどな」

「そういう関係なら、お前には千冬さんが居るだろうに」

「あー、俺はＩＳから遠ざけられてたからな。あんまりそういうのはない」

遠ざけられていた・・・か。第二回『モンド・グロッソ』の決勝の時の件もあるからな。そういう点で警戒しているのかもしれないな、千冬さん。まあ、あんまり自分の功績とかを自慢する人でもないがね。

「でも助かったぜ」

「あ？」

「男子の零司がＩＳの事理解してるなんてな。色々教えてくれよ」

心底安心したのか、笑顔を浮かべる一夏。いい笑顔だな。作りの良い顔立ちだからこんな笑顔を女性に向けたら、かなり効果あるぞ。特にうら若き十五歳の乙女達には効果バツグンだろう。

「お前って結構な危険人物かもな、この学校では」

「は？それってどういう意味だ？」

「ああ、織斑君。それに黒瀬君も。まだ学校にいたんですね。よかったです」

教室に入って来た山田先生が俺とその横で首をかしげる一夏を見つけるとこちらに走り寄って来た。山田先生、そんな短い距離なのにそんなに焦らんでも・・・それにそんなふうに走ると・・・

ズッ

「きゃっ！？」

「おっと！！」

案の定、足を床につっかえさせた山田先生は前のめりにこけてしまう。それを俺は情景反射的に抱き止めた。ふぅ、間一髪といったところか・・・もう少し反応が遅れてたら床に顔面衝突だった。

「・・・大丈夫ですか、山田先生」

「・・・・・」

抱き止めた山田先生にそう尋ねるが、返事が返ってこない。ただ茫然と俺の顔を見ている。どうしたというんだ、山田先生。

「・・・あの、山田先生？」

「・・・・・」

呼びかけても返事が返ってこない、硬直して全く動く気配もない・・・返事が無い、ただの屍の――――

「きゃあああああああああっ！？」

――――様ではなかった。返事をした、盛大な返事が返って来た。ただ悲鳴を、マンドラゴラを引き抜いた時の様に聞こえて来る大絶叫を返事というのならば、だが。

「――――ッ！！や、山田先生、落ち着いてください！！」

「あわ、あわあわあわあわ・・・・」

両肩を掴んだままの俺は悲鳴を受けて耳を痛めながら、落ち着かせるように言うが山田先生は顔を真っ赤にして、泡を食っている。

「だ、だだだだだ駄目ですよ黒瀬君！！私達は教師と生徒の関係であって・・・そんな強引にされたら私・・・」

・・・ちょっと、言ってる意味わかんないかな。俺ってほら、正常な人間だから。

「どうしていきなりそんな突飛な話になってるんですか」

「そ、そうですよね・・・こういうのはもっとゆっくりと関係を築き合って行ってから・・・だ、だけど駄目！！私は教師という聖職者なんです！！そんな生徒と禁断の関係なんて・・・」

「だから――」

「何をしているんだ・・・」

呆れ気味の声を聞いて、顔を上げると頭を抱えた千冬さんが立っていた。おおよかった、話の通じる教員が居てくれて本当に助かった。

「いいから手を離してやれ、いつまで抱き止めてるんだお前は」

「あ、そうですね・・・離しますよ、山田先生」

「は、はいっ！！」

千冬さんに言われて気付いた俺は山田先生の耳元でそう告げると肩から手を離す。山田先生はヨロヨロと数歩俺から離れると千冬さんの隣に移動した。

「・・・山田先生」

「あ、えと・・・その・・・」

「もう少し黒瀬にも慣れてくれ。彼は君の生徒なんだぞ？」

「す、すいません・・・」

叱られた犬の様にシュンと肩を落とす山田先生。なんだかそんな山田先生にすまないと思うと同時に少し可愛いと思った。なんだか本当に年上には見えないなぁ、この人。

「お前もお前だ、黒瀬。少しは山田先生の扱いに気を付けろ」

「そんな危険物に触れるみたいに言わなくてもいいじゃないですか」

「いいや、言わせてもらう。私は面倒が嫌いなんだ」

ウェンデイズ機関の専属契約でもしたことあるんかね、千冬さん。

「織斑、お前もぼさっと見ていないで少しは止めろ」

「いや、俺も止めに入る暇がなかったというか・・・」

「私が聞きたいのは言い訳ではない・・・『はい』か『イエス』か、だ」

「・・・はい」

とことん教官チックだね、千冬さん。というかこんな姉を持った織斑にはある種の同情の念を感じずにはいられない。合掌。

「勝手に殺すな」

「それはそうと、結局なんの様だったんですか？」

「ああ、実はお前達の寮の部屋が決まった」

そう言って千冬さんは俺と一夏に書類と鍵をよこした。ここ、ＩＳ学園は全寮制である。将来有望なＩＳの操縦者を学園側が保護するという名目で、学園の生徒は余すことなく、全員寮生活を義務付けられている。

実際のところ、ＩＳ学園の生徒＝未来の国防という式が成り立つ為に、学生であるこの頃からあれこれ勧誘する国が絶えない。もしかしたらどこぞの国の潜入工作員に拉致されてしまう、なんて笑えない事になる可能性もある。それに対する防衛策と考えれば、当然だ

ろう。

「俺の部屋、決まってないんじゃなかったっけ？一週間は自宅から通学してもらうって聞いたんだけど・・・」

「事情が事情だからな、無理矢理にでも変更したんだろ」

「そうらしいです。織斑君はそのあたりのことって政府から聞いていますか？」

復活した山田先生の問いに一夏は首をかしげていた。ちなみに政府ってのはもちろん日本政府だ。これまでに前例のない事態だから保護と監視を付けておきたいのだろう。こんなレアな生体を野放しにしておくわけにもいかんだろうしな。

「というわけで、最優先で部屋を用意した。早めに目を通しておけ」

「はあ、でも俺は荷物準備しておいたからいいとして、一夏はどうするんです？用意なんて出来てないだろ、お前」

「ああ、まったくしてない」

「安心しろ、私が用意してやった。まあ、着替えと携帯電話の充電器くらいの生活必需品だけだがな」

さすが合理主義者。必要のないと判断したものは全て切り落とす。それが他人に対する事であっても同じとはね。なんか本気で一夏が可哀想になって来た。

「と、とりあえず時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋に

はシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど・・・えっと、織斑君と黒瀬君はまだ使えません」

「え、なんでですか？」

そう訊き返す一夏にさすがの俺もずっこけそうになった。お前、この学園の生徒がなんだか考えてみればわかるだろうに・・・

「・・・もういいや千冬さん、こいつを大浴場に投げ込もう。その瞬間、大欲情になるかもしれんけど」

「誰が上手い事を言えと言った・・・まあ、こいつの天然加減に少々私も呆れたがな」

「な、なんだよ。俺が大浴場使っちゃダメな理由でもあるのかよ・・・」

「「大ありだ」」

千冬さんと声を合わせて、一夏へと応えた。ここまで天然だとワザとじゃないかと疑いたくなるぞ。

「お前は同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー・・・・」

「ようやく気付いたか、このアホ」

ようやく思い出したようだ。この学園には女しかいない。俺達に大

浴場の使用を許可したならば・・・・本当にどうなるか予想できない。

「お、織斑君っ、女子とお風呂入りたんですか!?だっ、駄目ですよ!!」

「い、いやっ、入りたくないです」

「ええっ?女の子に興味が無いんですか!?そ、それはそれで問題の様な・・・」

おいおい山田先生、だから考えが突飛過ぎやしませんかね?

「織斑君が女に興味が無い!?」

「織斑君が男に興味がある!?」

「織斑君が黒瀬さんを後ろから狙ってる!?」

おお、『婦女子談義』の猛者達よ。どうしてそうなった。もう一度言おう、どうしてそうなった。

「安心しろ、一夏。俺はうら若き乙女にしか興味はない。それともし後ろから襲いかかったら頭部を粉砕するつもりで裏拳を打ち出すから覚悟しておけ」

「お、俺はそんなことしないっ!!」

「大丈夫だ一夏、いざって時はお前の頭部が無くなるだけだ。俺に被害はない」

そう、俺はうら若き乙女にしか興味ない。男なんて論外だし、女だって選ぶさ。たとえば千冬さんなんて
論外――

パァンッ！

「何故に・・・殴るんですか？」

「いや、今お前に侮辱されたと思ってな」

「何も言ってないじゃないですか・・・・」

しかし当たってるのが恐ろしい。千冬さんって読心術とかできんのかな・・・やべ、出来ても全然不思議じゃない・・・

「え、ええと、それじゃあ私達は会議があるので、これで。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」

道草ね。この先にある学園、寮間五十メートル内で道草くえる場所があるなら教えて欲しいですよ。

「とりあえず、寮に行くか・・・お前も限界だろうしな」

「お、おう・・・さすがにこの視線の中にこれ以上いるのはさすがにな」

「目下の目標はこの視線になれる事だな、お前は」

千冬さんと山田先生の二人を見送った後、一夏を引き連れて、騒が

しい『婦女子談義』の続く学園を出て、俺は寮へと避難する事にした。

「１０３２号室・・・ここか」

「なんだ、他の部屋とは変わらないんだな」

番号札を確認する一夏の横で感想を呟くと鍵を差し込む。ガチャリという音がして、鍵を外すと扉を開いて部屋に入ると、大きめのベッドが二つ、まず目に入った。そこにさっき持ち込まれた荷物をベッドの上に放り投げる。

「おー・・・ふかふかだな」

「ここは天下のＩＳ学園だ。こういうとこにも金使ってんだろ」

ベッドに倒れ込み、幸せそうな顔をする一夏に対して適当に応える。さてと、部屋に来たが何するか。特にやる事もないんだが・・・

「とにかくシャワー浴びるかね・・・」

「ん？まだ風呂には早くないか？」

荷物からバスタオルと着替えを取り出すと一夏が不思議そうに尋ねてきた。確かにまだ六時回ってないくらいだし、風呂には早いだろう。

「いいだろ、別に。単純に風呂好きなんだよ」

「ああ、なるほど。俺も好きだぜ、風呂」

「ま、シャワーってところがちょっと嫌だがね。そうは言ってられないからな・・・てなわけでお先に」

「おう」

短い返事を聞いて、俺はバスルームへと入る。着替えをかごに置いて、ジャグジーを捻る。熱めのシャワーが俺の脳天から降り注いだ。

「・・・一週間か」

午前中の授業、三時間目の決定。一週間後にあの代表候補生であるセシリア・オルコットと試合をする。その事実に、俺は少々興奮していた。

代表候補生とは、言葉の通り一国を代表する有能なＩＳ操縦者の候補生だ。つまりそれなり以上の相手となる。しかもどのような相手なのかは情報一つない。

別に俺は自分が戦闘愛好家だという自覚はない。だが、一週間後の戦いが待ち遠しく思っている。いや、これは戦いたいという思いではない。おそらく早くＩＳに乗りたいという重いだろう。三年前まで、俺はＩＳと共に生きていた。ＩＳがあるから生きていた。ＩＳがあるから黒瀬零司は存在していた。

「・・・ＩＳにまみれた人生か」

そうだ、俺にはＩＳしかない。男がＩＳを操作できるという例外（イレギュラー）、それこそが俺の存在理由だった。だが、それは一年前に無くなってしまった。ＩＳは俺を拒絶するように手元から離れて行った。

「ようやく俺は・・・」

怠惰的な一年間。苦痛にも思えた一年間。それが終わる。一週間後に、終わるのだ。

オルコットには悪いが、絶好の機会とさせてもらう。俺が空へと帰る為の足掛かりになってもらおう。

「待ってろよ・・・」

誰に言うでもなく、小さく呟く。目の前にある鏡に映った俺の顔は、確かに笑っていた。

ＥＰ２　Ｅｎｄ

EP2　残り時間：一週間（後書き）

はい、今日はここまで！！ノットパーフェクトだ、緋星（ダンナ風に）。いや、早くするとろくな事無いですね（＾ω＾；）。まあ、自分的には結構書きたいこと描けたんでいいんですけど・・・自己満足で終わらないでほしいなぁ（じゃあ努力しろ）（―ω―；）。さて、次はついにチョロ可愛いセシリアさんとの試合です。どんなふうになるのか、さてはて・・・ま、決まってるんですけどねw。ではでは次回、またお会いできることを願ってます。では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ３　黒の飛翔（前書き）

はい、ではＶＳセシリア戦です。今回はちょっと長いですが・・・飽きないでね（；＾ω＾）。相変わらずの駄文でございますが、どうかご容赦してください

ｍ（＿＿）ｍ

ＥＰ３　黒の飛翔

一週間。一か月の四分の一、それは長い様に思えて、案外短いものだ。学園での授業とその後の予習復習。そんな事を続けていれば、すぐに二十四時間経ってしまう。そしてそんなこんなであっという間に時間が経って――

「大丈夫なのか、零司」

「さあな」

一夏が頭を抱えているが特に気にもせずに近場のアルミ製のベンチに座る。ここは第三アリーナ内の待機場所であるＡピット。ＩＳ操縦者はここでＩＳを着用し、アリーナ・ステージへと飛び立って行くのだ。

「さあなって・・・ＩＳも来てないんだぞ？」

「だからって騒いでも仕方ないだろ。俺に出来るのはＩＳが来るのを待つだけだ」

やたらと一夏が焦っている原因はこうだ。セシリア・オルコットとの試合が決まった次の日に、俺と一夏に専用機が来るという話がやって来たのだ。どうやら訓練機の数が足りていないらしく、政府側が至急、こちらに専用機を回す様に話を付けてくれたらしい。オルコットも「訓練機などで戦うなど、フェアではありませんわ」とかなんとか言って、専用機の使用を了承した。専用機が来るとなれば、こちらもグータラしてられない。そう思い、教科書を開いてもはや脳みそに深々と刻まれた基礎知識からやり直し、一夏にちょっとし

た訓練（剣道など）を付き合ってもらった。

――が、しかし今現在、そのＩＳは届いておらず、このままでは勝負すらできないという状況にある。

「あちら側にも色々理由があるんだろ。ＩＳの専用機なんて一週間やそこらで用意できるもんでもないし」

「どうして俺が焦ってお前はそんなに落ち着いていられるんだよ・・・」

いや、お前が勝手に騒いでるだけだろ・・・とは心配してくれてる一夏には言えずに心の中で呟いておく。

「く、黒瀬君黒瀬君っ黒瀬君！！」

何故か俺の名前を三回読んで我らが副担任、山田先生登場。そんなに焦って、転ばないかどうかが俺はとても心配です。

「はいはいはい、なんでしょうか山田先生」

「い、今さっき（ハァハァ）、黒瀬君の（ゼェゼェ）」

「とりあえず深呼吸でもしてください。話されても分かり辛いですから」

「は、はいっ！！スー・・・・・ハァ」

本当に素直に言うこと聞くなぁ・・・純粋なんだね、先生。俺はそんな純粋さの一欠片でも千冬さんにあったらどんなに良かったな

って思うよ、うん。

「人を冷血呼ばわりするな」

「うおっ！？」

俺の背後に気配も無しに千冬さんが姿を現した。本当に何者なんだって思う時があるよ、この人。

「ち、千冬姉――――」

「織斑先生と呼べ、いい加減学習しろ。この一週間で何回お前の頭を叩いたと思っている」

確かに一夏と俺は呼び方で幾度となく千冬さんに叩かれたからな。いや、直そうと思ってるんだけどね、慣れってのはなかなか身体から抜けないものだ。

「お、織斑先生！！零司のＩＳは・・・」

「何故お前がそんなに焦るんだ・・・・山田先生」

「あ、はいっ！！来ましたよ、黒瀬君の専用ＩＳ！！」

山田先生がそう言うとピットのＩＳ搬入口が重厚な音を立てて、防御壁斜めに開いた。そしてゆっくりとこちらに差し出す様にして、それは姿を現した。

「二機？」

「ああ、右にあるのが織斑、お前のＩＳの『白式』・・・・そしてこっちが――」

――『黒』、それは『黒』だった。

黒という言葉以外にその機体の色を判別する言葉はない。他を圧倒し、全てを飲み込んで、かき消してしまいそうな・・・そんな黒。

「これが・・・・」

「はい、黒瀬君の専用ＩＳ『黒天』ですっ！！」

待機状態の『黒天』に触れる。すると自分の手が吸い付く様な感覚を覚えた。まるで、こいつに乗るべきだ・・・いや、乗らなければならないと急かされる様にも思えた。この『黒天』と俺は、元々一つだったんだと・・・早く元の形に戻るんだと・・・

「早く乗れ、黒瀬。フォーマットとフィッティングは試合中にやれ、生憎とここでやっている時間はない」

「いや・・・そんな必要はないよ、千冬さん」

『黒天』に乗り込みながら、俺は千冬さんに言った。そうだ、これと俺は元々一つ。俺がこいつに乗り込むというのは、新たに『繋がる』のではなく、元の場所に『戻る』だけなのだ。だから『初期化』も『最適化』も必要ない。

――皮膚装甲（スキンバリアー）、クリア。推進系作動（スラスター）、クリア。バリアシステム、クリア。全駆動系、クリア。ハイパーセンサー、クリア。全武装（オールウェポン）、クリア。システム、オールグリーン。初期化（フォーマット）・・・終了。最適化（フィッティング）・・

・・完了。

「なっ・・！？」

「ええっ！？」

ハイパーセンサーを通して、千冬さんと山田先生の驚愕が伝わってくる。装甲が俺の全身を包み込み、一体となった瞬間に全ての確認が終了。そして『初期化』と『最適化』を終了させた。そして、『戻って来た』俺を祝う様に俺の目の前に文字が映し出される。

――――おかえりなさい

「・・・ただいま」

――部分装甲（カバー・スキン）から全身装甲（フル・スキン）へ移行。ハイパーセンサー改、クリア。

そう言うと、身体をＩＳと結び付けていた装甲の間から出ていた肌の部分に装甲が粒子となって現れ、覆い隠す。その装甲は次々に現れ、俺の胴体を余すことなく包み込むと、出現を停止。その後、大型のバイザーが俺の顔上部を覆うと全身の間接部分と背中にある大きめのデュアルウィングに真紅のラインカラーが入った。

「オーケーです、いつでも行けます」

「・・・ああ、その様だな」

訝しげな顔をして、こちらを見ていたが現状況を見て、色々と問い質す時間も惜しいと思ったのだろう。千冬さんは小さく頷くと、ハッチを解放し、それと同時に個人間秘匿通信（プライベート・チャンネル）で千冬さんの声が聞こ

えてきた。

「いいか、零司。タイムリミットを忘れるな。いざとなったら、私が出る」

「・・・了解（ヤヴォール）、織斑教官」

「教官は止めろ」

それだけ言って回線を切ると、千冬さんは山田先生を連れて奥へと消えて行った。その二人を見送って、俺はピット・ゲートへと移動する。

「零司っ！！」

飛び立つ準備として、カタパルトに足を付けると一夏が俺の名前を呼んだ。ハイパーセンサーで後ろを確認しながら、俺は返事をする。

「まだいたのか、早く客席にでも行け・・・危ないぞ」

「これ言ったら戻る！！」

「なんだ？」

「負けんなよ！！」

一瞬、唖然として言葉を失ってしまった。そのセリフならこの一週間で何度も聞いたってのに・・・まったく・・・

「・・・ああ！！」

一夏の激励に応えて、俺はピット・ゲートからアリーナ・ステージへと飛び立った。倒すべき敵を倒しに・・・

「あら、来ましたのね。ずいぶんと遅いから逃げ出したのかと思いましたわ」

ステージへと出てすぐに空中に点在するオルコットがそんな言葉を投げかけてきた。俺はそれを無視して、彼女の機体をハイパーセンサーで分析する。

機体名は『ブルー・ティアーズ』、イギリス製の中距離射撃型ＩＳ。青いフィン・アーマーを携えたそれは大きめのスナイパーライフルを手に持っていた。あれは記憶にある、確か『スターライトｍｋ？』、六七口径特殊レーザーライフルだ。

「最後のチャンスを差し上げますわ」

「チャンス？」

相手機体を分析していると、オルコットはこちらを指差してきた。

「そう、チャンスですわ。今からの戦闘で私が一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、今このまま地面に降りて、頭を擦り付けながら謝れば許してあげない事もなくってよ」

「・・・うるさいな、ごたくばかりで」

「・・なっ！？」

ぴくっとオルコットの眉毛がつり上がる。だがこちらにしては知ったこっちゃない。制限時間付きの戦いなのだ。それに試合開始の鐘はもう鳴っている。

「早くしろよ、代表候補生。来ないなら、こっちから行くぜ？」

「・・・そう、では後悔なさらない事ね！！」

眉間に青筋を浮かべたオルコットは左手の『スターライトｍｋ？』を構えると、即座にこちらに向けて引き金を引いた。急に始まった不意打ちに近いそれを、俺は身体を半身にして回避、その後、オルコットの正面から避ける様にして上へと飛ぶ。

「逃がしはしませんわ！！」

オルコットは俺を追って移動し、背後からライフルを打つ。俺は全て紙一重のタイミングで回避、『黒天』に当たる事はない。

「次はこっちから行かせてもらうぞ！！」

両手に『拡張領域（バススロット）』からアサルトライフル『Ａｎｎａ（アンナ）』とショットガン『Ｄａｌｉａ（ダリア）』を招来し、クイックターンで背後のオルコットの方へと向くと両方の引き金を引く。この間の作業を１．５秒で行う。

「なっ・・・きゃっ！？」

五二口径実弾と特殊散弾による弾丸の雨によって、小さな悲鳴と共に『ブルー・ティアーズ』のシールドエネルギーが減少する。次々

と打ち出される実弾から退避するように、オルコットは俺の射線上から離れる。

「このっ！！」

今度は直情的に追って来たりはせずに、一定距離を保ったまま『スターライトｍｋ？』を撃ってくる。だが、それでも俺は捉えたオルコットを自分の距離から逃げさせるつもりはなかった。

「遅いな」

空気の壁に押し付けられるようなＧの衝撃、通常の『黒天』のスピードを遥かに上回る速度でオルコットとの距離を詰める。

「これは・・・『瞬間加速（イグニッション・ブースト）』！？」

「もらった！！」

いきなりの行動に怯みながらも打ち出される青いレーザーを肩が掠めるか掠めないかという紙一重で回避して、『Ｄａｌｉａ』の有効射程に入った瞬間にその引き金を連続して引く。

射撃（ズドンッ）、射撃射撃射撃（ズドンッズドンッズドンッ）！！

「こ、これほどっ！！」

しかしオルコットとて、ただ棒立ちする素人ではない。移動に回転を組み合わせ、回避しようと試みる。だが散弾の範囲から完全に逃れる事は出来ずにその大半の弾を受けてしまい、逃げる方向へと俺が『Ａｎｎａ』を撃ち出す為にそちらによっても状況は好転しない。

「どうした、代表候補生！！こんなもんか！！」

「くっ・・・・これ以上、調子に乗らせませんわ！！」

オルコットはそう言うと、旋回しながらこちらに向けて二発のレーザーを撃ち出す。一発は牽制、そしてそれの回避に転じた俺へ、左足を狙った予測撃ちだった。

キュインッ！！

「グッ！！」

レーザー特有の音が聞こえ、左足に痛みが走り、シールドエネルギーが削られる。だがそれは問題じゃない、問題はこちらの攻撃がやみ、あちらの攻撃が再開した事にある。

「次はこちらに番ですわ！！」

「ちっ！！」

一定距離からの、中距離、遠距離型ライフル『スターライトｍｋ？』のレーザーの雨。それに応じる様に両手に握った『Ａｎｎａ』と『Ｄａｌｉａ』の引き金を引き続ける。

「そこですわ！！」

『黒天』の肩にレーザーが掠めた。オルコットの攻撃にキレが出てきた。どうやら俺が素人だと思って、ある程度は手を抜いていたようだ。それにしてもこの距離は少々マズイ。近距離、中距離が射程

距離であるこの二丁では遠距離まで対応する『スターライトｍｋ?』相手に分が悪い。かといって『瞬間加速』を使ってもおそらくそれは読まれるだろう。

「さて、どうしたもんかっ!?」

左手にレーザーが直撃し、『Ｄａｌｉａ』が弾き飛ばされた。くそっ、考え事してる場合じゃないな。

「素人のくせに・・・私にここまで動けるなんて大したものですわ、褒めて差し上げますわ」

回転して衝撃を殺した俺の『Ａｎｎａ』の射程から離れると、オルコットは動きを止めて言った。残念ながら、こっちは自分の腕の鈍り具合に気分は最悪だ。

「そうかい、それは光栄だ」

「ずいぶんと余裕そうですわね・・・でしたらその余裕、取り去って差し上げますわ!!」

そう叫ぶと『ブルー・ティアーズ』のフィン状の部分が外れ、空中に浮くと先が割れて銃口が露見し、こちらを囲み、捉えた。

「これはっ!?」

カッと銃口が青く光り、警戒音の響きが鳴って一秒もしないうちに四本のレーザーが『黒天』へと撃ち出される。

「クソッ!!」

俺は真上へと『瞬間加速』を使って、フィンの射程から離脱。だがそれを読んでいたのか、オルコットの『スターライトｍｋ？』のレーザーが俺の顔面のバイザーを捉えた。

「ガッ！！」

視界が暗転するほどの衝撃を受けた俺は急いでオルコットの射程から離れる。相手は防戦に回る。それをオルコットは理解したのか、余裕の笑みを取り戻した。

「さあ、始めますわよ！！この私、セシリア・オルコットと『青の雫（ブルー・ティアーズ）』の奏でる円舞曲（ワルツ）を！！」

『スターライトｍｋ？』の銃口と四つのフィンをこちらに向けて、オルコットは高々と宣言した。俺を倒す、ワルツを奏でると。

・

「す、凄いですね、黒瀬君」

ピットに設置されているリアルタイムモニターを眺めながら、真耶は唖然として言葉を絞り出してた。零司の動きは、ＩＳを今まで動かした事ない人間の出来るものではない。今はセシリアが本気を出し始めて事によって変わったが、最初の動きはもはやＩＳ乗りとして卓越したそれだった。

「あんな動き・・・どうしてできるんでしょうか」

他のスポーツなどと同じ様にＩＳ操縦にもセンスが関係してくる。

それに適正もある。だが、あの動きはその二つに当てはまるものではない。もっと訓練的な、実践的な技術が必要となる動きだったのだ。

「どうしてですかね、織斑先生」

心の底から感心しながら、真耶は千冬に問う。だが千冬は小さく呟く。

「・・・弱いな」

「え？・・・でも、彼は初心者ですし、あれ以上の事を望むのはちょっとハードルが高いんじゃないかと・・・」

「・・・・・初心者ならな」

真耶に聞こえない様に再び呟く。初心者なら・・・この言葉の指す意味は一つだけだ。

黒瀬零司はＩＳ操作の素人などではない。ましてやただのＩＳ操縦者などでもない。

零司はドイツにいた時に千冬自らが育て上げた、愛弟子だった。基礎から教え、操作を教え、戦い方を叩き込んだ相手だ。

（たった一年でここまで鈍るものなのだな・・・）

画面の向こうで、零司が少なからず苛立っているのがわかった。おそらく自分の腕の鈍り具合に呆れと怒りが同時に来ているんだろう。

（でなければ、零司があんなにもオルコットに押されるはずもない）

千冬は確信していた。千冬は自身の育てた弟子の中で、零司は最も実力ある者だということを。高みへと進もうとする向上心、他者を圧倒するほどのセンス、戦況を判断して次の手を即座に紡ぎ出す知性、そして他者とは比べ物にならないほどの戦闘の経験値。

（・・・これもあれの所為か）

「あの、織斑先生？」

真耶の声によって、千冬はハッと我に返った。いかんな、少々考え事が過ぎた。

「・・・なんだ山田先生？」

「いえ、なんだか話しかけても返事がなかったので・・・心配なんですか？」

「心配か・・・・する必要はないだろ」

「ずいぶんと黒瀬君の事をかってるんですね」

「そんなことはない、ただ事実を言ってるだけだ」

事実、千冬は零司に対しての心配なんて事をしても無駄だろうと思っている。弟子だった時もそうだった。千冬の心配も余所にいつも零司は自分の決めた行動を曲げる事のない男だったからだ。その所為で千冬が何回、頭を悩ませた事かわかったものではない。

「・・・まあいい。それはそうと、山田先生。タイマーは？」

「あ、えっと・・・・今五分半を回りました」

あと二分半。零司が言っていたタイムリミットは八分。それがあと一分半で経ってしまう。

「あと少ししかない・・・早く決めろよ、零司」

千冬は細まる目で、画面先の零司を見詰めた。丁度、零司がセシリアを捉え、攻勢へと回ったところだった。

・

「さあ、そろそろ閉幕（フィナーレ）と行きますわよ！！」

まるでその言葉がビットを指揮しているのか様に、多方向からのレーザー攻撃。そしてそれを回避したところへと『スターライトｍｋ？』を撃ち込んでくる。なるほど、理にかなった戦法ではある。

「だがっ！！」

飛んでくるレーザーをバック、急旋回を組み合わせ、右手の『Ａｎｎａ』と左手に招来したハンドガン『Ｌｉｓａ（リサ）』を双方、横に向けて撃ち出す。狙いはもちろん、オルコットではない。狙いは・・・

ガンッ

「なっ！？」

金属がひしゃげ、貫通する音が耳に届くと同時にオルコットの表情が一変する。横を見ると、青い残骸がアリーナの地上へと落ちて行った。そう、俺が狙ったのはビットである『青い雫』だ。言い方が悪いかもしれないが、これさえなければオルコットの『ブルー・ティアーズ』はちょっとばかし性能がいいＩＳだ。

「どうして・・・私のブルー・ティアーズがっ！？」

「驚く事でもないだろ、何回同じ攻撃を撃って来てるんだ」

オルコットが自立起動型兵器（ビット）、『青い雫』を展開してから約一分半。ここまでの戦いでわかった事がある。

「お前、毎回毎回俺の反応が一番遅いであろう場所・・・つまり死角を狙って来ているだろ？」

「・・・・っ！？」

オルコットの目元がヒクつく。彼女はどうやらビットの動かし方に癖があるらしい。彼女は人間の死角である、足元や真上を狙ってくる。つまり、普段から人間が警戒しない様な場所を付いてくるのだ。

「理にかなった攻撃であり、とても良い手だ・・・だが」

だが、逆を言えばそんな手を思い浮かぶ奴なんていくらでもいる。つまり気付いてしまえばある程度予測はしやすいということだ。

「もうちょっと応用力を付けろ。連続して攻撃を繰り返していたら、すぐに見切られるぞ。この戦法は」

「な、何を偉そうに・・・・『青い雫』！！」

オルコットは懲りずに再びビットを飛ばして、こちらに照準を向ける。それに反応して、俺は後方へと下がり、撃って来た方向へと両手に持った銃器を向ける。

射撃射撃（ドンッ　ドンッ）

マズルフラッシュが起こって０．５秒後、弾丸に撃ち抜かれた二つの雫は青い稲妻走らせると、爆音と共に粉砕。地面へと落ちて行った。

「そんなっ！？」

「ラストッ！！」

ガキュンッ！！

そして今、最後の一機が『Ａｎｎａ』の弾丸によって撃ち落とされた。俺は残弾がゼロになった『Ａｎｎａ』を消し、大きな刃に持ち手が付いた様な大型のブレード『Ｖｉｃｔｏｒ（ヴィクトール）』を招来する。

「さて、そろそろ終わりにするぞ・・・オルコット！！」

「男のクセにっ！！」

焦りの表情を浮かべて、オルコットは『スターライトｍｋ？』の引き金を引く。こちらを狙う青い閃光を、突っ込む過程で縦旋回を行い、避けると『Ｖｉｃｔｏｒ』を構え、『ブルー・ティアーズ』へと接近する。

「これでっ！！」

ブレードの横一閃。オルコットは『スターライトｍｋ？』を構え直す事も、回避行動を取る事も出来ない。このタイミング・・・・・もらった！！

ドックン・・・・

「・・・っ！？」

完全に捉えた。後はブレードを横に振るだけ。だが俺の脳みそからそんな単純な行動までも全て消し去られ、行動を止めてしまった。

（これは・・・・は・・・・っ！？）

「・・・っ・・・っ！？」

声にならない叫びが、俺の喉を震わせる。視界が紅く染まり、大きくブレる。心音がやけに大きく感じる。耳にはノイズ交じりで聞こえて来る、耳鳴りの様な甲高い音。これらの出来事に俺は覚えがあった。今、この現状でなるべきではない最悪の状況・・・

（まさか・・・時間・・・が・・・っ！！）

「隙ありですわ！！」

ハッと我に返り、ブレる視界のなかでオルコットを見る。至近距離で彼女の『ブルー・ティアーズ』のスカート部分。そこに設置されていた突起が外れて、こちらへと向いた。

「残念でしたわね・・・『ブルー・ティアーズ』は六機あってよ！！」

発射されてたそれは『弾道型実弾兵器（ミサイル）』だ。この距離で、しかもブレードを振りかぶった俺の回避が間に合うはずもない。マズイ、これは・・・・

ドガァァァン！！

紅い世界を見る俺の視界は、爆音と閃光に包まれた。

・

「・・っ！？」

「お、織斑先生！？」

モニタールームの千冬は画面へと身を乗り出す。今の動き・・・まさか・・・・

「だ、大丈夫ですよ、織斑先生。黒瀬君のシールドエネルギーはまだ残ってますから・・・」

「山田先生、今タイマーは！？」

「えっ！？・・・ええと、もうすぐ六分ですけど」

真耶にそう告げられ、千冬は一層表情を険しいものにした。零司が

予告していたタイムリミットよりも早い。だが、今の動きは明らかにおかしかった。セシリアのミサイルを感知できなかったのはいい。それは零司の見方が甘かっただけ。問題はその前・・・ブレードを振りかぶって、セシリアに接近した時だった。

（明らかに零司の動きが止まった・・・もし何か策が合って止めたなら、あそこで攻撃を回避しないはずはない）

「・・・山田先生、デッキに打鉄はあるか？」

「えっと、今は配備されてませんけど・・・一体どうされたんですか。ずいぶんと焦っている様に見えますけど」

「だろうな・・・」

千冬は内心で舌打ちをしていた。甘かった。制限時間内に零司がオルコットを倒すであろうと踏んでいたが・・・零司の腕がなまっていたのと、制限時間が短い事を予想の一つもしていなかったなんて・・・

「仕方ない、待機所から持ってくるか・・・山田先生っ！！」

「はっ、はいっ！！」

「オルコットをアリーナから退避させるように呼びかけてくれ、私は少し席をはずす」

「せ、席をはずすって・・・あ、織斑先生！？」

真耶の呼びかけを無視し、千冬は速足にモニタールームから出る。

セシリアが「引け」と言って、素直に首を縦に振るとは思えないが、それでもやってもらうしかない。そうでなければ・・・

「・・・怪我人どころではすまなくなるぞ」

・

「あのようなタイミングで隙を見せるなんて・・・やはり素人ですわね」

至近距離での『青い雫』を撃ち込んだ事によって、シールドエネルギーをごっそり削った後にアリーナの地面にたたき落とされた零司。それを囲む煙をセシリアは上空から見下す。

しかし、セリフとは裏腹にセシリアは笑みを浮かべてはいなかった。正確には、浮かべるよりも考える事があったからだ。

それは先のブレードによって切りかかって来た時の事だ。

零司はこちらへと飛んできて、振りかぶった剣をセシリアへと振ろうとした。だが、刃はセシリアに届く事はなく、急に停止した。そしてその瞬間の零司の表情が、セシリアをより混乱させていた。

その時の零司の表情は苦悶に満ちており、まるで何かに耐える様に歯を食いしばっていたからだ。

「・・・・・まあ、私にとってはどうでもいいことなのですけど・・・」

そう言って、セシリアは無意味な考えをシャットダウンしようとし

た。だが、そんな必要もなかった。

・・・ザワッ

「・・・っ！！」

代表候補生セシリア・オルコットの思考はそこで停止した。否、停止せざる得なかった。感じたのだ。まるで首を絞められるかのような、重苦しい何か。圧倒的なプレッシャー。無意識に手に持った『スターライトｍｋ？』を構える、そんな行動を取らせる様な緊迫感。

「一体・・・何が・・・」

自分の行動も理解できない。相手はただの素人。確かに良い動きはする。自分に付いて来たのも、正直本当に素晴らしいと少しは思った。だが、それでも所詮は素人だ。ここまで自分が警戒する者でもないはず。それなのに、何故か全身は新たに緊張感を覚え始めている。

「あ・・・ああ・・・・」

かすかに、爆煙の中から零司の声が聞こえてきた。だが声色はまるで違う。さっきまでの小憎たらしいセリフを吐いていた、はっきりとした声ではなく・・・まるで地の底から聞こえてきそうな掠れ声だった。

「ぐ・・・うぅ・・・」

煙が晴れる。そこには漆黒のＩＳ、『黒天』。頭を押さえる様にして、左手を額に当てるその姿があった。そして煙が晴れた瞬間、セ

シリアはより一層、理解する事になる。

この気持ち悪いほどのプレッシャーは、彼のモノである事を。

「何者なんですの・・・あなた・・・」

「・・・いるんだ・・・・」

セシリアの問いかけには応えずに、零司は呟く、まるで呪詛を唱える様に重苦しい、息苦しいとすら感じる声で。

「敵が・・・目の前に・・・いる」

そしてだんだんと息苦しさが消え、声がはっきりと聞こえて来る。

そのたびに、セシリアは背中に冷や汗を浮かばせていた。これは何かと、自分に問うが、理解できないものに応えを出すことはできない。ただ一つ理解できるのは・・・・

・・・今は、好機。

「まだ試合中だって事をお忘れかしら!!」

まだ零司の『黒天』のシールドエネルギーは半分を切ったくらいだ。

そしてセシリアの『ブルー・ティアーズ』のエネルギーは三分の一程度。押されている状況には変わりない。ここから一気に勝利へと進む。

「動かないのなら仕留めさせていただきますわ!!」

『スターライトｍｋ?』の銃口から青い閃光が瞬く。まず機動力を

奪う為に、左足を狙った一撃だった。
しかし・・・・

バシュンッ!!

「なっ!?」

レーザーは左足に命中しなかった。『黒天』が右手に持ったブレードで撃ち落としたのだ。着弾までの時間はたったの０．４秒。その間に構えもしないで反応し、ブレードでレーザーを弾くなんてことは、セシリアは初めての経験だった。

『オルコットさん!!すぐに試合を中断してください!!聞こえますか!!』

「中断って・・・何をばかな事をおっしゃるの!?試合はまだ――」

「・・・お前か」

真耶の言葉に応えながら、構えを固くするセシリアをバイザー越しの視線が射抜く。そしてグッと足を曲げ、背中のデュアルウィングが広がる。

「お前が・・・俺の敵かっ!!」

反応する時間もない。零司の声がセシリアの耳に届いた時は、すでに目の前に『黒天』の姿があった。そして驚愕する間も無しに、『Ｖｉｃｔｏｒ』が『ブルー・ティアーズ』の肩のアーマーを抉った。

「きゃっ・・・あ！？」

肩が外れる様な激痛と衝撃を感じ、怯んだセシリアの顔面を『黒天』の左手が掴む。そして次の瞬間、セシリアは押しつぶされる様なGを背中に感じた。セシリアが『黒天』が『瞬間加速』したのだと、気付く間もない。

「オオオオオオオオオオオオッ！！」

『黒天』を纏った零司は獣の様な咆哮を響かせながら、超高速で空中を引き摺り回す。しかもその速度は、先までの『瞬間加速』よりも数段上の速度を弾き出していた。バリアエネルギーを削る、つまり人体の生命に異常を及ぼす様な速度を。

「かっ・・・・あ・・・・」

バキッ！！

空気という名の壁に衝突を繰り返し、その度に衝撃波（ソニック・ブーム）によってシールドを貫通するレベルのダメージをくらうと同時に、『黒天』の二の腕部分に仕込まれた小型パイルバンカー『Ｄｅｎｉｓ（デニス）』によって、額にあった装甲が粉砕される。

「潰れろおおおおっ！！」

『黒天』は急停止をすると、一気に真下へと『瞬間加速』をする。爆発的な推進力に身体を拘束されたセシリアはそのまま地面へと激突する。

「かはっ・・・・」

呼吸すらもままならない状態から受けた、地面を割る様な衝撃。『ブルー・ティアーズ』の残りシールドエネルギーはあっという間に機体維持警告域（レッド・ゾーン）を超えて、操縦者生命危険領域（デッド・ゾーン）へと移行。もはやこれ以上の追撃などもってのほか。やり過ぎですらある。

だが――

バァンッ！！

『く、黒瀬君！！駄目です！！これ以上は操縦者の生命に関わります！！』

真耶の焦った声がアリーナに響き渡る。零司はもはや限界であるだろうセシリアをまるでボールでも投げる様に、会場の壁に投げつけた。そして弾き飛ばされていたショットガン『Ｄａｌｉａ』を拾い上げると、セシリアに向けて何のためらいもなく引き金を引く。

ドガンッドガンッドガンッ
射撃射撃射撃

『く、黒瀬君！！止めなさい！！止めて！！』

悲痛ともいえる真耶の叫びが響き、会場にも異常などよめきが広がって行く。容赦がないというレベルではない。まさに目の前にいるのは競技の相手ではなく、敵として排除しようとしている様にしか見えない。

そう、敵なのだ。零司から見た、今のセシリアは敵。

「敵は・・・殺す」

――これは敵だ。壊さなければならない。だから壊す。是非もない。

零司の『Ｄａｌｉａ』が再装填（リロード）を要求する頃、セシリアのＩＳが強制解除された。ギリギリのところで意識を保っているのか、彼女は薄い目で『黒天』を確認する。そこには再装填の終わった『Ｄａｌｉａ』をこちらに向ける・・・『黒天』の姿があった。

「ひっ！！」

絞り出す様な悲鳴がセシリアの喉から零れ、両手で自身を庇うようにして頭を抱える。普通の人間ならばここで引き金を引く事はないだろう。だが、今の彼ならやる。撃たれる。そうセシリアは直感で感じ取った。そして願う。

「誰か・・・助けて・・・！！」

引き金に掛った指が引かれる一歩手前のところで、セシリアは逃避する様に瞳をきつく閉じた。そして次の瞬間、彼女の耳に届いた音は――――

バキンッ！！

――――何か固いものが切り落とされる様な、そんな音だった。

「え・・・・」

予想外の音に瞳を開けて、頭を上げる。そしてセシリアが目にしたのは、狂気に染まった『黒』ではなく・・・

「やり過ぎだろ・・・これ以上は」

自分を護る様に立つ、『白』だった。

「あなたは・・・」

「大丈夫か、セシリア」

そしてその『白』を纏っていたのは、織斑一夏だった。一夏はセシリアを庇うように、最初から装備されていた近接ブレード『雪片弐型』を構える。

「どうしちまったんだよ・・・お前」

「・・・お前も・・・」

「おい・・・零司!!」

「お前も・・・敵か!!」

切断された『Ｄａｌｉａ』を投げ捨て、『Ｖｉｃｔｏｒ』を構える『黒天』。それを見た一夏は直感する。今の零司は危険過ぎると言う事、そして目の前に出てしまった以上、戦うしかないという事を。

「やるっきゃない・・・か」

初期化も最適化もついさっき終わったばかりで、自分はこの機体の事を理解していない。それでもやるしかない。そう腹にすえた一夏は『雪片弐型』を上段打突の構えで、零司と対峙する。

しかし、ここで異変が起こった。

「あ・・・・ああ・・」

零司が左手で再び頭を押さえる。彼の視界に映るのは、『白式』でもセシリアでも一夏でもない。彼の目に映っていたのは・・・

「それは・・・」

『雪片弐型』。それは嘗て、織斑千冬が使っていた、たった一つのＩＳ専用武器。それを見た瞬間、零司の動きが止まった。自身の恩師の武器がその場に存在する事が零司にどのような影響を及ぼすのか、それはわからないが、確かに彼の動きが止まった。

「『ブリュンヒルデ』の・・・・千冬さん――」

「織斑先生だと言っただろう、この馬鹿弟子が」

「・・・・っ！？」

不意に聞こえた声に反応しようとするが、零司の身体は衝撃と共に地面へと叩き伏せられた。首の上には峰の向いた日本刀型のブレード。そして背中には第二世代型ＩＳ『打鉄』を装着した千冬の姿が合った。

「千冬姉！？」

「一夏！！オルコットを連れてピットへ行け！！担架を用意してある！！」

「わ、わかった！！」

この場は教師である千冬に任せたほうがいいと思ったのか、一夏はセシリアを抱き抱えるとＢピットへと消えて行った。千冬はそれを見届けると、自身の下にいる弟子の耳元で囁きかける。

「落ち着け、零司・・・あれはお前の敵じゃない」

「敵じゃ・・・ない」

「そうだ、だから落ち着け」

静かに、子供をあやす様に囁きかける。敵ではない。その一言で零司の表情から焦りにも似た感情が消えて行く。

「俺は・・・」

何かを言おうとして、零司は意識を失った。『黒天』が待機状態である黒いチョーカーに姿を変え、それを確認すると千冬は刀を消滅させて零司を抱き上げる。

「馬鹿弟子が・・・過去にとらわれ過ぎだ、お前は」

自身の愛弟子にそう言うと、千冬は出てきたＡピットへと飛んで行った。こうしてＩＳ学園一年一組、クラス代表者決定戦は勝者無しという形で幕を閉じたのだった。

ＥＰ３　Ｅｎｄ

EP3　黒の飛翔（後書き）

はい、戦闘終了です・・・これはヒドイ（；ω；）ブワッ。どうも戦闘シーンを描くと龍頭蛇尾になってしまうんですよね。ちょっとそっち関係の勉強とかしてみようかしら（なぜオネエ言葉）。ちょっと今回はセシリアさんをいじめすぎちゃいました。オルコッ党の皆様、すみませんｍ（＿＿；）ｍ。次の話はクラス代表者決定戦の〆ですね。さてはて、誰が代表者になるのか・・・お楽しみに☆。何か文句や注文、あと「こうしたらいいよ」とか、「こうのほうがいいんじゃね？」とかアドバイスがあったらコメントしてくれると嬉しいです！！では次話でお会いできることを願っています。

では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ４　学園という場所（前書き）

はい、クラス代表者決定戦のメです。今回もお見苦しい作品でありますが、どうかよろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

ＥＰ４　学園という場所

目の前に、景色が広がっている。

その光景は決して美しいものではなく、全てを吹き飛ばしてしまう様な砂塵の嵐。

鼓膜が震える。

その音は決して心休まるものではなく、全てをかき消す様な発砲音。

手に感触を覚える。

その手触りは決して気分のいいものではなく、重厚で冷たい鋼鉄。

これはなんだ。否、問う必要などない。

俺はこれを知っている。忘れるはずもない。全て・・・全て知っている。

吹き抜ける砂塵も、飛び交う銃弾も、俺を覆う装甲も・・・

幾度となく駆け抜けた。安息だと夢想した。そして愚かにも再び舞い戻る。

流れる血の赤、むき出した骨の白、焦げてしまった肉の黒。

ああ、いらない。あれはもういらない。

残骸へと変わった兵器のメタルも
全身にこびりついた硝煙の匂いも
全てが合致し、視界を赤く染める。まるでここは世界の終り。そんな場所で俺は膝をつく。
そして抱き上げる、そっと、壊れるのを恐れる様に
だがそれは灰燼となって、衝撃と爆炎によって吹き飛ばされる。
残った首飾りの青は紅く塗りつぶされ、それを握りしめて、俺は叫んだ。
そしてその瞬間、全てが終わった。

・

「はっ・・・・・!!」

弾けるように瞳を開けると無機質な白い天井が見えた。ここは何処だ?俺は一体・・・・

「ここは・・・保健室?」

窓から差し込む夕暮れの光に目を細め、軽い痛みを感じながら身体を起こして周囲を見渡すと外界からの仕切りとして使われるカーテンに見覚えがあり、ここが何処であるかを一発で特定する事が出来た。だがしかし・・・何故に保健室?

「気が付いたようだな、この馬鹿弟子」

カーテンが引かれる。俺を馬鹿弟子って呼ぶとすると、千冬さんか。しかしなんか久しぶりだな、その呼ばれ方。

「千冬さん、俺は一体・・・どうして保健室なんかに？」

「・・・話で聞いた通り、ある程度記憶が混濁するようだな」

記憶が混濁・・・・という事は・・・

「千冬さん、もしかして――」

「ああ、お前はＩＳに乗って・・・症状が出た」

そう言った瞬間に俺はベッドから身を乗り出して、千冬さんに掴みかかった。

「だ、誰か！！誰が巻き込まれたんです！！無事なんですか！？」

「落ち着け。対戦者のオルコットも無事だ・・・少し前に部屋に戻したよ」

トンッと胸部を押され、力無く俺はベッドへと座りなおした。よかった・・・誰も・・・誰も犠牲にならないくて・・・

「だがここまで酷いモノとは聞いていなかったぞ・・・お前の精神疾患は」

精神疾患。そう、俺はとある精神病を患っている。病名は覚えていない。だが、その症状はいたって簡単だった。

―ＩＳに搭乗すると、精神に異常を来す―

「頭痛や吐き気、嘔吐などの症状が見受けられるのは聞いていた・・・だが、まさか発狂してＩＳを強制解除した相手に銃を向けるとはな」

千冬さんの言う通り、この精神疾患はＩＳに搭乗して一定時間経つと激しい頭痛や吐き気、そして視覚や聴覚などの感覚の麻痺などが見受けられる。だがもっと酷い時には・・・発狂し、目の前のものを破壊しようとするのだ。

「これも・・・あの事の所為か？」

千冬さんの問いかけに、俺は応えなかった。否、応える余裕がなかった。両手で自分の顔を覆う。俺は壊そうとした。目の前にいた、セシリア・オルコットを敵とみなして壊そうとした。その事実がゆっくりと俺の脳内で思い出され、現実味を帯びてきた。

「俺は・・・俺は・・・あの娘を・・・」

思い出してきた。俺はオルコットの頭を掴んで、空中で振り回し、壁に叩きつけて、『Ｄａｌｉａ』で・・・俺は・・・引き金に指を・・・

「・・・くそっ！！」

もっと俺が自分を制御できれば、あんなことにはならなかった。そ

の悔しさのあまり、ベッドを叩く。

「嘆いても仕方ない、もはや過ぎた事だ」

「ですけど・・・俺は」

「お前は過去に囚われ過ぎる・・・昔も・・・そして今も」

何か言おうとする俺を一瞥して、千冬さんは身を翻す。

「過去ではなく、今に目を向けろ・・・だからお前は馬鹿なのだよ」

そう言い残して保健室から出て行った。過去に囚われ過ぎる・・・過去ではなく、今に目を向けろ・・・か。でもね、千冬さん・・・・・

「逃れられない過去だって・・・あるんですよ」

俺はこの学園に来て初めて、織斑千冬に反論した。

・

結局、昨日は保健室で眠ってしまい、起きた時にはもうすでに朝だった。保健の先生曰く

「あまりにも言い寝顔だったから・・・起こすのも可哀想かなって思って」

いや、そこは起こしてくださいよ。俺だって部屋のフカフカのベッドで寝たいし、それに何より学校の備品を一晩中借りていた事に対しての変な申し訳なさを感じてしまうじゃないですか。

「変えの制服が合って、シャワー貸してもらっただけマシか」

起きてすぐにシャワーを浴びて、着替えの制服に着替えて登校する時にはもうすでに時間がギリギリだった。昨日の一件でクラスに入り辛いというところもあり、休んでしまおうかと思ったが、絶対に千冬さんはそんな理由で休みをくれるほど甘くはない。なもんだから、只今、全力疾走中である。

「これで廊下走ってたから罰与えるとかそんなオチは止めてくれよ・・・」

そうこうしている間に1年1組の扉が見えてきた。部屋の中ではSHRが始まっている様だったが、あの鬼教官の気配はない。よかった、とりあえず出席簿チョップは免れそうだ。

「スー・・・ハァ・・・」

俺は扉に前で急停止すると、深呼吸をひとつした。クラスに入った瞬間、どんな視線にさらされるかはイメージトレーニングしてきた。覚悟はもう完了している。覚悟完了。

「失礼しますっ!!」

「「「黒瀬さん、おめでとうございますっ!!」」」

しかし教室に入って向けられた視線は非難でも忌避でも畏怖でもない。ただ歓迎、そして祝福の一言に尽きる拍手の雨だった。

「・・・・は?」

すぐさま反応できずに、間の抜けた声を出してしまった。おかしい、俺はこんなイメージトレーニングをした覚えはない。

「凄いですね！！まさかセシリアに勝っちゃうなんて！！」

「男の人でも凄い人はいるんですね！！私、見直しちゃいました！！」

「初動とか本当に初心者なの、って疑うほどでした！！」

「というか惚れました！！付き合ってください！！」

なんか今物凄い発言が飛んだりしたけど・・・いや、マジでこれはどういう事なの？あれだけ酷い試合をしておいて、この歓迎は・・・まさかこれって夢？ドリーム？

「おい、零司・・・」

「お、おう・・・一夏」

戸惑う俺に見かねたのか、ちょいちょいと手招きをされて、一夏の元へと駆け寄ると周りに聞こえない様にひそひそと話しかける。

「こりゃあ、どういうことだ」

「ああ、なんでも途中からアリーナのシールドにステージを見えなくする・・・なんか視覚遮断みたいなもの入れたらしくてな。みんなはお前の・・・あの戦いは見てないらしい」

あの戦い、それはおそらく俺が発狂した当たりからだろう。

「それで、お前が勝ったって事だけ話しに出て来たんだ」

「そんな、見てもいないのに誰がそんなの信じるんだよ」

むしろ「八百長なんじゃないのか」とか騒がれそうな気がするんだが、この部屋の空気は本当に祝福する空気になっている。一体どうして・・・

「そりゃ、本人がそう言ったんだ」

「本人？」

聞き返すと、一夏は親指で後ろを指した。その指した向こう側には額に包帯を巻いたオルコットの姿があった。

「・・・オルコットが？」

「ああ、「私は負けて、黒瀬零司が勝った」ってな」

再びオルコットを見る。今度はこちらが見ている事に気が付いたのか、目線を逸らしてそっぽを向いてしまった。

「でも・・・あんな勝ち方――」

「まぁ、ちょっと問題あったけどな。勝った事には変わりないだろ？」

「・・・お前はいいのかよ」

一夏に問う。あんな勝ち方、俺はなんだか気に入らない。だが、一夏はどう思っているのか。当事者として、判断をゆだねてみる事にした。

「・・・・正直な」

腕を組んで考えた後、一夏は口を開いた。

「素人目から見ても、あの戦い。あのまま続いていたら、どっちにしろお前が勝っていたと俺は思ってる」

そう言う一夏の眼は真剣そのもので、俺が途中で否定しようとする事を自ら拒んでしまうほどだった。それは俺がその瞳に少なからず千冬さんの面影を感じ取っていたからかもしれない。

「それにな。俺、お前の正気の時の動き、あれ見て少し感動したんだぜ？」

「感動？」

「ああ、こんな力が俺の手にあるんだって・・・今度は俺が護る力を得られたんだって、な」

「・・・一夏」

「それなのに、俺を感動させた相手がこんなんでどうすんだよ。勝ったんだから、胸張れよ、零司」

俺は言葉を失ってしまっていた。不覚にも、俺は胸に込み上がる様

な思いを感じていた。
・・・まったく、感動させるのはどっちだ。この天然人タラシが。

「あ、あの～・・・」

「え？」「あ・・・」

「そろそろＳＨＲの続き・・・始めてもいいでしょうか・・・」

感激しているところで声をかけられ、振り向くとそこには涙目でこちらを見ている山田先生の姿が・・・

「ご、ごめん山田先生っ！！気付かなくて・・・」

「き、気付かない・・・うう、私ってそんなに影薄いんでしょうか・・」

「ああっ違う！！そうじゃないんです！！・・・ああ、泣かないでください。ね、山田先生」

今にも目元に溜まった涙が流れてきそうな山田先生をなだめる。ああ、もう本当にごめんなさい山田先生。無視するつもりは毛頭ないんですが・・・でも相方の冷血鬼教官とかと比べるとやっぱり若干キャラが薄いといいますか・・・

「教師をキャラ付けするとは、いい度胸だ」

「はっ、殺気っ！！」

背後からの声に反応して横に飛ぶ。よし、これで冷血鬼教官からの

出席簿チョップは効かな――

「甘いわ」

グキッ！！

「ぐおっ！？」

――くはなかった。千冬さんは出席簿を縦ではなく横に、しかも俺が方向からカウンターの如く首へと打ち込んだ。

「私の一撃をかわそうなど十年早いぞ。早く席に戻れ」

「くっ、首がっ・・・首がグキッて」

首を押さえながら、自分の席へと戻って行く。しかしよく躾けられた教室だな。千冬さんが出てきたら即座にどよめきが止まったぞ。

「さて、ＳＨＲを再会する・・・といっても、あとは代表者の発表をするだけだがな」

『代表者』という言葉が出た瞬間にクラスの女子達の視線が俺へと集束した。どうやら皆が皆、俺が『クラス代表者』に選ばれると確信しているのだろう。一夏までもがこちらを見ている。

だが、やはり俺は納得いかない。俺がクラス代表者になるのは、何か間違ってる気がする。

「ちふ・・・織斑先生」

「学習したようだな、これで私の苦労も減る・・・で、なんだ？」

「クラス代表者を・・・一夏にしてやれないでしょうか？」

そう言うと、驚きでクラスに先とは違うどよめきが起こった。

「静かにっ！！・・・・いいのか、黒瀬」

「はい、俺よりも一夏の方がこういうの良いと思います。こいつには・・・・護りたいという意志がありますから」

一夏を見る。驚いて唖然とした顔をしているこの男は俺が一度失ってしまったモノを持っている。千冬さんが『雪片』を託したように、俺も一夏に色々と託してみたいと思ったんだ。

「セシリア、お前は何かあるか？」

「そ、そうですわね、一夏さんで構いませんわ。彼は数少ない男性ＩＳ操縦者、色々特殊な経験が必要ですわね。それにＩＳ操縦には実戦こそが何よりも大きな糧。クラス代表ともなれば、それに事欠きませんものね」

オルコットもどうやら了承してくれるようだ――――あれ？オルコットの奴、今“一夏”って呼んだな。いつの間に名前で呼ぶようになったんだ？

「で、ですが、無様に敗北ばかりされてもクラスの顔に泥を塗る事になりますわ。ですから代表候補生であるこの私が、一夏さんにＩＳ操縦のなんたるかを教えて差し上げま――」

バンッとオルコットの言葉を遮るように机を叩く音が響き、篠ノ之箒が立ち上がる。

「生憎と一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

『私が』を強調した喋りをして、異様な殺気のこもった瞳でオルコットを睨みつける。というか、篠ノ之も“一夏”って呼ぶようになったんだな。仲直りでもしたのか？

「あら？ＩＳランクＣの篠ノ之さん。Ａの私に何かご用かしら？」

「ラ、ランクは関係ない！！頼まれたのは私だ！！い、一夏がどうしてもと懇願するからだ」

「え、箒ってＣランクなのか？」

「ランクは関係ないと言っている！！」

「座れ、馬鹿共」

千冬さんはスタスタと歩いて行くとオルコット、篠ノ之の順に出席簿チョップを打ち込む。うぁ、女の子に打ち込むもんじゃないぜ、千冬さん。

「私は男女平等なんだよ」

ほほぉ、このご時世で、それはそれは珍しい事で。

「お前達のランクなどゴミだ。私からすれば皆、平等に価値が無い。私が価値に値すると思うまで、優劣を付けるなど考えるな」

オルコットと篠ノ之は反論の余地無しといった感じで黙り込んだ。

「せめてお前らもコイツくらい動けるようになってからにしろ。話はそこからだ」

ビシッと俺を指差す。千冬さん、人を指差すのは礼儀正しくないんだぜ。知ってたかい？

「ず、ずいぶんと黒瀬さんの事をかってるんですね」

「少なくとも、ここにいる全員よりは強い。私は事実を簡潔に話しただけだ・・・さて」

青嶋の言葉にそう答えると黒板にチョークで一夏の名前を描き始める。それを焦った様に一夏が止めに入る。

「ちょっ、ちょっと待った!!俺の意見は!?」

「ない」

ばっさりと千冬さんに言葉という刃で叩き切られた。これが言葉の暴力というものだ・・・ちょっと違うな。そしてそう肩を落とすな、一夏。千冬さんの暴挙なんて今の始まった事じゃないだろ。

「ではクラス代表者は織斑一夏。異存はないな」

クラス中から元気なハーイ、という声が上がった。そんな中でため息を吐く一夏を見ながら、オルコットへとプライベートチャンネルを開く。

「オルコット、昼休みちょっといいか？」

「なんですの、急に？」

「いや、ちょっとだけな」

「・・・わかりましたわ」

オルコットの承諾を得て、俺は内心ほっとしながら、プライベートチャンネルを切った。

「で、一体何用ですの？」

「大丈夫だ、手間は取らせないよ」

屋上に呼び出されたオルコットは少し不満げに胸の前で腕を組んでいた。俺はそんな彼女から少し離れた距離から礼儀正しく、気を付けした後に頭を下げる。

「すまなかった、オルコット」

「・・・・・」

「あんな酷い事をして、頭一つ下げて許されるなんて虫の良い話かもしれないが、俺に出来る謝罪の方法はこれしか思いつかない」

頭を下げながら、心に思った事を口走った。一度は怪我どころではすまないくらい、危険な目にあわせそうになった。そのクセにこんなことしかできない自分が悔しい。だが、言ったように自分にできるのは頭を下げることしかできない。

「男同士なら殴ってくれとでも言っているくらいだ。それくらい、すまないと思っている」

「・・・顔を上げてくださらない」

俺はオルコットに言われた通りに、ゆっくりと顔を上げる。するといつの間にかこちらに歩いて来たオルコットが目の前におり、そして――

パンッ

「・・・・・」

――頬に痛みが走った。

「ふぅ・・・少しすっきりしましたわ」

平手打ちをしたオルコットは満足そうに言うと、いつもの様に腰に手を当てて、そして俺を見た。

「あなた、何か勘違いしていますわね」

「な、何がだ？」

いきなり叩かれるという予期せぬ事態もあり、少し困惑しながら聞

き返すと、オルコットは自身の胸に手をやった。

「別に私はあなたに怒ってもいなければ、恨んでもいません。あの時の敗北は、単に私が弱かった。ただそれだけですわ」

その言葉に俺は素直に驚いた。あのオルコットが、自分が弱かったと言った事に対してだ。代表候補生である事にプライドを持っていた、あのオルコットが、だ。

「私は少し調子に乗っていました・・・自分はＩＳの代表候補生である事で高慢な心を持ち合わせてしまっていたのですわ」

「・・・・オルコット」

「ですから、自分を磨き直す事にしましたの。このＩＳ学園で」

オルコットは今までに見せた事のない、笑顔を向けてきた。俺はそんな彼女の笑顔を綺麗だと、素直な気持ちで思っていた。

「さて、あなたにも言ってるんですのよ？」

「えっ・・・俺？」

「ええ・・・そうですわ、すまないと思っているのでしたら、一つ約束をしてくれませんこと？」

呆気に取られながら頷くと笑顔から真剣な表情へと一変させ、俺の胸に人差指を突き立てて、言う。

「今後、私からの対戦を断らない事・・・いいですわね？」

そう訊かれ、我に返ると同時にフッと無意識に笑みが浮かんできた。
ああ、なんでだろうな。この学園・・・・いや、俺の周りにいる奴らはどうしてこう・・・

「・・・ああ、いくらでも相手してやるよ」

「でもあのような事はごめんですわよ？」

「そりゃ違いない」

オルコットと共に小さく笑い合う。それと同時に、屋上の扉の方からガタッと物音が聞こえた。そちらを見ると、数人の女子が扉から倒れるようにして出ていた。

「あ・・・・」

「あなた達・・・何をしているんですの？」

「「「いや、あはははは」」」

オルコットに睨まれて、乾いた笑いを浮かべる女子ズ。どうやら一緒に屋上に来た噂を聞きつけて、俺達を折って来たのだろう。まったく仕方ないな、年頃の女子は。

「でさ、セシリアは黒瀬さんと何話してたの？」

「別にあなた達の聞きたい様な話はありませんわ」

「そうだぞ、別に特別な話なんて何もないさ」

「ええ～、怪しいなぁ」

「本当に何でもないさ・・・ほら、それよりも早く食堂行かないと昼休みの時間無くなるぞ」

「あ、ご一緒してもいいですか？」

「いいぜ、一夏と一緒に食べる予定だったし、飯は大勢で食べたほうが美味いしな・・・オルコットもいいだろ？」

「ま、まあどうしてもというのでしたら・・・」

「決まりだな」

オルコットと数人の女子を連れて、何処か晴れやかな気持ちを持ったまま、俺は屋上を後にした。

ＥＰ４　Ｅｎｄ

ＥＰ４　学園という場所（後書き）

セシリア　ノ　ユウジョウフラグ　ヲ　ゲット　シタ。

どうも、緋星です。終わりました、クラス体表者決定戦。ああ、なんだか心身ともに疲れてしまったぜ（―ω―；）。ま、何はともあれ完成できたのでよかったです、相変わらずの駄文ではありますがね（＾ω＾；）。

ちなみにセシリアはヒロインではなく、良き友人として付き合っていくことになります。期待した方はごめんなさいｍ（＿＿）ｍ。

では次は鈴登場、そしてオリキャラも登場です。こんな物語でも期待できる人は、ご期待ください。では、また（＾ω＾）ノシ

EP5　今を生きる（前書き）

はぁ？テスト？ぼっこぼっこにしてやんよ！　（＃。ω。）三つ三つシュッシュッ

はい第五話です。なんだかまとまりがない話です。あまり期待しないでね☆

EP5　今を生きる

晴れ渡る空、白い雲。まさに平和そのものを体現する様に澄み切っており、咲き終えた桜がゆっくりと青い葉を見せ始めるであろう、四月下旬。

「ではこれより基本的飛行訓練を始める。織斑、オルコット、試しに飛んで見せろ」

我らが鬼教官である千冬さんの厳しい授業を真面目に受けていた。つまり、いつも通りに一年一組の授業風景である。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

急かされて、一夏とオルコットは意識を集中するように目を閉じると、待機状態のＩＳが粒子化、そして再集結して、ＩＳ本体が形成された。

ちなみにフィッティング終了したＩＳはその操縦者の身体にアクセサリー状になって待機している。セシリアはイアーカスフ。一夏はガントレットなんだが、何故防具なんだろうか。あれか、一夏の中ではガントレットはアクセサリーの一つと加算されているんだろうか。だとしたら結構な趣味だな。

「０．７秒か・・・やはり少し遅いな。黒瀬、手本を見せろ」

「はい」

千冬さんに言われて、俺は自分の首に着いているチョーカーに意識

を集中する。黒い月に舞い散る羽のイメージ、それが俺の『黒天』の構成イメージ。それを頭に浮かべた瞬間、ほぼ一瞬で粒子化と再集結を行い、俺の全身が黒い装甲で覆われて、形成が完了する。

「０．４秒・・・まあまあだな」

「まあまあって・・・判定厳し過ぎじゃないですか？」

しかもさっきか０．７とか０．４とか、どうして小数点単位で正確に時間を当てる事が出来るのだろうか、ストップウォッチもないんだがね。恐ろしいわぁ。

「よし、飛べ」

号令を受けて、俺とセシリアはほぼ同時に飛んだ。そして一歩遅れて、一夏も俺達を追って飛んだ。

「どうした、スペック上出力は『白式』の方が『ブルー・ティアーズ』よりも上だぞ」

オープンチャンネルの千冬さんの声が聞こえて来る。近距離戦闘をメインとする『白式』の推進力が上なのはわかる、だがどうもまだ一夏は空を飛ぶという行動に慣れていない様だ。それもそうだ。人間とは元々地面を歩く生き物であって、自分の意志で空を飛ぶ様には身体も意識も出来ていない。

だが、ＩＳを搭乗する以上はそうもいっていられない。早めになれなければ、今後の実戦でもその思考が足を引っ張る事になるだろう。

「後でそこら辺の事を教えてやろうかね・・・うん？」

一夏とセシリアよりも高度のところを飛んで、上から二人を見てみると何やら二人・・・特にオルコットが楽しそうに話している。

「おやおや・・・」

二人を見ながら、笑みが浮かんでしまう。どうやらオルコットは先日の『クラス代表者決定戦』以来、一夏が気になるようだ。当の本人の一夏は気付いていない様だが、遠目から見てもアピールを繰り返しているのがわかった。

「教えるのはオルコットに任せるか・・・邪魔するのも無粋だしな」

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く下りて来い！」

いきなり通信回線に怒鳴り声が聞こえ、地上を見ると篠ノ之が山田先生のインカムを奪って叫んでいた。あらら、今日も荒ぶってるな篠ノ乃は。どうも一夏との仲が元通りになってから教室でもよく一夏に突っかかるというか、干渉してくるようになったからな。

「青春してるな・・・みんな」

って、何枯れた中年みたいな事を言ってるんだ俺は。まだ十七歳だぞ、俺は。まだまだ青春しても良い年頃なんだぞ。

「よし、織斑、オルコット、それに黒瀬。急降下と完全停止をやってみろ。目標は地表十センチ。黒瀬は五センチだ」

だからなんで俺だけそんなにハードル高いのさ。確かに出来ない事もないけど普通でいいじゃん。必要かい、そんなハードル。

「ではお二人とも、お先に失礼しますわ」

そう言うとオルコットは一気に地面へと加速し、ほぼ完璧に地表へと停止した。さすがは代表候補生、うまいもんだ。あれなら確実に合格レベルだろう。

「うまいもんだなぁ」

「感心してる場合か、お前もやるんだぞ」

「っとと、そうだった・・・行くぞ」

グッと膝を曲げて、地面へと目を向ける一夏。うん、加速するならそれでもいいけど・・・お前、停止するの忘れてないよな・・・

「おい、一夏。ちょっと待――」

ギュンッ――

「――って、言わんこっちゃない！」

ギュンッ――――

制止しようとした時には一夏は俺の前から地面へと向けて急降下していく。『瞬間加速』を使って、だ。さすがに一夏の腕では止まるに止まれない。そう判断した俺はこちらも『瞬間加速』を使って一夏を追う。

「うおあああああああああっ！？」

「悲鳴上げるくらいなら最初から加速すんなよっ！」

情けない声を上げる一夏へと追いつき、首根っこを掴むと一気に身体を逸らして、地面ギリギリ、鼻を掠める様にして、再び上昇すると、そのまま通常速度で千冬さん達の前へ降り立つ。

「まったく、確かに急降下しろとは言ったが誰が『瞬間加速』を使えと言った」

「どうせ無意識でしょう。一夏だってこの距離で自分から使う様な馬鹿じゃないですよ、さすがに」

一夏の首から手を離して、ＩＳを解除する。ベシャッと地面に落ちる一夏の前に篠ノ乃が歩み寄って来る。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

腕を組んで、立ち上がる一夏を睨みつける。どうやら一夏はあの日から篠ノ乃にＩＳについて指導を受けているらしい。本格的に友好関係が元に戻ってとてもよろしいんじゃないかと俺は思っている・・・実力の上達はさておきだが・・・

「大体だな一夏、お前というやつは昔から――」

「大丈夫ですか、一夏さん」

幼馴染からの小言が来ると思ったのだろう、思いっきり顔をしかめた一夏の元にオルコットがやって来た。

「いや、大丈夫だけど・・・零司が止めてくれたし」

「つまり俺がいなければお前は地面に大激突ってわけだ・・・少しは覚えろよ、お前のＩＳのスキルなんだからな」

「うう、面目ない・・・」

俺とオルコットに言われて、うなだれる一夏。まあ、一朝一夕で覚えられるようなもんじゃないだろうけどな、ＩＳ技術なんてものは。しっかし、嬉しそうだなオルコット。つい先日まで俺や一夏を「極東の猿」とか言っていた人物には到底思えない。

「まあ、篠ノ乃さんの擬音だらけの教え方では全く話にならないのでしょう。やはり私が教える方が――」

「だからそれは私やっている！一夏の理解が追いついてないだけだ！」

どんな教え方かは知らないが、一夏の顔を見るととても微妙な顔をしていた。どんな教え方をしているんだろうか・・・擬音だらけとか言っている時点であまり良い教え方ではない様な気もするが。

スパァンッ！スパァンッ！

「おい、馬鹿者共。いい加減にしろ、授業が進まん」

篠ノ乃とオルコットの頭に背後から出席簿チョップが投下。激痛に耐えているのか、プルプルと震えながら頭を押さえる。だからそれは女子に撃ち込むもんじゃないですよ、千冬さん。

「では次に武装展開。織斑、立て。そしてそこの馬鹿娘二人、いつまでうずくまってる。早く定位置に着け」

千冬さんの号令で皆が位置に戻って行く。いつもと変わらない授業風景。ああ、今日も平和だな。

・

「織斑君クラス代表決定おめでと～！」

「「「おめでと～！」」」

パンッ、パンパンパーンッ

軽快な音が食堂に響き渡り、クラッカーが乱射される。紙テープが一夏の頭の上にのしかかり、それをクラスメイト達が拍手で祝う。夕食後の自由時間。寮の食堂で一組のメンバーがそろい、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』が執り行われていた。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

何故か二組の女子が相づちを打っている。まあ、二組といわず他の

クラスの女子達も来ているようだ。目に見える頭数だけでも三十人は軽く超えている。

「人気もんだな、一夏」

「・・・押し付けてきたお前に言われると悪意がある様にしか聞こえない」

「んなわけないだろうが」

「ほんとほんと」

「・・・ふん」

二組女子、君はなんでも相づち打つな。それはそうと一夏の隣に座ってる篠ノ乃が明らかに不機嫌そうなんだが・・・どうかしたのか？

「はいはーい、新聞部でーす。話題の新入生にしてクラス代表者、織斑一夏君。そして黒瀬零司さんに特別インタビューをしに来ました～！」

オー！

一同盛り上がって声を上げた。突撃インタビューか、行動力あるねぇ、さすが新聞部・・・って、待て。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

「待て待て。なんで俺にもインタビュー？」

「そりゃあ、ＩＳ使える男子ですし・・・それ以上に代表候補生に勝ったって話じゃないですか、こんなスクープな話を見過ごすわけにはいきませんからね！それに年上の一年ってのも妙な情報ですし、そっちの方も」

名刺を受取った俺にそう言いながらビシッと親指を立てる黛。ていうか、二年ってことはまだ年下か。考えてみれば、俺ってこの学園の最上級生と同じ年齢なんだよな。確かに妙ではある。

「ではではズバリ織斑君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと・・・なんというか、頑張ります」

「えー。もっといいコメントちょうだいよ～」

「自分、不器用ですから」

「うわっ、前時代的！」

そのセリフは俺も好きだが、何故そのセリフを選んだ、一夏。

「はい、じゃあ次は黒瀬さん」

「俺はクラス代表じゃないんだけどな」

「いいじゃないですか～。パンチが効いたのお願いしますよ」

そんな事を言われてもな・・・なんかあるかね・・・

「・・・俺は面倒が嫌いなんだ」

「う～ん、なんだかパンチは無い気がするけどまあいいか」

あれ?今のは別にそれに対して言った一言じゃないんだけど。俺はアビスに誰かを招待したり、団地妻を乗り回したりしないぞ。

「じゃあ次にセシリアちゃんもコメントちょうだい」

「でも私はコメントする事なんてありませんわ」

「お前もなんかコメントしろよ、オルコット。元を正せばお前がクラス代表者決定戦自体の発端だろ」

「そうだぞ、セシリア」

「まあ、お二人がそう言うのでしたら・・・」

・・・とか言いつつも満更じゃなさそうだな、オルコット。髪のセットもなんだか気合入ってるし、新聞部来るのわかってただろ、お前。

「コホン。では、まず何故クラス代表者決定戦が始まったか、事の発端を語りますと――」

「ああ、長そうだからいいや。写真だけで」

「そ、そちらからコメントしろとおっしゃったのに!」

「ねつ造しとくから良いよ。よし、じゃあ織斑君に惚れたからって

ことで」

「なっ・・・ななっ!?」

おお、顔が赤いなオルコット。図星を付かれたからってそんなに見え見えの反応してたら一夏に感づかれるぞ。

「何を馬鹿な事を」

――――あれ、一夏?

「え、そうかなー」

「そ、そうですわ!何を持ってそんな馬鹿な事を言っているのかしら!?」

言いながらオルコットが一夏を睨む。おいおい、そりゃあ無いぜ一夏。まんまだったじゃん。明らかだったじゃん。なんで気付かないんだよ。

「な、なんだよ零司・・・」

「いや・・・ちょっとな」

お前の鈍さにちょっとした眩暈を覚えただけだ。この男は・・・いつか唐変木・オブ・唐変木ズとか裏で言われる様になるんではなかろうか。リアルに想像できるぞ・・・

「はいはい、取り合えず三人で並んでね。写真撮るから」

黛はそう言って、肩掛けのバックからカメラを取り出す。一眼レフか、今時デジタルを使わないなんて良い趣味してるじゃないか。

「注目の専用機持ちだからねー。しっかり写真に収めないと」

「あー、黛」

ノリノリでカメラを準備し始める黛に声をかける。俺は頭を掻きながら、少し控えめに言った。

「俺は後でいい。一夏とオルコットで先に写真撮って」

「どうしてで――――ああ」

どうやら黛は俺の意図を察してくれたらしい。オルコットの青春の一ページだ。どうせなら好きな人とのツーショット写真でも残してやりたい。そんな年長者としての要らぬ世話心ってやつだ。

「まあ、そっちの方がねつ造情報と照らし合わせても面白いかもしれませんしね。わかりました。じゃあ織斑君とセシリアちゃんは並んで、握手とかしてくれるといいかもね」

「そ、そうですか・・・そう、ですわね」

モジモジとし始めるオルコット。いいね、初々しくて。こういうの見てるとちょっと面白くてニヤけてしまう。

「・・・・・」

だが篠ノ乃からの攻撃的な視線がこちらに向くってのは誤算だった。

そう睨むな、篠ノ乃。並みの不良なら一瞬で黙らせられるような睨みをこちらに向けるな。怖いじゃないか、若干。

「・・・・・」

「？なんだよ？」

「な、なんでもありませんわ」

オルコットはきっと心の中では嬉しいんだろう。さっきから挙動が不審だ（いい意味で）。

「・・・・・」

「・・・なんだよ、箒」

「なんでもない」

睨みを一夏に向け直す篠ノ乃。ところで一夏はあの視線を見てどう思うんだろうな。怖いのかね、やっぱり。

「じゃあ撮るよ・・・３５×５１÷２４は～？」

「え？えっと・・・２？」

「７４．３７５だ」

「黒瀬さん、正解」

パシャッ

カメラのシャッターが切られて、フィルムに焼きつけられる。

「で、なんで全員入ってるんだ？」

だがそこに映されているのはきっと一夏とオルコットのツーショットではなく、俺を除いた一組メンバーが集結した映像だろう。早いね、君達。篠ノ乃も一夏の前にいるし。恐るべし、うら若き十代の行動力。

「あ、あなた達ねぇ！」

「まーまー、いいじゃないセシリア」

「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

クラスメイトからの言葉でオルコットは徐々に丸めこまれて行く。本当に要らぬ世話だったようだ。

「う、ぐ・・・」

「まあ、そう落ち込むなよ。違う機会があるって」

「・・・そ、そう信じましょう」

苦虫をかみつぶしたような顔のオルコットはそう言うとため息を一

つ吐いた。

「じゃあ次は黒瀬さんだけど・・・一人で映るのはちょっと寂しいわね」

「そうだな・・・さっきと同じでいいんじゃないのか？」

どうせ俺一人で映っても、味気ない十七歳がポツンと立っているだけの写真になってしまう。なんて写真だ。学校で撮る様なものじゃない。身分証明の顔写真じゃないんだぞ。想像しただけで心が泣けて来る。

「よーし、じゃあ私が黒瀬さんの隣に――」

「ちょっと、さっき抜け駆け云々って言ったでしょ」

「公平に行きましょうよ、公平に」

言い争いを始める女子達。オルコットは凹み、一夏は苦笑し、篠ノ乃は一夏を睨んでいる。そんな中で俺は笑いながら並びが決まるのを待つしかできなかった。

こうして、『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は続いて行ったのだった。

・

「え～、先に戻っちゃうんですか？」

「ああ、この賑わいは年寄りにはちょっとつらいからな」

「年寄りって・・・二歳しか違わないじゃないですか」

「二歳でも肉体は老化してるんだよ・・・てなわけで一夏、後は頼んだぞ」

「頼むって何をだよ・・・」

只今の時刻はもうすぐ九時半といったところ。俺は食堂から抜け出して、通路を歩き出していた。やばいやばい、女子のエネルギーは半端じゃない。年寄りには辛いってのは冗談だが、かなり疲れていたのは本音だった。

「元気だな、本当に・・・」

だけど、年頃の女子・・・いや、女子に問わずあの年代の少年少女はあれくらいのパワーがあるものなのだろう。

「十五歳か・・・」

十五歳、つまり俺からすれば大体三年前に当たる世代。その頃の俺はあんな誰かとワイワイ騒いだり、ふざけ合ったりしていただろうか・・・

「・・・愚問だね」

少し卑屈な笑いがこぼれた。そんなこと、しているはずがなかった。

俺はずっとＩＳに付きっきりだった。ドイツで行われた、生活という名の実験。世界最初の男性操縦者と騒がれる事もなく、ただひたすらＩＳに乗り続けた。

起動して、実験を行い、ノルマが終わったら解除し、休みと同じ事を繰り返す。まるで日が毎日上るのが当たり前の様に、俺の実験生活は俺の中で当り前のものと化していた

「思えば思うほど、殺風景で思い出の欠片もなんだな・・・俺って」

そして最終ノルマが達成され、実験が終わり、地獄から解放された。だがしばらくして、十五歳になった俺は駆り出された。砂塵が吹き荒れるあの地へ。

視界が闇に包まれる。耳の奥にあの音がリフレインする。思い出すな、精神がそう告げている。

「は、はは・・・本当に・・・本当に・・・」

嫌な汗が背中にわき出て来る。ザワザワと心が落ち着かない。警戒を怠るな。隙を見せるな。その手に握る物を絶対に手放すな。

「どうしようもない・・・」

進め進め進め、足を止めるな。立ち止まるな。どれも怠るな、怠れば――――

――――死ぬぞ

「黒瀬っ！」

「・・・っ！？」

声を聞いて、ハッと我に返る。すると目の前には俺の肩を掴んだ千冬さんの姿が合った。辺りを見ると、そこには黒い空間はなく、あの音も耳には聞こえない。

「大丈夫か？」

「・・・はい」

俺は短く答え、小さく頷くと千冬さんは厳しい表情のまま俺の肩から手を離した。幻視に幻聴・・・こりゃ酷いな。ＩＳにすら乗っていないのに・・・

「思い出していたのか？」

「もう、大丈夫ですから」

少し無理をして笑って見せる。だが千冬さんは厳しい表情を崩さないまま、俺を見ていた。

「本当に大丈夫ですから・・・そんな顔しないでくださいよ」

「お前の嘘が今まで私に通用した事が合ったか？」

なかったような気がする。どうやら無理して強がっているのもバレているようだな。こんな状況じゃ当り前か。

「・・・零司」

「は、はい」

「ちょっと付き合え」

「は？」

「教師に対する答えは『はい』だ」

「・・はい」

「よし、付いてこい」

そう言ってカツカツと歩き始める千冬さんの後ろを追って、俺も歩き出す。付き合えって・・・何処に連れて行くつもりだろうか。

・

「着いたぞ」

千冬さんに連れて来られたのは、寮の屋上だった。開けたその場所からは雲一つない空と煌々と輝く星と月がこれでもかというほどにはっきりと見えていた。

「ほれ」

「――っと」

いきなり千冬さんが何かを投げ、それをキャッチする。投げ渡されたのは缶コーヒーだった。

「帰りがけに買ったものだ。無糖と間違えてな」

確かに缶コーヒーには微糖と描かれている。確か千冬さんはブラックしか飲まないんだよな。俺もブラックの方が好きだが、微糖も飲まないわけじゃないのでありがたく頂戴しておく。

「・・・あれは聞いていない症状だがな」

あれというのは、さっきの廊下での出来事だろう。俺は表情を歪めながら、応える。

「あれも疾患の一つというか・・・疲れが出ると時々・・・本当に時々ですけど」

「・・・そうか」

プシッ

隣に移動して言うと、千冬さんは短く応え、缶コーヒーのプルタブを開ける音が、無音の夜に響く。

「・・・情けないですよね」

「何がだ」

「ＩＳに乗らなくちゃ、ほとんど意味のない人間なのに。ＩＳに乗れば暴走する・・・なんて」

実験や訓練。積み重ねたものが全て意味を無くす。俺の病気はそういうものだった。一年前に俺はドイツからこちらの日本へと帰国したのはそのせいでもある。

もはや使えはしないパーツ。利用価値のない非力な人間。使えたとしても、周りに被害を出すだけの欠陥品。

「まさに欠陥品ですよ・・・今の俺は」

「疲れの所為でブルーになっているのか」

「元々思っていた事ですよ」

素直に応える。日本に戻ってから、一年間は地獄だった。日本政府から姿を隠し、家族である妹に害を加えまいと自分を封じ、悪夢で眠れない夜を過ごす。

ＩＳが俺の手元から消えた事で、全てが変わってしまった。そう言っても過言ではないのだ。

「この学園に来て、本当に良かったのかって思ってもいるんです。俺にＩＳに乗る資格なんてあるのかって・・・それに」

「・・・・」

「あなたの前に立つ資格があるのかって・・・」

最初にこの学園に来いと千冬さんから電話が来たときは、嬉しかった。だが嬉しさの半面、後になって怖くなってきたのだ。今の俺を

知って、千冬さんは俺の事を・・・嘗ての弟子をどう思うのだろうと。

「失望させてしまったのならすみません・・・俺は――」

「もういい、黙れ」

鋭い声が飛んだ。俺は口を噤み、隣の千冬さんを見た。

「泣き言なら妹にでも言え、甘える様に私に向けるな。反吐が出る」

「・・・すいません」

「・・・何故、立ち止まる」

千冬さんはこちらを向いて、睨みつけてきた。その瞳は嘗ての俺の師匠、『ブリュンヒルデ』の織斑千冬の目をしていた。

「お前の足は飾りか、その眼球はガラス玉か。歩みを止めた足、見る事を止めた瞳。それらは何の意味もなさない」

「・・・千冬さん」

「私は言ったはずだ。過去に囚われるな、今を見ろと・・・私の言うことも聞けない弟子だったのか、お前は」

千冬さんの目を直視できなくなり、俺は目を逸らす。だが――

「目を逸らすな。教えたはずだ、私の話を聞くときは目を逸らすなと」

そう言われ、視線を元に戻す。

「何よりも、お前はあの時、答えた筈だ」

「え・・・」

「ＩＳ乗りたい・・・そう言ったはずだ」

それは三月下旬のあの時に俺が電話で答えた事。そうだ、俺は確かに言った。ＩＳに乗りたいと・・・言ったんだ。

「私はな、あの時のお前の答えを訊いた時に決めたんだ」

「決めたって・・・何をですか」

「お前を意地でもＩＳに乗らせると・・・そしてその精神疾患を治し、一流のＩＳ乗りにする、とな」

「なんで・・・」

なんでそんな・・・そこまでしてくれるんだ。もう俺とあなたは・・・違うはずだ。三年前のあの時から、全部違うはずだ。なのに・・・どうして・・・

「なんで、だと？」

俺の問いかけを復唱し、瞳を閉じて、千冬さんは呆れたようにため息を吐いた。

「ここはＩＳ学園で、私は教師、そしてお前は生徒だろうが。そんな単純な事も理解できんのか」

言いながら千冬さんは一歩前に出ると、俺の頭に手を置いてクシャッと優しく撫でた。懐かしさで感情が押しつぶされそうなるのをこらえながら、千冬さんの言葉に耳を傾ける。

「お前は私の生徒で、私はお前の教師だ。形は違えど、ここだけは三年前と同じだ」

「何もかも・・・違いますよ」

「そうかもしれない・・・だがな、根本的な事は変わっていない」

そう言うと千冬さんはフッと微笑を浮かべた。どこまでも優しい、俺の心を洗う様な、そんな微笑を。

「ここには私が居て、そしてお前が居るという事だ」

スッと頭から手を離し、千冬さんは冷めてしまったコーヒーを一気に飲み干し、出口へと歩いて行く。そんな後ろ姿を見詰めるしか、呆けて立つ俺には出来なかった。

「毎週、火曜と木曜、午後九時から十一時の間、第三アリーナを借りる事に成功した」

「第三アリーナ・・・」

「そこでお前の治療を行う・・・一つのショック療法だ」

何処までも厳しく、何処までも優しかった。織斑千冬、師であった頃のこの人はそういう人間だった。そしてそれは今でも変わってはいない様だ。

「効果があるかわからん。だが手は尽くす・・・いいか、午後九時からだ。絶対に来い」

「・・・は・・・はいっ！」

震える全身を押さえ、声を絞り出し、俺は返事をする。その返事が満足したのか、千冬さんは何も言わずに屋上を後にして行った。

「・・・・今を見ろ・・・・か」

空を見上げる。満点の星空に浮かぶ月。そう言えば昔も、千冬さんと一緒にこんな月を見た事が合った。剣を交え、言葉を交え、支えてくれた大切な・・・何よりも大切な師匠と共に。

だけど、この月は確実にあの時の月ではない。あれから三年が経って、今現在俺を照らしつけている月なのだ。

「苦労は・・・あるだろうな」

今すぐに前を向けるかといったら、わからない。何度も、過去に足を囚われるかもしれない。でも・・・それでも・・・・

「今を・・・歩いて行こう」

そう、決めたから。

「ありがとう・・・千冬さん」

俺は過去の師であり、今の師でもある女性に礼を言って、受け取った缶コーヒーを開けて、一気に飲む。冷め切っているはずのコーヒーは、何故か温かさを感じる味だった。

・

「ふぅん、ここがそうなんだ」

星空が照らすＩＳ学園正面ゲート前。小柄な身体にボストンバックを抱えた少女が一人、立っていた。

「ずいぶん遅くなっちゃったわね・・・で、受付って何処にあるのよ・・・」

くしゃくしゃの紙切れを手に歩き出す少女の左右に結ってある髪を夜風が揺らす。その足取りは何処か苛立ちを含んでおり、ズンズンと学園内へと進んで行く。

「もう少しまともな地図とか渡してくれればいいのに・・・気が利かないんだからも～」

文句を言っても始まらない。とにかく進む、それが彼女の判断だった。活動的な少女に取って小難しく考える事はなるべく避けたかった。

「こんな時間だっていうのに出迎え一つないんだから・・・ん？」

きょろきょろと辺りを見渡すとふと少女の視線に人影が移った。学園の人間かもしれない、そう思い、少女は人影に駆け寄ろうと足を動かすが・・・途中で足を止めてしまう。

「・・・・・」

空から降り注ぐ月の光が人影を照らし出すと、それが女性だということが分かった。ブラウン色のロングヘアーに真っ白な白衣を着た、少女が足を止めるほどの美女だった。見た限り年齢は十八から二十くらいだろう。優しそうな顔は学園を見ながら、小さく微笑んでいた。

「・・・・あ」

女性はこちらに気付いたのか、小さく声を上げて少女を見るとこちらに歩み寄って来た。

「こんにちは」

「こ、こんにちは」

大概の事ではもの動じない少女だったが、少々上ずった声になってしまった。それだけ綺麗な女性なんだと言えよう。

「あなたはここの生徒なんですか？」

「あ、えっと・・・あたしはまだ転入したばっかりで」

「あ、そうなんですか・・・じゃあ校舎内の事とかわからない・・・

ですよね？」

「うん、まあ・・・そうなるわね」

「そうなんですか・・・はぁ」

女性は肩を落として、ため息を吐いた。どうやらこの女性は学園関係者ではないようだ。だけどだったらなんでこの場所にいるのだろう。見たところ科学者の様に見えるが・・・

「本校舎一階総事務受付・・・何処なんでしょうか・・・」

女性は「う～ん」と顎に手を当てて、呟いていた。本校舎一階総事務受付・・・それは丁度少女が向かっているところと同じところだった。

――――どうせなら一緒に探したほうが手間省けるし、良いかもね。

「あの・・・あたしも受付探してるんだよね」

「あ、そうなんですか？」

「そう、だから一緒に探さない？もしよかったらだけど・・・」

「もちろんです！一緒に探しましょう・・・えっと」

女性はこちらの呼び名に困っているのか、少し戸惑う。それに気付いた少女は自分の名前を口にする。

「凰鈴音（ファンリンイン）よ、鈴でいいわ・・・あんたは？」

「はい、私は――」

ヒュウゥゥ――――

突風が吹き付け、ふわりと髪が揺れる。再び嫉妬するよりも早く目が奪われる様な美しい笑みを少女に向けて浮かべると、女性はこう続けた。

「――――黒瀬奏と言います・・・よろしくお願いしますね、鈴さん」

EP5　今を生きる（後書き）

サブタイトルと関係あるのが後半部分だけじゃねえかーーーっ！（＃。Д。）

はい、終わりです。新キャラ登場です・・・本当に最後しか出てきてないけど（；＾ω＾）。それと鈴がやってくるタイミングが違うのはオリジナル展開です。深夜近くに学園にやってくるって不審者ですよね～・・・ま、いっか（おい）。次回は鈴登場から入っていきます。何か感想などあったらコメお願いします。では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ６　来客者（前書き）

（Ｔ）ダイスンスーン＜　貴公、死に急ぐこともあるまいに（テスト期間的な意味で）

描きたくて描きたくて仕方ないんだよおおおおおおおお！！（。д。＃）

なんというか、今回もやっちゃったんだぜ☆。相変わらずの駄文でありますが、読んでいただけると嬉しいですｍ（＿　＿）ｍ

EP6　来客者

「黒瀬さん、転校生の噂聞いてますか？」

「転校生？」

朝。席に着くなり青嶋が話しかけてきた。もはや青嶋には最初のびくついた様な様子はなく、気兼ねなくこちらに話しかけて来るようになっていた。オルコットを抜けば、クラスメイト女子の中で一番最初に友達となってくれた女子でもある。

「いや、そんな話は聞いてないな・・・一夏、お前は何か聞いてるか？」

「俺も初耳だ・・・というか、こんな時期に転校生かよ」

一夏の言う通りだ。今は四月。この時期ならば普通、入学式にまとめてやればいい。それなのに何故転入なのだろうか。

「どうやらその娘、中国の代表候補生みたいなんですよ」

「中国の・・・代表候補生ねぇ」

代表候補生といえば、うちのオルコットもイギリスの代表候補生だが・・・ああいう娘は一人でお腹いっぱいというか・・・これ以上増えられても五月蠅いというか・・・

「あら、何か失礼な事を考えてなくて？」

「なんでも・・・そう言えばお前も代表候補生だよなって思っただけだ」

ひょっこり現れたオルコットにそう返し、鞄から一時間目の用意を取り出す。

「やっぱり強いのか？」

「ま、だろうな。仮にも代表候補生だ、生半可な奴ではなれんよ」

オルコットだって、年の割にはかなりの技術を持っている。しかも代表候補生となるにはＩＳの操縦技術だけではなく、知識や姿勢もしっかりしなくてはならない。その点、オルコットは感情的ではあるが、変に突かなければちゃんとした姿勢で物事にのぞんでいる。

「・・・今のお前は他の女子を気にしている暇なんてないと思うがな、一夏」

一番窓際の席にいた篠ノ乃がこちらにやって来て、一夏に言う。

「来月にはクラス対抗戦だ、それなのにそんなことで浮かれてる場合か」

「う、浮かれてなんてないだろ」

妙に刺々しい篠ノ乃に反論する一夏を見ながら、そういえばと俺はクラス対抗戦の事を思い出した。

クラス対抗戦、その名の通りクラス同士で戦うリーグマッチ。なんでも本格的なＩＳ学習が始まる前に、現段階での実力指標を作る為

の簡単なテストのようなものらしい。出るのは篠ノ乃の話しに出ている様に無論の事ながら、クラス代表である一夏だ。

「いきなり大役だな、一夏」

「だから押し付けた本人が言うなよ・・・」

「自信はどんなもんだ？」

「・・・まあ、やれるだけはやるつもりだよ」

「やれるだけでは困りますわ！一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそんな弱気でどうする」

「織斑君が勝てばクラス皆が幸せだよ。ね、黒瀬さん」

「そうだな、俺達の幸せを勝ち取ってくれよ」

俺、篠ノ乃、オルコット、そしてクラスメイトに好き放題言われて、一夏の顔がどんどんよりとしてくる。どうも一夏の奴はＩＳの操縦が上手くいっていないらしい。

だが、俺はその噂をちょっと信じ難かった。

俺が見た、一夏の動き。クラス代表者決定戦の時に見せた動き。俺の背後から近付き、すれ違いざまに『Ｄａｌｉａ』を叩き切って、空中でターン、俺に向けて構えを直した。

なんというか、動きに無駄が少なかった。オルコットを護ろうと必死だったのかもしれないが、それでも俺は一夏にＩＳ乗りとしてのセンスを感じ取っていた。

「織斑君、頑張って」

「フリーパスの為にも」

やいのやいのと楽しそうな女子一同。ちなみにフリーパスとはクラス対抗戦の優勝賞品である学食デザートの半年フリーパスだ。俺からすれば食べ物で釣るのかって思うが・・・女の子は甘いもの大好きだからな、仕方ない。

「お、おう・・・」

「そんな自信無さそうに返事するなよ・・・お前なら出来るさ」

そう笑いかけてやると、一夏はポリポリと頭を掻いて、小さく息を吐いた後に言った。

「ま、まあ・・・零司がそう言うならな、やってみるさ」

「そうだ、それでいい」

最初から気が滅入っていたら、何をやっても駄目だ。メンタル面でもしっかりしていくこと。それはＩＳに関わらず、他のスポーツや勉強にだって関わってくる。病は気から、とも言うしな・・・これはちょっと違うな。

「それにそんな気を張らなくてもいいって。今のところ専用気持ち

のクラス代表は一組と四組だけだから、楽勝だよ」

「――――その情報、古いよ」

クラスの女子の言葉に応じる様に扉の方から声がした。何事かとクラスの女子と俺、そして一夏がそちらを向く。

そこには腕を組んで、片膝立てながらドアにもたれかかる女子生徒・・・誰だ？

「二組も専用気持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝させないよ」

「鈴・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告にきたってわけ」

小さく笑みを漏らす少女。なるほど、この娘が中国の・・・なんだかオルコットと違った意味で面倒くさそうなのが来たぞ。というか一夏、お前はその娘と知り合いなのか？

「何カッコつけてるんだ？全然似合わないぞ」

「んなっ・・・！？なんて事を言うのよ、アンタは！」

「おい」

「何よ！」

バァンッ！

もはや聞きなれた出席簿と頭蓋骨がぶつかり合う音。どうやら千冬さんの登場らしい。てか、ちょっと音が大きい気がするんですけど・・・返事が乱暴だったからかね。ご愁傷様です。

「もうＳＨＲの時間なのだが・・・お前は何をやっている」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生だ・・・まったく、どいつもこいつも。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「は、はい・・・すみません」

さっきまでの威勢の良い態度は何処へやら、まるで蛇に睨まれた蛙の如く、ビクビクと震えて道を開ける。怖いよね、千冬さん。そうなるのが普通だよね。

「ま、また後で来るからね！一夏、逃げない事！」

「何故俺が逃げる」

「それと・・・黒瀬って奴いる？」

「俺だが？」

小さく手を上げて、アピールするとこちらに気付いた・・・ええと、凰はビシッとこちらを指差してきた。

「あんた、今日の昼休み学食に来なさい！絶対よ！」

「それでお前はいつまでここにいるつもりだ・・・さっさと戻れ、それともう一発くらいたいのか？」

「い、いえ！すぐに戻りますっ！」

ドスの聞いた千冬さんに言われ、凰は二組へと猛ダッシュで駆け抜けて行った。おーい、代表候補生、廊下は走っちゃいけませんよ～。

「っていうかあいつ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」

「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？偉く親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で――――」

篠ノ乃＆オルコットの質問によって一夏に対する集中砲火の口火が切られそうになる。女子諸君、今はいかん、そいつに手を出すな！

スパパパァンッ！

「お前らは私の言う事が聞こえないのか、それとも聞こうとしていないのか？」

「「せ、席に着きます・・・」」

流れる様な出席簿チョップが彼女達の頭上に撃ち込まれた。ああ、言わんこっちゃない。

・

「お前のせいだ！」「あなたのせいですわ！」

「なんでだよ・・・」

昼休みに入って、開口一番に聞こえてきた文句に一夏はため息を吐いて応えていた。そういえば午前中の授業、篠ノ乃とオルコットはやたら出席簿チョップの餌食になっていたな。だがそれで一夏に当たるのはちょっとばかし理不尽の様な気もするが・・・

「二人とも、理由も言わずにそりゃないぞ。とりあえず飯でも食いながらゆっくりと文句を言え・・・一夏、行くぞ」

「おう。二人とも、行こうぜ」

他にも何か言いたげだったが、二人はブスッとした表情のまま、クラスの女子数名と一緒になって一夏の後ろについて来ている。なんか後ろに女子連れて飯に行くっていうのが日常風景と化してるよな・・・

「・・・おや、ずいぶんと賑やかだな」

学食に着くと何やら人だかりができていた、いや、昼休みだから人が集まるってのは当たり前なんだけど、なんかやたら一つの席に集まっていて・・・あれだ、まるで芸能人を喫茶店とかで見かけて、一般ピーポーが集まってる感じ、アレに近い。

「誰か著名人でも来てるのかね」

「さあ、そんな話は聞いてないぞ・・・箒とセシリアはなんか知ってるか？」

「いや」

「さあ、知りませんわ」

後ろの女子生徒達も首をかしげる。まあ、とりあえず人だかりのおかげで食堂のおばちゃんの前が空いてる。今のうちに食事を――

「あ、黒瀬さんだ！」

「本当だ、黒瀬君グットタイミング！」

券売機へと進んで、金を入れていると人だかりの中から声が上がり、数人の女子がこちらに寄ってくる。は？いきなりなんだ？

「黒瀬君、こっちこっち！」

「あの、意味がよくわからないぞ三年生」

「いいからこっち来てください！」

「わ、わかったわかった・・・一夏、飯買っといてくれ。金はもう入れてあるから」

「何買うんだ？」

「任せる・・・だからそんな引っ張んないでくれ二年生」

一夏へと食券を任せて、三年生と二年生に腕を引かれながら人混みへと入って行く。むおう、女子の匂いで充満しとる・・・ちょっときついな・・・

「はいはいどいて！主役のお通りだよっ！」

「どいてくださ～い！」

人混みを割って、前へ前へと進んで行く。そんな中で、俺の耳にとある声が聞こえた。

「いえ、だから私は本当に・・・姉じゃないんですって」

「この声は・・・」

混雑した人混みの中でもわかる、ずいぶんと聞き慣れた声。でもまさか、こんなところにいるはずがない。いや、いるかもしれないけどなんで・・・

「・・・プハッ・・・はい到着」

「つ、連れてきましたよ～」

完全に人ごみから抜け切ると、この波の中心となっているテーブルに行き着いた。そしてそこには、俺の予想していた人物が白衣姿で控えめに座っていた。ブラウンの長髪に俺と同じ青い目、ドイツ人の祖母から受け継いだ瞳の輝きは俺と同じものを宿しており、一目見た瞬間、驚きのあまり少し息を飲んでしまった。

「あ・・・お兄ちゃん・・・」

「か・・・奏？」

そこにいた俺の事を兄と呼ぶ少女を見て言葉を失い、固まった。

黒瀬奏。そこにいたのは紛れもない、俺の唯一無二の妹だった。

「ど、どうしてお前がここに？」

「えっと・・・その、ちょっと理由があるんだけどね」

えへへと笑いながらに頬を掻く。理由ってなんだろう、奏がこの場所に自分の足で来るなんてよっぽどの事だ。

「理由って・・・一体なん――」

「へぇ、本当に妹さんだったんだ・・・てっきりお姉さんだと思ってた」

ピシッと俺の身体が動きを止める。その言葉は人混みの中から出た言葉であり、何気ない感じで出た一言だった。

「本当だよね。見た目、完全に私達よりも年上だもんね」

グサッ

「なんだか弟を待ってる姉って感じだったもんね・・・見た感じ」

グサグサッ

「う～ん・・・やっぱり黒瀬さんが弟にしか見えないな～」

グサグサグサッ！

「ぐ、グフッ！」

「お、お兄ちゃん！？」

心の痛みに耐えかねた俺は奇妙な声を上げて、その場に跪いた。ああ、痛い、痛いよ、心がさ。年下に見られるほど情けない兄に見えるのかね、俺って。

「い、いや・・・大丈夫だ・・・ドミナントの力、こんなものではない」

どこぞの隊長殿式の気合いを注入し、立ち上がる。こんな心の傷なんざ痛くねえさ。若干塩塗り込まれて、のた打ち回って苦しんでるくらいだし。

「お～い、零司。飯取って来たんだが・・・」

「あ、織斑君だ！」

人混みの向こうが側から一夏の声が聞こえる。それに注意が引かれたのを見計らって、奏が声を上げる。

「じゃ、じゃあ皆さん。ありがとうございました、おかげで兄に会えました」

「ああ、そんなこと良いよ。それよりも、黒瀬奏先生に会えただけで私達は光栄だし」

「そうそう、本当にびっくりしちゃったんだから」

「よぅし、じゃあ後は兄妹二人で話させてあげましょ・・・はい、これ・・・じゃあね、黒瀬君」

「お、おう・・・ありがとう」

俺の腕を引いていた三年生は一夏から受け取った飯を俺に渡すと、ウィンクしてひらひらと手を振ると人混みを散らせた。ありがたい。正直、奏にとっては人混みも少し避けて欲しいくらいだからな。

「奏・・・」

「えっと・・・来ちゃった」

ワイワイガヤガヤと一夏の周りへと向かって集まって行く中でちょっと控えめの笑みを浮かべる。俺は机にきつねうどんの乗ったお盆を置いて、そんな奏の隣に腰を下ろし、ため息を吐いた。

「お前なぁ・・・こっち来る時は連絡くらい入れてくれよ。驚くだろ？」

「ごめんなさい、急に来る事になったから・・・」

「次からはちゃんと連絡するように」

「そ、それを言うならお兄ちゃんだって・・・ちゃんと連絡くれな

かったじゃないですか」

連絡？はて、何の事だろうか。特に何か連絡するような事あったか？

「兄さん、ＩＳ学園に入る時に連絡なんて一言だけで・・・もっとちゃんと話して欲しかったです」

「あ、ああ・・・あれか・・・あれはほら、急いでいたし――」

「そんなのいい訳ですよ・・・織斑教官さんからの連絡でちゃんと聞いたんですから」

本音を言うと連絡する事でもないかなって思ったんだけどね。我が妹はしっかり者だし。しかし千冬さんめ、余計な事を・・・

「あれから『黒天』を作るのだって大変だったんですからね。急ピッチで進めて・・・束さんに進言した時にもからかわれたり・・・」

そう言ってちょっとムクれる奏。おいおい、拗ねるなよ。ちょっと連絡しなかっただけじゃないか。そりゃ、奏は結構心配症だから機嫌損ねるかな、なんて事も思ったが・・・うん？

「・・・『黒天』を・・・作る？」

「はい。急ピッチで。束さんからコアもらってから一週間で作りましたよ」

奏はさも当然の様に言う。さすがは天才。やる事が違う。

俺の妹、黒瀬奏は天才である。どれくらい天才かというと、ＩＳ制

作者である篠ノ乃束のＩＳについての無茶苦茶理論を理解し、それに対して反論、そこで束さんに認められ、齢十五歳で彼女と同じくＩＳ作成に関わっているくらいの天才だ。そして何よりも現段階のＩＳの花形ともいえる第三世代ＩＳの作成に大きく貢献した人物でもある。さっきの女子の黒瀬奏大先生とはこういうことだ。

だが、俺が驚いたのはそこではない。

「お前、自分で指揮とったのか？」

「ちょっとだけだよ・・・ほんのちょっとだけ」

訊くと曖昧に笑いながら、奏は言う。

「奏」

「な、なに？」

「俺の目を見ろ」

「うっ・・・」

俺が今度は真剣に訊くと、奏は言葉に詰まった様に声を上げた。この反応、嘘を付いてるな。

「・・・無茶しちゃダメだって言ってるだろ？」

「ご・・・ごめんなさい」

俺がちょっと怒った風にため息混じりで言うと、シュンとなって素

直に謝った。まったく、少しは俺に対する心配症を自分の方へと向けて欲しいものだ。

「お前は身体が弱いんだから・・・な」

「ごめんなさい・・・」

「わかればよろしい」

うなだれる奏の頭の上に手を置いて、優しく撫でてやる。ううん、駄目だな。やっぱり奏のこの表情を見ると許してしまう自分が居る・・・このシスコンめが。

「で、ここにはどんな用事で来たんだ？」

「えっと、『黒天』の整備と・・・あと最終調整ですね」

「最終調整ね・・・ってことは俺もその場に居合わせた方がいいのか？」

「はい、その事を言う為にここで待ってたんです」

顔を上げて、奏はそう言った。なるほどね。確かに一週間やそこらで注文された機体を作るなんて事はそうそうな事で合ない。ましてや訓練機ではなく専用機だとすれば余計そうだろう。その上ＩＳは並みの兵器なんかよりも整備が難しい。

「鈴さんが昼頃にここに来れば会えると連絡してくれて・・・」

「鈴？・・・ああ、あの五月蠅い奴か」

「誰が五月蠅いのよ！誰がっ！」

突然声をかけられ、少し驚きながらも声のした方へと首を動かすとそこには中国の代表候補生殿が腰に手を当てて、立っていた。

「あ、鈴さん」

「やっほ、奏。あんたの兄貴、ちょっと失礼じゃない」

腰に手を当てて、俺に向かってそう言う凰。そういえば教室に来た時に食堂に来いとか言っていたが、奏の事だったのか。

「なんか凰と親しそうだが、なんで？」

「昨日、こっちに来た時に一緒に受付を探したんですよ」

「結構かかちゃったけどね」

「そうだったのか・・・凰が一緒にね」

だったら、ちゃんと礼を言わないとな。奏の話しを聞いた俺は椅子から腰を上げると、凰に向けて頭を下げる。

「な、何よ、急に・・・」

「妹が世話になった、ありがとう」

「・・・あ～、そういうのいいから、頭上げてよ。むしろあたしの方が助かったんだしさ」

「そうか、すまない」

凰に言われた通りに頭を上げる。騒がしい娘かと思ったが、結構さっぱりとした良い娘だな。いい知り合いじゃないか、一夏。

「それよりさ・・・話、聞いたわよ」

「話？」

「本来、クラス代表者になるはずだったのって、あんただったのよね」

おそらく、言ったのはプライドの高いオルコットではなく、一夏だろう。なんかあいつ、未だにクラス代表者に持ち上げたのを少なからず文句を言っていたからなぁ。

「まあ・・・な。だけど俺はそんな器じゃないしな」

「イギリスの代表候補の腕前がどんなもんか知らないけど、やるじゃん、素人で勝つなんて」

「・・・素人？」

「ん、まあな」

ちょっと首をかしげそうになった奏にアイコンタクトで理由を告げると、理解したのか小さく頷いた。下手に口を滑らせたら、大変な事になる。

「まっ、あたしはそこまで甘くないけどね」

幸い、鳳は今の仕草で気付く事はなかったようで、話を続けている。

「もしあたしと対戦する時はコテンパンにのしてやるから、覚悟しなさい」

「俺にも宣戦布告か・・・血気盛んだね」

「それに、そう簡単にはいかなくてよ」

鳳の宣戦布告に俺が肩をすくめていると、向こうの席から一夏達と一緒にオルコットが現れると、そう言った。

「少なくとも、私が見る限りでは黒瀬さんの腕前は確かですわ。悔しいですけど、それは認められます」

「負けた人に言われてもねぇ」

「わ、私だっていつかは勝ちますわ！」

オルコットは一瞬、言葉に詰まったが、すぐに言い返した。しかしここまでオルコットに実力を認められているとは思わなかったな。ちょっと嬉しいかもな、こりゃ。

「でも本当に零司は強いぜ、鈴。絶対に甘い相手じゃない」

「ふぅん・・・一夏までそう言うんだ。なんかちょっと試合してみたくなってきた」

「だけど、その前にクラス対抗戦があるだろ、お前さんは」

「そうね。じゃあ、軽く優勝して、とっととあんたと対戦しようかな」

「えらく余裕だな」

「そりゃあね、あたし強いし」

「それはそれは・・・対戦、楽しみしてるよ」

「そうね、その時は思いっきりやらせてもらうわ・・・悪いわね、奏」

奏に向かって余裕の笑みで言うと、奏はちょっとムキになった様に頬を膨らませてた。

「大丈夫です、お兄ちゃんは負けませんから」

「あはは、そっかそっか・・・ま、冗談抜きで楽しみしておくわ、それじゃ」

凰はそう言い残し、食堂から去って行った。ふむ、中国代表候補生、凰鈴音ね。どんなものか、クラス対抗戦を見てみて、対策でも考えるかな。

「どれほどの腕前なんかね・・・ん?どうしたオルコット?」

「・・・絶対に!」

両手の拳を握りしめて、オルコットは声を上げた。おお、いきなりどうしたというんだ。何を荒ぶっているんだ、お前は。

「絶対に負けてはいけませんわ！いいですか、一夏さん！？」

「へ？」

「一夏さん！」

「は、はいっ！」

どうやらオルコット的には自分があの鳳に軽く見られた事が気に食わなかったんだろう。よ～し、頑張れ一夏。クラス対抗戦、楽しみにしてるぞ。

「それに・・・黒瀬さんも！」

「・・・は？俺も？」

「宣戦布告されたんですのよ！？絶対に、絶対に負ける事は許されませんわ！わかっていますわよね！」

「わ、わかってますわよねって・・・・俺は別に・・・」

「わ・か・っ・て・ま・す・わ・よ・ね・！」

「りょ、了解した・・・」

オルコットの気迫に押されて、俺はちょっと引き目に頷く。食いつくなら俺じゃなくて一夏にしなさいよ・・・先にクラス対抗戦で戦

うのは一夏だろうに。

「まったく、そんな調子では先が思いやられますわ。一夏さん、今日の放課後に私がみっちり訓練して差し上げますわ」

「一夏、放課後は『私と』訓練するんだ。そう決めていただろう」

一夏の後ろから現れた篠ノ乃がオルコットと睨み合う。本当にこの二人は張り合うな・・・まぁ、若い時は切磋琢磨していくことが大事だよ、うん。

「・・・じゃあお兄ちゃん、私は『黒天』の整備をやらなくちゃいけないから」

そう言って腰を上げる奏。俺が授業を終えるまでに整備を終えておかないと、最終調整へと移れないらしい。

「わかった・・・でも無理だけはするなよ」

「わかってるよ・・・そんなに心配しなくても大丈夫なのに」

「大切な妹に何かあったら困るからな」

「そ、そういうことはそんなサラッと言わないでよぅ、もう・・・そ、それでは皆さん」

一夏達に頭を下げると恥ずかしそうに速足で食堂を出て行く奏を見ながら俺は笑んでいた。まったく、相変わらず可愛らしいな奏は。

「今のって・・・お前の妹か？」

「ああ、黒瀬奏・・・俺の大事な妹だ」

「そうか・・・綺麗な人だな」

「だろう？」

だけどお前にはやらんぞ、絶対にな。だってお前にはほら・・・

「・・・一夏、早く教室に行くぞ」

「・・・一夏さん、早く教室に戻りましょう」

「え？・・・え？」

両腕を掴まれて学食から強制連行されて行く一夏。お前には二人の鬼が居るじゃないか、それで満足しろ。お前に女神はもったいない。

「千冬さんといい、言葉に気を付けた方がいいぞ」

「ちょっと言ってる意味がわからない・・・って、二人ともなんでそんな怖い顔して俺を引っ張るんだ。止めてくれ、変な汗が止まらな――」

「頑張れよ～・・・さてと」

消えて行った一夏を見送った後、やっと食事にありついた。

「・・・・・・マズッ」

当り前というか、俺のきつねうどんはこれでもかというほど伸びきっていた・・・・きつねうどんは犠牲になったのだ・・・・

・

キーンコーンカーンコーン

「あ～、終わった～・・・・」

本日の授業終了のチャイムが鳴り、千冬さんが去った後に一夏の声が聞こえてきた。あいつ、今日も授業全然分かんなかったみたいだな。昨日は予習として内容を教えた筈なんだがな。

「一夏さん、第三アリーナへ行って訓練しましょう。絶対に負けらせんもの」

「あ、ああ・・・わかったよ・・・ただちょっと部屋に戻る用事があるんだ、先に行っててくれ、セシリア」

その上にオルコットと共に教室を出て行く。頭の疲労と身体の疲労が同時に与えられる・・・一夏、お前はこの学園に来て正解だったのか？なんだか自分で自分を追い込んでいる様な気がするんだが・・

・

「・・・俺も行くか」

二人が出て行って少しした後、俺も椅子から立ち上がり、教室を出て『黒天』のある場所、第二アリーナへと向かう。二人の行動を止

めるにしてもタイミングを失ってしまったのだから仕方ない。別に面倒くさかったとかそういうわけじゃない・・・本当だぞ?

「しっかし・・・本当にＩＳ関係の施設しかないんだよな、ここ」

校舎を出て、アリーナへと向かう道を歩きながら呟く。ここはＩＳ学園、だから仕方ないんだろうけど・・・

「ＩＳ以外の施設っていうと部活動の施設だけだからな・・・」

言いながら、道の途中にある横道を見る。それは部活動の施設へとつながる道であり、一夏と軽い訓練まがいの剣道を行った剣道場もこの道の先にある。

「確かこっちの道からもアリーナへ行けるよな」

こっちの道でどんな部活動があるのかを眺めながら行くってのもいいかもしれない。別段、遠回りになるルートでもない。なんだかんだで学園の道は理解したけど、この先の道でどんな部活動があるのかは理解していない。これを期に何処かの部活に入部とか考えてもいいかもしれない

「そうとなれば、行動あるのみだな・・・奏を待たすのも悪いし」

決断して、横道を進んで行く。すると、様々な部活動の施設が見えてきた。射撃場やテニスコート。ラクロスコートもあれば、ハンドボールやサッカーもある・・・向こうに見えるやたら和風の建物は茶道部か?

「かなり色々あるな・・・」

思った以上の数に驚きながらも進んでいく。これだけの数があるなら部活動では事欠かないだろうな・・・うん？

「剣道場・・・開いてるな」

そこは俺と一夏が使っていた剣道場。普段ならしっかりと鍵がかかっているはずなのに、ガラス張りの扉に隙間が開いている。確か今日は剣道部は休みだったはずだ。使用した時に剣道部の部長に話を聞いたから良く覚えている。

「閉め忘れか・・・戸締りはしっかりしないと駄目だろうに」

確か道場内に予備のカギがあったはずだ。それを使って締めた後、顧問の先生に渡そう。そう思って、俺は扉に近付いた。

「――――まったく、一夏め」

「うん？」

その時、中から声が聞こえた。凛とした声色に乗って聞こえてきた『一夏』という名前。学園でその呼び方をしている人間は俺の知ってる範疇じゃあ俺を除いて一人しかいない。

「・・・・篠ノ乃？」

道場の中にいたのは、篠ノ乃箒だった。まるで精神を統一するかのように、目を閉じて正座をしている。窓から差し込む陽光に照らされるその姿は声をかけるのも躊躇われるような何処か神秘的なモノを帯びていた。

「でも・・・なんで篠ノ乃が――」

「あんなのだから訓練でも駄目なんだ」

訓練・・・おそらく放課後に行っている訓練の事だろう。なんかオルコットの話だとあんまり有意義な訓練ではない様だが・・・・というか、訓練ならもうオルコットが向かったが行かなくていいのか、お前。

「・・・幼馴染というのは、私の事だろうが」

・・・うん、お前は一夏の幼馴染だろうよ、篠ノ乃。だがそれがどうしたというんだ・・・

「・・・・・」

口を閉ざして何か考えている篠ノ乃の表情からは苛立ちの感情がひしひしと感じられる。これは予想だが、凰の事で何かあったのだろう。

「ま、何かってのはわからないがね・・・」

パァンッ！

「・・・うおっ」

少し視線を外している間に篠ノ乃は竹刀を持ち、打ち込み台へと憤りをぶつけるかのように叩き込んでいた。確か篠ノ乃は剣道全国大会の優勝者だったんだよな、やたら綺麗な太刀筋だ。

「横から出て来てっ！何を偉そうにっ！」

パァンッ！パァン！

篠ノ乃が声を上げるにつれて、竹刀を打ち込む音が大きくなっていく。あんなに怒らせるとは・・・凰の奴は何をしでかしたんだか・・・

「私の方がっ！昔からっ！昔から一緒だったんだっ！」

パァンッ！パァンッ！パァンッ！

「・・・篠ノ乃」

怒りと一緒に何処か痛々しさを感じさせるその行動。そして感情が爆発したかのように、大きく竹刀が振り上げられ――

「私の方が・・・昔から好きだったんだっ！」

バキッ！

絶叫と共に竹刀の一部が痛々しい音を立てて砕けた。そんな光景と篠ノ乃の叫びを聞いて、俺は身を硬直させていた。

「篠ノ乃も・・・か」

オルコットと張り合ったり、一夏に時折刺々しい態度を取っていたのはこのせいだったのか。確かに篠ノ乃が一夏に突っかかる時は一

夏が女子の話題に食いついたり、あいつ自信が他の女子の話をする時だった。

「・・・幼馴染で、昔から好きだったんだろうな」

だとしたら、ちょっとつらいかもしれない。せっかく数年ぶりに再会したっていうのに、自分を気に止めてもらえない。学園に女子しかいないから、そういう話題が多いのもわかるが・・・嫉妬心も出したくなるだろう。

「一夏の奴・・・どうしようもないな」

幼馴染なんだから、もっと気を使ってやればいいのに。あいつが鈍感である事はわかっていたが、もうちょっと気付いてやってもいいんではなかろうか。

「・・・・・くっ」

「・・・・・」

壊れた竹刀を片手に立ち尽くす篠ノ乃。その後ろ姿はここに来たばかりの時とは違い、何処か寂しげで、励ましの一言でも行ってやりたいくらいだった。だが、ここで俺が出て行っても話がこじれるだけだ。結果的には篠ノ乃が解決する事であって、俺が正面から出る幕ではない。そう思い、きび返そうとした、その時だった。

「あ・・・黒瀬さ～ん」

「・・・っ！？」

近くのテニスコートからユニフォームを着た女子・・・というか青嶋が俺に向かって手を振りながら名前を叫ぶ。いきなりの出来事、不意打ちに起きたそれに俺は驚きのあまり数歩後ろに下がってしまい――

ガシャッ！

背中を剣道場の扉にぶつけてしまった。

「・・・っ！？誰だ！？」

驚き、こちらを振り向く篠ノ乃と勢いで振り向いてしまった俺。ばっちり、目が合ってしまった。

「なっ・・・」

「は、ははっ・・・・やあ、篠ノ乃」

乾いた笑いを浮かべながら、俺は小さく手を振った。それからの行動は早かった。

「・・・くっ！」

まるで弾ける様に近場にあったもう一本の竹刀を手に掴むと俺へと一気に接近して、篠ノ乃はその手に持った竹刀を俺に向けて振り下ろしてきた。

「うおっ！？」

俺はそれを前に、道場へと入る形に紙一重で回避してやり過ごす。

おお、怖い。耳元で風切り音がしたぞ。

「あ、あな・・・あなたは・・・！」

「いや、待て篠ノ乃！落ち着いてくれ！俺は別に・・・決して盗み聞きしたわけじゃない！たまたま通り掛ったら道場のドアが開いていて、気になったから近づいてみたら篠ノ乃がいて！そして何だろうと思ったらお前の独り言がたまたま耳に入って来て・・・」

「はあああああっ！」

「おうっ！？」

弁解も虚しく、篠ノ乃は竹刀を俺に向かって振り下ろす。駄目だ、怒りで完全に我を忘れている。だけどこの篠ノ乃は閃光弾と蟲笛じゃおさまらんぞ。

「だから落ち着けってのの！」

「死ねえええええええええええええ！！」

うわ、この娘今俺に死ねって言ったよ。まあ、確かに気迫だけでも人を殺せそうな雰囲気だけどさ。

「この・・・このっ！」

「ああ、もう・・・仕方ねえな」

このまま篠ノ乃とこんな事をしていても埒が明かん。有効に話合う為にも少しこの娘には落ち着いてもらわないとな。

「悪いな、痛けりゃ恨め」

篠ノ乃に小さく謝罪してから、後ろに飛ぶのを止めて、前に出て篠ノ乃と距離を詰める。その後、振り下ろされる上段からの一撃を左の袖部分に手を当てて止める。

「なっ！？」

いきなり前に出てきた事と自分の一撃が止められた事、双方に驚きを感じたのだろう。一瞬、篠ノ乃の動きが止まった。その隙に道着の襟袖の部分を空いている手で掴み、足払いを掛ける。すると篠ノ乃の身体は空中にコンマ数秒浮かんだ後、背中から床へと落下した。

「落ち着けっての」

掴んでいた左袖を離して言う俺を篠ノ乃は未だに驚きの視線で見ていた。おそらく彼女には何が起こったのか、いまいち理解できてないんだろう。まあ、それはいい。

「お前な、篠ノ乃。竹刀持って人を追い回すなんてこと、しちゃダメだろ。俺だから良かったものの・・・当たったら結構危ないって事くらい、お前だってわかってるだろ？」

「・・・くっ」

俺の言葉にバツが悪そうに眼を逸らす。そんな反応するってことは、わかってるってことか・・・

「理解してるならいいさ。大切なのは今後、同じ事を繰り返さない

ってことだ・・・立てるか？」

手を差し伸べるが、篠ノ乃はその手を取る事は無く立ち上がり、小さく頭を下げた。

「・・・すみません、頭に血が上ってしまって」

「いや、むしろ謝らなきゃならないのに偉そう何言ってるんだって感じだけどな・・・・こっちこそ、盗み聞きみたいなことしちゃってすまない」

こっちも篠ノ乃に頭を下げる。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

なんだか気まずい沈黙が流れる。篠ノ乃、結構気にしているみたいだな。根っからの剣道娘、一夏曰く「女武士」って感じの性格らしいから、自分の失態を恥じているんだろう・・・って、俺がやっといてそりゃないか・・・

「その・・・黒瀬さん」

「おう、なんだ」

少しして、沈黙を先に破ったのは篠ノ乃だった。

「・・・ど、何処まで訊いていましたか？」

「え～・・・正座してて、そこから竹刀ぶっ壊すまで・・・かな」

「ぜ、全部ではないですか・・・・ああ」

まるで世界が終ったみたいな声を出しながら、篠ノ乃は恥ずかしいのか頬を赤くしてうつむいた。まあ、あんな事訊かれたなんてなったら恥ずかしいわな。

「すまんな、本当に盗み聞きするつもりはなかったんだが・・・」

「もういいです・・・あなたの記憶をどうできるわけでもありませんし」

「・・・・ほんとすまん」

再度、頭を下げる。結果的には完全に盗み聞きだよなぁ・・・・俺って結構最悪かもしれん。

「はぁ・・・今日はなんだか酷い一日だ。これも全て、一夏が悪い」

ため息混じりにそう言う篠ノ乃。ちょっと理不尽な感じもするが、確かに一夏にも非はあるよな。

「・・・篠ノ乃と一夏って幼馴染なんだよな」

「え・・・は、はい・・・そうですが」

俺の質問に照れている様な微妙な表情を浮かべて、篠ノ乃は応えた。

「そうか・・・昔から好きだったんだよな、一夏の事」

「す、好きというか・・・なんというか・・・」

「聞いちゃったんだし、隠さなくてもいいよ・・・って、偉そうに言える立場でもないけどさ」

もごもごと言葉を濁す篠ノ乃に対して、苦笑を浮かべて頭を掻く。数年前からの想い、か。どれほど大きなものなのか、ちょっと俺の想像できる範疇のものではないんだろう。おそらく何度も胸焦がれ、願い続けたものなんだろう。それに対して、本当に失礼な事をしてしまったと今更ながら思った。

「本当に悪かったな」

「・・・そんなに謝るのでしたら、最初からしないでください」

「・・・そうだな」

「・・・他の皆に黙っていてくれれば、許します」

「ありがとう・・・」

慈悲の一言に俺は礼を言う。だが、どうも釈然としない。俺が悪いんだから、何かお詫びとして返したい。そういう思いが、俺の心にはあった。いやだってよ、好きな人を盗み聞きして、それで何もしない。それどころかブン投げて、そのまま帰るなんて行動、出来ると思うか?否、出来まい。反語。

「な、なあ篠ノ乃」

「はい」

「何か・・・お詫びしたいんだが・・・俺にやってほしい事とかあるか？」

「やってほしい事といっても・・・特にはありま――」

おそらく、「ありません」と言おうとしたんだろう。言葉を区切って、篠ノ乃は何か考える様に口に手を当てた。そして二十秒くらいして、篠ノ乃は口を開いた。

「そ、その・・・でしたら」

「お、おう！なんでも言ってくれ！」

「い、一夏の事を・・・ちょっと」

「一夏の事・・・っていうとアレか、色々な一夏の情報とか、部屋で何してるとかか？」

「は、はい・・・」

ふむ、つまり篠ノ乃の恋愛サポートに回れってことか。おそらく篠ノ乃は久しぶりに再会して、色々と一夏の事で知らない事が増えたのが心配なんだろう。凰の件もあるしな。

「・・・よし、わかった。今後、俺は篠ノ乃のサポートをする事にするよ」

「ほ、本当ですか？」

「なんで聞き返すんだよ、お詫びなんだから当然だろ？」

そう言うとちょっとだけ、篠ノ乃の顔に喜びの色が出た・・・この娘もレベル高いよな、不意にも可愛いと思ってしまった。

「じゃあさっそくサポートしますか」

そんな事を篠ノ乃に悟られない様に、言葉を口に出す。

「一夏とオルコット、なんか二人で訓練するらしいぞ」

「なっ・・・今回の訓練は無しと訊いたが・・・セシリアめ、謀ったな！」

謀ったな・・・なんか凄い久しぶりに訊いた単語だよ。今の日本でもそうは訊かないぞ。

「だから追いかけた方がいいんじゃないか？道着は制服持ってけばアリーナでも着替えられるし」

「で、ですが・・・私はまだ訓練機の使用許可が下りてません。今、アリーナに行っても訓練は・・・」

「ふむ・・・」

俺は顎に手を当てて少し考えた後、ポケットから携帯電話を取り出して、ここ数日で記された連絡先が三倍以上に膨れ上がった電話帳から一つの連絡先を呼び出す。

「・・・あ、受付の方ですか？はい、黒瀬です・・・はい、黒瀬奏がこの学園にいるのは・・・はい、ご存じですか。ではちょっと彼女が実験に訓練機を使いたいと言っているんです、至急一機こちらに回していただけないでしょうか？・・・・受け取りには一年一組の篠ノ乃箒を行かせますので」

「えっ・・・！？」

驚いてこちらを見る篠ノ乃に人差指を唇に当てながらさくウィンクをして、電話越しの受付との話を続ける。

「・・・はい・・・はい、わかりました。使用用途については極秘ですので・・・はい・・・あ、訓練機の使用者も篠ノ乃でお願いします・・・はい、では」

「い、いいのですか？」

電話を切ると同時に篠ノ乃が訊いて来た。それに対して、俺は笑って返す。

「俺は単純に実験だと思って、訓練機を篠ノ乃に渡した。そしたら、奏の実験とは訓練機相手にどれだけ『白式』が動けるかのテストだった・・・ただそれだけだよ」

「・・・し、しかしその・・・」

「ほらほら、迷ってる暇あったらとっとと受付に行きなさいって・・・そうこうしている間にオルコットに先を越されるぞ」

「は、はい」

「場所は第三アリーナだ、間違えるなよ」

「はい！」

先を越される、その言葉が決め手になったのか、道場の中にある着衣所から制服を取ってくると、その足で篠ノ乃はアリーナへと向かって走って行った。一夏は一旦部屋に戻ってからとか言ってたから、たぶん間に合うだろう。

「恋愛・・・か」

篠ノ乃の後ろ姿を見送ってから、ポツリと呟いた。なんだかとても学園というこの場所に似合った言葉だと、心底思った。

「恋愛感動青春万歳、ってね。頑張れよ、篠ノ乃」

俺にどれだけのサポートができるか、わからない。だけど決まった以上、篠ノ乃には全力でサポートをするつもりだ。長年育ててきた淡い想い、成就させてやろうじゃないの。

「俺もここで恋愛とかしたりして・・・」

そんな事を想像して、少し笑ってみる。そりゃいい、少し遅れた青春をここで満喫するっていうのも悪くはない。

「千冬さんにも言われたばっかりだしな」

前を見ろ、過去に囚われるな。今を生きる事を考えろ。そう、今この場所で生きている事。ＩＳ学園という場所で生きている事を考え

ろ。そして、未来へと目を向けろ。

「・・・行くか」

まずは目の前の事をこなそう。そう思い、俺も奏の待つアリーナへと向かう為に剣道場を後にしたのだった。

EP６　来客者（後書き）

はい、久しぶりの投稿です（―ω―；）。今回は篠ノ乃さんと仲良くなれました・・・仲良く？・・・まあいいや（いいのかよ）。あと妹がしっかり登場です。ま、次回からがメインなんですけどね、あの娘は。さぁて、次回は妹のターンの予定です。楽しみにしてくれると嬉しいです。それでは、また（＾ω＾）ノシ

EP7　兄と妹（前書き）

はい、七話です。今回はなんと妹ちゃんオンリーですよっ！（、・ω・´）ｂ

休みに入って初投稿ですので、何分その場のテンションで描いている節があります。結構めちゃくちゃですが、ご勘弁くださいませｍ（＿＿；）ｍ

それではどうぞ

EP7　兄と妹

第二アリーナ、Aピットへと続く無機質な金属製の通路に俺の足音が高く響く。作りはほとんど第三アリーナと同じだが、ところどころに違いが見られる。第二アリーナの方が少し基盤が痛んでいる様だ。こちらの方が旧式なのだろうか。

「・・・っと、いたいた」

そうこうしている間にAピットに付いていしまった。自動ドアが開いて、足を踏み入れる。そこには乗り主が居ない為に待機状態の量産機の様にコクピットが開いた状態の『黒天』と、おそらく粒子化して持ってきたのであろう機械でできたデスクに座り、そこから出たコードに接続された『黒天』のデータを八つの電子画面で見ながらキーボードを打つ奏の姿が合った。

「・・・・・・」

どうやら奏は俺がピットに入って来た事に気付いていない様だ。一心不乱にキーボードを打っている。凄まじいスピードだ。一秒も打つ速度を休めない。これを最初に見た人間は大半が唖然となるだろう。だが奏曰く――

「これくらい早く打てないと束さんに追いつけないから」

――だそうだ。いや、あの人に追いつくという思考からしておかしいんだがな。

「それに・・・無理するなと言ってるのに・・・」

俺はため息を吐きながら頭を掻いて、奏に近づいて行く。

「おい、奏」

「・・・・・・」

「おーい・・・奏よい」

「・・・・・・」

後ろから声を掛けているんだが・・・駄目だ、聞こえていない。研究所の人からも言われてるんだよな、これ。どうにか直して欲しいって・・・

「仕方ないな・・・」

そんな真面目に頑張る奏の事を邪魔するのは悪いがこれだと時間がかかりそうだ。ちょっと気付かせてやるか・・・

俺は足音を殺して、ゆっくりと画面に集中する奏の背後に近付くと・・・

「よっと」

「ひゃわっ!?」

勢いよく、後ろから抱きついてやった。ようやく俺の存在に気付いたのか、奏は可愛らしい悲鳴を上げて首だけで後ろを向いた。

「お、お兄ちゃん!?ど、どうして・・・!?」

「お前が呼んだんだろ?忘れるなんて酷いぞ」

「ご、ごめんなさい・・・って、そういうことじゃなくてっ!なんで抱きついてなんて・・・」

「お前が気付かないからだろ」

「だ、だからって・・・抱き付かなくても――」

「嫌か?」

「い、いやじゃ・・・ないけど・・・」

恥ずかしそうに頬を赤らめて言う奏。そんな妹の顔にちょっと胸に来るものがあった俺はたぶんシスコンなんだと思う。いや、前々からわかってたけどさ・・・この可愛さは卑怯過ぎるぞ。

「可愛いな、奏は」

「お、お兄ちゃん・・・」

「お前は可愛いよ」

ほほ笑みながら俺が言うとすぐそこにある奏の顔がさっきよりもさらに紅く染まった。そんな頬に触れると耳元の髪に指にかかり、それを払うようにして奏は俺の手に自分の手を重ねた。

「お兄ちゃんだって・・・その・・・カッコイイです」

「ありがとう、嬉しいよ」

「はい・・・」

青い瞳に同色である俺の瞳が映る。軽い催眠術にでもかかってしまうんじゃないかと思うほどの綺麗な瞳は確かに俺の顔を捉えており、それが確認できるくらいに俺達の距離は近い。そう、数センチ先に行けばキスで来てしまうくらいに・・・

「あー・・・ンンッ！」

俺と奏が見詰め合っていると、横の方から咳払いが聞こえてきた。そちらを見ると、壁に背を預けている千冬さんと真っ赤な顔で泡を食っている山田先生の姿がそこにはあった。

「千冬さん、それに山田先生まで・・・いつからそこに？」

「お前が入ってくる前からここにいた・・・私は声をかけたんだがな」

そんな馬鹿な。まったく聞こえなかったぞ、千冬さんの声なんて。

「おおよそ、お前は奏君の事しか見えていなかったのだろう・・・まったく、シスコンもここまで来ると呆れる」

「く、黒瀬君！駄目ですよ、兄妹で・・・そんな・・・・禁断の関係なんて！」

頭を抱える千冬さんに慌てたように何か言っている。禁断の関係・・

・・何が禁断なんだ？

「ところでいつまでそうしているつもりだ、お前は」

「ああ、そうでした」

奏に気付いてもらえた事だし、俺も離れるか。これ以上は作業の邪魔になるだろう。無理してもらうのは避けて欲しいが、別に作業を中断させたいわけではない。奏にはやりたい事をやってもらいたい。

「あ・・・」

「・・・ん？なんだ？」

「い、いえっ！なんでもないですっ！」

俺が身体を離すと、奏はすぐさま作業に戻った。今ちょっと残念そうな顔しなかったか？・・・まあ、いいか。本当に何かあるなら本人から言ってくれるだろう。それよりも――

「ところで、何故千冬さんと山田先生がここにいるんですか？」

「『黒天』の最終調整だと聞いて、見に来た。それとお前の病状もある。暴走したお前を乗せた『黒天』を止める的確な方法などを奏君と相談しに来たんだ」

「力ずくで止めるという手段も手元にＩＳが無いと正直難しいですからね。ましてや織斑先生のお弟子さんなんて、教員でも抑えられるかどうか」

俺の質問に二人はそう答えた。なるほど、さすがに毎回『クラス代表決定戦』の時の様に千冬さんに止めてもらうわけにもいかないだろう。まあ、先に暴走するまで乗るなという事なのだが。

「というか、俺が弟子だったって事を話したんですか？」

「ああ、さすがに山田先生にはな。彼女はお前の副担任だ、知っておく必要はあるだろう」

「はぁ・・・」

俺は生返事を返しながら、頬を掻いた。あんまりおおっぴらにしなければ構わないかもしれないが・・・だがそれでももうちょっと俺に了承とか取って欲しかった。いきなり「話した」といわれて「ああそう」で返せるようなものでもないだろう。

「あー・・・念のために訊きますけど、山田先生。これを他の人には――」

「言ってませんよ。そんなこと、絶対にしません。だから安心してください」

「・・・わかりました」

ニコッと笑って山田先生はそう言った。嘘を言ってるようにも見えないし、千冬さんも信じて話したんだ。俺が信じないでどうする。

「話がそれてしまったな」

「そうですね・・・俺を止める手立てを訊きに来たんでしたっけ

？」

「そうだ。お前の実力は折り紙つきだ。私にだって簡単には止められるかわからん。最終調整が終わった『黒天』がどの程度のレベルかは知らないが、少なくとも量産機で止められるものではなくなるだろう」

「さすがに千冬さんが止められないってことはないんじゃないですか？」

さすがに量産機でも、たかだか俺ごときで千冬さんに勝つ事なんてないだろう。嘗ての『モンド・グロッソ』の『ブリュンヒルデ』を倒せるほど、俺の腕は立たない。

「そうですよ、織斑先生。いくら専用機持ちといっていも――」

「誰も機体の性能差で負けるとは言っていないよ、山田先生・・・むしろ問題は搭乗者だ」

そう言うと千冬さんは俺を見た。それは贔屓をするようなものではなく、れっきとした戦士の目をしていた。

「この馬鹿は強い。危険なほどにな。おそらく本気でやれば殺し合いになるだろう」

「殺し合いって・・・そんな冗談を――」

「それはわかっているだろう、零司」

山田先生は千冬さんの言葉を否定しようと引き攣った笑いを浮かべ

るが、言葉を切る様にして言った言葉に俺が応えずに千冬さんの目を見据えていたところを見て、笑みを浮かべるのを止めた。おそらく、千冬さんが言っている事は実際にあり得る事なのだろう。俺の疾患による錯乱は、相手を敵と見てしまう。あの時のオルコットを見ている時の光景を思い出す。

目の前の全てが真紅に染まり、見えるのはＩＳと操縦者。それは紛れもなくオルコットだが、俺は破壊する敵と認識した。戦わなくてはならない。壊さなくてはならない。そう思う様になってしまうのだ。

「それは・・・嫌ですね」

「ああ、そうなっては困る。私も自分の弟子を殺したくはない」

そう言うと千冬さんは瞳を閉じて、再び開ける時には教師の瞳に戻っていた。俺だってあなたの手を汚させるのも嫌だ。

「そこで奏君に頼んでな、お前を止める為の装置を作ってもらったんだ」

「俺を止める？」

「はい、その通りです」

返事が聞こえ、奏での方を見る。バシュンという音と共にさっきまで奏が座っていたデスクが粒子化して、消滅する。それを見てから俺の隣へと歩いて来た。

「織斑教官さん、これをどうぞ」

そう言って奏が渡したのはボールペンクラスの大きさのものにボタンが付いたシンプルなものだった。

「奏、これは？」

「『黒天』のあらゆる機能にリミッターを付けるスイッチです。コア・ネットワークを利用した粒子回線を通じて『黒天』の武装からスラスターまで、戦闘機能として使われるものを全てシャットダウンし、残りエネルギーを生命維持に変える事が出来ます」

つまり俺に強制的に戦闘をさせない様にして暴走を防ぐってわけか。加えて搭乗者である俺を死なせない様に防御面への機能は残してくれる。こいつはありがたい。

「最初はＩＳの強制解除も考えたんですけど、戦っている最中にそれをすると危ないですからね」

「さすがだな、奏君」

「いえいえ、それほどでもないですよ」

おうおう、優しいです事。千冬さんってなんか俺や一夏に対してはやたら厳しいよな。そのクセ、山田先生や奏には優しいんだから・・・もしかして千冬さんは――

スパァンッ！

「そういう馬鹿な想像をするから叩かれるのだ」

「・・・なるほど、よくわかりました」

どうやらそう言うことらしい。一夏、お前も千冬さんの前では変な想像するなよ。お兄さんとの約束だ。

「お、お兄ちゃん大丈夫？」

「ああ、大丈夫大丈夫。いつもの事だからもう慣れたよ」

「いつもって・・・お、織斑教官さん」

奏は少し非難を込めた視線を千冬さんに向ける。それを見て、少し厄介そうに頭を掻く。

「あのな、奏君。ドイツの時も言ったかもしれんが、体罰を受けるには理由があるんだ」

「それはそうかもしれませんが、だからってそんな思いっきり叩かなくてもいいじゃないですか」

千冬さんはおそらくそこまで全力で俺の頭は叩いていないだろう。もし全力ならば、頭に出席簿がはまってＭ７８星雲の元惑星観測者であるバトルサイボーグの様になってしまうだろう。

「ともかく、あまり叩かないでください。お兄ちゃんがボケちゃいますよ」

「・・・善処しよう。あと教官というのは止めてくれ。私はここでは一般教師だ」

頭を押さえながら、千冬さんは言うと奏は満足げに頷いた。

「まったく・・・シスコンに加えてこちらもブラコンだから困る」

「いや、すいませんね」

「そう思うなら、馬鹿な事をして私の手を上げさせるな」

「・・・口で注意すればいいんじゃないでしょうか」

やっぱり教官の方が向いているよ、千冬さん。アメリカとかでフルメタルな鬼軍曹クラスにはやっていけるんじゃないか？

「・・・ところで奏、最終調整は終わったのか？」

「あ、はい。じゃあお兄ちゃんはちょっと『黒天』に乗ってみてください。先生達はどうぞこちらに」

奏に先導され、千冬さんと山田先生は『黒天』の背後に回る。俺は『黒天』へと乗り込み、瞬時に展開され、俺の身体を包み込む装甲に身を任せる。

「どうですか、お兄ちゃん」

「・・・ああ、悪くはない」

最初乗った時よりも少し身体への重量感の様なものが抜けている気がする。だが、その他には別段変ったところが見られない。

「最終調整でどの辺が変わったんだ？」

「そうですね・・・では『拡張領域』を見てください」

奏に言われて、俺は視界の端に『拡張領域』の見取り図を表示した。そこには前の戦闘で使ったアサルトライフル『Ａｎｎａ』、ショットガン『Ｄａｌｉａ』、ハンドガン『Ｌｉｓａ』の名前が記載されている。前はこれだけで『拡張領域』は完全に埋まっていたが、範囲が広がり、あと八つか九つは武器を入れられるだけのスペースが拡張されていた。

「・・・凄いな、ここまで広げるなんて」

「『拡張領域』の多さが売りのリヴァイブ以上の『拡張領域』・・・」

「専用機のスペックにこれでは量産機はお手上げですね」

「しかも、『拡張領域』を増やしただけではないんです。お兄ちゃん、その見取り図の下の方に何かありませんか？」

見取り図の下の方、そこには用途不明の四角い領域があった。そう言えば前の時にはこんなものはなかったな。

「四角いのがあるが・・・これがなんだ？」

「それは武装の粒子変換技術を利用して作った『改良領域（カスタマイズ・スロット）』です」

「『改良領域』？」

始めて訊く名前だ。少なくとも現存するＩＳの内でそんな機能を兼

ね備えた機体を俺は知らない。

「『改良領域』とは、その四角い領域に粒子コードの改造データを組み込む事によって『拡張領域』内の武装の威力や連射力、命中精度を上げたり、『黒天』自体のスペックを向上させたりすることができます。あとその中に武装データを入れることによって、『拡張領域』とは別に武装を入れる事が出来ます。大量に武装が必要な時などに使ってもオッケーです」

つまり後付け強化がデータ状で可能になっているわけか。普通なら専用機ってのは機体の強化に『換装装備（パッケージ）』だったり、『専用換装装備（オートクチュール）』などを使用するが、その必要が無いってことだな。

「実はこの機能は前からあったんですが、こちら側からロックさせてもらっていました」

「つまり今回の最終調整ってのはこの機能のアンロックが目的か」

「そうですね・・・後はコアの点検といったところでしょうか」

「コアの点検？」

奏の言葉に俺は首を傾げる。この『黒天』はまだ作られて一カ月も経っていない。そんな作ったばかりの機体なのに点検が必要なんだろうか。心配性な奏が点検もしないでこちらに専用機の受け渡しをするとは思えないし・・・

「大丈夫、念の為ですよ。お兄ちゃんの疾患を考えれば、念に念を入れる事が入れ過ぎる事になりませんから」

よほど不安そうな顔をしていたのだろうか、奏は優しく笑みを浮かべて俺を安心させる様に言った。そうか、奏がそう言うのなら信じよう。だが一点だけ、俺の不安を煽る物が合った。

「・・・・・」

「・・・どうかしましたか、千冬さん」

「・・・・・いや」

千冬さんは俺の機体を鋭い目で見ていた。何か思い当たる節でもあるのだろうか、何か思案するようにただ『黒天』を睨みつけていた。

・

「じゃあ、基本的な説明はこれで終わりですね」

最終調整の説明も終わる頃、すでに日は傾いて、若干暗くなってきていた。黙って話を聞いていた千冬さんの隣にいる山田先生はさっきまで必死に奏の話を書き記していたメモをしまうと、腕時計を確認する。

「そうだな、時間もいい頃だ・・・それと奏君、二、三訊きたい事があるんだが」

「もうすぐ六時半ですね。黒瀬君もそろそろ寮の方に戻らないといけませんよ。寄り道とかしちゃダメですからね？」

「わかってますよ、山田先生・・・俺ってそんな不良生徒に見えますか？」

「あっ！い、いえ、そんなことはないんですっ！」

「・・・冗談ですよ。そんなに間に受けないで下さい」

「あ、冗談・・ですか・・・はぁ」

安心したのか、肩を落として安堵の息を吐く。本当に気真面目だな、この人。小さい外見といい・・・ちょっと意地悪したくなる。

「・・・な、なんで笑うんですか黒瀬君・・・」

「いえ、ちょっと・・・それよりも奏」

零れてしまった笑いを誤魔化す様に言って、何やら千冬さんと話していた奏を呼んだ。すると話は終わったのか、こちらに寄って来た。

「なんですか？」

「お前、部屋はどうしたんだ？昨日からこの学園にいたらしいが」

「ああ、それなら鈴さんと相部屋にしてもらったんです。そっちの方がいいだろうって受付の人が」

「なるほど、本当に仲良くなったんだな」

「はい。凛さん、とっても優しくて親切にしてくれ――」

――と、そこまで言って言葉を区切ると奏は少し苦しそうな顔をして口元を押さえた。

「奏？」

「ケホッ・・ケホッケホッ」

咳き込み始める奏。俺は慌てて、奏の背中に手を回す。

「奏、大丈夫か」

「う、うん・・・大丈夫・・だよ」

奏の肩を持ち、こちらに引き寄せて背中を撫でる。笑顔を浮かべているが、無理やりなのが目に見えてわかる。

「部屋に戻ろう、奏。俺が付いて行くから」

「は、はい・・・ケホッ」

「千冬さん、山田先生。俺達はこれで」

「ああ・・・安静にしていろよ、奏君」

「無理しないでくださいね、奏さん」

「それでは」

奏の代わりに頭を下げると彼女の肩を抱いて、二人を置いてゆっくりとＡピットを出る。

「ごめんなさい・・・私・・・」

「落ち着くまで喋るな」

「でも・・・」

咳混じりながら何か言いたそうにする奏だが、歩きながらではどうも話辛そうだ。そう思った俺は奏から手を離し、目の前に膝を着く。

「奏、乗れ」

「で、でも・・・恥ずかしいですよ」

「駄目、言う事を訊きなさい」

「・・・あう～」

困った様な声を出したかと思うと、背中に重量感と柔かい感触を感じるのと同時に俺の首に腕が回される。

「お、重くないですか？」

「そんなわけないだろ」

奏の足を持って立ち上がると俺は笑いながらそう言って歩き出す。それに時間も時間なので、あまり生徒の姿も見えなかった。これなら恥ずかしくないだろう。

「・・・ごめんなさい、お兄ちゃん」

再び謝る奏。奏はいつもこうだ。自分の発作が始まると俺に向かって謝り続けている。決して、この娘が悪いわけじゃないのに。

「私、身体が弱いから・・・迷惑掛けてるよね」

「・・・気にしてないって言ってるだろ、いつも」

黒瀬奏は極端に身体が弱い。何が弱いかと訊かれれば、医学的過ぎて説明する事は難しい。俺がちゃんと理解しているのは『免疫力が極端に低い』と『肺と心臓に持病を抱えている』という事だけだ。だがこれだけでも、奏がどれだけか弱い存在かは理解できる。医者曰く、「本来ならベッドの上での生活を余儀なくされる」と言う。

現在、彼女がこうしてベッドの上にいないのかというのは、ＩＳ関係で培った知識を使って出来上がった医療型ナノマシンのおかげだ。本来ならば投与された人間の病気を尽く治療することのできるナノマシンだが、それでも奏の病気は完治できなかった。普通の人として生活するには至らなかった。医者はさじを投げ、もはや治療の目途は立っていない。

「でも私の所為で――」

「お前の所為で何か悪かった事があったか？」

その病気にかかった妹を俺はずっと見守って来た。否、見守る事が出来るのは俺しかいなかった。

俺の両親はいない。研究者であった両親は俺が八歳の頃に爆死した。原因はその研究所の技術を奪おうとしたテロ集団の爆破テロ。

だが俺の胸には悲しみというものが無かった。研究に没頭するあまり、育児を放棄した両親に俺は悲しみの念を抱けず、ただ怒りだけが残っていた。何故、奏を一人にするんだ。どうして、一度でも奏の側にいてくれなかったんだ、と。

「お父さんやお母さんが居れば・・・」

「その話はするな・・・」

あんなもの、親とは呼ばない。人生を研究に捧げるなんてカッコつけたこと言っていたが、あいつらが何をした。お前らは親だろう。自分の子供を放っておいて、何が研究だ。

俺の事はどうだっていい。ただ奏はあの時、まだベッドの上にいたんだ。それなのに、あいつらは奏を見捨てた。そして研究していたものは爆散し、本人達も死亡。まったく、どうしようもないとはまさにこの事だ。

「安心しろよ、俺がお前を護るから」

「私を護って・・・そしてまた前の様にするの？」

前の様に、という言葉を訊いて、俺は少し言葉に詰まった。この言葉の意味は見当が付いている。だがらこそ、答えられない。否、どう答えていいのかわからない。未だ俺の中の答えを出せていない、一つの問題。それを指摘されてしまった。

「私、嫌だよ・・・お兄ちゃんがまた傷付くのは」

ギュッと俺の首に回された腕に力が入った。おそらく奏は俺の背中で泣きそうな顔をしているのだろう。傷付いて欲しくない、か。何度も何度も、奏には言われたな、昔っから。

「大丈夫だよ、奏」

俺は安心させるように優しい声色で奏に語りかける。

「ここはＩＳ学園だ。ドイツにいた時の様な事にはならないさ」

「・・・絶対にそうだって、言えますか？」

「絶対じゃないかもしれないけど、ほとんど大丈夫だろ」

「それじゃ・・・安心できませんよ」

「でも、安心してもらわなきゃな」

「・・・無茶苦茶です」

ちょっと拗ねたような声を訊いて、小さく笑って続ける。

「だけど、お前は信じてるんだろ？」

「え？」

「俺は負けない。どんな障害でも打ち破る。どんな確率でも乗り越える、例外（イレギュラー）だってこと」

そう言って、背におぶった奏の顔を見る。ちょっと呆け顔になって

いた奏は目が合うと、表情を隠す様にして俺の背中に顔をうずめた。

「・・・はい」

「じゃあ、これからも俺を信じてくれよ。私の兄貴は強いんだって・・・絶対に傷付かないんだって、さ」

返事はない。ただ俺の背中で動きが合った。奏が小さく頷いたのが俺には分かった。

「それにお前が病気でも、俺は全然構わないぞ」

「・・・構わない、ですか」

「ああ、似た者同士でいいじゃないか。かたやＩＳ専用精神疾患持ち、かたや身体が極端に弱い奇病持ち・・・欠陥兄妹の誕生だよ」

「なんだか嫌です、それ」

「そう言うなって・・・俺はちょっと嬉しいんだぜ？」

「何がですか？」

顔を上げて、首をかしげる奏に笑いかけながら俺は口を開いた。

「愛している人と、共通点があるってことは嬉しいと思うんだがね」

「・・・・っ！？」

カーッとこれでもかというほどに顔を真っ赤にしたかと思うと、奏

は再び俺の背中に顔を隠した。そんな照れた仕草に俺の笑みは深くなる。そうだ、両親なんていなくても構わない。だって今、俺達二人はこんなにも・・・・

「・・・・愛してるよ、奏」

「・・・はい、私も・・・です」

小さく、本当に小さく呟くようにして返って来た返事を訊き、一層強くなる腕の力を感じる。夕陽の景色は美しく、全てを洗い流す様に澄み切っている。そんな今の俺の心境の様な陽光に照らされながら、寮へと向かう足取りを早くした。

EP7　兄と妹（後書き）

さて、七話終了です。ね、妹オンリーだったでしょ？

主人公以外の初オリジナルキャラになるわけですが・・・どうでしょうか？（＾ω＾；）。私的には結構好きなキャラになってるんですけどね～・・・ちょっとありがちな妹キャラになっている気もしないでもないです（―ω―；）。このキャラの感想とかもよかったらコメントしていただけると嬉しいです。さて、次はいよいよクラス対抗戦・・・・・・の前にいろいろとあります。おそらくクラス対抗戦は三話か二話くらいはさんだ後かな・・・長いなぁ（長くしてるのは俺）。

ま、そんな感じで予定していますので次も見ていただけると嬉しい限りです。では、また（＾ω＾）ノシ

EP8　夜間訓練（前書き）

えー、第八話です。連続です、連続で描いてます。なんだか描きたくて仕方ありません。これが夏休みパゥワーなのでしょうか・・・・・（ーωー）

駄文はデフォルトです。読むには胃薬必須！そんなもう一つの翼をどうぞ

追伸
妹は不評なのかねぇ・・・・orz

EP8　夜間訓練

「真っ直ぐ行って・・・・そう、そこの部屋」

「あそこか」

学生寮の一年部屋通路。寮前で少し落ち着いた奏を下ろし、肩を抱いたままで進んで奏のお世話になっている凰の部屋の前まで来ていた。部屋は俺が全く脚を踏み入れない方向にあったが、奏の案内のおかげでスムーズに発見する事が出来た。

「鈴さん、私です」

軽くノックをすると、ほどなくしてドアが開き凰が顔を出した。

「奏、お帰り」

「はい、ただいまです」

戻って来た奏に対して、凰は笑顔で出迎える。同室が凰で本当に良かった。こんな風に出迎えてくれるくらい仲が良いなら俺も安心できる。

「あ、それに黒瀬じゃん、丁度良かった」

「丁度良かった？」

隣の俺に見るなり、凰はそう言った。何が丁度いいのだろうか。俺が彼女の役に立つ様な状況など思いつかないんだが。

「あのさ、奏。ちょっと部屋で休んでてくれない？」

「え、何処か行くんですか？」

「まあ、ちょっと用ができちゃってね」

あははと笑いながら頭を掻く。どうやら用事の内容とやらはあまり話したくないようだ。そんな凰を見て、俺は奏に一言加える。

「奏、ここは凰の言う事を訊いておけ。ちゃんと休めって千冬さんにも言われただろ？」

「は、はい、わかりました・・・じゃあ、凛さん」

「うん、しっかり休んでおいてね。じゃ、私はちょっと行ってくるから」

そう言って、凰はゆっくりとドアを閉じる。そしてその後、俺の事を見てニヤリと笑った。

「本当に丁度良かったわ・・・ねえ、黒瀬――」

「一夏のところへ案内しろ・・・だろ？」

「な、なんでわかったの？」

ちょっと驚いて訊いてくる凰。いや、なんとなくわかるよ。ほぼ関わりのない俺に対して、お前が丁度いいなんて事言うとしたら、選択肢は限られてくるし。

「別に良いよ、俺と同室だし・・・ついて来い」

「あ・・うん」

返事を返すと凰は歩き出す俺の隣に並んで俺と一夏の部屋に向けて進む。その途中で、ふと疑問に思った事を凰に問う。

「凰は一夏とどんな関係なんだ？なんか親しそうだったが」

「まあ、簡単に言うと幼馴染ね」

「幼馴染？一夏の幼馴染は篠ノ乃だろ？」

少なくとも、俺が記憶している一夏の幼馴染は篠ノ乃だけだ。もしその頃から一夏に友達が居るとしたら、俺が知っていてもいいはずなんだが。

「ああ、なんか一夏が言うには私はセカンド幼馴染なんだって」

セカンド幼馴染？なんだそりゃ、新手のルー語か？

「詳しい説明をプリーズ」

「まあ簡単に言うと、あの篠ノ乃とかいうのが転校した後、入れ違いに友達になったのが私で中二の頃まで一緒の学校に通ってたの。だからセカンド幼馴染なんだってさ」

なるほど、そういうことか。確か篠ノ乃が小学五年くらいの時に学校から転校したってのは一夏から訊いた事がある。それと入れ違い

だったのか。

「で、一年ぶりの再会ってわけだ」

「そういう事ね」

「その間に付き合ってたりしたのか？」

「つ、付き合う！？」

凰は俺から一歩引いて、やけに驚いた感じで答えた。何気なく訊いたんだが、予想以上の反応が返って来たぞ。

「べ、別にあたしはあいつと付き合ってなんか・・・そ、それに私は一夏の事なんて・・・」

なにやらゴニョゴニョと言っているが・・・この反応・・・おそらくこの娘も一夏の事を・・・

「はぁ・・・」

「・・・ど、どうしたの？急にデカイため息履いて」

「なんでもない・・・気にしないでくれ」

あいつはどうしてこう、モテるのだろうか。いや、顔が良いのはわかってる。しかも性格もやたら鈍感なところを除けば悪いところなんてそうそう無いだろう。だが、いくらなんでもフラグが多過ぎるんじゃなかろうか。

「ライバルがここにもか・・・篠ノ乃のサポートは思ったよりきついな」

「・・・？さっきから何一人でぼそぼそ言ってんのよ」

「気にするな、気にしたら負けだ。諦めたらそこでゲームセットだ」

最後の一言は自分に向けての言葉の様な気がした。頑張ろうぜ、篠ノ乃。お兄さんも頑張るから。

そんな事をやっていると、俺達の部屋が見えてきた。

「・・・まあ、到着だな」

「ここが一夏の部屋・・・ね」

俺と一夏の部屋、『１０３２号室』のドアを睨む。まるで魔王の居城を見詰める勇者の様に・・・いや、実際どんな目で見てるかなんてのはわかんないけどよ。

「睨んでても扉は開かないぞ」

「わ、わかってるわよ！・・・・一夏、入るわよ」

ノックもせずに凰はそう告げるとドアを問答無用で開いて、入って行く。思いっきりの良いのは感心するがノックくらいはしようぜ？

「鈴、それに零司もか」

「おう、一夏。遅くなった」

「別にかまわないけどよ・・・シャワー、先に使わせてもらったぞ」

「ああ、構わないよ。どうせお前も訓練で汗だくだっただろうしな」

「・・・なんでお前が訓練の事を知ってるんだ？」

「ちょっと！私の事無視すんな！」

「ま、俺はシャワー浴びるからさ・・・お二人はごゆっくり話していてくださいな」

ここにいても俺は二人の邪魔だろうし、バスルームへと非難する事にした。篠ノ乃サポートはすると言ったが、他の女子の邪魔をするとは言っていない。みんなそれぞれの青春を謳歌してるんだから、妨害ってのはちょっとしたくない。

「よっと」

サー・・・・

衣服を脱衣籠へと放りこむと、ジャグジーを捻ってシャワーを浴びるながら今日の出来事を思い返してみた。奏がやって来た事、『黒天』の最終調整、そして篠ノ乃との協力関係。

「協力関係ねぇ・・・」

篠ノ乃の事を思い返してみる。凛として、見方を変えれば何処か近寄りがたい雰囲気を醸し出している和風少女。そんな彼女と結んだ、一夏との関係を取り計らうという協力関係。

「恋愛の教授なんて俺に出来るのかね」

今更ながら、ちょっと不安になって来た。あの時はすまないと思う謝罪の気持ちの所為で安請け合いしてしまったが、これは結構大変な事である事に気付いた。第一、俺は今までそんな事をした事はない。

「別に後悔してるとかじゃないが・・・・」

難しい。非常に難しいだろう。恋愛の観点なんて人それぞれだろうし、何せ相手はあの一夏だ。ちょっとやそっとじゃ篠ノ乃の気持ちを理解することは不可能だろう。本来なら某落とし神のご教授をもらいたいところだ

「だけど・・・やるしかないな」

だが、約束は約束だ。篠ノ乃だって、それなりに信頼してくれているからあんな頼み事をしてくれたんだろう。だとしたら、そんな気持ちを無碍にする事は出来ない。約束は守る、それは万国共通な気持ちだ

「やるだけやってみるか・・・・」

気合いを入れる様にシャンプーで髪をグシャグシャと洗い、一気に洗い流す。よし、可愛い年下クラスメイトの為だ、一肌でも二肌でも脱いでやるぞ。後輩に優しくできるのは先輩の特権だ。

「よし、だったらまず一夏の現在の趣味とかを――」

「最っっっ低！女の子との約束をちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！犬に噛まれて死ね！」

バスルームを出て身体を拭いていると何やら凰の大声が聞こえて、乱暴にドアが閉められる音が聞こえた。なんだなんだ？なんかやらかしたのか、一夏

「・・・まずい、怒らせちまった」

「何やらかしたんだ、一夏」

とりあえずパンツだけ履いて、バスタオルを肩に掛けたまま部屋に出ると一夏が頬を押さえていた。その下は何やら赤みを帯びて、紅葉が出来上がっていた。

「いや、ちょっとな・・・」

「声しか訊いていないが・・・凰の怒りはちょっとで済まされる様なもんじゃな気がするんだが？」

バスルームから聞こえた声。あれはおそらく、本気で怒っている声だった。それに若干声が震えていたのも鑑みるに、泣いていたのだろう。

「気の強い子だ。そんな娘が泣くってことは、よっぽどの事だったんだろ？」

「・・・実はさ、あいつと昔した約束の事なんだが」

昔した約束、ね。こりゃあ乙女心には効果絶大だな。でも一夏の性

格を考えると、約束を忘れたってわけじゃないだろうし・・・

「その約束がどうしたんだ?」

「ああ、その約束ってのが鈴が中国に帰る前にした約束なんだけどさ。あいつの料理の腕が上がったら毎日俺に酢豚喰わせてくれるってやつなんだ」

「毎日酢豚を?」

なんだ?あいつは一夏を酢豚依存症という新種の奇病にでもするつもりなのか?ちなみに酢豚にパイナップルは入れないでほしいと思う。あれは食えん。

「あいつの家が中華料理店でさ、俺はてっきり『毎日俺に酢豚おごってくやる』って言ってるもんだと思ってたんだ」

「それで?」

「・・・そう言ったらキレた」

一夏はため息を吐く。ええと、ちょっと情報を整理しよう。凰は一夏と古い友人でもう一人の幼馴染と呼べるほど仲が良かった。そんでもって中国に帰るという重大な時に一夏と『毎日酢豚を食べさせる』と約束した。それは凰の態度からするにとても大事な約束だったのだろう。それはもう、一世一代の覚悟でした告白の様な・・・・・告白?

「・・・・ああ、そういうことか」

「な、なんかわかったのか？」

なるほどなるほど、そういう事ですか。このロジックから紡ぎ出された答えは間違いではないだろう。酢豚喰わせるってのは『毎日私の作った食事を食べさせる』ってことだったのね。ということはつまり・・・・マジモンの告白だったのだろう

「・・・それを・・・」

乙女の告白をこのノータリンの大馬鹿野郎は『飯奢る』って事でまとめやがったってわけだ・・・そりゃあキレて泣くはな。

「一夏、ちょっと来い」

「あ、ああ・・・」

アホ面ひっさげてのこのこと俺の手招きに呼ばれて、一夏は近づいてくる。そして射程距離に入った瞬間――――

ズパァンッ！

「イッ！？」

思いっきりぶん殴った。ええ、そりゃあもう思いっきり。千冬さんの出席簿チョップに引けを取らない程度にはね。

「な・・・何すんだよ！？」

「一夏」

「な、なん――」

「風雲再起に回し蹴り喰らって頭蓋骨粉砕骨折しろ、この大馬鹿野郎」

「はぁ！？」

「もしくは黒王号でもいい、ともかく馬に死ぬくらいまで蹴られろ。そんぐらいしないと凰が可哀想でならん」

そう言い残し、俺は着替える為にバスルームへと戻って行く。その途中で「訳がわからん・・・」とかいう一夏の声が聞こえた気がしたが・・・自分で考えろ、馬鹿野郎が。俺が言えるわけねえだろ。

そしてこの日、俺は一夏と口を訊く事はなかった。

・

「・・・・・・・・」

見上げる空は雲で覆い隠されていて、星おろか月すらも見えない。夜、時刻は八時五十五分。俺は自室ではなく、第三アリーナの会場にいた。服装は全身を覆うダイバースーツの様な特殊ＩＳスーツ、そして首には『黒点』の待機状態である黒いチョーカーが巻かれていた。

アリーナは無論のことながら、俺をのぞいたら無人だ。観客席は無音を保ち、クラス代表決定戦の時の騒がしさを感じた後だからか、

ちょっとした不気味さを覚えるほどだった。

「なるほど、五分前集合は出来る様だな・・・良い生徒だ」

ふと声の聞こえる方、Bピットへと視線を移す。そこにはいつもの黒いスーツ姿ではなく、水着の様なISスーツと、量産型第二世代IS『打鉄』に身を包んだ我らが担任教師、織斑千冬先生がこちらに向かって歩いて来ていた。

「女性との待ち合わせで遅れた事はありませんから」

「そうか？私は何かと待たされた気がしたがな」

「そりゃ気の所為でしょ・・・毎回遅れたのはあなたの方ですよ、千冬さん」

「そうだったか」

「そうですよ」

軽口を叩く俺に微笑を返す。そう、今日は訓練日だ。九時から千冬さんとの、俺の疾患の荒治療。それが今日から始まるのだ。

「・・・言っておくが、手加減はあまり出来んぞ」

「今まであなたが訓練で手加減する事なんてあったんですか？」

「していたさ、毎回な」

「そりゃ怖い・・・じゃあ、手加減でも本気で当たらなきゃいけま

せんね」

スッと千冬さんの目が細くなる。あの眼だ。ドイツにいた時、俺を訓練していた時の眼。戦いのなんたるかを知り、理解し、それを理解させようとする戦士の眼。見慣れていない人間なら、直視することで彼女に畏怖の念を覚えるであろうその瞳。

その瞳を見ながら、俺は思った。

・・・相変わらず綺麗だな、と

場違いの様な言葉。だが、俺は千冬さんを見た時に最初に思った事がそれだった。顔立ちも、四肢も、女性としてのスペックは高水準である千冬さんだったが、ＩＳに乗った時の彼女が一番美しいと思えた。

鋼鉄の装甲に包まれ、鋭利で輝く刃を持ち、鋭き眼光を放つ。その姿はまさに戦乙女（ブリュンヒルデ）。ＩＳという神の力にもっとも愛されし、ヴァルキュリア。そんな美しさと力強さが千冬さんは確かにあったのだ。

「『暮桜』じゃないのが残念です」

「心配するな、機体のスペック差でお前に負ける様な私ではない」

「どうですかね・・・案外、勝っちゃうかもしれませんよ？」

「ほう、それは・・・・楽しみだ」

今のは無論、軽口であって本心ではない。一度だって、俺はこの人に勝った事はない。弟子は師を超えるものだと誰かが言ったが、俺

は未だに師を超えられないでいる。そう、彼女を超えられるのはやはり・・・・

「・・・では『黒天』を出せ」

鋭い一言で俺の思考はシャットダウンされた。意識してはやっていない。昔の訓練の時からそうだった。千冬さんが「始める」と言ったら、余計な思考は全て止める。そうでなければ、この人について行く事なんて不可能だ。

「『黒天』・・・」

黒い粒子が舞い、『黒天』を装着する。手にはブレードの『Ｖｉｃｔｏｒ』を握る。『打鉄』は遠距離装備が無い。だが千冬さんの乗った『打鉄』に遠距離戦を挑もうなどとは考えていない。すぐに接近されて、ブレードを出す前に切り刻まれるのがオチだからだ

「・・・準備完了です」

「そうか・・・・」

ゆっくりと空が晴れ始める。雲が無くなり、月が顔を出し、俺と千冬さんを夜闇の中から照らし出す。まるでそれはスポットライト。アリーナという劇場にいる、二人を照らし出す様にして、満月が現れる。そして――――

「では・・・・行くぞっ！」

疾走。千冬さんは日本刀型のブレードを『展開（オープン）』するとあっという間に間合いを詰めて、下段からの切り上げをくらわせてくる。

ヒュンッ！

「くっ！」

それを『Ｖｉｃｔｏｒ』で受け流すが続けて二連、回転を利用した横斬撃が俺に襲いかかる。早い、やはりオルコットなんかとは話が違い過ぎる。スペックで上回っているなんて事を忘れさせる様な、そんな連撃。だが、このまま相手のペースに呑まれるわけにはいかない。

「フッ！」

ガッ！

「・・・させるかっ！」

流れる様な斬撃を途中で受け止め、馬力で上回る事を利用して弾き返すと、そこにできたわずかな隙に最小限の動きで斬りかかる。

「甘いっ！」

「なっ！」

だがその斬撃は背後に飛ばされた勢いを利用して、千冬さんに受け流される。そして――

「はっ！」

ガガガッ！

「このっ！」

ギィンッ！

背中から斬撃を三発ほどもらい、すぐさま体勢を立て直すと同時に『Ｖｉｃｔｏｒ』を振るうが、受け止められる。すれ違いざま、ほんの一瞬だった。普通のＩＳ乗りなら一撃だって与えられる様な時間もない。そんな中で、千冬さんは俺の『黒天』に三発の斬撃を撃ち込んできたのだ。

「早過ぎる！」

「お前が遅い！」

斬撃斬撃斬撃斬撃（ギンッガキンッギギッギュンッ）

三発を喰らってから、剣劇が続いた。これが『打鉄』の動きなのかと、疑いたくなるような高速斬撃。それはまるで芸術の様にすらも見える。美しくも荒々しい、剣の波。その波に押されながら、俺は昔の・・・・千冬さんとの訓練時代の感覚を取り戻し始めていた。

「フッ・・・・ハッ！」

「そうだっ！それでいい！」

斬撃を捌く。弾き、受け流し、回避し、どうにか現状をキープする。徐々に、自分の中の感覚が研ぎ澄まされて行く。まるで、千冬さんという刀鍛冶が剣（俺）を鍛え直す様に。

だが――

「ハァッ！」

「その程度ではっ！」

ギュンッ！

俺の全身装甲で護られた胸の辺りが下から左斜め上へと削られる。攻撃に転じようとした瞬間、これだ。捌き始めてはいるが、どうしても反撃に回れない。威力は問題ない。問題なのは――

「あんた、本当に人間かよっ！」

「生憎とそうらしい！」

声と同時に次の攻撃が飛んでくる。問題なのは千冬さんの圧倒的反射神経。そして行動に移す速さだ。機体のスペックは上回っても、ハイパーセンサーを駆使しても、これだけは付いていけない。

「なら・・・これで！」

俺は『Ｖｉｃｔｏｒ』の持ち手の部分から二分、大小二刀流へと変形させた。威力は無い、必要なのは速度・・・手数で間に合わせる！

「二刀流か・・・お前は両手利きだったな」

「弟子の利き腕の事なんて良く覚えてますね」

「弟子の中で両手利きはお前だけだったからな！」

ガギィッ！

斜め上から流れる様にして横一閃。激しい金属音が二割増しぐらいになって、俺の鼓膜を刺激する。だが、そんな事は気にならない。否、気にしていられない。そんな事に気を回すくらいなら、目の前の攻撃に集中しろ。

「そこだっ！」

ヒュンッ！

右手のブレードで向かってくる刃を抑え、がら空きになった脇へと短い左手のブレードで斬りかかる。その動作は一秒とかからない、瞬間の動作。だが――

「だから甘いと言っている！」

「・・・っ！？くっ！」

瞬間、千冬さんは右側のスラスターを機動し、上へと飛び上がると俺の斬撃を回避、背後に回ると同時に一太刀、ウィングに当てて来る。衝撃と共にシールドエネルギーが減少する。なんだかんだでもうその数値は半分に差し掛かろうとしていた。これ以上の被弾はまずい。

「くっ・・・・そぉ！」

ガキィンッ！

「腕が鈍ってるな、零司」

「いやぁ、元々こんなもんですよ」

クイックターンで後ろに旋回、千冬さんは縦に、俺は双剣をクロスさせ、双方のブレードがぶつかり、鍔迫り合いになる。ギギギと耳触りな金属音と火花が散り、そんな物騒な状況で俺と千冬さんは言葉を交わし、俺達は小さく笑っていた。

「何笑ってるんですか」

「いや、柄にもなくな・・・少々、楽しいとすら思ってる」

「年甲斐もなくこんなことではしゃいじゃって、俺の知ってる織斑千冬さんはもっとスマートな大人の女性だった気がしますが？」

「さて、どうだろうな」

ガッ！

再び刃は離れ、新たな剣劇が始まる。強い、おそらく一撃をくらわせるのも難しいだろう。だが、そんな絶望的な状況でも、俺は千冬さんと同じ様な心境だった。

楽しい。楽しいのだ。今こうやってＩＳに乗って、師匠と剣を交えながら過ぎて行く時間が心地よい。今、この瞬間一つ一つを愛おしくすら思う。

「そこだっ！」

俺は・・・ＩＳに乗っている。ＩＳに乗れている。

「まだまだっ！」

オルコット戦では必死になって味わえなかったものを今ここで再確認させられる様な、そんな感じだった。

「千冬さん、俺は・・・」

「なんだ！」

今、俺の視界には紅い景色は無い。

「今、あなたに向かっていけるのが嬉しい！」

あるのは平和な学園で行われる、師とのぶつかり合い。

「今、この機体に乗れて、嬉しい！」

そして、大切な妹から受け取ったＩＳ。

この状況を、喜びと讃えずしてなんとする。

「今、この瞬間が猛烈に・・・楽しい！」

再び、剣がぶつかり止まる。その瞬間に俺の視界に入った、千冬さんの顔は――

「・・・そうか」

確かに・・・・・はっきりと・・・・・ほほ笑んでいた。

・

「あー・・・・・・・」

数時間後、休憩をはさみながらの訓練を終えた俺はアリーナのど真ん中で大の字になっていた。全身には汗がこびりついていたが、そこまで嫌な感じはない。むしろスポーツやり切った時のさわやかな感じがする。

「あー・・・・負けた」

あれから十一時までの三時間。約十回ほどの戦いに分けてやったのだが、結果は惨敗だった。

「当り前だ、私に勝とうなど百年早い」

俺の頭の上に立つ、ＩＳスーツ姿の千冬さんが言う。つまり俺が千冬さんに勝つには人間を止めなければならないらしい。師に対しての勝利か、人間としての一生か・・・・考えるまでもない。

「じゃあ、俺は千冬さんに負けっぱなしですかね」

「少なくとも、オルコットの試合の時よりはマシになった様だな」

「みたいですね」

あの時よりも昔の勘を取り戻せた。そして何よりも・・・・

「それに制限時間も伸びた・・・案外、この方法はお前には効果覿面なのかもしれんな」

そうなのだ。約五分から七分程度だった俺の時間が、今や十五分にまで伸びた。この訓練、どうやら劇的過ぎるくらいに効果抜群だったようだ。

「ＩＳの試合時間を考えるとまだまだですけどね」

「そうだな・・・だが、これで訓練効率は上がる」

「ですね」

訓練効率もあがれば、さらに俺の時間も伸びるかもしれない。そうすれば、俺はもっと・・・もっと・・・この場所で・・・

「俺さ、オルコットに約束させられたんだ。望む時に戦う様にって」

急に俺の口から飛び出した言葉は、それがどうしたといった感じの、どうでもいい私事だった。だかほとんど無意識というか、勝手に舌が回ってると言った感じにぽろりといった感じに口走っていた。

「そうか」

「あと今日も・・・篠ノ乃と仲良くなってさ」

「そうか」

「クラスメイトでしっかりとした友達は、一夏合わせて三人目なんだ」

「そうか」

まるで子供が親に学校での友好関係を話す様な、そんな取るに足らない話。だが千冬さんは頷いて、返事をしてくれていた。それが、なんだかとても嬉しかった。

「・・・千冬さん」

「なんだ？」

「俺は・・・・この場所が好きだ」

「・・・・そうか」

逃れられない、過去もある。そう思っていた。今も、そう思っている。過去の出来事は代えられないし、忘れろといっても無理な話だ。人は過去を忘れずに、生きて行く。その過去に囚われる事もある。でも・・・・それでも・・・・

「だから、ここで生きて行こうと思う」

過去があるから、今がある。そして俺は今を生きているんだ。思い悩んで、立ち止まることもある。でも、そこからまた一歩、次へと進んで行く。それが大事なんだ。

「・・・俺は・・・今を見ます」

「・・・それでいい」

スッと俺の目の前に手が差し伸べられる。俺よりも少し小さい、それなのに俺よりも何倍も強い手。厳しくも優しく、冷たくも温かい。そんな手を掴むと、千冬さんが俺を一気に持ち上げる。

「さあ、夜間訓練は終わりだ。すぐに戻って休め。夜遅くまで訓練していた・・・なんて言い訳で遅刻を免れる事は出来んぞ」

「はぁ・・・こりゃ毎週水曜と金曜は地獄だな・・・」

「そう思うならとっとと戻って休むことだ」

「了解(ヤヴォール)・・・・」

「・・・零司」

返事を返し、俺はAピットまで戻ろうと千冬さんに呼び止められる。俺は返事をするでもなく、振り返る。

「・・・着替え終わったら、正面口で待っていろ。送っていく」

「・・・子供じゃないんですよ？」

「疲れで症状が出られても困る。いいな」

そう言い残すと千冬さんはBピットへと姿を消した。そんな後ろ姿は何処か足早だった。

「・・・優しい先生ですこと」

教官・・・いや、先生の不器用な優しさに苦笑しながら、俺もＡピットへと戻って行く。こうして、俺と千冬さんの夜間訓練初日目は終了したのだった。

EP8　夜間訓練（後書き）

はい、終わりです。久しぶりの戦闘！龍頭蛇尾タイムです！（おいおい）。

いやあ、本当に戦闘って描きづらいです。ぶっちゃけ、小説で一番難しいかも・・・（―ω―；）。でもめげずに頑張りたいと思います。なんだかんだで読んでくれている人もいてくれるみたいですし。読者の皆さま、こんなもんを見ていただいて、本当にありがとうございます。できれば今後ともよろしくお願いしますm（＿＿）m。では次の話でお会いしましょう。では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ９　嵐の前の――（前書き）

総合評価１００越え、キタ――――――――（ﾟ∀ﾟ）――――――――！

そんなわけで、第九話です

ついに総合評価が１００を超えました！これも皆様がこの駄文を読んでくださったおかげです！あれ・・・目の前が曇って、前が見えねえや・・・

今回は取るに足らない話かもしれませんが、描かせていただきました。皆様の納得のいく作品にはまだまだ程遠いかもしれませんが、これからも応援よろしくお願いします！ｍ（＿＿）ｍ

EP9　嵐の前の――

「おい、零司」

「・・・・・」

俺の名前を呼ぶ一夏の声がする。反応しようと身体を起こそうとするが、俺の思いとは反して、一向に身体は起きようとはしない

「おい、起きろって・・・いくらなんでも寝過ぎだろ」

千冬さんとの夜間訓練の次の日、俺は机の上に伸びていた。眠い、やたらと眠い。ついでに全身が痛い。原因はわかってる、昨日の夜間訓練の所為だ。

「一体どうしたんだよ、朝もギリギリまで寝てたし」

「すまん一夏・・・寝かせてくれ」

気休め程度の準備運動なんかでは俺の運動不足は補えなかった様だ。いや、運動不足ってわけでもないんだが・・・三時間、ほとんどフルボッコっていうのはかなり堪えるものがある。元々勝てるつもりでは遣ってなかったにしろ、容赦無さ過ぎ。終わった直後は爽やかな感じはあったけど、千冬さんに送ってもらってる途中からもうすでに全身激痛の嵐だったからな。

「寝かせてくれ・・か。もしかして織斑君、黒瀬君の事を寝かせないほど何かしたのかな」

「ま、まさか！昨晩、男同士の熱い肉のぶつかり合いが！？」

「結局、どっちが受けでどっちが攻めなのかしら・・・会話からすると織斑君が攻め？」

「・・・・・」

ＨＵＺＹＯＳＩの方々は何やら論じているが、もはや止める気力すらもない。というか、どうしてそうなってしまうのか・・・そんな事を論じるなら、その労力は違うところで発揮してほしいものだ。

「・・・だが、さすがに寝過ぎかね」

筋肉が引き攣る痛みを感じながら、ゆっくりと身体を起こす。まったく呼びかけに反応しなかった俺を見て涙目になっていた山田先生を心を鬼にして無視し、一時間目の始まりから、今の今まで寝ていた為か、疲労は十分回復した。だが痛みは取れない。こりゃ、今日一日はお世話になりそうだ・・・

「それはそうと、一夏。お前、ＩＳの調子はどうなんだ？」

「どうって？」

「クラスマッチ、いけるか？」

ふと、昨日の放課後の事を思い出して、一夏に訊いてみた。

「さあなぁ・・・専用機持ちはこのクラス以外だと四組と――」

「二組の凰だけだから、余裕・・・なんて考えてんじゃないだろう

な？」

「まさか、むしろ当たりたくないとすら思ってるよ」

肩をすくめて、ため息を吐く。どうやら未だにＩＳに乗る事に対しての自信が付いていないようだ。まだ実戦らしい実戦もしていない所為もあるのだろう。しかしこれではクラスマッチが少し心配だ。

「専用機持ちがなんだ、やってやる・・・くらいの気合いは無いのか？」

「俺はまだ、ＩＳ操縦者としては素人だぞ？ましてや訓練でセシリアの実力見せつけられて・・・楽観視なんてできないし・・・それに現実問題、結構無理があるだろ、それ」

「出場するお前がそんな弱気でどうする」

「そうです、最初からそんな負け腰では勝てる勝負も勝てませんわ」

話の間に呼ばれてないのに飛び出て来た篠ノ乃＆オルコット。

「一夏さん、私の訓練を受けておいて負けるなんて、そんなことは許されませんわ」

「中距離射撃訓練の戦闘方ばかりのあれを訓練と言うか。第一、白式には射撃装備は無い」

「篠ノ乃さんの擬音説明を永遠と訊くよりはまだマシかと思いますけれど？」

並ぶ二人の間に火花の様なものが見えた。完全にライバル関係になってるな、今更だけどさ。ただ篠ノ乃、擬音で説明ってのは止めた方がいいぞ。大阪の人じゃないんだから・・

「・・・苦戦してるみたいだな」

「・・・ああ」

張り合う二人を見て、一夏がさらに大きなため息を吐く。うーん、訓練の手伝いでもしてやりたいんだが・・・せっかく篠ノ乃とオルコットが手に入れた好きな人と一緒にいられる時間ってのを邪魔したくはないんだよなぁ。

「・・・と、そう言えば篠ノ乃」

「はい、なんでしょうか？」

「昨日は間に会ったみたいだな、良かったじゃないか」

俺がそう言うと、篠ノ乃は礼儀正しく頭を下げた。

「その説では・・・どうもありがとうございました」

「そんな頭を下げる様なことじゃないけどな・・・どういたしまして」

「なんだ、昨日の訓練の事を知ってたのは箒から聞いたのか」

俺と篠ノ乃のやり取りを見て、一夏がそう言ってきたので俺は「ああ」と短く返した。するとオルコットが俺に非難の視線を向けてき

た。

「黒瀬さんでしたの・・・余計な事を――」

「いやぁ、あんな状況を見せられたら協力したくなっちゃうのが男ってもんでね」

「なっ!?黒瀬さん!?」

篠ノ乃の表情に焦りの色がうかがえる。へえ、そんな顔もできるのか・・・いつも落ち着いた感じだから、そういう顔を見るのも新鮮だな。

「・・・箒、なんかあったのか？」

「な、なんでもない！どこも、微塵も、何一つ問題などなかった！」

「そ、そうか・・・」

あまりの迫力に気押されたのか、一夏は追及を止めた。それに安堵の息を吐いた後、篠ノ乃は俺を睨んできた。

「く、黒瀬さん、余計な事は言わないでください」

「すまんすまん・・・ちょっと悪戯が過ぎたね」

「まったく・・・」

拗ねたような顔で腕を組む篠ノ乃。こうみると、やっぱりこの娘も思春期の女子なんだな。あの天才、篠ノ乃束の妹とは思えない。

・・・・まあ、あの人も年中頭ん中思春期っていうか・・・真っ白っていうか・・・

「なんか箒と仲良いみたいだな、零司」

一夏はそう言う。なかなか周りと打ち解けていなかった篠ノ乃と気兼ねなく話しているのにちょっと驚いている様だった。

「そう見えるか？」

「ああ。箒の奴、ちょっとぶっきらぼうなところがあるけどさ、良い奴だから、友達でいてやってくれよ」

「・・・良く見てるんだな」

ちょっと含みのある言い方すると、篠ノ乃がハッとなって一夏を見る。さて、どんな反応を見せるか。俺の言葉の真意を理解することができるのか・・・

「そりゃあな、幼馴染だし」

ズパッと切り裂く様な音が聞こえる。見事、幼馴染という事で切り捨てやがった。ああ、そんな肩を落とすな篠ノ乃。半ばわかってた事じゃないか。こいつの唐変木ぶりには何度も呆れさせられただろう。

「まあ、なんだ・・・お前は幼馴染の女子に男友達が出来ても・・・その、なんかないのか？」

「？？？」

「いや・・・なんでもない」

そんなあからさまに「何言ってるんだコイツ」みたいな顔をするな。
お前にそんな顔をさせる筋合いはない。

「・・・まあ、なんだか知らないけどさ。新しい友達で来てよかったな、ほう――」

笑顔だった一夏の顔が引きつる。それもそうだろう。目の前にいる人物が鬼をも射殺せそうな眼光を放っているのだから。紅くて殺意に目覚めてしまいそうな波動を出しているのは俺の気のせいだろうか・・・・・・気のせいであってほしいと切に願う。

「・・・一夏」

「は、はい！？なんでしょうか篠ノ乃さん！？」

「放課後、待っていろ・・・つまらない裏切りを後悔させてやる」

言葉にはこれほどのプレッシャーを掛けられるものなのだろうか。
近くにいるだけの俺にさえ感じさせるほどの重圧を乗せた言葉を一夏に吐きかけると、篠ノ乃は自身の席へと戻って行った。

「い、一体なんだったんだ・・・」

「なんだったって・・・なあ、オルコット」

「そうですわね・・・これは一夏さんが悪いですわ」

「可哀想にな、篠ノ乃」

「同じ立場なら一夏さんを撃っているところですわ・・・同じ女子として、同情します」

さっきまで珍しく黙っていたオルコットと一緒になってうんうんと頷く。やっぱり恋のライバルであるオルコットもそう思うだろう・・・いや、恋のライバルだからこそか。

「な、なんだよ二人共。俺が何かしたのか？」

「何もしていないとでも思ってるのか？」「何もしていないと思ってますの？」

「・・・訳がわからん」

キーンコーンカーンコーン

「はい、皆さん授業を始めますよー。席についてください」

チャイムが鳴り、山田先生が教室に入ってくるとオルコットは自分の席に戻り、今度は一夏の方が机の上に伸びた。柄にもなく恋のキューピットを買って出たわけだが、どうもこれは苦戦しそうだ。

「織斑君？どうしたんですか？気分でも悪いんですか？」

「いや、その―」

「山田先生・・・授業を始めましょう」

「は、はいっ！ごめんなさい、篠ノ乃さん！」

・・・すまない、篠ノ乃・・・すまない、山田先生・・・・

・

キーンコーンカーンコーン

「早く行かなくちゃ」

「どんな感じなのかな」

「出来れば専用機持ちは避けたいよね」

四時間目終了のチャイムを訊いて、クラスがあわただしくなり始める。昼前ということで、ある程度騒がしくなるのはいつもの事なのだが、なんだか今日はちょっと違う騒がしさの様だ。

「なんか騒がしいな・・・一体どうした？」

「黒瀬さん、掲示板見に行かないんですか？」

「掲示板？・・・あ」

隣の席に座る青嶋にそう言われ、思い出した。そういえば朝のＳＨＲで千冬さんが俺を叩き起した時に言っていた。今日、昼休みにクラスマッチの組み合わせが発表されるのだ。

「なるほど、だから一夏ももういないのか」

「篠ノ乃さんもオルコットさんも行っちゃいましたよ・・・行かないんですか？」

「いや、行こう。俺も気になるし・・・せっかくの青嶋のお誘いだしな」

「お、お誘いって・・・そんな私は」

笑いながら席から腰を上げて、青嶋と共に一年廊下の中央に位置する一年掲示板へと向かう。しっかしさすが青嶋、恋に恋する年頃の乙女だね。顔赤くしちゃって、可愛いじゃないの。

「だけど・・・何処と当たるかねぇ」

「わかりません・・・でも二組と四組は専用機がありますから、あまり当たりたくはないですね」

確か凰は二組だったな、四組の奴は誰だか知らないが専用機持ちってことは何処かの代表候補生なんだろう。

「だけどそういう話をしていると、結構当たったりするんだよな」

「まさかそんな・・・あ、織斑君がいましたよ」

ちょっと歩けばそこには人混みと、掲示板の前に立つ一夏と篠ノ乃、オルコットの姿が合った。心なしか、その表情は少し淀んでおり、あまり良い組み合わせではなかった事を物語っていた。

「おい、一夏。組み合わせ、どんな感じだ？」

「・・・見てくれよ」

そう言って指差す先には・・・・

一回戦：一組代表『織斑一夏』対二組代表『凰鈴音』

「・・・・一回戦目からこれか」

見事に的中しやがった。しかも相手が凰とは、何か因縁めいたものを感じる・・・誰かこれ仕組んだんじゃないだろうな？

「私との訓練、その成果を知らしめる絶好の機会ではありませんか」

「一夏、相手が誰であろうと手を抜く様な事はするなよ」

「当り前だろ、手を抜いて勝てるなんて思ってないしな」

「大丈夫大丈夫、勝てるって」

「頑張って、織斑君」

周りの女子、何故か一組以外の女子からも応援される一夏。人気なのは良い事かもしれないが、他のクラスの代表を応援するってのはどうなんだろうか。

「ここで織斑君が勝てば、また写真の値打も上がるしね・・・」

「男で、クラスマッチ優勝の英雄談まで付いたらうなぎ上りよね・・・うひひ」

「その前に、今回の試合で指定席の話が・・・」

・・・他人のやる事に口出しするつもりはないが、一夏をネタに商売をする時は気を付けろよ。あとで千冬さんに掴まっても知らんぞ。

「しかし、凰相手に一夏はどんな試合をするかね・・・ん？」

そんな事を呟いて、掲示板から目を離すと人混みの端の方に人影を見つけた。凰だ。なかなか小さい見た目、そんでツインテールなんてわかりやすい女子は彼女くらいだろう。そしてさらにもう一人。凰の後ろに立つ、ＩＳ学園の制服を着ていない少女。この学園内で、制服を着ていない少女なんて、一人しかいない。

「凰、それに奏」

「あ・・・」

「お兄ちゃん」

人混みを分けて行くと俺に気付いたのか、凰は小さく反応し、奏は笑顔を浮かべた。

「どうしたんだ、こんなところで・・・」

「奏があんたに渡したいものがあるんだってさ」

「立ち話ではちょっと長くなりそうなので、食堂で話したいんです

けど・・・これから空いてますか？」

「ああ、青嶋と一緒でも良いなら・・・」

「構いませんよ」

「・・・鈴」

不意に一夏の声が聞こえ、俺の隣に出て来ると鈴の表情が急に険しくなった。おそらく、昨日の事をまだ引き摺っているのだろう。

「・・・フンッ」

「・・・まだ怒ってるのかよ」

「別に・・・」

明らかに機嫌が悪い。全方位へと「怒ってますよ」オーラを出している。例としては、永続的に発射されるＡＡ（アサルト・アーマー）だ。最強兵器の誕生だよ、素晴らしい！

「見るからに怒ってるじゃねえか・・・」

「怒ってないって言ってるでしょ！」

いや、おそらくこの空間にいる人間の十人中十人がお前の姿とそのセリフを訊いて、怒っていないとは認識しないんじゃないだろうか・・・昨日の事を思い返せば、怒って当然だとは思うが。

「・・・なんで怒ってるのか、理由くらい教えてくれよ。そうじゃ

なきゃ俺だって謝るに謝れないだろうが」

「あの話を聞いて、理由が分かんないってところに私は怒ってんのよ！」

「やっぱり怒ってるんじゃないか・・・」

「うっさい！」

「あーあー、はいストップ、そこまで」

このままでは埒が明きそうにないので、仲裁役として間に入る。まったく、世話のかかる奴らだな・・・

「こんなとこで喧嘩すんなって、周りにも迷惑だし、それにいつあの鬼教官が物理的な仲裁を入れるのかわかったもんじゃ――」

パァンッ！

「陰口は女の特権だ。男がする様なことじゃないな、黒瀬」

「・・・聞こえてる時点で陰口じゃない気がするんですが・・・・」

いつの間にか姿を現した千冬さんのいつものアレ―出席簿チョップ―をくらい、痛む後頭部を押さえながら呟く。本当に気配のかけらもなく現れるなぁ・・・心臓に悪い。

「ちふ・・織斑先生」

「ち、千冬さん」

「貴様らが喧嘩をしようが、私には関係ない。だがな、ここは通路だ。人が移動する場所だ。つまり貴様らは邪魔になる・・・わかるな？」

ギラリと光る有無を言わせぬ眼光に、一夏と凰はコクコクと頷いた。まるで蛇に睨まれた蛙だな・・・いや、蛙の場合は動きが止まるか。じゃあフクロウに睨まれた鼠だな・・・似たようなもんか・・・

「お前らもいつまでもここに溜まるな、わかったな」

そう言い残して、二階へと上がって行く千冬さんに対して「はーい」という返事が聞こえたかと思うと蜘蛛の子を散らすように女子達が掲示板の前から離れて行った。完全に殴られ損だな・・・俺。

「私達も行きましょうか、鈴さん」

「うん・・・」

奏に促されて、凰は一夏にそっぽを向くと掲示板前を後にした。こりゃ、二人の関係修復はしばらく先になりそうだな。

「一夏、凰と何かあったのか？」

「大分怒っていらっしゃいましたけど・・・」

「俺が訊きたいよ・・・なんであんなに怒ってるんだ・・・」

「そりゃ、お前が悪いからに決まってんだろ」

「だから、零司もわかってるなら理由くらい教えてくれっての」

どうも凰の怒りに理不尽さを感じて、一夏も苛立ってるみたいだな。だけど・・・

「教えてやる事はできない」

「だから、なんで――！」

「それはお前自信が意味を知る必要があるからだ・・・それに教えたら、今度は俺が凰にキレられる」

「なんだよそれ・・・」

グシャグシャと頭を掻く。悪いな、一夏。こればっかりは教える事は出来ないよ。これは凰の大切な思いだ。俺が軽々しく教えていい事じゃない。

「ま、迷えよ青少年。青春ってのはこんなもんだ」

「・・・お前、何歳だよ」

「青春を食いっぱぐれた、擦れた十七歳だよ・・・じゃ、篠ノ乃もオルコットも、五時間目な。行こうぜ、青嶋」

「は、はい」

そう言って俺は一夏達に背を向けると、食堂に向かって歩き出した。青春食いっぱぐれ、か・・・なんか泣けて来る・・・

・

「で、話って何だ？」

数分後、俺は奏に鈴、そして青嶋と共にテーブルを囲んでいた。ちなみに俺の昼飯はやたら具のデカイＢＬＴサンド、鈴はラーメン、青嶋がミートソーススパゲッティ、奏がブロック型の栄養食品だ。

「最終調整が終わったので、渡しておこうと思いまして」

そう言って奏は『黒天』の待機状態である、黒いチョーカーを俺に手渡した。と、そこで俺は最終調整前とは違う点に気が付いた。

「・・・この右側についてる丸は何だ？」

「それについて説明しようと思ってたんです・・・はい」

今度は肩に斜め掛けていたカバンから一台の黒いノートＰＣを取り出した。飾りっ気のない、質素な感じ。それはシンプルさを追い求めた様なフォルムをしており、最近のノートＰＣではこれと同じ様な機種は見た事がない。

「・・・見た事のない形ですね・・・何処の会社のですか？」

「何処の会社にもありません。私のお手製ですから」

「完全ハンドメイド・・・それも三日で作ったって言ってるのよ、

この娘」

「三日・・・三日ですか・・・ははは」

呆れたように言う鈴に、驚きのあまりぎこちない笑いをこぼす青嶋。だが俺的には結構これクラスの物を奏が作るというのは日常茶飯事であり、そこまで気に止める事もなく会話を続ける。

「パソコンが必要なほど情報に困っちゃいないぞ？」

「別にネットサーフィンして欲しいから上げたわけじゃありません・・・そのＰＣの横を見てください」

「横？」

見てみると、円柱の形をした突起物がそこにはあった。それはテレビなどに接続する金属端子にも見える。

「それは『黒天』の丸の部分に接続する為の端子です」

「『黒天』って、黒瀬のＩＳでしょ？ＰＣに接続なんかして、どうすんのよ」

「『拡張領域』と『改良領域』の操作です」

「『拡張領域』は知ってますけど・・・『改良領域』って何ですか？」

「ま、簡単に言うと『黒天』だけの特殊機能ってところだよ、青嶋・・・それはそうとノートＰＣでそんな操作できるのか？」

ＩＳの武装データや強化データなどをパソコンで操作し、あのスロットに入れるんだろ。操作の理屈はまあ、理解できる。だが、それらのデータをこのＰＣに情報としてまとめ、それを操作するという事が出来るかというところに、少し疑いを持ってしまう。

「はい、出来ます。粒子体としてあるＩＳをデータ状にして、電子無線により各国に移転させるという技術が研究されていて、その発展途上としての方法ですけど」

「粒子体の電子化・・・ね」

「圧縮するところでかなり苦戦しましたけど、概念としては『拡張領域』から武器を『展開』するのに近いです。束さんもバッチリだって言ってましたから、大丈夫ですよ」

「う～ん・・・あの人のバッチリって若干信用できないんだよなぁ」

あの人なら乗りで「バッチリバッチリ！お姉ちゃんに任せなさい！」とか言って、全然バッチリじゃないものとか押し付けて来てもおかしくはない。

「そんな不安そうな顔しないでくださいよ。大丈夫ですから・・・」

「・・・奏がそう言うなら、信じよう」

可愛い妹の言葉だ、信じるとしよう。それにＩＳに何かあっても、俺に直接危害が出るわけでもないだろう。帰ったら早速やってみるか・・・

「でも凄いですね、こんなことまで可能にしてしまうなんて・・・さすが黒瀬先生ですね」

「せ、先生は止めてください・・・」

青嶋に言われ、奏は苦笑している。おそらく過大評価し過ぎていると思っているのだろう。だが、これだけの事をやってのけたんだだから、先生と呼ばれても良いレベルだと俺は思うんだけどな。

「何はともあれ、これで『黒天』のスペックを完全に発揮できる・・・ありがとな、奏」

クシャッと隣に座る奏の頭を撫でてやると、擽ったいのと恥ずかしいのと半分半分といった笑顔を浮かべる。そんな俺達を見て、凰は眉を顰める。

「あんたらって、なんかやたら仲良いわよね・・・」

「・・・まあ、兄妹仲良いぞ」

「いや、そうじゃなくてさ・・」

なんだ?何が言いたいんだ?最近は兄妹仲が悪いっていうのを良く聞くけど、世界の兄妹全部が仲悪いってわけじゃないんだぞ。

「・・・もっと違うベクトルで仲が良さそうなんですよね、凰さん」

「そうそう・・・」

「何が言いたいんだよ、二人共。はっきり言ってもらわないとわか

らんぞ」

「・・・んじゃあ、はっきりと訊くけどさ」

「ああ」

「あんた達、恋仲なの？」

「・・・・・・・は？」

いきなり飛んできた質問は俺に素っ頓狂な声を上げさせる。何を言ってるんだ、この日系中国人は。

「凰、お前は何を――」

「そ、そんなわけないじゃないですか！」

勢いよく腰を上げてバンッとテーブルを叩き、顔を真っ赤にしながら奏は声を荒げ、食堂の視線が一瞬で俺達に集まる。俺が袖をチョイチョイと引くと、肩で息をしながら腰を下ろした。

「・・・わ、私とお兄ちゃんはそんな淫らな関係じゃありません」

「淫らなって・・・別にそんな事言ってないわよ。単純に恋人同士なんじゃないかって」

「で、ですからそんな・・・」

「奏、落ち着け。あんまり興奮すると身体に障る・・・ほれ、水」

そう言ってコップを差し出すとまだ何か言いたそうな顔をしていたが、奏はそれを受け取り、水を一気に飲み干した。それを見て、俺は凰に向けて口を開く。

「凰、俺と奏は別にそんな関係ではないよ」

「でもやたらと親密そうだったじゃない」

「単純に仲が良いって事じゃ駄目なのか？」

「はぁ・・・ちょっと度が過ぎてるというか、なんというか・・・」

青嶋は苦笑を浮かべる。ふむ、やっぱりちょっとそう見えるか・・・だが恋仲ってのはちょっとな。

「それは俺が少々シスコンな所為かもな」

「自分で言う？」

「奏に対して、過保護だってことは認めてるからな」

奏は身体が弱い為に過保護になっている事は認める。昔はシスコン云々と言われ、ヘコんだ時もあったが、今となっては屁でもない。

「とにかく、家族的な・・・親愛の感情ならあるけど、恋愛的な感情は無いかな」

「そ、そうですよ・・・私達は家族なんですから、恋愛感情なんてありません」

「そんなものなんですか？」

「そんなもんだよ」「そんなものです」

俺と奏の声が合わさり、その言葉で納得したのか、凰と青嶋はそれ以上の詮索を止めた。

「まあ、あれだ・・・一夏が千冬さんに憧れ抱くのと同じ」

「ああ、一夏もシスコンだからね」

一夏の名前が出た瞬間、一気に嫌な顔をした。一夏もそうだが、この娘も感情が素直に表情に出るな・・・わかりやすい。

「すぐにとは言わないが、ある程度怒ったら許してやれよ？」

「・・・ヤダ」

「ヤダって・・・まあ、一夏が悪いのはそうなんだろうけどな」

「織斑君、何かしたんですか？」

「まあ、ちょっとね」

「私は鈴さんから聞きましたけど・・・ちょっと酷いですよね」

苦笑を浮かべる奏と首をかしげる青嶋をしり目に凰は苛立たしげにラーメンのスープをゴクゴクと飲み干していく。こればっかりは俺はどうにもできないな。

「あいつが謝るまで、こっちは謝る気ないから・・・ごちそうさま」

そう言うと凰はお盆を持って席を立ち、去って行った。凰は謝るまで許さないと言って、一夏は一夏で理由がわかるまで謝れるかという。意地の張り合いか・・・なるほど、こりゃ長引きそうだな・・・

「内容が内容だけに話し辛いだろうしな・・・」

「クラスマッチで恨みをぶつけるみたいな事も言ってましたよ」

「織斑君、大丈夫かな・・・」

青嶋の心配はもっともだ。どんなＩＳなのかはまだ分からないが、実力的にも精神的にも、一夏には辛い相手だろう。もしかしたら一回戦敗退なんて事は十二分にあり得る。

「大丈夫ではないだろうな・・・」

「そんな・・・」

「そんな簡単に勝てるとは思えん・・・フリーパスは諦めた方がいいかもしれないな」

「兄さん、織斑さんを鍛えてあげては？」

「う～ん・・・どうするかねぇ」

クラスマッチで一夏を勝たせたいという気持ちはあるのだが、あの二人が一緒にいる状況に俺が入って行くのはお邪魔虫に他ならない。特に篠ノ乃と協力関係にある現状況を考えると、その行動は篠ノ乃

に対して裏切り行為になるんじゃなかろうか・・・

「・・・なんでそんなに迷ってるんですか？」

「色々あるんだよ、色々ね・・・」

「黒瀬」

青嶋に言葉を返すと、後ろから俺を呼ぶ声がする。誰だかわかっているが、首を回して、背後を見る。叩かれた頭がまだ痛い。

「なんですか、織斑先生？」

「ちょっと話がある・・・いいか？」

「良いですけど・・・ちょっと待っててください」

千冬さんにそう断ると、一口しか食べていないＢＬＴサンドの先っぽに齧りつく。そのままシュレッターに入れた紙の様に咀嚼し、喉を通って胃袋へと落ちて行く。やたら具が大きかった為に呑み込み辛かったが、サンドは見事に胃袋へとおさまった。

「けふっ・・・オッケーです」

「・・・・早食いは身体に悪いぞ」

「急かしたのは織斑先生ですよ・・・さてと、そろそろ授業も始まるから青嶋も早めに食べろよ」

乗せていたお盆を持って、腰を上げると千冬さんと並んで食堂を出

ると同時に訊いてみる。

「で、用って何ですか？」

「ちょっと頼みがある」

千冬さんが俺に頼み事をするとは、もしかしたら初めてかもしれない。そんな事に少し驚き、信頼されている嬉しさを感じながら、俺は苦笑を浮かべる。

「やたら無理難題じゃなければ、いくらでも答えますよ」

「そうか・・・・実はな――」

・

Ｓｉｄｅ　織斑一夏

クラスマッチを来週に控えた土曜日の第三アリーナ。いつもの訓練時間である夕刻にはまだ遠く、陽光はまだオレンジ色にはならず、煌々と会場の真ん中に立つ、訓練をしていた俺と箒、そしてついさっき顔を出した千冬姉を照らしていた。

「千冬姉、いきなりやってきてどうしたんだよ」

「織斑先生だ・・・今日はお前に『雪片弐型』の説明をする為に呼びだしたんだ」

「『雪片弐型』の説明？」

説明と言ったって、これは接近戦用ブレード・・・それ以外に何かあるんだろうか？それコレには他に特殊な機能でも付いているんだろうか？

「『雪片弐型』はただの近接ブレードではない。他に類を見ない破壊力を持つ攻撃力を秘めている」

「どんな能力が・・・」

「『バリア無効化攻撃』だ」

「――『バリア無効化攻撃』？」

訊き返すと千冬姉は小さく頷いた。

「『雪片』の特殊能力が、それだ。相手のシールド残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与える事が出来る。そうすると、どうなる、篠ノ乃？」

「は、はい。ＩＳの『絶対防御』が発動して、大幅にシールドエネルギーを削ぐ事が出来ます」

「その通りだ。私がかつて世界一の座にいたのも、『雪片』のその特殊能力によるとことが大きい」

さらりと言う千冬姉だったが、それでも凄い事である。たった一本のブレードで世界を制した、その行動がどれだけ過酷で、どれだけの努力が必要なのかは、俺の十五年の人生観点ではかる事は出来ないだろう。そしてそれだけの事をやってのけた姉を持つ弟の気持

ちというものは、とてもプレッシャーのかかる物でもあった。

「ってことは、相手がどんな奴でも数発その『バリア無効化攻撃』を当てれば勝てるってことだよな」

「そうだ。しかしそれはあくまで当てられればの話、今の状態で『バリア無効化攻撃』を行ったところで、『雪片』にエネルギーを食われて終わりだろう」

「エネルギーを食われる？」

「もしかして・・・その『バリア無効化攻撃』というのは、自身のシールドエネルギーを攻撃に転換しているのですか？」

そう尋ねる箒に、千冬姉は頷いた。

「察しが良いな、篠ノ乃・・・詰まるところ、欠陥機だ」

――――って、おい！

「欠陥機！？欠陥機って言ったよな、今！？」

バシンッ！

「言い方が悪かったな。ＩＳはそもそも完成していないのだから欠陥も何もない。ただ、他の機体よりちょっと攻撃特化になっているだけだ、大方『拡張領域』も埋まっているだろう？」

「そ、それも欠陥だったのか・・・イテテ」

「人の話を聞け。本来『拡張領域』用に空いているはずの処理を全て使って『雪片』を振るっているのだ。その威力は全ＩＳの中でもトップクラスだ」

（だから千冬姉は『雪片』しか装備してなかったのか）

千冬姉は『モンド・グロッソ』の時に、『雪片』しか使っていない。それはつまり、他の武装を削っても、有り余る性能をこの『雪片』には備えられている事になる。先に千冬姉が言った通り、世界一となったのはぶっ飛んだＩＳ操縦者としてのレベルもあるが、相手を一刀両断出来るこの『雪片』のおかげでもあるわけだ。

「大体、お前の様な素人が射撃戦闘などできるものか。反動制御、弾道予測から距離の取り方、一零停止、特殊無反動旋回（アブソリュート・ターン）、それ以外にも弾丸の特性、大気の状態、相手武装による相互影響を含めた思考戦闘・・・他にもあるぞ。出来るのか？お前に」

「・・・ごめんなさい」

自分の非を認めたら謝るに限る。千冬姉は短く「わかればいい」と頷くと微笑を浮かべた。

「一つの事を極める方が、お前には向いているのさ。何せ――私の弟だ」

「千冬姉・・・」

「さて・・・お喋りはこの辺にしておこう」

笑みを消すと、千冬姉の表情がいつもの顔に戻る。

「とにかく実戦で試さない事には始まらん。今日はお前に演習相手を用意してきた」

「演習相手・・・」

つまり『バリア無効化攻撃』の練習台を用意してくれたってわけか。相手は誰だ？ここにはいないセシリアでも連れてきたのか？

「オルコットでは遠距離戦が主体となってしまう、おそらく当てる前に落とされる」

俺の考えを呼んだのか、千冬姉はそう言った。セシリアじゃない？だとすると一体誰だろう。顔も知らない人とかだったら、変に緊張してしまうんじゃないだろうか。

「安心しろ、知った相手だ・・・」

千冬姉の視線がＢピットの方へ向く。俺と箒もつられる様にして、そちらを見た。するとＢピットの入り口が開き――

「よう・・・一夏」

そこには――黒が立っていた。

ＥＰ９　ＥＮＤ

EP9　嵐の前の――（後書き）

はい、第九話でした。

う～ん、正直最初の方と最後の方で、中間のところはあんまり必要なかったかな、なんて思ってます。鈴の出番を少しでも作りたくて・・ごめんなさいｍ（＿＿；）ｍ。それと、今回初めて主人公以外のキャラの視点を試してみました・・とはいっても、ほぼ原作と同じなんだけどね（＾ω＾；）。

今回もこのような駄文に付き合っていただき、ありがとうございます。もし意見や感想がありましたら、遠慮なく、ドシドシ送ってください。返信するこちらとしてもとても励みになります。

では、次回は白式ＶＳ黒天です！もしよかったら、ご期待ください！ではでは、また（＾ω＾）ノシ

EP10　白と黒（前書き）

はい、はじまっちゃたんですよ。第十話です（＾ω＾）

いやあ、なんだか第十話ってなるとちょっと感慨深いものがありますね。なんだか描く方も気合入っちゃいます！

というわけで前回予告した通り、記念すべき第十話は龍頭蛇――――じゃなくて『白式』ＶＳ『黒天』です！

もしも楽しめてもらえたら幸いです！それではどうぞ！

EP10　白と黒

「よう、一夏」

「零司!?」「黒瀬さん!?」

Bピットから出て、驚きのあまり声を上げる一夏と箒の前に降り立つ。すると千冬さんがこちらに声を掛けてきた。

「遅いぞ・・・女性との待ち合わせには遅刻しないんじゃなかったのか?」

「『拡張領域』と『改良領域』をちょっとイジるのに思ったよりも時間がかかってちゃいましてね・・・あれ、思ったより頭使いますよ」

「時間ならあっただろう」

「そう怒らないでくださいよ・・・だったら遅刻の分の埋め合わせでも、後でしましょうか?」

「そうだな、考えておこう・・・さて、一夏」

千冬さんは俺との会話に区切りを付けると、一夏の方に向き直る。

「今からお前には黒瀬と戦ってもらう」

「そ、そんないきなり過ぎるぞ!?」

「だよなぁ、俺もびっくりだったぞ」

そう言って俺は笑うが、一夏にとっては笑い事ではないのだろう。いきなり話もよく聞かされないまま、あのオルコットをボコボコにした相手と戦えというのだから。しかもそのやり方も、異常なまでの攻撃により、だ。

「安心しろ、こいつも私との夜間訓練で大分本調子に戻って来た。十分やそこらで暴走する様な事はない」

「そ、そうは言うけどさ・・・」

「とにかく、口で説明しても理解できるのは半分程度だ。後は実戦でものにしろ・・・そうしないと、凰には勝てんぞ」

言い残し、こちらに背を向けると千冬さんはピットへと歩いて行く。何か言いたそうな一夏だったが、ああ言った以上、千冬さんに何を言っても無駄だということを理化しているのか、渋々といった風に口を噤んだ。

「いきなり過ぎるだろ・・・先に話してくれないとこっちにも心の準備ってもんが」

「情けないぞ、一夏」

文句を垂れている一夏に隣にいた篠ノ乃が口を挟んだ。

「相手が目の前にいて、対戦すると言っているんだ。それに対して文句を言ってどうする」

「箒・・そうは言うけどな」

「彼が強いのは知っている・・・だが、相手がわからない試合だってあるだろう」

「いや、それは――」

「ともかく、相手が誰であろうと勝って見せろ」

厳しい言葉を一夏に投げかけると、篠ノ乃は千冬さんの後を追って行った。本当に厳しいね、あの二人は。励ますとかはしないんだから。

「手厳しいな、一夏」

「・・・俺の周りの女子はどうしてこう・・・」

「まあ、そう言うなよ。女運は恵まれてる方だと思うぜ、お前」

・・・ついでに女難の相が出てるとも思うがな。

「お前がとある点に気付いてやれば、周りにいる女子の大体は態度変わると思うけどな」

「とある点って何だよ」

「それはお前が気付くべき、そうするべき・・・・・って、そんな話しをする為に来たんじゃなかったな」

こんな話をしていたら、これだけで訓練時間が終わってしまう。俺

は頭のスイッチを切り替え、苦笑を消すと一夏を見据える。

「さてと・・・覚悟決めろよ、一夏」

「・・・今更、無理って宣言しても止めてもられる様な状況でもないしな」

ようやく腹を据えたのか、一夏は手に持った『雪片』を構える。それを見て、俺も『拡張領域』から二つの武器、右手に肩の後ろに大型のドラムマガジンを搭載したガトリングガン『Ｂａｒｂａｒａ（バルバラ）』、左手には『Ｄａｌｉａ』の様に重厚ではなく、何処か機品すら感じる銀色の口径が二つ付いたショットガン『Ａｌｉｃｅ（アリーセ）』を『展開』する。

「近距離相手に射撃とは心苦しいが・・・悪い、これも仕事なんでな」

「わかった・・・俺も手加減なんてしないぜ」

「できるもんならやってみろ」

『織斑、黒瀬、準備は良いな』

「いいですよ」

「・・・・・」

オープンチャンネルからの声に返事をする俺とは違い、一夏は頷く。もはや言葉を出せぬほど緊張しているようだ。だがこちらはそんなことで手を抜くほど、甘くするつもりはない。

『では・・・戦闘開始ッ！』

千冬さんの号令と共にブザーが鳴り、試合開始の合図が鳴った。

「うおおおおおおっ！」

そしてそれとほぼ同時に、一夏が加速する。一気に距離を詰める気か・・・ま、近接装備しかない機体ではそれが妥当かもしれんが――

「・・甘過ぎるな」

『黒天』のスラスターを展開し、向かってくる一夏の上段からの振り下ろしを右へのクイックブーストで回避、上に上がると同時に左手に握った『Ａｌｉｃｅ』の引き金を引く。

キュィン――――シュバババッ！

「なっ・・・レーザー！？」

輝きを放つ二門。降り注ぐのは緋色のレーザーの雨。一発一発が『白式』のシールドエネルギーを削って行く。

「くそっ！」

今までにない兵器を見せられて、驚きながらも一夏はこの場から即座に移動しようと、前方に加速する。ショットガンは弾がバラける。近距離でなければ威力が下がるのは自明の理。離れればある程度はやり過ごせてしまう・・・その上に――

「・・・チッ、これ使い辛いな」

舌打ちして、『Ａｌｉｃｅ』を見る。この武器は試作段階のレーザーショットガンである。そう、まだ試作段階の物なのだ。奏の提案で、大規模な『拡張領域』を持つこの機体を使った試験用ＩＳ兵器の実戦データを取るという事になり、試験用武器を使っているのだが・・・これは思ったよりも使い辛い。

「威力は申し分ないんだが・・・エネルギーがな」

「くらえっ！」

前方に進んで、空中での軌道修正をした一夏の『白式』が飛び込んでくる。今度は横からの一閃。構えで見え見えだぞ、一夏。

「ハッ！」

ガッ！

「なぁ！？」

再び一夏の驚愕の声が上がる。『雪片』を振ろうとした腕に合わせて、そこに『Ａｌｉｃｅ』の先っぽをぶつけて、腕自体を止めたからだ。俺はそのまま躊躇いなく、引き金を引き、拡散するレーザーを全弾、『白式』の腕へとぶち込む。

バァンッ！

「うぐっ！？」

レーザーがシールドとぶつかって、破裂する様な音を鳴らしたと思うと『白式』は後方へと弾け飛ぶ。そこへと追撃する様に、右手の『Ｂａｒｂａｒａ』の銃口を向ける。

「休みは無いぞ！」

ババババババッ！

ドラムマガジンから薬莢が零れ落ち、大口径の銃口からは毎分三千発の特殊弾丸を吐き出す。その弾丸はさっきの衝撃で体勢を崩した『白式』を捉え、シールドエネルギーもおろか、装甲すらも削り取って行く。

バキンッ！

「クソッ！」

肩部分の装甲が破損し、外れる音がすると、一夏は毒づきながら『瞬間加速』によって弾丸の雨から離脱する。それを右手で追おうとするが、上手く追いつけない。これは重量問題か・・・今の武装、威力は十分だが他に改良点が多過ぎるな。

「今は使えんな・・・」

『Ｂａｒｂａｒａ』のドラムマガジン部分のロックを解除すると、『Ａｌｉｃｅ』を『収納』し、『Ｖｉｃｔｏｒ』を『展開』。離脱した『白式』へと『瞬間加速』を使い、一気に接近する。

――ギュンッ！

「遅いな、『白式』！」

一夏の目の前に回る。後からの『瞬間加速』によって、正面に立つのは同速ならまず不可能だろう。ならば何故追い付けるのか・・・それは同速ではないからだ。『改良領域』の強化データとして『瞬間加速』の速度を上げるものがあり、これによって飛躍的に速度を向上させる事に成功している為だ。

ギャリィッ！

「ほら、お得の接近戦だぞ！」

吠えながら、『Ｖｉｃｔｏｒ』を振り下ろす。いきなり前に回られ、反応が遅れながらも一夏は『雪片弐型』を構え直して、その斬撃を受ける。即座の反応はまあまあ――だが

「武器は両手だけじゃないぞ！」

そう告げると同時に右手の『Ｂａｒｂａｒａ』のドラムマガジンの部分を叩きつけ、持ち手を離すと蹴りを打ち込み、距離を開ける。そしてその後、コンマ五秒で『Ａｎｎａ』を『展開』、一夏が体勢を立て直す前にドラムマガジンに向けて銃弾を撃ち出す。

バァァァンッ！

「うあああ！？」

激しい炸裂音と共に飛散する特殊弾丸。手元で使えないなら、使えないなりに利用する。爆発でダメージを与え、さらにそこへと追撃をくらわす。休む暇など与えない。手加減はしない。

「くっ・・・そおおおおおお！！」

点火されるデュアルウィングのスラスター。また『瞬間加速』か、このタイミングで読まれないとでも思っているのか。

射撃（ドンッ）　射撃（ドンッ）　射撃（ドンッ）　射撃（ドンッ）

「ぐあっ！」

「児戯だな、まるでよちよち歩きだ」

先読みの弾丸が右手、双翼、左足を捉え、撃ち抜く。いくら速度が出ようとも、向かう方向が割れていれば、意味がない。使い場所を誤ったな、一夏。

「あの時の動きは嘘だったのか・・・」

ドンドンッ――――ギュンッ！

平速移動から瞬時に『瞬間加速』へと切り替え、『Ａｎｎａ』を撃ちながら飛ぶ一夏の下に回り込み、上昇する勢いで斬り付け、そのまま上空でターン、一夏へと接近戦を展開する。加速も読まれ、平速移動でも捉えられる。そんな一夏は完全に防戦一方になっていた。

「どうした！それでもあの人の弟か！『雪片』が泣いているぞ！」

「くっ！」

俺の『Ｖｉｃｔｏｒ』と打ち合った瞬間に一夏は俺のセリフを訊い

て、悔しそうに表情を歪める。だが、事実未だ一撃も『雪片弐型』は俺の『黒天』に触れてすらいない。こんなものでは話にならない。そんな事を思っていると、沸々とある感情が浮かび上がってくる。

「頼む・・・頼むから・・・」

この程度なのか・・・本当にこんなものなのか・・・

「俺を失望させてくれるな・・・・一夏！」

鍔迫り合いの『Ｖｉｃｔｏｒ』で弾き飛ばし距離を取り、左手の武器を『Ｄａｌｉａ』へと持ち返ると離れた『白式』へと一斉射撃する。耐えきれるか？いや、むしろ耐えろ。その程度を耐えられないようであれば――

「でなければ・・・・落ちろ！」

肩部分に今回『拡張領域』に入れた最後の武器を構える。両肩と背中における固定し、左肩から伸びる三メートルの方針を持った回転式弾装型九十口径大型カノン砲『Ｅｌｅｏｎｏｒｅ』。命中すればシールドエネルギーを根こそぎ奪い取り、おそらく『白式』のシールドエネルギーはゼロ・・・つまり終わりだ。次の瞬間、俺の耳に届くのは終了のブザーかそれとも・・・・

さあ、見せてみろ・・・お前の『雪片』の輝きを・・・俺の心を魅了し、俺の憧れとなった・・・あの輝きを！

「輝けぬ白に意味はない・・・・輝いて見せろ、一夏っ！」

射撃（ドゴンッ！）

爆音という言葉がまさに相応しい射撃音。空気の振動は大気を揺らして――

ドオオオオオンッ！

全てを吹き飛ばす様な音が俺の鼓膜へと届いた。視界には着弾の衝撃から生まれた爆発によって巻き上がる砂埃。

『い、一夏ぁっ！』

篠ノ乃の声が聞こえる。あの爆発、『Ｅｌｅｏｎｏｒｅ』の砲撃が一夏へ命中したのを見て、焦って声を上げたのだろう。いや、違うな――

――命中したと、思ってか――

「あのタイミングで砲弾を切り捨てるか・・・なかなかどうして」

そう、切り捨てた。砲弾を切り捨てたのだ・・・つまり『白式』は――――

「輝いたか・・・一夏・・・『雪片弐型』」

呟くとスラスターの点火する音が聞こえ、砂埃から――――

「うおおおおおっ！」

――『白式』が飛び出してきた。手に握られるのは『雪片弐型』。だが形状が少し変わっている。刃が開き、エネルギー状のブレード

が展開されている。これが『バリア無効化攻撃』・・・・『零落白夜』！

「ハァッ！」

ザンッ！

反応が若干遅れた為か、両手に握っていた『Ａｎｎａ』と『Ｄａｌｉａ』が横薙ぎに一刀両断される。そしてそのまま後ろに後退しようとする俺に対して流れる様に打ち出された右からの蹴りによって、バランスを崩してしまう。

「グッ！？」

「これで――」

――ギュンッ！

怯んだ俺へと再びの『瞬間加速』、あまり距離が離れているわけでもないこの状況での加速は、後手の『瞬間加速』や武器を取り出す時間よりも早い。そして『白式』の手には『零落白夜』。これは・・・やばい。

「――終わりだあああ！」

フッと不意に笑みが零れた。向かってくる光の剣。それを握るは、俺の恩師の弟。時代は流れ、今再び『雪片』を受け継ぐ者が居る。そしてそんな男と戦える事が、もう二度と見れないと思っていた輝きを今、俺は目にしている事が、心底嬉しかった。

――だから同時に不満にも思った。どうして、もっと早く輝いてくれなかったのかと。

「詰めが甘いな一夏」

ブーーーーーッ！

「なっ！？」

響き渡る、ブザーの音。それはまさしく、試合終了に合図を示すもの。俺はさっきの蹴りを一発しか喰らっていない、そしてこのタイミングでもブザー、それが指し示すものは――

『勝者、黒瀬零司』

俺の勝ちってことだ。

・

「この馬鹿者が」

「ありゃ無いぜ、一夏」

「あんな終わり方をするとは思ってもみなかったぞ」

「・・・返す言葉もありません」

試合終了後に俺と一夏はＡピットに集合させられ、一夏は今、呆れ気味の俺と腕を組んだ篠ノ乃、頭を押さえる千冬さんに絶賛説教タ

イム中である。まあ、あれだけ盛り上げといて、終わりがアレじゃあな。ある意味、エンターテインメント性あり過ぎでしょ。

「私は試合が始まる前に『バリア無効化攻撃』はシールドエネルギーを消費すると言わなかったか？」

「・・・言いました」

「それなのに『瞬間加速』バカスカ撃ってね・・・・あれ、エネルギー消費デカイって知らないわけじゃないよね、篠ノ乃」

「私は教えたつもりです・・・覚えているかはともかく」

「わ、忘れてたわけじゃないぞ」

「だったらなおのこと悪いだろ」

「鍛え方が軟弱だからあんな事になるのだ」

どんどんしぼんで行く一夏。最後が結構良かっただけあって、色々と刺さるんだろうな。だが、いい加減説教ばかりでもあれだろう。

「・・・だけど、これである程度感覚は掴めただろ」

「お、おう・・・」

俺が説教を止めると、一夏は返事をし、それを見て頷く。

「最後の感覚、あれを忘れないようにしろ。お前の『零落白夜』は一撃必殺だが、諸刃過ぎる。焦り過ぎず、かといって攻めな過ぎて

も駄目だ。決められる、絶好のタイミングを狙え」

「結構難しい事言うな・・」

「出来ないのなら、負けるだけだ」

千冬さんの鋭い一言で、再び一夏がヘコむ。だがそんな一夏に、俺は笑いかけた。

「大丈夫だって・・・出来るさ」

そうだ、一夏なら『零落白夜』を使いこなせる。使いこなせるに決まってるさ、なんたって――

「お前は俺の師匠の弟だからな」

俺が追い求めた輝き。それを握る事を許された男。それが輝きに呑まれるなんて事はあり得ない。あってはならない。一夏は、そんな男で終わらないと俺は確信している。

「使いこなせるさ・・・お前ならな」

「・・・おう」

一瞬、呆けた様な顔をしたが、一夏はすぐにいつもの顔に戻り、まっすぐな視線で良い返事を返してきた。

・

「ふぅ・・・」

Bピットの男子更衣室。俺はそこで一人、ISスーツを脱いだ後に一息ついていた。ここに一夏はいない。Aピットで集まった後、篠ノ乃が「軟弱だから、今から訓練再開だ」とか言ってアリーナに連れて行ってしまったからだ。訓練もほどほどにしておいてやれよ、篠ノ乃。

「しっかし、最後のはよかったな」

最後に一夏の見せた動き。もしあの時、シールドエネルギーが残っていたとしたら、確実に『零落白夜』の一撃を喰らっていただろう。まるで別人の様な動きだった。あれが一夏の本当の実力だとしたら・・・ISに慣れた後にどうなって行くか見ものである。

「『雪片』・・・『零落白夜』か」

久しぶりに・・・本当に久しぶりにあの輝きを見た。持ち手は違えど、衰える事のないあの輝き。全てを両断する、絶倒の美しさ。

「思えば、あれに見惚れたからってのもあったんだよな」

輝く剣と『ブリュンヒルデ』。この二つの輝きが、研究所での俺を支えたものでもあった。苦しくて、何度も逃げ出そうと思った、あの研究所での生活。だが、『雪片』を握って、『暮桜』を乗りこなす千冬さんの姿を見て、俺は思ったんだ。

――ああ、あんな風になりたい

――あんな強い力を持ちたい

そう思い、研究所でのＩＳ訓練に没頭した。そしてしばらくして、俺の目の前に千冬さんが現れて、俺を弟子にしてくれて・・・今思えば、全ては千冬さんが居てくれたから、今の俺があるんだ。

「お世話になりっぱなしだっただからな」

戦う術を、身を護る術を、誰かを護る術をあの人は教えてくれた。これは俺の自惚れかもしれないが、あの人もそれなりに俺の事を優秀な弟子として見てくれていたのかもしれない。

――お前は私の大切な弟子だ

一度だけ、本当に一度だけ千冬さんに言われた言葉。胸を熱くして、涙がこぼれそうで、本当に嬉しかった一言。一生、この人について行こうと思った言葉だった

――――でも、俺はその後・・・・・

「・・・止めよう」

頭を振って、続きの考えを打ち消す。今を生きようと決めたのに、どうしてこう過去に振り返ろうとするのか・・・成長しないな、俺って。

しかし、こう少し思い出すだけだと千冬さんの事が多いな・・・千冬さんと一緒いた時の俺ばっかりだ。千冬さんの言葉で胸を熱くしたり、一生ついて行こうと思ったり・・・って、あれ？

これじゃまるで・・・俺が千冬さんを――――

「零司、いるか？」

「のうわっ！？」

突然、更衣室のドアが開いて現れた千冬さんに驚いて変な声を上げてしまった。

「なっ、千冬さん！ここは男子更衣室ですよ！？」

「そうだが、お前の裸など見慣れてる。別にいいだろう」

そう言って、パンツ一丁の俺が居るズカズカと更衣室へと足を踏み入れる。というか、俺の裸は見慣れてるって、それは弟子だった時の話でしょうが・・・今になって得られる羞恥心とかが在るんですよ？

「ほれ、差し入れだ」

「どうも・・・」

渡されたのはスポーツドリンク。キャップを開けると、俺はゴクゴクと中身を呑み込んで行く。ぬるめのドリンクで精神を落ち着かせると、一息ついてから千冬さんと向きあう。

「・・・ふぅ、何の様ですか？」

「様と言うほどの事でもない・・・戦ってみてどうだったか訊きた

くてな」

「そうですね、素直な感想を言いますと・・・あれは伸びますよ」

「・・・なるほど」

俺の贔屓目無しの発言を聞いて、千冬さんは小さく頷く。表情はあまり変わっていないが、何処か複雑な感じだった。

「・・・一夏はＩＳに関わって欲しくなかった、だから素直に喜べないってところですか？」

「別にそうではない。ただ、お前の眼が狂ったのではないかと心配になっただけだよ」

「酷いな。俺にも酷いですけど、一夏にも酷いですよ」

「そうでもないさ、いつも通りの扱いのつもりだ」

つまりいつも俺は信用されてないと・・・ちょっとばっかしショックだ。

「こっちはいきなり『一夏と戦ってほしい』とか言われて、予定消して付き合ったのに、この扱いはちょっと酷いですって」

「可能な事ならやる・・・そう言ったのはお前だっただろう？」

「・・・・・ソウダッタカナ？」

「言葉が事実だと証明してるぞ」

不敵に笑みを浮かべる千冬さん。くっ、世話になってるからって言って見ればこれだ。今後、軽くあんな事を言わないようにしよう。

「頼み事を聞いてくれたのは感謝している・・・ありがとう」

「・・・・っ！い、いえ・・・・」

・・・・柄もなく、嬉しいとか思ってしまった俺が居る・・・・

おいおい、落ち着けよ俺。昔みたいに師匠と弟子って関係が先生と生徒に変わっただけだ。それに今のは用件を聞いてくれた礼を言っただけだろう。そんなことで嬉しくなる様なピュアボーイかよ、俺は。

「・・・まあ、先生の言う事を聞くのは生徒の務めですから」

「では、今後も言う事をちゃんと聞いてくれよ。出席簿で殴るのも疲れないわけじゃないんでな」

冷静に返事を返すと、千冬さんもいつもの感じで返答した。やっぱり、ちょっと変だったよな、さっきの千冬さん・・・ちょっと柔かい笑みというか・・・って、またこんな事を・・・

「千冬さん」

「なんだ？」

「礼を言うの止めてください」

「何故？」

「なんか優しくて気色悪いです」

シュバァンッ！

「ついさっき、疲れないわけではないと言ったばっかりなのだが？」

「・・・すいません」

何処から出したのか出席簿を片手に目元をヒク付かせて言う千冬さんに俺は頭を押さえながら謝った。なんだか、普通よりも痛い気がするんだが・・・・

「まあ、いい。それだけを言いに来た・・・今日はもういい、帰ってゆっくり休め」

「・・・やっぱり気色悪――」

「そうか、では八時から十二時まで一時間増しの夜間訓練を――」

「ああ！やっべ、超疲れた！こりゃやばいな！もうどれくらいヤバいかと言うと虐殺ルートのラストをアクアビットマンでクリアしろとか言われるくらいにヤバい！」

いやあ、本当に千冬さんは優しいなぁ。俺の様な奴を気遣ってくれるなんて本当に天使の様な人だ・・・・知ってるか？悪魔って元々天使なんだぜ？

「・・・礼くらい素直に受け取っておけ・・・馬鹿者が」

「はい？」

「・・・なんでもない、早く着替えて自室へ行け」

何か呟いたかと思うと、千冬さんは更衣室から出て行った。なんだか最後にちょっと怒っていた気がするんだが・・・

「・・・気のせいか」

俺にあの人の考えが読めるわけないし、とりあえず今は言われた通りに部屋に帰って休もう。疲労で下手に症状出しちゃっても迷惑かかるし。それにさっきは気色悪いとか行っちゃったが・・・せっかくの千冬さんの善意だ、ありがたく受け取りましょう。

「・・・ちゃちゃと着替えますか」

・

Ｓｉｄｅ　？？？

上空、標高三百キロメートル。場所は新型の大型ステルス輸送機内部の化物室。そこに一つの人影が合った。

「・・・・少し・・・寒い」

とても小柄な体系、顔立ちは深くかぶったローブでわからない。だが細い腕や足、呟く様な声の声色から察するに女性・・・いや、少女だろう。体育座りをする少女は自分の肩を温める様にして、擦る。

「コーヒーでも淹れましょうか？」

機内の奥から女性が顔を出した、その顔はヘルメットに覆い隠され、完全には把握できない。だが、声色には優しさが感じられ、その問いには好意が感じられる者だという事がわかった。

「いらない・・・あんな泥水、アメリカ人の飲み物でしょ」

しかし、その好意に満ちたセリフに少女は唾を吐きかける様な言葉を返した。女性は肩をすくめ、機内へと戻って行く。それと同時くらいに化物室に取り付けられたスピーカーから声が響いた。

『まもなく、目標上空・・・・』

その言葉を聞き、少女は立ち上がると壁に設置されていた窓から下の景色を見る。そこには本島から外れ、モノレールによって繋がった島。そしてその島には白く、大きな建物・・・・学園があった。

「あれが・・・・ＩＳ学園」

呟く少女は俯き、ギュッと自分の胸元を掴むと息を吐く。今から緊張で胸が高鳴って仕方がない。自分はちゃんと出来るだろうか、皆よりも自分は劣っている自分でもちゃんと出来るだろうか。

「大丈夫・・・出来る・・・出来る」

自己暗示をかける様に二、三度呟くと小さく頷く。そして顔を上げると、再びＩＳ学園を見た。

「ヨハン・・・私の事を褒めてくれるかな・・・」

ゆっくりと口元が緩む。過ぎて行く目標、ＩＳ学園。それに目を釘付けにしながら、確かに少女はほほ笑んで・・・言った。

「ちゃんと・・・壊すからね」

この日、ＩＳ学園を見下ろす影に気付いた者は誰もいない。

ＥＰ１０　Ｅｎｄ

ＥＰ１０　白と黒（後書き）

はい、第十話終了！どうでしたか？俺的には・・・ちょっときつかったです（―ω―；）。『白式』が接近武器しかないからどうも描きにくいんですよね・・・ううむ、今後もこれはネックになりそうです。

第十話ということで、結構見せ場になりそうな話を持ってきました。作者としてはこの第十話はとても感慨深いで・・・正直、このような駄文でここまでやってこれるなんて誰が予想したでしょうか・・・少なくとも、私は思ってもみませんでした（＾ω＾；）。

これも全て、この『ＩＳ　もう一つの翼』を読んでくださった皆様のおかげです。本当にありがとうございます！これからも頑張っていこうと思いますので応援、よろしくお願いします！

さて、次回はついにクラスマッチ・・・なのですが！正直、一夏と鈴の出番は少ないと思います・・・すいませんｍ（＿＿；）ｍ。そして最後に出てきた少女とは・・次回、クラスマッチ編Ａパートです！ではでは、また（＾ω＾）ノシ

EP11　問題発生（前書き）

みーなさーん、11話ですよー！

先に言っておきます。今回はクラスマッチ戦ですが、一夏と鈴の出番はほとんどありません！ごめんなさい！m（＿＿；）m

ちょっとした新キャラ出現を交えつつ、始まり始まり～（＾ω＾）

EP11　問題発生

五月
緑色の木々がすっかり顔を出し、徐々に気温も上がって行く春という季節では最後の月に当たる、そんな頃。ＩＳ学園、第二アリーナは圧倒的な賑わいを見せていた。観客席にあるのは人、人、人。座れぬものは立ち上がり、アリーナからあぶれた者は食堂などのモニターから会場の状況を確認するのだろう。

「こりゃ凄い賑わいだな」

そんな会場をＡピットから見て、この騒ぎの原因ともいえる男子である一夏はそう言った。

「これのほとんどがお前を見に来ているんだぞ？」

「マジかよ・・・さすがにこれは緊張するぞ」

「尻込みか、一夏」

「冗談だろ、箒・・・腹は据えてる、やれるだけやってみるさ」

同じピットにいるのは俺と篠ノ乃という、あの時の訓練のメンツだ。結局、『零落白夜』の一件以来、俺は一夏との訓練に参加することはなかった。鍛えるという事よりも、一夏と少女達の交流の方を優先したわけだ。だが――

「あれ以来、感覚は掴めてきた・・・やってやるさ」

どうやらあの一件は一夏にはいい刺激になったらしく、先週からクラスでも「調子が良い」と言っていた。あとは相手がどんな兵装で来るかによるが、コンディションはバッチリの様だ。

「相手はあの凰だが・・・大丈夫か？」

「安心しろよ、相手が知り合いだからって手加減するほど自惚れちゃいない。全力でやる」

『白式』のが展開された拳をグッと握り締める一夏だが、どうもその顔には単純に勝つという意志だけではなく、他の事も考えている様な節が見られた。

おそらくそれは件の『毎日酢豚事件』だろう。あの時から結局今日にいたっても一夏と凰の関係は修復できず、未だ関係に大きな溝を作っている。どれくらいかというと、ここ一週間は双方一切口を聞いていないほどだ。まあ、主に凰の方が一夏を避けているみたいなんだが・・・

「ま、これで凰との関係に何らかの衝撃でも与えられればいいんだがね・・・」

「なんか言ったか？」

「いや・・・」

お互い拳でしかわかりあえない人種でもあるまいに・・・意地っ張りなところは似てるからな、この二人。

『織斑君、対戦者のデータを送ります』

不意に山田先生の声が聞こえた。おそらくＩＳのオープンチャンネルだろう。一夏の前にデータが表示される。

『凰さんのＩＳは『甲龍』といって、織斑君の『白式』とは類似する近接格闘型の機体となっています』

赤紫色主体のＩＳ、小柄な凰と対照的ともいえる相手を叩き潰す様な『龍』にふさわしい見た目をしている。

「武装は近接用青龍刀型実大剣『双天牙月』が二基・・・山田先生、この肩の丸いのは？」

『はい、それは『龍砲』といって空間圧縮により砲身を作り出し、衝撃砲を撃ち出す遠距離装備です。その肩のと他に両腕部に装着されています』

なるほど、遠近両方を兼ね備えるバランス型の機体でもあるわけだ。おそらく一番警戒するべきは、この『龍砲』だろう。

「聞いたか、一夏。相手は遠距離装備を兼ね備えている」

「『白式』と同じ近距離型で、追加で砲撃までしてくるのか・・・厄介だな」

「しかも空間圧縮による砲身って言うくらいだから、視覚による発射の察知は難しい。その上にこの球体である利点はあらゆる方向に向ける事だろう」

「あらゆる方向への視覚感知が難しい砲撃・・・黒瀬さん、これは

――」

「うん、正直かなりヤバいな。慣れと直感で回避するには多少時間かかるし、何より一夏は初対面だ」

『白式』の弱点は遠距離兵器を持った相手にとことん弱い事だからな。ましてや砲撃なんて威力の高いものを何発も受けたらシールドエネルギーはアッと言う間に削られる。

「『龍砲』に穴だらけされる前に、あれの回避方法を掴むのが勝利の鍵になってくるだろう」

「一夏には『零落白夜』がありますから、一撃でひっくり返す事も出来ますからね」

「そうだな・・・一夏、わかってるとは思うが――」

「『零落白夜』は諸刃の剣・・・だろ？わかってる」

言いながら、一夏はアリーナを見据える。これ以上の教示は不要だろう。後は本人の実戦に出てからの動き、そして相手の動きにどう対処できるかにかかっている。これは言葉では説明する事は出来ない。

『お話も終わったところで・・・黒瀬君、いいですか？』

「はい、なんですか？」

『今から職員会議室へ来てください、お話があるので』

職員会議室・・・またなんでそんなところに。それになんだか山田先生の声が少し落ち着き過ぎている様な・・・気のせいか？

「わかりました・・・一夏」

「なんだ？」

「気の利いた事は言えんが・・・頑張れよ」

「それだけで十分だ・・・まかせろ」

返事を返しながら、一夏は俺の前に出した腕にガッとぶつける。そして他に交わす言葉もなく一夏から離れると、すれ違い際に篠ノ乃に一言。

「試合まで時間が在る・・・後は任せたぞ、篠ノ乃」

「・・・はい」

しっかりと頷く篠ノ乃を見て、小さく笑みを向けると俺は歩き出す。一夏の事は心配ない、今のあいつなら凰と互角以上に戦ってくれるだろう。そう信じて、Ａピットを後にした。

・

「ここか・・・」

Ａピットから出て、職員会議室まで一直線に移動し、今扉の前まで

来ていた。他の部屋とほとんど変わらない扉なのに、なんだか威圧感のある雰囲気が感じ取れる。なんか・・・ピリピリしているというか・・・

「良い感じはしないな・・・」

しかしここで足踏みしていても仕様が在るまい。覚悟を決めて、ドアを軽くノックする。

――コンコン

「一年の黒瀬です」

「来たな・・・入れ」

室内から聞こえてきたのは千冬さんの声に命じられるがまま、ドアを開ける。そこで俺は小さく息をのんだ。

まず目に入ったのは正面、壁に掛けられる様にして存在する大型の電子画面。そこにはＩＳ学園から周辺数キロ単位までを記した地図が映され、そしてその映像を見る数人の学園の教師達が部屋の中央にある長テーブルを囲んでいた。

「これは・・・ずいぶんと仰々しいですね」

「急に呼びだしてごめんね、黒瀬君」

「なかなかに急を要する事なんでな・・・」

「まあ、構いませんけど」

電子画面の前に立つ千冬さんと山田先生はそう言われ、俺は返事をしながら教師達を見る。よく見てみると、そこにいるのは一年担当の教師達であり、二、三年の教師の姿が見当たらない。という事は、今回のクラスマッチ関係の集まりってことか・・・

「このタイミングで一年の先生ってことは・・・アクシデントでもありましたか？」

「ああ・・・これを見ろ」

テーブルまで移動すると、俺の目の前に電子マップが浮かび上がる。そこには上空から見たＩＳ学園。海に浮かぶ孤島というほどの大きさのＩＳ学園が完全に映し出されている。だが何よりも目を引いたのは、ＩＳ学園本体ではなく、そこから北に位置する海上だった。そこには四つの矢印がさらに上の方を指している

「この矢印は？」

「広げて確認しろ」

千冬さんに言われ、マップの距離を広げてさらに北の方を見てみる。すると、北西四十キロ方面に四つの点が見受けられた。

「この点・・・アクシデントってのはコレの事ですか？」

「ああ・・・では、現状を説明する」

千冬さんの声を聞いて、教師陣も電子画面に視線を向ける。

「現在、このＩＳ学園から北西四十キロの場所に所属不明の未確認ＩＳが四機、確認された。目標は海上で停止しているが、いつ動き出すかわからない状況だ」

「呼びかけはしたのですか？」

「はい、何度も信号を送っているのですが呼び掛けに応じる様子は見受けられません」

「ごり押しで来てるか・・・理由はロクなもんじゃないってことね」

教師陣から緊張感のある声が上がる。ロクなモノではない理由。それはおそらく、この部屋にいる誰もが気付いている事だろう。所属不明の未確認機（アンノウン）、停止命令に応じない態度、そしてその機体はこちらに向けてまっすぐと向かって来ている。この状況で導き出される答えは・・・

「・・・相手の目標はクラスマッチに出る専用機ですかね」

「わからん。相手の目的がＩＳ学園の襲撃にしろ、そうでは無いにしろ警戒を怠るわけにはいかん」

「だったらまず、クラスマッチを中止して生徒を避難させるべきなのでは？」

「そういうわけにもいかないんだよ、黒瀬君」

教師陣の中から呼びかけられ、そちらを見る。そこには青い瞳に銀色のショートヘアー、細身の白スーツを着た美人女性教師がいた。

「今、この場所にはクラスマッチを見学に来ている他国の監査官が来ている。下手にＩＳ学園の評判を落とすわけにもいかないんだろう。まったく・・・面倒くさい事だ」

「それは確かに面倒くさいですね・・・えっと――」

「イリア・ブルシロフスカヤ先生だ・・・他のクラスの担任の名前くらい覚えていろ」

ああ、確か三組の担任教師だったよな。名前からするとロシアの人か・・・なんか銀髪と碧眼って事で冷たい印象があったから話しかけ辛い先生だって三組の女子に聞いたことが合ったな。

「――で、詰まるところ学園内にこの事を知らせる事は出来ない。だから気付かれることなく、秘密裏にこの出来事を処理しなきゃならないってことですか」

「そういうことになるな・・・面倒な話である事には変わらないが、これも学園の為でもある」

「・・・だったら、なんで俺を呼んだんですか?俺も一応、学園の生徒なんですけど」

「君にも協力してもらう為だよ・・・そうだろう、織斑先生」

イリア先生の言葉に千冬さんは無言になった。俺に・・・協力?

「なんで俺に協力なんて求めるんですか?教師陣が動けばどうにかなるんじゃないですか?」

「秘密裏に、と言っただろう・・・教師陣はおおっぴらに動く事は出来ん。それにＩＳ学園自体の警備もある。今、この場所に二年と三年の先生がいないのはその為だ」

「・・・なるほど」

大体理解できた。今回の事件の担当は二、三年の教師は各国の要人警護、そして一年の教師陣が問題の未確認ＩＳの撃破。だが、今回の事件を学園にいる人間には感づかれてはいけない。だから一年教師陣もおおっぴらには動けない・・・そして今、この場には今回のクラスマッチに出場せず、身軽でそこそこ腕の立つＩＳ乗りが一人・・・

「・・・俺にその未確認機をどうにかしろってことですね？」

今回のクラスマッチ、おそらく皆が注目するのは会場の賑わい加減から見ても完全に一夏に向いている。おそらく、要人達もそちらに注意が向いているだろう。その時、一人生徒がいなくなる程度では気付く者もいない。

「強制はしない。お前が断れば、我々で対処しよう・・・どうする」

極めて真剣な目をしながら、俺に問う。これは実戦だ。訓練や競技とはわけが違う。もし、この未確認機体が予想外の行動を取り、こちらがやられた時はどうなるかわからない。下手をすれば、命の保証もないかもしれない。普通の学園生なら、荷が重い。断るべき事なのだろう。

そう、普通の学園生なら――――

「いいですよ」

俺がそう返事をすると、部屋の教師陣が少しザワついた。こんな無茶な事を受けるとは思わなかったのだろう。

「・・・いいんだな？」

「進めといて、そりゃないですよ千冬さん・・・それに」

そうだ、それに何よりも――

「おそらく・・・この中にいる誰よりもこういう仕事は俺に向いてますからね」

そう言って、小さく笑うとスッと千冬さんは目を細めた。なるほど、確かに俺向きの仕事だな。千冬さんもわかってるじゃないか・・・これなら俺も思いっきり『黒天』を動かせる。

「・・・よし、では何か注文はあるか？」

「そうですね・・・では誰か一緒に来てください。さすがに四対一では分が悪いですから」

「そうか、では山田先生を付けよう・・・いいですね、山田先生」

「わ、わかりました」

授業をしている時よりも、さらに真剣でありながらも何処か焦った表情をして山田先生は頷く。

「現場の指揮は？」

「お前に任せる。状況によってはお前の方が良い指示を出せるだろう」

「ご期待に添えるようにしますよ・・・では山田先生」

「は、はい！」

「十分で用意を・・・その後、すぐに出ます」

「わかりました！」

「よし、では我々も持ち場に移動しましょう・・・解散」

千冬さんの言葉を聞いて、職員会議室から出て行く教師陣と共に俺も部屋を出て、近くの更衣室へと急ぐ。そんな中で頭の中をクリアにしていく。たった一つの事、今回の仕事のことだけを考える様にする。ああ、この感覚が懐かしい。久しぶりの・・・そう、久しぶりの・・・

「久しぶりの・・・任務だ」

・

「お待たせしました！」

職員会議室を出て十分後、俺がＩＳ学園の丁度裏口に位置する場所

に立っているとＩＳスーツ姿の山田先生がやって来た。

「丁度十分ですね。じゃあ、行きますよ」

「はい」

山田先生の返事を聞いて、俺は『黒天』を展開。それと同時に山田先生もネイビーカラーの量産型第二世代ＩＳ『ラファール・リヴァイヴ』を展開すると、二機とも一斉に飛び上がり目標へと進む。

「目標は北西四十キロから動いていませんね・・・少し不気味です」

「こちらをおびき寄せる為の寄せ餌か・・・だけど、放っておくこともできませんからね」

四機の未確認ＩＳ。軍事基地でも大体配備されるＩＳは二機程度だろう。それの二倍クラスの戦力を持っての寄せ餌とは考え辛いが、万一の事もあり得る。最悪の状況は考えておいた方が良いだろう。

「もし罠だとすれば・・・」

話を続けようとして、山田先生を見ると、彼女の手元が震えていた。確か新人教師だって言っていたな。こういう現場は慣れてないんだろう。

「山田先生」

「は、はいっ！？」

「もっと落ち着いてください。そんな状態じゃ実力出せませんよ」

「だ、大丈夫ですよ！私は緊張なんて――」

「そんな見栄を張らないでください。手、震えてますよ」

「あ・・・」

ハッとなり、自分の手を見る。やっぱり気付いていなかったか、まあ初陣で敵がＩＳ四体なのは少し・・・いや、かなりのプレッシャーだろう。並みの教師ではこんな経験はしていないだろう。

「怖いなら無理する必要なんてないんですよ」

「わ、私は先生です。私が頑張らなくちゃ生徒の皆が・・・」

「頑張るのはいいですけど、少しは肩の力を抜いてください」

言いながら、山田先生に近づき、震える手に自分の手を重ねる。

「安心してください・・・もしもの時は俺が全力であなたを護りますから」

「く、黒瀬君・・・」

「だからそんなに緊張しないで、山田先生は自分のペースで動いてください・・・ね？」

「は、はい・・・」

緊張を解くように微笑みかけ、手を軽く握りながらそう語りかける

と頬をほんのりと紅く染めて山田先生は頷いた。自分の生徒に情けない姿を見せたのを恥じているのだろうか、そんなに顔を赤くしちゃって・・・気にする必要ないのに、真面目だな。

「・・・あの、黒瀬君？」

そんな事を考えながら離れると今度は山田先生の方から声を掛けてきた。

「なんですか、山田先生？」

「いえ、大したことではないんですけど・・・あの時、黒瀬君は『誰よりもこういう仕事に向いている』って言ってましたよね・・・」

「ああ、それですか・・・」

『山田先生、その話はまた後ですると言う事で良いだろうか？』

「ひゃ、ひゃいっ！？」

オープンチャンネルで聞こえてきたのは千冬さんの声に驚いたのか、山田先生は素っ頓狂な声を上げるが千冬さんは気にせず話を始める。

『零司、今織斑と凰の試合が始まった。学園内の生徒だけでなく、要人達も二人の試合・・・いや、織斑に夢中になっているはずだ』

「こっちの寄せ餌は良い感じに働いてくれてますね」

一回戦に一夏と凰の試合が在るというのは運が良かった。要人達の視線は完全に一夏に向いている。今のうちにターゲットを叩ければ、

少なくとも要人達には気付かれることはないだろう。

『防衛はブルシロフスカヤ先生率いる一年教師陣で固めてある。もし撃ち漏らした時は即報告しろ』

『私達も腕に自信はあるけど・・・ワザと撃ち漏らしたりするのはよしてくれよ？』

通信回線にイリア先生が横やりを入れて来る。こんな状況で冗談も言えるのだから、結構現場慣れしている教師だということが窺える。

「そんなことしませんから、安心してくださいイリア先生」

『それを聞いて安心したよ・・・でももしもの時は無茶するんじゃないぞ、黒瀬君』

「その時は思いっきり任せます」

『はっはっは、はっきりと言うなぁ。気に入ったよ』

「そいつはどうも」

笑い声を聞いて、苦笑を浮かべてしまう。この人はなんだかちょっと変わった人だな・・・こういう人がいると職場の雰囲気とか良いんだろうな。ＩＳ学園の職員室風景がちょっと気になる。

『・・・ブルシロフスカヤ先生、そろそろいいでしょうか？』

『名字じゃ長いから名前で良いよ、織斑先生・・・それにそうだね、お喋りしている暇もないか・・・』

千冬さんに話を止められると、一気にイリア先生の声も鋭くなる。
こっからはこんな他愛もないお喋りは無し。俺も頭の中でスイッチを切り替えて、オープンチャンネルからの声に耳を傾ける。

『そういう事です・・・零司、お前は目標に接触すると同時にまず回線を使って呼びかけろ。無駄だとは思うが、一方的に攻撃するわけにもいかん』

「もし返答がなかったら？」

『攻撃して構わん』

なるほど、そいつはわかりやすい。つまり警告して、それに返事がなかったら相手を撃って良しって事だ。まあ、ＩＳ学園に無断で侵入するってのは両国審判とかそんなレベルの話になってくるからな。

「了解しました・・・ちょっと荒っぽいですけど付いて来てくださいね、山田先生」

「わかりました」

『安心しろ。山田先生は元日本代表候補生だった人物だ、そう簡単にやられる様な腕ではない』

千冬さんの言葉を聞いて、山田先生を見る。確かにさっきので緊張が抜けたのか、出撃時よりも良い顔になっている。

「なるほど・・・期待してますよ、山田先生」

「はい・・・黒瀬君は無理しないでくださいね」

「はい、心に留めておきます」

山田先生はおそらく俺の疾患の事を言っているのだろう。千冬さんとの夜間訓練の成果により、十五分以上の持たせられるようになった。だが、それでも油断は禁物だ。なるべく早く、それでいて的確に目標を倒さねばならない。

「そろそろ目標と接触します。黒瀬君、準備を」

「了解・・・ではこれより相手に接近、以上通信を終わります」

『零司』

両手に『Ａｎｎａ』と『Ｄａｌｉａ』を『展開』し、スラスターの速度を上げようとした瞬間、千冬さんが少し強めの声を出す。何事かと耳を傾けると――

『・・・無事に帰ってこい』

とだけ言って通信が途切れた。さてと、なんだか懐かしい一言を聞いて、さらにやる気も出てきたよ。まったく、あの人の言葉はまるで呪文だな。俺をこうも単純に突き動かしやがる。

「はい、師匠（せんせい）」

言葉と共に感じた温かさを心の底にしまい込み、呑み込まれる様な蒼海と蒼天に挟まれた世界で、俺と山田先生は速度を上げる。目標はまで・・・あと五キロメートル。

EP11 End

EP11　問題発生（後書き）

はい、11話終了です。今回はここまで、戦闘開始は次回です。

どうでしたか？前回戦闘は苦手とか言ってましたが、戦闘が完全にないってのもツライですね・・・あれ？小説で俺が得意なのってなんなんだろ（ーωー；）

新キャラ、イリア先生の登場です。彼女はチョイ役ではなく、今後も出てくるオリキャラです。今後とも、新キャラの彼女をよろしくお願いしますm（＿＿）m。

さて、次回はヤマヤマと一緒に四対二です。若干ヤマヤマの強さが変動してしまうかもしれませんが、そこはオリストのご愛嬌ということろで許してください。では、また（＾ω＾）ノシ

EP12　人形（前書き）

これで一巻のメですって、奥さん！

はい、始まりましたよ。いやぁ、今回も戦闘だけなんで文が酷い！（ｰωｰ；）これでも頑張ってるんですけどね・・・相変わらずの駄文で読み辛かったり、つまらなかったりしたらごめんなさいｍ（＿＿）ｍ。

それでは始まります。どうぞよろしくお願いします（＾ω＾）

EP12　人形

Ｓｉｄｅ　???

青い海が広がる。海の青は空の青が映った所為だと言ったのは誰だったただろうか・・・非科学的だが、とてもロマンチックで私は好きだった。

「綺麗・・・」

下に広がる蒼海を見て、私は呟く。海は変わらない。故郷のものと変わっていない。とっても綺麗な海。

「あなた達もそう思う？」

私と同じ様に海上に浮遊する四機のＩＳに話しかける。返事はない。当り前か、この子達はお人形。私の大切な・・・大切なお人形さん。

「ヨハンも・・・そう思ってるのかな」

名前を呟いただけで、鼓動が高鳴る。頬が熱くなる。ヨハン、私の大切な人の名前。私に笑いかけてくれた、最初の人。私に大切なお人形というプレゼントをくれた、優しい人。

「ヨハン・・・会いたいよ、ヨハン」

あの優しい笑顔をもう一度見たい。あの人に頭を撫でて欲しい。だから・・・私はやるんだ。

「ちゃんと壊すからね・・・」

呟く私の視界には、接近してくる二機のＩＳ。さあ、始まる。私が操る人形劇（プッペンキステ）が。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

「目標、動き出しました！」

「こちらも目標まであと一キロを切りました、接触します」

五キロ地点から一気に加速して、あちらも動き出しお互いに距離を詰めながら山田先生にそう告げると、ハイパーセンサーで捉えた機影を凝視する。機体は四機とも全て深い灰色をした全身装甲になっており、俺や山田先生のＩＳよりも一回りくらい大きく、首から下を隠す様にしてマントの様なモノが出ている。両腕もすっぽりと隠れてしまい、何を武装しているかわからない様になっている。それと・・・

「黒瀬君、見てください。機体が・・・」

「ええ、一機多いですね」

四機の全身装甲の後ろ、五機目のＩＳを睨む。他の機体と違い、頭まで隠しており、素姓が全くうかがえない。ただでさえ四機でも危険だというのに、追加までされるとは思ってもみなかった。

「レーダーには映ってません・・・何らかのジャミングを行っているんでしょうか」

「今から連絡しても間に合いませんよ。俺達は俺達のやるべき事をやりましょう・・・行きますよ」

視線を送ると、山田先生は頷く。それを確認してから、俺は右手の『Ａｎｎａ』を目標に向けて、オープンチャンネルを開く。

「そこの機体、すぐさま停止後、所属国もしくは所属の企業名をこちらに告げてくれ！お前達はＩＳ学園の領海に侵入しようとしている、もし様がないなら迂回路の使用を！」

「・・・・・」

そう告げるが返答は返ってこない。静かだ。静か過ぎる。ハイパーセンサーを通しても、呼吸音一つ聞こえてこない。

「聞こえていますか！今すぐ迂回して――」

「・・・っ！山田先生、奴の射線から外れろ！」

バシュンッ！

俺の叫びが飛ぶとほぼ同時、全身装甲の一機から高エネルギー反応が確認され、マントから相手の腕が出たと思うと、腕部装甲がスライド、そこからビームが打ち出された。それを山田先生は反応が遅れながらも、紙一重で回避して、アサルトカノン『ガルム』を構える。

「どうやら説得は無駄の様ですね・・・織斑先生が言ったとおりです」

「やっこさんはやる気満々みたいですからね」

言っていると四機のＩＳはマントを外し、それぞれが腕の装甲をスライドさせる。そして五機目のＩＳから、オープンチャンネルへと返答される。

「邪魔・・・しないでっ！」

バシュンッ！

俺の言葉に反応してか、一斉に四機の全身装甲ＩＳはビームを撃ち出し、それに対応して俺と山田先生は双方、左右に分かれて回避する。そのまま俺は回避から即座に両手の『Ａｎｎａ』と『Ｄａｌｉａ』を構え、一機目へと攻撃を開始する。

射撃（ドンッ）　射撃（ドンッ）　射撃（ドンッ）　射撃（ドンッ）　射撃（ドンッ）

高速で撃ち出される実弾。しかし大きさに見合わない、速度的で的確な動きによって被弾率は半分にも満たない。しかしそこへ――

「外しません！」

冷静な真耶の声と共にアサルトカノン『ガルム』が火を吹く。

ドンッドンッドンッ！

回避に移った先を読み、撃ち出された『ガルム』の弾丸はＩＳの間

接部分と頭部に着弾。正確な射撃に舌を巻いてしまう。

「もらった！」

しかしこちらも驚いてばかりはいられない。『Ａｎｎａ』を『収納』し、『Ｖｉｃｔｏｒ』を『展開』。左手の『Ｄａｌｉａ』で違う機体に牽制射撃をしながら、さっきの機体に『瞬間加速』で近づき、ブレードを振りかぶる。

ガキィッ！

「チッ！」

だが、さらにもう一機。横から来た機体の腕から出ていたビーム砲からでたビームをブレード状に固定して、阻まれる。遠近両方で活用できる兵器か・・・

「だがっ！」

ズドンッ！

ブレードを『Ｖｉｃｔｏｒ』で押さえながら、その機体の腹部に『Ｄａｌｉａ』の銃口を押し付け、引き金を引く。鼓膜を震わせる射撃音とバリアの上から装甲を削る音が聞こえ、敵ＩＳは弾き飛ばされる。これならかなりシールドエネルギーを削っただろう。

「はあっ！」

そこに他の二機からの攻撃を回避しながら、さらに『Ｄａｌｉａ』をくらった『ガルム』による追撃を行う。よし、このまま・・・

「落とすっ！」

叫びながら『Ｖｉｃｔｏｒ』を投げ、それを追う様に『瞬間加速』をして『Ａｎｎａ』のトリガーを引く。さらに左手に『拡張領域』から武装を『展開』する。それは漆黒のフレームによって作られた、巨大な楯にも見える。だが先端には七十二口径の巨大な杭が取り付けられている。大型パイルバンカー『Ｄａｒｉｕｓ（ダリウス）』、それがこの武器の名前だ。

バシュゥッ！

「そう嫌がんなよ・・・」

『Ｖｉｃｔｏｒ』が命中しながらも極太のビームが俺に向けて発射されるが、それを『Ｄａｒｉｕｓ』のシールドで防御し続け、投げ飛ばした『Ｖｉｃｔｏｒ』が肩に刺さった目の前のＩＳとの距離を詰めると同時に先端を押し付け――

「痛いだけだっ！」

ガコンッ！・・・バキンッ！

やけに重苦しい音と共にシリンダーを吐き出すと、特殊合金で作られた杭が全身装甲のＩＳにぶち当たる。連続発射は二発が限界だが、威力だけならあの『楯殺し（シールド・ピアーズ）』こと『灰色の鱗殻（グレー・スケイル）』の比ではない。一発で確実にこの機体のシールドエネルギーはゼロまで持っていける！

「これで――っ！？」

『Ａｎｎａ』を『収納』し、『Ｖｉｃｔｏｒ』を右手で引っこ抜くと同時にトドメとして『Ｄａｒｉｕｓ』を打ち込もうとした瞬間、俺は驚きで言葉が詰まった。さっきこのＩＳに庇われたもう一機がこちらに向けて目の前のＩＳを蹴り飛ばしたのだ。『Ｄａｒｉｕｓ』の先端が全身装甲の胸部にめり込む。意識では『Ｄａｒｉｕｓ』の引き金から指を外そうとするも、間に合わず・・・

バギンッ・・・

「なっ！？」

『Ｄａｒｉｕｓ』は装甲板を打ち抜き、ＩＳを貫通した。パイルバンカーによって砕かれた胸部からは、紅い液体が噴水の様に溢れ出し、俺の顔に装着されたバイザー型ハイパーセンサーを紅く染め上げた。

「あいつら・・・なんて事を！」

さっき仲間を蹴り飛ばしたＩＳを睨みつける。なんて事をしやがるんだ、あいつは。仲間を壁にしやがったのかよ！

「黒瀬君っ！？・・・きゃっ！」

今の光景に衝撃を受けたのか、一瞬の硬直を許してしまった山田先生に三発のビームが迫り、そのうち二発が命中した。あの威力を同時に二発も・・・クソッ！

「山田先生っ！」

重苦しいＩＳを貫いたまま、故障したのか機能しなくなった『Ｄａｒｉｕｓ』をパージし、『瞬間加速』を使い、ビームの出力に耐え兼ねたのか弾き飛ばされた山田先生の元へと一気に急ぐ。

バシュッ！

「グッ！」

俺を追う射撃がウィングと右足を掠める。バランスを若干崩したが、まだ加速する。そして

ガシッ

「大丈夫ですか！山田先生！」

「は、はい・・・なんとか」

腕を掴むとこちらに引き寄せる様にして体勢を立て直させる。マズいな。今の一撃で『ラファール・リヴァイヴ』のシールドエネルギーがほぼ空だ。それに山田先生の頭部へと激しい衝撃を与えたらしい。腕は良いが、機体は量産機。防御面も俺の『黒天』の様に高くはない。

「その程度じゃ・・・駄目」

庇う様にして、山田先生をこちらに引き寄せる俺の前に三機のＩＳを引き連れたマント付きが言う。

「もう無駄・・・だから止めて」

その声は何処か悲しさに似たものが込められており、ここでの戦いを拒んでいる様だった。だが、だったら何故ＩＳ学園へと進行する。

「止めて欲しかったら、この場所から立ち去れ」

「それは・・・出来ない」

「何故だ！」

「壊さなきゃ、ならないから」

「壊す・・・だと？」

「そうじゃなきゃ・・・喜んでもらえないんだよね？」

何を・・言っているんだ？何故俺に聞いてくるんだ？

「だから、意味がわからないと言って――」

『零司、聞こえるか』

聞き返そうとした瞬間、学園側からの通信が介入、千冬さんの声が飛び込んできた。

「なんですか、こっちはまだ戦闘中――」

『新手だ、こちら側に二機・・・侵入された』

「なっ！？」

馬鹿な、学園側は教師陣が護ってるんじゃなかったのか？そんなやすやすと侵入なんて・・・

「どういうことですかそれは！管制は昼寝でもしてたんですか！」

『レーダー反応無しにいきなり現れた・・・一機はブルシロフスカヤ先生が破壊したが、一機はアリーナに侵入、今は織斑と凰が応戦している』

レーダー反応なし・・・原因はおそらく今目の前にいる少女と同じもののせいだろう。まさかこんなに早く侵入するとは・・・

「何故こんな事をするんだ・・・こんな事をして誰が喜ぶってんだよ！」

「全部、ヨハンの為なの・・・だから邪魔しないでよ」

とても澄んだ少女の声、声色からしてまだ十代前半といったところか。声にはやはり何処か必死というか、切実な感情が聞き取れた。だが――

ドンッ！

「・・・っ！？」

「ふざけんなよ」

全身装甲の一機に向かって『Ａｎｎａ』を撃ち、装甲を削る。通すわけがない。やたら高威力のビームにブレード。そんなものを搭載した機体を四機もあの会場にさらに侵入を許したら、パニックどこ

ろの話ではなくなる。

「あそこは・・・新しい俺の居場所なんだ」

「黒瀬・・君」

あそこには一夏が居て、篠ノ野もオルコットも、青嶋も凰も・・・千冬さんもいる。学園の皆が居るんだ。皆が平穏にクラスマッチを見て、賑わって、それを楽しんでいるんだ。そんな状況にこんな化物はいらない。

「場違いなんだよ・・・お前らは」

あそこは戦場じゃない。学園なんだ。これからを生きる、ＩＳ乗り達があの場所にいるんだ。そんな場所にお前らを行かせるわけにはいかない。

「だからこの場所から消え失せろ・・・もしそうしないなら――」

山田先生から離れ、右手に握る『Ａｎｎａ』を向ける。あと何分持つかわからない。だがあの場所へと危害を加えるのなら・・・俺は全力で・・・

「俺はお前達を・・・破壊する！」

ギュンッ――――

「・・・っ！？」

終了した戦闘の再開の合図と言わんばかりに、俺は加速し、残りの

三機、内一機へと接近すると『Ａｎｎａ』を『収納』、『Ｖｉｃｔｏｒ』を二つに分けるとその機体の両肩へと振り下ろす。

ブシュッ！

「あっ！」

少女が声を上げるのと同時にＩＳの両腕が引き千切れ、再び紅い液体が壊れた蛇口の様に吐き出す。俺はそれを無視して、左手に持った短いほうの刃を顔面へと突き立て、柄を殴る。

バキッ！

刃が突き立てられ、砕ける音と共に顔面の装甲が割れ、俺の視界にとあるものが飛び込んできた。

それはパーツ。本来なら人間の頭が在るべき場所に敷き詰められているのは何重にも張り巡らされた機械だった。

「まさか・・・独立駆動（スタンド・アローン）が可能の自立起動兵器!?」

「なるほど、通りで血がオイル臭いわけだ」

憎々しげに吐き捨てる。七年前に技術的には開発され、事実上使用可能と言われていた兵器。そんなものがこんなところにあるなんていう事が信じられないと言った感じで山田先生は言葉を零した。

だが、俺の感情は驚きとは別の物で支配されていた。

「・・・クソッタレが」

心の中で沸々と湧き上がる黒い感情。それは憎悪。目の前にある兵器が許せない。あってはならない。蘇る光景。時間も来ていないのに現れる砂塵のフラッシュバック。向かって来る、あの時の敵。

「こんなもんを・・・まだ作ってやがるのか・・・」

目の前が真っ赤に染まる。ギリギリと砕けるほど歯を食いしばる。こんなものはこの世にあってはならない。

「スクラップ共が・・・全部バラバラにしてやるよ」

言うが早いか、右手に持った『Ｖｉｃｔｏｒ』が捉え、人形のレーザーブレードにぶつかる。

ジジジッ！

鍔迫り合いのまま、俺は人形を押していく。こちらの感情に応じるかのように、『黒天』の出力が上がっている。お前にもわかるのか、『黒天』。俺の怒りが・・・

「駄目っ！」

マントの少女が声を上げる。もう一機の人形は俺の側面に回り込むとビーム砲の銃口を光らせる。鍔迫り合いの状態を狙ったか・・・だが

「黒瀬君はやらせません！」

バシュンッ！

ビームが弾かれる音がする。俺と人形の間に入った山田先生が『拡張領域』に閉まってあった機体全体をカバーする様な大型シールド『グレート・ウォール』を『展開』していた。

「こちらの機体は私が引き受けます！黒瀬君はそっちを！」

「了解！」

山田先生の指示に返事をすると、スラスターの出力を上げる。まずはこのまま押し切って分断する。

「ウオオオオッ！」

一気に加速し、ある程度分断すると俺は相手を蹴り飛ばす。そして両手の武器を『Ａｎｎａ』と『Ｄａｌｉａ』にチェンジ。即座に引き金を引く。それに対して、相手も即座に体勢を立て直し、ビームで応戦。

ドンッ！　バシュンッ！　ガガガッ！

「デカイ割によく動く！」

乱射される実弾とビーム。高速で動きまわる俺と人形、どちらも決定打を与えられずに戦闘は進んで行く。さっきよりも格段に動きが良くなっている。まるで相手が戦闘中に成長している様な感覚さえ覚えて来るくらいだ。

「どんなＡＩしてやがるんだ！」

――ザンッ！

ぼやいていると、人形は射撃を止めて、スラスターを吹かすとこちらに接近。レーザーブレードで『Ｄａｌｉａ』を叩き斬る。

「クソッ・・・」

「きゃあっ！」

向こうから悲鳴が聞こえ、こちらに山田先生が飛んできた。俺はすぐさま人形から離れると、山田先生の元へと移動、彼女の背後で止まる。

「大丈夫ですか、山田先生・・・」

「はい・・・すみません、先生なのに足を引っ張っちゃって」

「無茶ないですよ・・・これじゃ」

残りは二機と一機。そのうち二機は戦闘初めより格段に強くなっている。二手に分かれてやるなんて無謀な事は出来ない。それに・・・

「黒瀬君、時間の方は――」

「まだ・・・でもそろそろですね」

そう、時間が近い。このままだと戦闘中に時間切れという、シャレにもならない事態が起こってしまう。そうなれば最悪、山田先生に襲いかかってしまうかもしれない。それだけは避けなければ。

「仕方ありません・・・一機ずつ各個撃破では間に合わないでしょう。二機同時に破壊します」

「二機同時ですか・・・でもどうやって」

「俺に策が在ります」

そう言うと俺は山田先生にプライベートチャンネルを開き、簡潔に作戦の内容を告げる。すると、山田先生は顔をしかめる。

「・・・策と呼べるんでしょうか、それは」

「確かにそうでないかもしれません、でもやるしかありませんよ」

「そうみたいですね・・・わかりました、その策で行きましょう」

俺と山田先生は頷き合うと、二機の人形を見る。親切にも待ってくれていた様で、こちらにターゲットをロックしたまま空中に浮遊している。

「さあて・・・行きますよ!」

「はいっ!」

返事をして、山田先生は横に飛び、俺は真っすぐ二機の人形へと向かう。すると二機は腕のビーム砲をこちらへと撃ち出す。

射撃(バシュンッ)　射撃(バシュンッ)　射撃(バシュンッ)　射撃(バシュンッ)

撃ち出されるビームの雨の中を俺は進む。ウィングに、腕に、足に、

胴体に、命中する度に痛みが走る。だが俺は加速を止める事は無い。ただまっすぐに、相手に向かって飛ぶ。そして、射程圏内に捉えた瞬間――

「捕まえたぞ！」

『瞬間加速』を発動、一機の人形へとタックルを喰らわせる。そしてそのまま加速を止める事無く進み、もう一機を捉える。

「ギギ・・・」

俺を見て機械音が鳴ると、人形は俺の射線から逃げようとする。だが逃がさない。俺達はその為に二人いるんだ。

ザシュッ！

「逃しません！」

人形の横腹に位置する部分から緑色のレーザーブレードが突き出す。刀身を長くすることで命中率を上げた山田先生の近接ブレード『メタス』だ。絶対防御が発動しないってことはやはりこの人形共、自身のエネルギーをほとんど攻撃に回してやがる。だからあんな二発で量産型とはいえ、『リヴァイヴ』のシールドエネルギーをほぼ全て削り取る様な馬鹿出力の兵器をぶっ放せるんだ。となればシールドエネルギーはほぼ皆無だ。

「オラァ！」

山田先生の貫いている人形へと速度の付いた状態でぶつかる。貫通した『メタス』がさらにもう一機の人形の胴体を貫通する。それを

見て、俺は人形から離れて、とある武装を『展開』する。

「行くぞ、狩りの魔王」

紅い粒子が俺の背から右肩へと集まり、形を成す。それは俺の『黒天』と同じ黒をベースにラインレッドを加えた色合いをしている。背中に形成されたショルダーパックと直結した、大型のキャノン砲。その名は『Ｓａｍｉｅｌ（ザミエル）』。狩りの魔王にふさわしい、『黒天』現段階最大威力のレーザー砲だ。

「離れろ、山田先生！」

俺の声に反応して、山田先生がブレードを手放し、離れる。その瞬間に俺は残ったエネルギーをほとんど『Ｓａｍｉｅｌ』へと回す。これで終わりだ、スクラップ共。二度と俺の前に姿を現すな。

「消え失せろおおおおおおっ！！」

キュィン・・・・・・ズバアアアアアアアアンッ！！

瞬間、全てを飲み込む真紅の閃光が人形達の上半身のほとんどを抉る様に消し飛ばし、貫通したそれは海上に着弾すると巨大な水柱と沸騰による蒸気を立ち上げる。

上半身を失った二機の人形は完全に機能を停止し、その水柱に呑まれながら海中へと没した。

「さすがですね、黒瀬君。完璧です」

「無茶させてすいません・・・」

「いいんですよ、私は先生なんですから」

『Ｓａｍｉｅｌ』を『収納』し、山田先生に言うといつもの頼りなさげな笑顔を向けてくれた。だが笑ってもいられない。

「・・・ならもうちょっと頑張りましょうか」

「そうですね・・・学園の為にも」

ガシャッ！

『Ａｎｎａ』と『ガルム』が『展開』され、マント付きの少女へと銃口が向けられる。俺も山田先生もほとんどシールドエネルギーは残っていない。だがそれでも、ここでこの少女を通すわけにはいかない。勝てる見込みなどほとんどない。だがそれでも、せめて少しでもシールドエネルギーを削って次に繋ぐくらいの働きをしなくては・・・

そう考えていた、その時――――

「・・・いやぁ」

弱々しく、か細い声が聞こえた。その声を発したのは目の前の少女。よく見るとマントで隠れた顔のところから雫が落ちている。あれはもしかして・・・

「・・・泣いてるのか？」

「ヨハンのお人形・・・ひっく・・・全部壊れ・・・ちゃった」

嗚咽混じりに聞こえて来る涙声に困惑を隠せない。あまりに不格好で、見ているこっちが痛々しくなるような純粋な声だった。

「やだ・・・ヤダ帰る！」

「な・・・帰るって――」

「こんなところ居たくない！皆、皆・・・私から人形を取り上げるんだ！そこのおっぱい眼鏡の所為だ！」

「お、おっぱ・・・！」

あまりにもストレートな言葉に羞恥のあまり顔を紅くする山田先生。というか、この娘は一体何を・・・

――ザ・・・ザー・・・・

「・・・？」

ふと、ノイズ交じりにとある光景が蘇る。それは明らかにこの場には似つかわしくない光景。いつも俺が見る様な殺伐とした光景ではなく、とても優しい光景。

金属の壁と白いベッド・・・そして笑顔で語りかけて来る・・・少女達。

――ギュンッ！

「今のは・・・って、おい待ちやがれ！」

奇妙なフラッシュバックに不信感を抱いた一瞬に少女は泣きながら身を翻すと、マントの中のスラスターを吹かしてこちらから離れて行く。くそ、早い。この速度で動いて追うとすると、すぐにエネルギー切れになっちまう。

「逃げられちゃいましたね・・・」

「はい・・・でも二人とも無事で良かったです」

「ええ、私も黒瀬君が無事でよか――」

言葉が途切れる。ハッとなり山田先生の方を見ると、『ラフーァル・リヴァイヴ』を纏ったまま海上へと落ちて行く。

「マジかよっ！」

すぐさま山田先生を追い、海上ギリギリでキャッチする。どうやら気絶している様で、顔色も真っ青だ。もしかして、さっきの戦闘で頭を・・・

「どうしてこんなタイミングで・・・グッ！」

気絶した山田先生の顔が歪む。しかもこんなところで時間が・・・クソッタレ！次から次へと面倒な！

「とにかく・・・早く戻らないと・・・！」

俺の事はいい。所詮、気絶しても休めば害はない。だが山田先生は違う。もしも変なところでも打っていたら・・・そんな最悪な想像

が浮かぶ。

「おい、山田先生・・・・しっかりしてくれよ！」

すぐさま、ＩＳ学園へと進路を取る。俺は誓ったんだ。あそこで新しく生きて行くって・・・それなのに・・・

前と同じ様な状況に・・・近くの誰かが死ぬなんて冗談じゃない！

「死ぬなよ、真耶！」

俺は抱き締めた山田先生の肩を強く握った。

EP12　人形（後書き）

はい、十二話終了。はいはい、龍頭（ｒｙ。本当に難しいなぁ、戦闘シーン。いろいろ参考にしてるんだけど一向にうまくなっている気がしない・・・（ｌωｌ；）。でもまあ、描きたいこと描けたしまあいいか（おいおい）。

次回はエピローグですね。どうなるんでしょうか、皆様ご期待ください。では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ１３　守りし笑顔（前書き）

オッシャー！十三話はじめっぞー！（　。　д。）ノ

今回はクラスマッチ編のエピローグってやつです。よく考えたらﾒはこっちですね、すみません。（＾ω＾；）

ＰＶがついに一万越え！こりゃあめでてぇや！緋星、大☆歓☆喜です！

そんなテンションを保ったまま、あとがきまで一直線だぜ！

というわけで、相も変わらずの駄文ですが、十三話をどうぞ！

EP13　守りし笑顔

眩しい、俺が抱いた第一印象はそれだった。

視界に広がるのは白い花。それも一つや二つじゃない。月に照らされた地平線を埋め尽くす様に咲き乱れ、俺の足元を埋めている。この花はユリだ。華に興味がある訳じゃないが、これくらいは知っている。

静かだ・・・およそ都会の喧騒とはかけ離れた情景。闇夜の月に照らし出されたこの場所は美しく、この世のどの景色よりも美しいのではないかと思ってしまうほどだった。

凝縮された美の世界。とても心地よく、ある種の安らぎを感じさせる。それはまるで揺り籠を連想させる様な気持ちだった。

でも、ここは何処だろう。これはいつも見る幻風景ではない。こんな美しい風景を今まで俺は見た事がない。

そして何故だろう。この景色はこんなにも美しいのに・・・どうしてこんなに物悲しくて、寂しいと感じるのだろう。

「それは君が抱く感情・・・つまりは君自信しかわからない事だよ」

不意に声がして振り向くと、『女性』が俺の目の前を掠めすぎた。その姿はとてもおぼろげで、不可思議。たとえるなら穴だらけの影絵の様。ボロボロの外套で全身を覆った姿は、ファンタジーの出てくる魔術師を連想させる。

「やあ、また逢えたね」

また・・・逢えた?

「俺の知り合いに君みたいな奴はいなかったと思うけど?」

「それは困る。君は私を知り、そして私は君を知っている。それは知らないのではなく、覚えていないだけだよ」

『女性』から小さな笑い声が零れる。良く見ると、頭の位置するところに顔は有り、世にも美しい笑みを浮かべている。不思議とその笑みに懐かしさを感じた。

「寂しくは無かったかい?ずいぶんと長い間、一人にしてしまった。私を怨んでいるだろう?」

「寂しいも何も・・・まあ、この場所に一人でいるのがちょっとあれだったくらいで・・・」

「そうか、それはすまない・・・だがもう寂しい思いはさせないよ、これからは一緒だ」

「・・・ああ」

頷きながら、心の中で首を傾げる。この『女性』は一体何者だろうか。彼女を見ているとひどく懐かしい感情に駆られる。まるで旧知の親友・・・もしくは恋人に再会した様な感じだ。

「それで、謝罪の後に頼みごとをするというのも、些か恥知らずな話なんだが・・・」

「ああ、なんだ」

「君に・・・触れてもいいだろうか？」

「・・・は？」

いきなり素っ頓狂なお願いに俺は唖然となった。訊き間違いではないかとも思ったが、影から見える彼女の表情は相変わらず薄い笑いを浮かべており、真剣なのかそうでないのか、差し図る事は出来ない。

「どうだろうか？」

「別に・・・構わないけど」

「そうか・・・では失礼」

了承すると、『女性』はスッと音もなく近付くと右手を差し出し、俺の頬へ触れる。そして息がかかる距離で俺へと囁きかける。

「やはり君は美しく、強い。昔と幾分変わらない・・・君に勝る者を私は未だに見た事がないよ」

「な、何言ってるんだ・・・そんな事ない」

ストレートな褒め言葉に少し戸惑ってしまう。普通なら軽くあしらうくらいで終わるのだが彼女にはどうしてもそれが出来なかった。何故だろう、わからない。わからないが心が言っている。彼女に嘘やまやかしは通用しない、と。

「そんな事思ってないし、誰も言わないだろ」

「然り――それ故にだよ」

そう言うと、彼女の表情から笑みが消え、眼を細める。

「昔、誰もが君を恐れ、憎み、直視を躊躇い、忌避を選んだ。何故か――それは君の美しさに・・・君の強さに絶望し、己の矮小さを認めたくないがためだよ。人は理解不能なものを悪と呼び、恐怖するように出来ている。くだらん。実にくだらんね。そんな保身や虚栄を大義に、いったいどれだけの輝きが失われてきたと思うかね。それは私の最も嫌う行為だよ」

その言葉には確かな呆れと微かな怒りを読み取れた。そして

「君の同志以外はね」

と、付けたして笑みを戻す。ここで確信する、この人物は俺の過去を知っていると言う事・・・それも知られたくはない秘密を知っているということを。

「ただ、私は君の同志達には憎まれている様だ・・・全く皮肉なものだよ、同じ様な想いを君に抱いているというのに」

「あんた・・・何者なんだ?何故俺の過去を知ってる?」

問い掛けるが彼女は答えずに、微笑むと俺からゆっくりと身体を離した。

「我らが英雄、真実の奇跡、運命の人――私は君を信仰し、彼女らもまた似た様な思いを持っている。故にこのオペラの主役となるのは・・・君だ」

「オペラの主役？」

「そうだとも、君こそがこの世界（オペラ）の主役だ・・・それを演じようとするのなら、私は力を貸そう。どうするかね・・・君が望むのであれば、私はあの月ですら堕とす覚悟があるのだが・・・」

やけに仰々しく喋る『女性』の言葉に俺は飲み込まれる様にして、聞いていた。そしてそれと同時に不安感を覚え始める。この人物は一体何を言っているのかは分からない。だが一つ、頭の中で理解している事が在る。

・・・この人物は――

「どうかね、君はこの世界の主役を演じるか？」

「分からない・・・少なくとも今はまだ――」

「今はまだ答えが出ない、か・・・答えを急ぎ過ぎたかな」

『女性』がそう言うと、風が吹き、白い花弁が舞って俺の顔に吹き付けると、俺は気付いた。さっきまで真上にあった月が西へと沈み始め、空が白んできている。

「・・・朝？」

「どうやら時間の様だ。口惜しいが、私はここで消えさせて貰おう」

「ま、待ってくれ！」

日が上がるにつれて消えて行く彼女を俺は呼び止める。

「名前を教えてくれないか？」

「ああ、いいとも」

影絵はゆらゆらと揺れて、まるで存在そのものが笑っているようだった。そんな彼女を見ながら、俺は耳を傾ける。

「恥ずかしながら私には名がない。だが過去に君が付けてくれた名前が有り、私はそれ以来その名で自身を示している」

「その名前は？」

「許されざる光、メフィスト・フェレス・・・君の番いだ」

名を告げると同時に日は上がり、俺の視界を全て飲み込んで行くのだった。

・

「・・・・・あ？」

光が明けたと思い、瞳を開けると視界には白い天井が見えた。なんとも見覚えのある光景だ。四月ごろにもこの天井を見た気がする。

そう、それはクラス代表選が終わった後だったはずだ。

「保健室か・・・」

ゲンナリと呟く。まさか一カ月に一回のペースでここのお世話になるとは思わなかった。俺ってもっと健康男児だったはずなんだけどな。

「しかし・・・今のは一体・・・」

ギュッ――――

「うん？」

先ほどの光景を思い返そうとした時、不意に左手を握られる感触がしてそちらを向く。そこにはブラウン色の髪をした我が妹の姿が在った。

「奏？」

「すー・・・すー・・・」

何故か奏は保健室の丸椅子に座り、俺の左手を握ったまま寝息を立てていた・・・というか、待て。何故俺は保健室にいて、どうして奏がここにいるんだ？

「起きたか？」

シャッとカーテンが開かれて、千冬さんが現れた。せめて確認を取ってから開けて欲しいものだ。

「千冬さん・・・俺、一体どうしたんですか？」

「覚えてないか・・・まあ、こっちに着いた途端に気絶したから無理もないか」

気絶・・・そんでもってそれより前の行動内容をあんまり覚えてないってことは・・・

「・・・俺、またやりましたか？」

「人形退治を終えた後、単に時間切れで気絶しただけだ。暴れてはいない」

「人形・・・ああ」

近くにあったパイプ椅子に座りながら言われ、俺は頭を押さえる。思い出してきた。確か先生に呼ばれて、未確認ＩＳを倒しに行ったらそれが自立起動兵器で・・・

「そうだ、山田先生は？」

そう訊くと千冬さんは無言で隣のベッドのカーテンを開ける。するとそこには額に包帯を巻いた山田先生の安らかな寝顔が見て取れた。

「軽い脳震盪だ。お前より早く目が覚めて、やたらと心配してたぞ」

「そうですか・・・一夏達は」

「織斑と凰はオルコットと協力して人形を破壊した。皆無事だから

少しは落ち着け」

千冬さんにそう言われ、安堵の息を吐くと一気に身体から緊張が抜けて行く。よかった、本当に。山田先生に死なれてしまったら、俺は自分を責めても責めきれないだろう。

「とにかく、皆無事でよかった・・・」

「おや、私の心配はしてくれないのか？」

「え？」

声が聞こえ、顔を上げると目の前にあるベッドを囲むカーテンが開いて、イリア先生が現れる。

「やあ、黒瀬君」

「イリア先生、いつからそこに？」

「さっきからいたよ。心配されないし、その上気付かれもしないなんてな・・・そんなに影薄いか？織斑先生」

「自分から隠れて置いてそれを言いますか、ブルシロフスカヤ先生」

横目で睨まれ、イリア先生は軽く笑いを返す。なんというか、掴めない先生だな・・・

「要人達にも感づかれる事もなく終わった。結果だけ言えば完璧に近い」

「そうですね・・・」

「ただ気になる点が在る」

「奴らが何処から来たのか・・・ってことですか？」

千冬さんは頷く。だろうな、俺達の接触したあのＩＳは明らかに今あらゆる国家に配属されているＩＳとは違うものだし、何処かの国の新型だとしても絶対防御を取り除いた機体なんてものがあっていいはずがない。

「新型でもないだろうし・・・破壊した機体から何か出なかったんですか？」

「でたよ」

「え？」

イリア先生の口から出たちょっと予想外のセリフに俺は声を上げる。てっきりプロテクトとかかかってて何の情報も得られなかったのかと思っていた。

「じゃあそれを元に色々調べれば出るんじゃ」

「いや、出たのは出たんだが・・・」

「零司、これを見てくれ」

そう言われ、俺は千冬さんの差し出した物を受け取る。それは様々な数式と図形、そして文字が描かれた紙をクリップでまとめた書類

であり、ざっと見ても二十枚くらいある。

「なんですか？数学の宿題？」

「あの人形から出てきた情報だ。元は暗号化されていたが、奏君が解析して、ブルシロフスカヤ先生がまとめたものだ」

「デスクワークは私の管轄じゃないから見辛いかもしれないが勘弁してくれ」

「いや、見辛いも何も・・・」

正直、描いてある文字は読めるが数式や図形に関してはチンプンカンプンだ。しかも文字だってただ読めるってだけで内容を理解する事なんて出来ないほどカオスな文章だし。まるで千冬さんの部屋だ。

パシッ

「・・・なんで叩くんですか？」

「自分の胸に手を当ててよく考えてみろ」

ジロリと睨まれ、俺は軽く叩かれた頭を掻きながら肩をすくめて書類を返す。

「で、どうだい黒瀬君。何かわかったか？」

「意味不明ですよ。数式や図形はともかくとしても、文章まで良く分かりませんよ」

「ふむ、やっぱり駄目か・・・だとすると本当にその書類は迷宮入りかねぇ」

「奏に解かせてみればどうですか？」

奏なら俺達にもわからない事をサラッと理解不可能な言葉で解析し、良く分からない理論に基づいて解いてくれるんじゃないだろうか。我ながら名案だと思うんだがね。

「・・・黒瀬妹君か」

「それが出来たら苦労は無かったんだがな」

だがこの名案に女性教師二人は表情を曇らせる。何か問題でもあるのだろうか？

「実はな、奏君でもそれに関してはわからないと言ったんだ」

「奏が？」

ああ、と小さく頷く千冬さん。あの奏がわからないというなんて・・・少々信じられない。だが真実だとすれば、今この書類を解析できる人間は可能性的に篠ノ乃束以外に思い当たらない

「もしかして・・・」

「いや、あいつではないだろう。今のところこちらにこの様な事をする理由もない・・・それに何よりも、こんな強引なやり方はあいつらしくない。やるならもっとスマートにやるだろう」

「完璧にして十全でなければ意味がない・・・ですか」

「そういうことだ」

だとすれば、一体誰がこんなプログラムを入れるのだろうか。それに何故、このＩＳ学園に攻め入るのだろうか。

「ま、どうにしろ私達じゃあこの書類はただの紙の束でしかないってことだね・・・」

「すいません、お役に立てずに」

「君が謝る事じゃないよ。むしろこういうのは私達がどうにかしなくちゃならないんだから、頭下げなきゃなんないのはこっちの方だ」

頭を下げるとイリア先生は苦笑を浮かべる。だがわからないでは済まされないと思っているのか、彼女の眼は笑みを浮かべてはいない。そう、わからないでは済まされないのだ。今回、襲撃してきた相手がまた襲撃してこないとは限らない。早々に手を打つか、その準備を少しでもしなければならない。それなのに相手の素姓どころか、回収した機体からすら何の情報も得られないとなると、あまり良い状況ではない。内心、結構焦っているのかもしれない。

「イリア先生・・・」

「そんな顔するんじゃない。良い男が台無しだぞ」

顔に出ていたのか、イリア先生はそう言うとクスッと小さく笑う。

「それにそんな顔、私ばっかりに向けてくれるな。周りから嫉妬さ

れる・・・なあ、織斑先生」

「いちいち私に絡まないでくれませんか？」

「年上をそう睨まんでくれよ・・・怖い怖い」

笑うイリア先生を何処か怒った表情で睨む千冬さん。はて、今千冬さんが怒る様な要因があっただろうか。良く分からん。

「・・・なんだ、零司」

「あ、いえ・・・なんでもありません」

俺まで睨まないでくださいよ。まるで俺が悪いみたいじゃないですか・・・

「ふん、まあいい・・・あと一つ、お前に聞いて起きた事が在る」

「なんですか？」

「Ｖｅｒｗｅｉｌｅ　ｄｏｃｈ．　Ｄｕ　ｂｉｓｔ　ｓｏ　ｓｃｈ？ｎ」

「・・・え？」

千冬さんの言葉を聞いた瞬間、俺は妙な感覚に囚われる。

Ｖｅｒｗｅｉｌｅ　ｄｏｃｈ．　Ｄｕ　ｂｉｓｔ　ｓｏ　ｓｃｈ？ｎ・・・それはドイツ語であり、何処か懐かしく、頭の奥底に響く様なフレーズ。そして先ほどの光景が・・・夢の光景が頭の中でフ

ラッシュバックする。そして聞こえて来る、あの女性の声――

――――――時よ止まれ、お前は美しい

「この言葉に聞き覚えは・・・零司？」

「は、はい・・・」

ハッと我に返ると、少し焦りの色が見える千冬さんとイリア先生がこちらを見ていた。今のは何だ。あの女性は夢で出てきただけなのに、なんで今夢に見なかったセリフを吐いたんだ？そう言えば彼女は言っていた。知らないのではなく・・・忘れてるだけだと・・・

「千冬さん、メフィストって女・・・知りませんか？」

「知らん、聞いたこともないが・・・」

「そう・・・ですか」

千冬さんは本当に知らないようだ。だとすると、千冬さんが俺と居なかった時期に会った人だとでも言うのか・・・だけど・・・だとすると・・・

――あの頃に・・・出会ったとでも――

「大丈夫か、黒瀬君。顔が真っ青だが・・・」

「大丈夫・・です」

その考えから思考を振り切る。そんなことはない、あの時俺が一緒にいたのはあいつらだけだ。他に誰かいたなんてことあり得ない。考え過ぎだろう。

「・・・織斑先生、質問はこれくらいにしておこう。黒瀬君も目覚めたばかりだ」

「そうですね・・・零司、歩けるなら部屋に戻ってゆっくり休め。ここより、自室の方が休まるだろう」

「はい、わかりました」

返事をすると、千冬さんは無表情にイリア先生は手を振って保健室から出て行った。それを見届けると身体を倒し、全身をベッドに預ける。

「・・・皆無事か・・・」

呟き、その言葉に確かな嬉しさを感じる。誰も欠ける事もなく、この場所の何処かにいる。その事が嬉しいのだ。

「今度はちゃんと守れた・・よな？」

一度は手に入れる事を諦めかけた平凡な日常。

――ガラッ

「零司！目が覚めたって！？」

「黒瀬さん！無事ですか！？」

「外で戦闘があったというのは本当ですの！？」

「ちょっと黒瀬！あんた、奏泣かせたら承知しないわよ！」

「お前ら・・・」

保健室の扉が開き、一夏と篠ノ乃、オルコットと凰が入ってくると、そろって俺のベッドに押し掛けて来る。騒がしいな、ここは保健室だぞ。もうちょっと静かにしなさい。寝てる人もいるんだから。

「あふ・・・なんですかぁ、騒がしいですね・・・」

「あ、山田先生」

「はい、私は山田先生ですよ・・・あれ？皆さん、なんでここに？」

そう言って一夏達を見回し、山田先生の寝ボケ眼に俺の顔が止まる。すると一瞬で目が覚めたのか、いきなり慌てふためき始めた。

「く、黒瀬君！？大丈夫なんですか！？怪我はありませんか！？」

「大丈夫ですよ・・まあ、身体中が痛みますが」

「そ、そんな・・・先生の私が付いていながら・・・ああ」

ガーンといった風に肩を落とす山田先生を見て、俺は少し笑ってしまう。本当に責任感強いな。大丈夫だって言ってるのに・・・この人は。

「ごめんなさい、黒瀬君・・・」

「俺の方こそ、護るなんて大層な事を言っておいてこんなザマになってしまって」

「い、いえっ！そんなことないですよ！」

「・・・山田先生」

「はい？」

「今度戦う時は・・・その時こそ、あなたを全力で護りますから・・・絶対に」

そう宣言すると山田先生の顔がボッと一瞬で紅くなる。まるで茹で上げられたタコの様に、これでもかというくらいに。

「そ、そんな・・・こ、こんなタイミングでそんな・・・ゆ、夕焼けの保健室というのはとってもロマンチックですけど・・・でも、私達は教師と生徒ですし・・・あ、別に護ってもらいたくないとか、そう言う事ではなくてですね！」

おおう、何やら変な方向に暴走を始めてしまったぞ。熱暴走か？あれは厄介だ。何より回復までやたら時間がかかる。対戦でやったあかつきには死を待つしかできなくなるぞ。皆、エネルギーには常に目を配ろう、ドミナントとの約束だ。

「ちょっと、あんた何堂々と教師ナンパしてるのよ！」

「は?何を言ってるんだ、凰。俺は別にそんなこと――」

「いや、零司。今のは殺し文句過ぎるぜ・・・」

「一夏、お前に言われると無性に腹が立つのは何故だろう」

そう言いながら、俺は一夏と凰を見る。こうして肩並べてるって事は、ちゃんと仲直りしたんだな。人形との戦いで何かあったのだろう。良き事かな良き事かな。

「ともかく、無事でよかったです」

「そうですわね、やられてしまってはリベンジ出来ませんもの」

「そんなこと言ってさ、結構心配してたくせに」

「なっ!?り、凛さん、一体何を言いますの!」

ホッと肩を撫で下ろす篠ノ乃と凰に喰ってかかるオルコット。皆が笑ってる、こうしてこの場所にいる。そしてそこには、俺がいる。こんなに温かく、こんな嬉しい事が在るだろうか。

「皆・・・」

なんだという様な視線がこちらに向く。俺は今表せる感謝の意を言葉に乗せて、紡ぐ。

「無事でいてくれて・・・ありがとう」

言うと皆がポカンとした顔でこちらを見た後、

「そりゃこっちのセリフだよ」

と一夏は笑い、

「まったくだ」

と篠ノ乃が少し怒り、

「それよりも、自分の事を気にしたらどうですの？」

とオルコットが呆れ、

「そんな風に礼を言われると・・・なんかくすぐったいわね」

凰が頬を掻いている。

皆の言葉一つ一つが、俺がこの場にいるという実感をくれる。優しさが俺の心を揺らしていく。そして俺は再確認する。俺はなんて幸せなんだ、と。

「う、ううん・・・」

「あ、奏・・・」

眠たそうな声が左側から聞こえ、そちらに向く。騒がしさに目を覚ましたのか、奏が眠そうに目を擦っていた。

「皆さん・・・それに・・・あ」

「おはよう、奏」

優しく笑みながら、奏に挨拶を送る。すると少しの間、奏は虚を突かれた様な顔をしていたが、クシャッと表情を崩す。

「・・・お兄ちゃんっ！」

自立起動兵器、謎のプログラム、そしてメフィスト・フェレス。まだ分からない事が多いが、とりあえず今はこの嬉しさを噛み締めよう。目に前にある大切なものを抱き締めよう。それぐらいは、許してもらえるだろうから。

・

学園地下五十メートル。そこには隠された空間が在った。レベル４権限を持つ者、つまり教師陣でも持っているものは少ないとされる権限を持つ者にしか入れない。その場には四機の無人型ＩＳが並べられ、解析作業が行われていた。

そこに、揺らぐ紫煙があった。

「なんだか、黒瀬君とずいぶんと仲良さそうじゃないか」

その空間で煙草を咥えながら椅子に座り、電子キーボードを叩くイリアは浮かび上がる様々な記号を眺める千冬にそう問いかける。すると少し鬱陶しそうに返答する。

「・・・そう見えますか」

「ああ、そうだね。なんというかツーカーな感じで、私だけ置いてけぼりな感じだったし・・・ちょっと悔しかったな」

「そうですか」

短く返し、会話はあまりしない。正直、千冬はこの教師の事が苦手だった。決して嫌っているわけではないのだが、少なくともあまり関わりたくはないと思っている。しかし相手はこうして何かとこちらに絡んでくる。

「そういえば名前も呼んでたし・・・どういう関係なのかって気になるんだな」

「私とあいつがどのような関係でも、あなたには関係ないのではないでしょうか」

「無くはないよ。黒瀬君は大事な後輩の、真耶の教え子なんだからね・・・・って――」

そんな事を言っていると、キーボードに直結している大型ディスプレイが暗転し、最初に画面まで強制的に戻される。それを見て、イリアは重々しくため息を吐く。

「・・・これは正直、解析不可能で間違いないな。これだけやっても、結果は何一つ出ないんだから」

「機体の破損状況も悪い・・・無理もないでしょう」

一機は胸部を貫かれ、一機は両腕と頭部破損、そして残りの二機は

上半身の大部分が消滅している。

「コアとれたのも腕切り落とされた奴と織斑君達が落とした奴だけだったからな・・・」

「残りの一機はコアどころの話でないですからね」

そう言って、千冬が横に積まれた金属の塊を見る。良く見るとその金属はこの無人機達に使われたものと同じである。しかし、その形は明らかに変形しており、傍から見たら十人中十人が金属ゴミだと見間違うだろう。

「反省はしてるよ・・・ちょっと壊し過ぎた」

そう肩をすくめるイリアを千冬は睨む。

（壊し過ぎたか・・・一撃でこれだというのにな）

異質なまでの強さ。おそらくこの学園の教師の中でも、トップクラスの実力を持つであろう、イリア・ブルシロフスキカヤの力の餌食となった者の末路がそこにはあった。

「そう怒るな、シワが増えるぞ二十四歳」

「怒ってなどいません・・・手に入った情報は一つだけですか」

「ああ、こいつらの名称だけだな」

ディスプレイが移り変わり、回収された球体状のコアを映し出す。そこにはＰｕｐｐｅと記されている。

「『プッペ』・・・ドイツ語で『人形』だな」

「ドイツか・・・」

「心当たりでも？」

「いえ・・・」

そう返事をするも、千冬の内心では黒い影がよぎっていた。もしも、自分の予想通りならば、単なる学園に対する襲撃では済まされない事となるかもしれない。

「今はまだ・・・なんとも」

「そうか・・・」

二人の女性教師・・・いや、二人のＩＳ乗りはディスプレイを睨みつける。その瞳は紛れもなく、歴戦の勇士の瞳であった。

EP13　守りし笑顔（後書き）

どうでしたか？お楽しみいただけたら幸いです。（＾ω＾）

なんだかヤマヤマとも仲良くなれたみたいです。どうも黒瀬君は年上の女性に縁があるようですね。もげてしまえ。（＾ω＾＃）

ＰＶ一万突破。この情報を見たときはパソコンの前で叫んでしまいました。こんなに数多くの人が私の作品を見てくれるなんて・・・こんなに嬉しいことは本当に久しぶりです。しかし、それと同時に見ている人に詰まらないと思われない文章を描けるようにしなくてはいけないというプレッシャーも感じています。ですが、それも今後の励みとして受け取り、文章力の強化に励みたいと思います。

なんだか上がりきったテンションで描いているので、何書いてるか自分でもわからなくなってきました（＾ω＾；）。でも嬉しいのは確かです。読者の皆様、本当にありがとうございます！これからも、『もう一つの翼』をどうかよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

次の話は二巻に入らず、オリストで行きます。それでは次話でまたお会いしましょう！

では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ１４　とある日曜日の話（前書き）

俺達の夏は終わらない・・・・

十四話です。今回はオリストということなのですが、正直グダグダとやたら長くなってしまっただけの話です。そこまで重要性が何ので、案外飛ばしてもいいくらいかも・・・「これだけ遅くなっておいてこれかよ・・・」とかは無しの方向で（―ω―；）読まれる方は駄文ですが、どうぞ。

お気に入り登録が１００超えました！びっくりです！読者の皆さま、本当にありがとうございます！目指せ、１０００登録！／（＾ω＾）ノ

EP１４　とある日曜日の話

五月の終わり。それは夏という季節へと足を掛ける時期であり、学園生活を始めたばかりの一年生にとっては中学生から高校への準備期間が終了し、学園にも慣れ始めた頃に当たるのだろう。

だけどぶっちゃけ、一年生と言っても年齢的には三年生な俺は特に勉学に苦労する事もなく、奏も束さんの所に帰ってしまった。結果、そんな時期でも結構暇を持て余している俺はこの時期でもいつも通り生活していた。

ただし、今俺がいるのは一夏の部屋ではない。

「どらどら・・・」

パクッ・・・

「ど、どうでしょうか？」

モグモグ・・・・

「う～ん、お前は面白いものを作るね、篠ノ乃」

ここは調理室、普段なら料理部のみが使用している場所である。普段なら自分から足を踏み入れる事は絶対にないであろうそんな場所で、俺は割烹着を着込んだ篠ノ乃が作ったチャーハンを咀嚼しながらなんとも微妙な顔をしてしまう。

「面白いものですか？」

「このチャーハン、味がないぞ」

「そ、そんな馬鹿なっ！？」

パクッ・・・モグモグ・・・

「・・・味がない」

「だから言っただろうに」

「くっ・・・」

ガクッと膝をつく篠ノ乃。俺もさすがにこれは行けるんじゃないかと思ったんだがね。だって色合いはちゃんとしてるし、ゴマ油で炒めた旨そうな匂いもあるんだ。でも逆にこれだけの見た目で味がないってのは、ある意味奇跡に近い。

「失敗か・・・はぁ」

「ほらほら、落ち込んでる暇があったらもう一回だ。もしかしたらメニューがお前向きじゃなかっただけなのかもしれないし。時間と俺の胃袋は無限じゃないんだぞ・・・それにしても不思議だな、これ」

篠ノ乃背中を押して、一夏攻略同盟の俺達は部屋にあるコンロへと向かう。

それはいつものと変わらない、とある日曜日。事の始まりは数時間前に遡る。

・

「アップキープ、ドロー・・・〈沼〉プレイ、〈暗黒の儀式〉、〈惑乱の死霊〉をプレイ。ターンエンド」

「A定食かよ・・・〈山〉プレイ、エンド」

「スーサイド的には〈山〉出された時点で結構絶望的なんだぞ・・・〈沼〉、アタック」

「スタック、〈稲妻〉」

「戦闘ステップ終了、第二メインに再び〈暗黒の儀式〉、四マナで〈ファイレクシアの抹消者〉をプレイ」

「どぶんじゃねえか、どういうことだ・・・抹殺者じゃないのか？」

「ステロ相手にそんなリスクの塊出せるか」

そう言うと心底嫌そうな顔をする一夏。やる事もなく、暇を持て余していた俺と一夏は古き良きカードゲームをプレイしていた。いやぁ、まさか一夏がＭＴＧプレイヤーだったとは思わんかった。しかもステロ使い。このリスキーな戦い、久しぶりに燃える。こんな戦いにこの暇な日曜日を使えるとは有意義有意義。ビバ、暇な日曜日。

「〈森〉、〈野生のナカティル〉と〈密林の猿人〉プレイ、エンド」

「〈沼〉、〈死の印〉で猿を殺す・・・一夏」

「なんだよ？」

「最近、どうだ？」

「どうだって？」

「篠ノ乃から聞いたぞ、やたら訓練に熱心だってな」

例の人形襲撃事件により、クラスマッチが事実上中止となってから、一夏はやたら練習に生を出すようになっていたらしい。人形との戦いで勝利の実感を得たのか、それとも力の足りなさを悔いているのか。それは俺にはわからないが、練習に凰も加わってか、徐々に頭角を現している様にも見える。

「箒がそんなこと言ってたのか？」

「ああ、彼女はお前の事良く見てるからな」

それは他の二人にもいえることだろうが、あえて伏せておく。許せよオルコット、凰。残念ながら俺は篠ノ乃の味方だ。

「で、どうなんだよ」

「実際、訓練に力入れてるのは事実だ。前回の事件だって、俺一人じゃどうにもできなかっただろうし、実力不足だって事は前々からわかってた事だしな」

「なるほど」

「それにさ・・・なんか女子に負けっぱなしっていうのもな」

「この女尊男卑の世界でそれを言うか」

「俺は古き良き日本人なんだよ。それに実際、お前はセシリアに勝ってるだろ」

「む・・・」

それは・・・そうなのだが、あれはまた別だろう。大体、俺は素人じゃないし・・・って、ここで言っても意味ないというか、隠してるんだから言ってどうするっていうか。

「だから、今は早く腕を上げてセシリアや鈴に勝ちたいんだよ・・・ある意味、お前が目標なんだぜ？」

「俺が目標ね・・・」

目標、そう言われるのは初めてだ。なんだかちょっとこそばゆい・・・

「俺なんか目標にしたって、良い事ないぞ？」

「そんなことないって、千冬姉だって零司の事認めてるんだ。千冬姉があんだけ他人を認める事なんてそうそう無いと思うぞ」

千冬さんか・・・認められてんのかね。それなりに弟子として恥ずかしくない様にはしているつもりだが、認められているのかと言われれば話は別だ。

「どうなんだかねぇ・・・」

昔、大切な弟子だと言われた経験はあったが・・・ううむ、どう見ていいのかわからん。時々、優しい時があったけど・・・ううむ。

「・・・そういえば、零司」

「・・・なんだ？」

「お前って、千冬姉とはどんな関係なんだ？」

「・・・なんだよ藪から棒に」

カードを下に置き、前を見ると訝しげな顔をした一夏がいた。

「いや零司ってさ、結構千冬姉と仲良いよな。だから何処で知り合ったのかってさ・・・」

「ついでにどんな関係なのかってのも気になったのか・・・」

「そんな感じだ・・・で、どうなんだよ」

う～む、なんと答えるべきか・・・

「俺と千冬さんは」

「ああ・・・」

「実は姉弟なんだ・・・」

「・・・は？」

「そう、実は俺はお前のお兄ちゃんだったんだよ！」

「ナ、ナンダッテーッ！」

「・・・なんてふざけた答えじゃ納得しないよな」

「当り前だ・・・というか、そんな答えを出そうとしてたのか？」

「冗談だって・・・冗談・・・さてと」

真剣にどう答えればいいのか困る。どういう関係か・・・どう説明したらいいんだろうか。師弟ってのはＮＧだろうし・・・かといってただの知り合いで済ませられるようなほど親しげに話しちゃってるしな・・・今更ながら転校早々『千冬さん』ってのはやり過ぎだったか・・・

「俺と千冬さんは・・・」

――――プルルルッ

質問に答えようとした瞬間、枕元に置いてあった携帯電話が鳴った。

「すまん、ちょっと」

「ああ」

一夏へと断りを入れて、携帯を取る。着信画面には知らない電話番号が記されている。一体誰だ?

「はい、もしもし」

『黒瀬さんですか?』

「その声は・・・篠ノ乃?」

携帯電話の向こう側から聞こえてきたのは篠ノ乃箒の声だった。何とも微妙なタイミングで掛けて来てくれた。

「やあ、こんにちは。お前が俺の携帯に電話をかけて来るとは思ってもみなかったよ」

『そうですか?』

「ああ、だって俺はお前に電話番号を教えた覚えがないんだが?」

『それは・・その』

何故かゴニョゴニョと言葉を濁す。まあ、大方青嶋辺りにでも聞いたんだろう。なんだかんだで、一組のクラスメイトの大半の電話番号とアドレスは交換した。しかしせめて俺に一言くらい言ってほしいものだ。

「ま、ボッチじゃなかったんだな・・・安心した」

『ボッチ？』

「いや、なんでも・・・で、何の用だ？」

『・・・一夏の事でちょっと相談が』

「ん、じゃあ場所を指定してくれ・・・今は一夏が側に居る」

「俺がどうしたって？」

なんでもないと言い、シッシッと手で一夏を払う。

『・・では私の部屋で、相部屋の相手は今部活に出ていますので』

「了解」

短く返事をするとあちら側から電話が切れた。俺は送られてきた電話番号を電話帳に登録しながら、一夏へと言う。

「一夏、ちょっと用事が出来た。ちょっと出でくる」

「あ、おい。俺の質問は――」

「後で応えてやるよ」

適当に返し、俺が篠ノ乃の部屋に行くっていうのは変な噂が立てられないだろうかなんて事を考えながら、俺は自室を後にした。

・

「どうぞ」

「ありがとさん」

部屋を出て数分後、篠ノ乃の部屋に来た俺は椅子の上に胡坐をかきながら、片手に緑茶、片手に醤油煎餅という待遇のもとで篠ノ乃の相談を受けていた。どうでもいいが、部屋にいる時は和服着てるんだな・・・なんか凄い似合ってるぞ。

「それで、相談って言うのは何だ？」

「はい、それが――」

俺が問うと篠ノ乃は話し始める。自分が専用機持ちで無い為に、あの人形との戦いで加勢する事が出来なかったこと。そして訓練でも、ほか二人と比べて自分が一段階低いレベルにいて、訓練でも一夏に対して良い訓練になっていないのではないかという事、そしてこのままでは自分の届かない所へ行ってしまうのではないかという、篠ノ乃なりの悩みを打ち明けてくれた。

「なるほど・・・つまりここでその間を埋められる様な挽回の策が欲しいと」

「はい・・・それで黒瀬さんに相談というか、質問なのですが」

「質問？」

そう訊き返すと篠ノ乃は緑茶を啜り、一息入れて続ける。

「黒瀬さん、男性は女性のどういうところに惹かれると思いますか？」

「どういうところに惹かれるか・・・か」

そう言われ、顎に手を当てて考える。惹かれる女性と聞かれても、俺は今までそういう考えは持ち合わせた事がなかった。好きになる相手には問答無用に好きになるものだ、それが俺の恋愛の考えなんだが・・・それじゃあ答えにならないしなあ・・・何か適当に答えておくか。

「う～ん・・・家庭的な女性かね」

「家庭的な・・・ですか？」

「おう、料理洗濯家事万能。毎朝俺の味噌汁作ってくれる、そんな感じのお淑やかな家庭的な和服美人が俺の好みです」

ちなみに後半は目の前の篠ノ乃が和服を着ていたから。正直、本当の好みは自分でもわからん。

「そうなのですか・・・」

何故か篠ノ乃は少し驚いた様な顔をしていた。なんだその顔は。

「なんだよ、あんまり納得してないって顔だな」

「いえ・・・黒瀬さんは織斑先生の様な人が好みなんじゃないかと

思っていましたから」

「ブッ！」

いきなり向けられた言葉に飲んでいた緑茶を吹いてしまった。

「だ、大丈夫ですか！？」

「ゲホッゲホッ！い、いきなり何を言い出すんだ・・・」

すいません、と頭を下げる篠ノ乃。まったく、なんで俺の好みが千冬さんなんだよ。そりゃ、あの人は美人だし、スタイルも良い。憧れはある。綺麗だと思ったこともあるさ。だがそれは強さから来るものであって、女性として千冬さんを見ていた事は無い。というか、どうしてどいつもこいつも俺と千冬さんの仲を勘ぐるのだろうか・・・

「・・・というか、俺の好みをきいてどうすんの。気になるのは一夏の方だろう」

「参考にしようと思っただけです・・・ですが、やはり家庭的な女性というのは」

「まあ、魅力的じゃないのか？手作り弁当なんてかなり効果的だと思うぞ」

「手作り弁当・・・」

結構適当な事を言ったつもりだったが、篠ノ乃の表情が引き攣った。この表情から察するに、篠ノ乃はあんまり料理が得意でなさそうだ。

それは不味いな。凰とかは酢豚の件が在るからそれなりに料理は上手いだろうし、オルコットは知らんが甘いＢＬＴサンドを作る様なベタなお嬢様スキルを所有している事は無いだろう。

「料理とかした事はないのか？」

「・・・あまり得意ではないです」

苦々しい顔で言う。おそらく家庭的な事をやるよりも剣道とかに身を入れていたんだろう。それ以上にこの女尊男卑の世界じゃあ家事も仕事も男がやらされる事が多い為にこういう家庭的な事をおろそかにする女が多い。

「そう考えると凰はしっかりとした女だな・・・」

「凰？凰がどうかしたのですか？」

「いや、実はさ――」

そう続け、俺は一夏と凰の『酢豚事件』について話した。すると篠ノ乃は唖然となって、口を開く。

「まさか二人の間にそんな約束が・・・」

「まあ、実際告白まがいの事をしていた訳だからな・・・当の本人が鈍感だったのは幸い（？）だったが」

こう考えてみると、篠ノ乃は競争に遅れてるな。放課後の訓練でのアドバンテージはオルコットも同じだし、昔の約束という面では『私の酢豚を（ｒｙ』のせいで凰の方が取っている。いくら過去フラ

グが在るからと言って、このままではマズイ。

「どうするんだ、篠ノ乃。色々とリードされてる気がするが？」

「うっ・・・」

篠ノ乃は顔をしかめる。彼女自身も今の状況があまり良くはない事はわかっているのだろう。

「まあ、お前さんが素直に一夏に『好きだ、付き合ってくれ』と言えば済む様な話なんだけどさ・・・」

「で、出来るわけないじゃないですか！」

「だろう？だったら、何かしら距離を詰める為に行動を起こさなきゃならん。そして俺が提案した策が一つ・・・どうする？」

そう言うと、篠ノ乃は口を閉ざして考える様に目を閉じる。そして三十秒ほど思案していたのか、それくらいした後に目を開けて答えた。

「黒瀬さん、料理を教えて下さい」

「よし来た」

真剣な表情の篠ノ乃に笑顔で答える。どうやら今日は暇な日曜日にはならないらしい。

・

「えっと・・・ここか」

篠ノ乃は料理すると宣言した後、急いで材料を調達してくるとかで部屋を出て行った。おそらく本島へと買い物に出たのだろう。篠ノ乃について行こうとも考えたが、俺はこの学園から出る事はまだ許されていない。日本政府から逃げる様にしてＩＳ学園に来たのに本島に戻るのは少々危険であり、千冬さんの監視下でしかあまり自由に動けない様になっているのだ。なので、俺は調理する部屋を調達する為に職員室に訪れた。

「そう言えばこの学園の職員室に入るのって初めての様な気がする」

そう呟きながら扉を三回ノックしてから扉を開く。

「失礼します」

入ってみると、そこにはアクリル製の教員机が並べられた空間。ホワイトボードやら何やらが結構あるが、何よりも目を引くものが一つあった。

扉から手前にある教員机の列、その中央に位置する場所にそれはある。それは書類の山。積み重ねられた書類がなんとも絶妙なバランスを取り、ギリギリ崩れない状態を保っている。その状態を見て、俺は瞬時に理解する。

――――あ、あれ千冬さんの机だ

「黒瀬か？・・・どうした、そんな遠い目をして」

案の定、書類の席に座っていたのは千冬さんだったらしく、書類の山の隙間からニョッキリ首を出してきた。俺は半分呆れ気味になりながら、その席へと近づいて行く。

「・・・仕事場ぐらいしっかりしましょうよ」

「散らかってるわけではない。ただ単に積んであるだけだ・・・やることが多くてな」

どうだか。この人の私生活はやたらだらしないからな。ドイツにいた時に部屋の掃除やらされた時は自分の師匠のだらしなさに本気でびっくりしたわ。

「ところで何の様だ。今日は日曜日、お前は部屋でゆっくりしているかと思っていたんだが？」

「バリバリ忙しい織斑先生を冷やかしに来ました」

バシンッ！

「殴るぞ」

「・・・殴ってから言わんで下さい」

容赦のない一撃に頭を押さえる俺を見て、千冬さんは出席簿を置くとため息を吐いた。まったく、冗談の通じない人だなぁ。

「で、本当の用件は？」

「いや、実は料理出来そうな場所を探していまして」

「料理？」

「色々理由が在りまして・・・」

訝しげな顔をする千冬さんに俺は軽く理由を説明した。すると千冬さんは頭を押さえる。

「・・・ここは学校なんだが？」

「固いこと言わないでくださいよ。同じ女として、篠ノ乃の乙女心ってやつを尊重してやってください」

「お前が乙女心を語るか」

「・・・なんですか」

いや、と小さく笑う。なんだかその笑いの意味が良くわからなかったが、あまり気にしないでおく。おそらく気にしたところで、良く理解などできないだろうし。

「織斑先生、書類持ってきまし・・た」

そんな会話をしていると扉の方から聞き慣れた声が聞こえ、そちらを見ると書類を抱えた山田先生が立っていた。

「ああ、山田先生。こんにちは」

「こ、こんにちは・・・黒瀬君」

俺の挨拶をすると顔を紅くして、控えめに返事を返す山田先生。なんだかこの前のクラスマッチが終わってからというもの、山田先生の態度が妙によそよそしいというか、落ち着きがない。

「お、織斑先生、書類を」

「ああ、ありがとう」

書類を渡す山田先生だが、チラチラと俺の方を見て来る。挙動不審だ。入学初日も男性慣れしていなかった為にあんな態度を取ったりもしていた様な気がしたが、あの時よりも酷くなっている気がする。

「・・・千冬さん」

「織斑先生だ・・・なんだ」

「俺、山田先生に何かしましたかね？」

「さあてな、自分で考えろ。お前の言う乙女心というやつだ」

頭痛の種が多いのか、再び頭を押さえると呆れ気味に千冬さんはそう言った。自分で考えろって、つまり俺が悪いのだろうか。

「そうは言ってもなぁ・・・・」（チラッ）

「ううっ・・・」（フイッ）

なんだか目すらも逸らされた。さすがにちょっと傷付きますよ、山田先生。やっぱりクラスマッチの時の事を・・・よし、ちょっと理

由を聞いてみよう。

「あの・・・山田先生」

「な、なんですか?」

「俺、何か山田先生にしたんでしょうか?」

「え、ええっ!?」

勇気を出して、訊くと山田先生は驚いたのか声を上げた。しかし、そんな声に驚いたのはこっちであったりもする。

「いや、その・・・なんか避けられている様な気がして・・・」

「そ、そんなことないですよ!私は黒瀬君の事避けるなんてしてませんよ!」

ズズイッと俺に詰め寄る様にして、山田先生は反論する。

「ただちょっと対応に困ってるだけなんです!わ、私、男の人にあんな事を言われたこと無くて・・・それでちょっと戸惑ってるだけなんです!本当ですよっ!?」

「あ、あの山田先生。顔が近いです・・・」

「・・・山田先生」

「な、なんですかっ!?」

「落ち着け、ここは職員室だ」

「あ・・・・」

千冬さんの一言に我に返ったのか、山田先生は周囲を見回す。笑ったり、呆れたり、唖然としていたりと千差万別な反応を示す教師達を見て、赤面して俯いてしまった。そんな反応されると俺もちょっと困るのだが・・・

「ククク・・・」

そして耳に届いてくる、必死に笑いをこらえる声。これまた聞き覚えのある声で、その声は丁度千冬さんの前の席から聞こえて来る。

「・・・イリア先生、何を笑ってるんです？」

「いやいや、すまんな黒瀬君。真耶の慌てっぷりが可笑しくてついな」

ついでにあっはっは、と軽い笑いを追加してくる白スーツ姿のイリア先生。そんな彼女に山田先生は頬を膨らませて言う。

「わ、笑わないでくださいよイリア先輩」

「先輩は止めろ。しかし笑うなという方が無理だ、これを面白がらずにどうするというんだ・・・なあ、織斑先生？」

「・・・少なくとも、見せものではないと思いますがね」

「相変わらずお堅いな・・・こういうものも楽しまないと人生もっ

たいないぞ」

「少なくとも仕事をしなければ今後の人生に支障を来すと思いますが？」

「こいつは手厳しい」

笑うイリア先生とため息を吐く千冬さん。対照的な二人だな、誰だこの二人を相席にしたのは・・・まあ、それはともかくとして。

「じゃ、じゃあ、避けてたっていうのは俺の勘違いだったんですね。安心しました」

「は、はい・・・」

顔の紅い山田先生を見て、苦笑を浮かべる。とにかく、良かった。嫌われてるわけじゃないんだな。担任教師から嫌われるというのは、今後の学園生活でも響いてくるだろう。

「・・・じゃあ、私は仕事に戻りますね」

「はい、頑張ってください」

笑顔でそう返すとそそくさと山田先生は自分の机に歩いて行った。そんな姿を見ていると、横からの視線に気付く。

「・・・なんですか」

「・・・別になんでもない」

何故か半目で俺を見ていた千冬さんはスッと視線を逸らすと、席を立つ。あれ、千冬さん・・・なんか・・・

「調理室の鍵だ・・・」

「ちふ・・・織斑先生、なんか怒ってます？」

席を立つと特別室の鍵がかかっている壁から一つの鍵を取り、こちらに来るとそれを差し出してきた。それを受け取り、俺は質問すると

「さあ、どうだろうな」

と返し、自分の席へと戻って行った。やっぱり態度が刺々しいな・・・だけどあんまり詮索しても藪を突いて蛇を出すだけだしな。

「愛しの君を横取りされそうで、気が立ってるんだよ。察してあげなさい、黒瀬君」

「世迷いごとを語る暇があったら、ペンを動かしたらどうですか？ブルシロフスカヤ先生」

「・・・ありがとうございます、それでは失礼しました」

詮索する事を諦めた俺は鍵の礼を言いながら、避難する様にして職員室を後にした。何故か職員室の先生達が哀れみを帯びた目をして、手を振ってくれていた。

・

そして数時間後――現在に至るわけである。

「で、できました・・・」

「おう・・・」

割烹着姿の篠ノ乃から差し出された、鮭の塩焼きとほうれん草の胡麻和えを見て、俺は引き攣った笑いを浮かべながら、箸を使って鮭の身を摘む。

「いただきます・・・」

パクッ・・・モグモグ・・・

「・・・うう」

がっくしと項垂れる。これはしょっぱいを通り越して塩辛いという域に達している。こんなもんを食べてたら絶対に早死にする。

「しょっぺえ・・・しょっぺえよ」

「で、ではこっちのほうれん草はどうですか？」

ヒョイ、パクッ

「うむむ・・・・」

篠ノ乃に進められ、口の中に放り込んだ瞬間に圧倒的な甘さが広がる。胡麻和えのほのかな甘みってレベルじゃねーぞ！ほとんど砂糖

漬けにしたのではないかという甘さだ。こんなものを毎日食べていたら、糖尿病になるぞ。

「篠ノ乃・・・」

「はい」

「味見・・・しようぜ?」

「・・・はい」

俺のセリフで失敗を感じ取ったのか、肩を落として深いため息を吐き、俺も同じタイミングでため息を吐く。

「料理がこんなに難しいとは・・・」

「食べるのがこんなに苦しいとは・・・」

「「ハァ・・・」」

再び同時ため息。だが俺と篠ノ乃ではため息の意味が違う。今の料理で五品目になった。チャーハン二杯―味無し―とキンピラゴボウの唐辛子炒め―辛過ぎて舌の感覚が飛んだ―に続いて、これである。元々あまり量を食べない俺にとって、五品の料理というのは荷が重かった。

「大丈夫ですか、黒瀬さん」

「お、俺は大丈夫だ・・・お前はどうだ、まだやれるか?」

「・・・少し休みます」

「おう、それが良い。そのほうが（俺の）身の為だ」

そう言って鮭とほうれん草を胃袋に無理やりねじ込み、皿を横にどけると俺はそのまま机に突っ伏し、篠ノ乃は俺と向かい合わせの場所で椅子に腰掛けた。ああ、胃が痛い。物理的に圧迫されているのもそうなんだが、料理を否定する度に肩を落とす篠ノ乃の姿を見てると精神的に圧迫され胃が痛くなってくる。

「私には才能がないのでしょうか・・・」

「そ、そんなこたぁないと思うぞ。皆最初はこんなもんだって・・・ケフッ」

塩分と糖分が追加され続ける無間地獄から抜け出したいという強い思いを抑え込み、落ち込む篠ノ乃に言葉を掛ける。だがそんな俺とは対照的に、篠ノ乃のセリフには暗い感情がありありと感じられた。

「こんなことでは一夏は・・・」

篠ノ乃の苦々しくも気落ちした声が聞こえる。どんなに気が強くても、彼女はうら若き十五歳の乙女。思春期真っ直中な女の子である。ちょっとしたことで感情を起伏させ、ちょっとした事で傷付いてしまう。そんな面倒くさくも、とっても大事な時期なのだ。

「・・・やっぱり私には無理なのだろうか」

だからだろうか、ちょっとした諦めの一言がやたら重く、痛々しく感じる。たかだか料理だろうと思う人間もいるかもしれないが、今

の篠ノ乃にとってはとても大事な事なのだろう。

「なあ、篠ノ乃・・・」

そしてそんな顔されたら、そんな声出されたら、俺も後押しをしたくなってしまうわけで・・・

「・・・なんですか？」

「無理だと思うなら、諦めるか？」

突っ伏している状態から顔を上げて、前にいる篠ノ乃に問う。すると顔を上げて、唇を噛んで反論してきた。

「で、でもそれじゃあ・・・」

「意味がないよな・・・だったら頑張ろうぜ、ここまでやったんだ」

「ですが・・・この有様では・・・それに黒瀬さんにも迷惑です」

「この有様だから、ダメだって思うのか？」

少し声色を強めて、再び問うと篠ノ乃は黙って俯く。そんな姿を見て、フッと微笑する。

「もしこれが一夏だったら、努力してこれを乗り越えようとするだろうな」

「一夏・・・なら」

「最初から何でもかんでも上手い奴なんていないさ、ＩＳにしろ料理にしろ・・・だから努力するんだろ、一夏もお前もさ」

言いながら、若干胃の調子が良くなってきた俺は横に退かした食器を流しに持って行き、軽く水で流していく。

「丁度いいじゃないか。努力家カップルなんて、俺好みだけどね」

「か、カップル・・・ですか」

「未来的にはそうだろ？」

茶化し半分に言うと篠ノ乃の頬が少し朱色に染まる。おそらく、カップルになった姿でも想像したんだろう。可愛いね、まったく。

「それに俺の事なら安心しろ。篠ノ乃の恋が成就するなら、この身をいくらでも捧げるぞ。そういう約束だしな」

そう言ってニッと笑うと篠ノ乃は一瞬、唖然としていたがすぐに呆れたように小さな笑みを浮かべた。

「・・・黒瀬さん」

「おう」

「・・・再開します、よろしくお願いします」

「・・・おう」

俺の返事を聞いて頷くと椅子から立ち上がり、台所へと立つ篠ノ乃。

その横顔にはいつもの凛々しい表情が戻っていた。

・

「し、失礼しまふ・・・」

「おや、黒瀬君・・・大丈夫かい？」

再び職員室に戻って来た俺を見つけ、イリア先生は開口一番にそう言った。

「だいじょうぶぁ」

ちなみに「大丈夫です」と言おうとした結果である。篠ノ乃がやる気を取り戻してから、さらに二時間ほどだろうか。料理の質は確実に良くなってきた。最後の料理、十品目に至っては隠し味までいれられるという、普通以上の料理の腕になっていた。もはや篠ノ乃はあんな味無しチャーハンなど絶対に作らないだろう。それは喜ぶ事だ。

だが、俺にはそれを祝うだけの元気などほとんど残っていなかった。原因は・・・ほら、わかるだろう？

「さ、さすがに胃が・・・」

「ちょ、ちょっと待っていろ。椅子持って来てやる・・・真耶、軽く水を」

「は、はい」

俺から鍵を受け取ったイリア先生は山田先生に指示を飛ばし、椅子と水を持って来てくれた。

「まあ座れ」

「どうも・・・」

心底心配そうな顔をするイリア先生と山田先生。教師である二人にこんなことで迷惑掛けるとは・・・面目ないです。

「許容量以上の無理をするからだ、この馬鹿者が」

そんな二人の間から辛辣な言葉と共に千冬さんが現れた。しかしまた現実的な言葉、返す言葉もないです。

「ま、まあまあ織斑先生。そう言わずに・・・」

「篠ノ乃さんの事を思ってやってやったんだ、友達思いで良いじゃないか」

「だからと言って、無理されては私が困るので」

・・・なんで千冬さんが困るんだ？

「お前の保護者としてだ、当り前だろう」

「ですよねぇ・・・ふぅ」

胃袋の中身が徐々に消化されてきたのか、言葉を話すのがだんだん苦痛じゃなくなってきた。やはり和食は胃に優しいな。

「ともかく、何事も無理はするな。少なくとも、私の監視下ではな」

「了解しましたよ」

「わかればいい」

そう言って、千冬さんは俺に何か差し出してきた。

「・・・これは？」

「胃薬だ、どこぞの馬鹿に付き合ってる為だろうな。最近常備するようになっている」

「いいんですか、その馬鹿者に上げちゃって」

「たまたま余ってただけだ」

フンッと鼻を鳴らす千冬さんを見て、少し苦笑する。なんだかんだ言っても、こういうところで優しいのが千冬さんらしい。馬鹿馬鹿言いながらもこうやって胃薬くれるところとかね。

「あれ？織斑先生、胃薬なんてお持ちだったんですか？」

「・・・・・」

山田先生の言葉を聞いて、ピクッと一瞬だけ震えると千冬さんの動きが止まる。そんな光景を見て、イリア先生が「あちゃー」と言っ

た感じに頭を押さえると、山田先生の肩を掴んだ。

「真耶、ちょっとこっち来ようか」

「え？イリア先生何を言って――」

「いいから！こっち来て、今織斑先生が物凄い剣幕でこっち見てるから、なっ！？」

話がわかってないのか、キョトンとした顔の山田先生をイリア先生は職員室の奥へと連れて行った。それを見届けた後、千冬さんがこちらを向く。

「・・・たまたま、余ってただけだ」

「わかってますよ」

そう言って、笑っておく。心配して買っておいてくれたなら、そう言ってくれればいいのに。変なところで恥ずかしがってるんだから・・・まあ、そんなところがちょっと可愛い――

バシンッ！

「痛いっ！？何するんですか！？」

「なんだか腹が立つ笑顔だったのでな、殴っておいた」

完全に油断していた時に頭を叩かれた俺の非難に対してシレッと言うと、自分の席に戻って行った。

・

「帰ったぞ～・・・」

「おお、おかえり」

まるで朝帰りのお父さんみたいな覇気の欠片もない声を出しながら部屋に帰ると、一夏が出迎えてくれた。俺は一夏への返事も早々にベッドへと倒れ込む。

「なんかやたら疲れてないか？」

「疲れてるよ・・・お前の所為でな」

「俺の所為？一体何の事だ」

まったく、誰のせいでこんな疲れてると思ってるんだ。元をただせば全てこいつのせいだというのに、その当の本人は何食わぬ顔でいやがる・・・なんだかちょっと篠ノ乃の気持ちがわかった気がする。

「一夏、この唐変木」

「・・・なんだよ」

「なら悩め。悩んで悩んで、ちゃんと人の気持ちを考えられる男になれ。いいな？」

「あ、ああ・・・そうする」

素直に頷く一夏にそう言った後、仰向けになると盛大なため息を天井に向けて吹きかける。ま、でも篠ノ乃へと協力もできたし、なんだかんだで励ます事も出来た。こんな一日も悪くないかもしれない。

「篠ノ乃の事、逃すなよ」

「逃すなって・・・どういう意味だよ」

「文字通りだ。あんな良い女、逃したら絶対損するぞ」

首をかしげる一夏にそう笑いかけ、起き上がる。とりあえず疲れた。シャワーでも浴びて、横になるか。食事してすぐ横になるのはあまり健康上よろしくないが、今回くらいはいいだろう。

「じゃ、シャワー使わせてもらうぞ」

「あ、そうだ零司」

「なんだよ」

「あの時の質問、まだ答えてもらってないぞ」

「質問・・・ああ」

質問とはおそらくアレの事だろう。俺と千冬さんがどういう関係だってやつ。なんでそんなに聞いてくるのかね。

「そんなに聞きたいのか？」

「だって気になるだろ。千冬姉は俺の家族だぞ？」

「・・・腹の内もわかっていない様な奴が近くにいるのが不安か？」

「そうは言ってないだろ」

「すまんすまん、冗談だ」

ムッとした表情の一夏を見て、肩をすくめる。しかしどう答えるべきか。正直、まだ答えは出てなかったんだよね。職員室に行った時に千冬さんに聞けばよかったな。

「俺と千冬さんの関係ね・・・」

悩みながらポケットに入った胃薬を取り出す。優しくも厳しい、変わらない人。だからおそらく今俺の中に浮かんだ答えで良いと思う。だから俺はしっかりと一夏に伝える。

「良い師匠（せんせい）と弟子（せいと）・・・かな」

おそらく、それが最も的確且つ正確な答えだと、俺は信じているから。

・

「今日は失礼しました・・・」

「謝られても困るんだがな、山田先生」

零司が職員室から出て行ってからしばらくして、例の胃薬の事で真耶は千冬の前で何回目になるかわからないくらいに頭を下げていた。

胃薬、アレは零司が鍵を借りに来てから千冬がわざわざ購買部の方から買って来たものだった。常備しているというのは、もちろんのことながら嘘であり、自分の心配を表に出さない為のカモフラージュのつもりだった。

まあ、無論の事ながらバレてはいるのだが・・・

「そんな事も気付かないなんて・・・本当にすいませんでした」

「別にいい、それよりも仕事に戻ったらどうだ?まだ残っているんだろ?」

「はい・・・あの、織斑先生」

「・・・なんだ?」

「い、いえ!なんでもありません!」

「そうか、では私は自室に戻る」

しつこさに少し呆れながら言うと、真耶は慌てて職員室から出て行った。そしてその後、人数の少なくなった職員室から出て、千冬はため息を漏らす。そのため息は真耶に向けられたところも少しあったが、それ以上に自分に対するものだった。

(・・・もう少し、普通に気遣ってやれないものか)

そう、それは自分の零司に対する行動の事。気遣う優しさ、それを彼に見せる時に時折思いとは逆に行動してしまう節が在り、それに対して千冬は少しばかりの憂鬱さを感じていたのだ。

（何をやっているんだろうな）

昔は弟子として、そして今は生徒として自分の元にいる一人の少年。ドイツで手に入れた全てを手放して、この日本に舞い戻った男。

なるべく優しく接してやりたい。だが自分の性格上、それを素直に出来ない事は知っている。それでも、そんな自分に少々苛立ちを覚える。

側にいてやらなければ・・・守らなければならない。三年前（あのとき）に出来なかった事を今やらなければならない。

（それなのに私は――）

零司をＩＳに乗せ、そしてつい先日起こった戦いに彼を駆り出した事。あの状況ではあの選択は良いチョイスだったのかもしれない。だがそう思っていながら、あんな選択をした自分が許せないでいた。

（これでは・・・あの時と同じだ）

「過去に囚われているのはどっちだ・・・まったく」

職員室を出て、寮にある自分の部屋に戻った千冬は自分が零司に言った言葉を思い出し、散らかった部屋のベッドに余った仕事の書類を投げ出し、椅子に座ると再びため息を漏らす。

零司と電話で話した時、千冬は少しばかり安堵していた。彼の声に憤りを感じなかったからだ。その代わりに、自分に対する怒りを抱いた。

どうして、どうして安堵するのか。

彼にした事を忘れたというのか、と。

「忘れるものか・・・」

憎々しげに言う千冬は瞳を閉じる。忘れはしない。あの時、零司に何が起こったのか、そしてその時に自分が出来なかった事。千冬はおそらく、それらを忘れる事は無い。そして自分を責め続けるであろう。それが千冬なりの零司に対する贖罪なのだから。

「・・・いかんな、どうも」

頭を押さえる。昔の事を思い出すと少々ブルーな感じになってしまう。これからさらに仕事をしなければならないのに、こんな状態では出来る仕事にもミスが生じる。シャワーでも浴びて、すっきりしよう。そう考えた千冬は椅子から腰を上げる。

「・・・ん?」

そしてそこで、ふと目に留まるものが在った。

それはさっきベッドの上に投げ出された書類。その書類に記された、名前だった。

「これは・・・」

その名前を見て、千冬の眼がスッと細まる。なんということだろうか、これも運命の悪戯か。恐ろしいくらいに的確に、気分を入れ替えようとするのをあざ笑うかのようなその書類を見て、千冬は呟く。

「過去から逃れられないな・・・私もあいつも」

投げ出された書類、そこには描かれた二つの名前。過去の産物、追ってくるかの如く現れる二つの存在。その名前はこういった。

『シャルル・デュノア』

『ラウラ・ボーデビッヒ』

ＥＰ１４　とある日曜日の話（後書き）

はい、十四話終了です。

今回はやたら間が空いてしまいました。その上になんだかよくわからない感じになってしまいまして・・・読者の皆さま申し訳ございませんｍ（＿＿；）ｍ。描きたい事はいっぱいあるけど、文字にできないこのもどかしさ・・・つらいです（ＴωＴ）。

さて、次回はようやく登場のシャルルとラウラ。そして最後の千冬さんの残した言葉の意味とは！？
それでは皆様、次の話でお会いしましょう！

では、また（＾ω＾）ノシ

EP15　過去からの使者（前書き）

十五話どぅえす！

オリストという壁を乗り越えたのでなんだか筆が進みました。いやあ、よかったよかった（＾ω＾）。

今回はラウラ・ボーデヴィッヒ少佐が登場です！では駄文ですが、どうぞ。

EP15　過去からの使者

とある飛行場。錆びれて、飛行機もちらほら見えるだけで賑やかさなど何処にもない。夕陽に照らされた、ずいぶんと殺風景なその場所にそこに二つの人影があった。

それぞれは少年と少女であり、その場で口論をしている様だった。いや、口論というよりも少女の方が一方的に口を開いている。

「何故！何故なのですか！」

「ここまで追って来て・・・またその話か」

呆れたように少年が覇気の無い声で訊き返す。もう何度目か、正直この少女の「何故」という言葉は訊き飽きていた。

「何度だって聞きます！それに・・・理由も話さずに行ってしまおうとしているのはあなたではないですか！」

声を荒げる少女。その度に美しい銀長髪が風に揺れる。だが少年はその問いに答えない。少女がどのような怒りを抱いているのか、薄々理解はしている。だが答えない。それが少女の憤りを加速させる。

「あなたは優秀な戦士だ！それなのにあのような極東の地に戻って何をする気なのですか」

「・・・何もしない・・・何も」

「ならば！ならば何故戻るのですか！あなたはここにいるべきだ！」

「もう・・・ないんだ・・・」

「何を言って・・・っ！？」

そう呟き、振り返る少年の顔を見て、少女が口を噤む。少女が目にしたもの、それは今まで見た事のない様な悲しい笑顔と、頬を伝う一筋の涙だった。

「もう、何もないんだよ・・・」

それは二年前、ドイツでの出来事だった。

・

「やっぱりハズキ社製のがいいなぁ」

「え？そう？ハズキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいなぁ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

五月も終わり、六月に入ったＩＳ学園。その月曜日の朝。明日よりＩＳスーツの申し込みが始まるらしく、クラス中の女子達がワイワ

イと賑やかに談笑していた。そんな中で・・・・

「・・・・・ハァ」

俺は重苦しいため息を吐く。気分は最悪、正直授業にも出たくない。原因はわかってる、おそらく今日見た夢のせいだろう。

とあるドイツの飛行場である少女との口論した時の夢だった。実際口論した内容はどうでもいいのだが、問題はその時期である。

二年前、それは俺のトラウマの原因になった事件の数か月後の出来事だった。俺がもっとも追い詰められ、何もかもに絶望していた時、躁鬱病の様な状態だった時の夢だった。

たかだか夢一つ、そう思う人もいるだろう。だが、これは俺にとってトラウマの象徴であり、ここ数日間は見ていなかった夢だ。ようやく解放された、そう思っていた矢先の出来事だ。まるで雛鳥がようやく飛び立とうとした瞬間、羽が折れて地にたたき落とされた様な感覚。言葉にするのも嫌になる様な嫌悪感。

「最悪だ・・・」

呟かずにはいられない。これを最悪と言わずに何とする。俺は再びため息を吐き出すと、机に突っ伏した。しかしそんな精神状態でも学業に励まねばなるまい。それが学生の本分なのだから。

「そうだねー・・・そうだ、黒瀬さんのＩＳスーツって何社製なんですか？なんだか見ないタイプですけど」

「・・・・・」

さっきまでそこで話していた女子が不意に俺に話題を投げてきた。
それに反応して、俺は無意識にその女子を睨みつけてしまった。すると女子は持っていたカタログを胸に抱え込み、一歩後ずさる。

「あ、ご、ごめんなさい・・・興味本位でつい・・・」

「あ、いや・・・俺の方こそすまない」

睨みつけてしまった女子に謝罪する。何をやっているんだ、俺は。イライラしてるからと言ってもこれは無いだろ。

「大丈夫ですよ、気にしてないですから・・・スーツの事はまた後で聞きます」

「本当にすまない・・・」

笑顔で「大丈夫ですって」と言うと女子は友達の中へと返って行った。そして入れ違いになるように、一夏が声を掛けてきた。

「どうしたんだよ、零司。らしくないぜ?」

「・・・わかってるさ、そんなこと」

ぶっきらぼうに返事を返す。こんなんじゃ駄目だ。理解している、頭ではわかっている。だがそれでも感情は言う事を聞いてはくれない。
「どんな夢を見たのかは知らないけどよ、他人に当たるのは違うだろ」

「わかってる・・・だから自分が馬鹿らしく思える」

「だったらよ――」

「わかってるって言ってるだろ」

突き放す様な言い方だとわかっている。だが、今は本当に干渉してほしくない。今だけは一人にしてほしい。

「そうかよ・・・じゃあな」

「一夏」

「なんだ」

「迷惑掛ける。授業までには直す」

「・・・ああ」

俺の気分を察してくれたのか、一夏はあまり深く詮索せずに自分の席へと戻って行く。それを見た後、深呼吸をする。すまない、一夏。すぐに気分を持ち直すから、待ってくれ。

しかし、最悪な夢だが同時に不思議にも思っていた。あまりに唐突、それが夢で在るとすると当然の事かもしれないが、俺にはそれが偶然には思えない。まるで何かを・・・これから起こる出来事を予見する様な、まさに正夢という感じなのではないかと。

「まさかな・・・」

馬鹿らしい考えを振り払う。どうしてそんな事になる。あの娘は今頃ドイツの軍事施設にいるだろう。それが何故俺の目の前に現れる。あり得ない、そう絶対にあり得ない。

「諸君、おはよう」

「「「おはようございます、織斑先生」」」

そんなことを考えている間に我らが担任鬼教師こと千冬さんが入って来ると、返事をして次の瞬間には騒がしかったクラスの女子達の喧騒が静まり返る。まるで礼儀正しい軍隊行列。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人気を引き締める様に。各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れない様にな。忘れたものには学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着でもかまわんだろう」

いや、構えよ。クラス全員が内心、突っ込みを入れていただろう。水着と下着では羞恥心に天と地の差が在る。大体、女子が下着姿になるならまだしも、俺や一夏が下着姿になったらどうするんだ。誰が喜ぶんだよ、そんな展開。少なくとも、俺達を見ている読者（天の視線）は喜ばないはずだ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ！」

連絡事項と言う名の問題発言をぶちかました千冬さんはすでに教室にいた山田先生にバトンタッチ。眼鏡を拭いていたのか、慌てて掛

け直す姿が子犬の様に思えて少し癒される。

「え、えっとですね。今日はホームルームを始める前に何と転校生を紹介します」

「「えええええええっ！？」」

いきなりの転校生発言にクラス中が一気にざわつく。転校生か、確かにここＩＳ学園は様々な国から優秀なＩＳ操縦者の候補達が送り込まれてくるだろう。だが、先々月には凰が来たばっかりだ。いくらなんでもスパンが短すぎないか？

「黒瀬」

「なんですか？」

「帰りたい、などと言うなよ」

そして千冬さんからの謎の警告。帰りたくなるような事って何だよ・・・なんだか激しく嫌な予感がするんだが・・・

そんな俺の予感は余所に、教室のドアがスライドし、ざわめくクラスメイト達の視線は一斉にそちらへと向く。その影に隠れていた人物の姿が顕になる。

その姿に俺は息を飲む。その腰近くまで無造作に伸ばした美しい銀長髪も左目に付けた黒眼帯も、そして赤色の右目もその小柄な体格からにじみ出る『軍人』としての気配。全てが激しく見覚えが在る。

そう、それは俺の夢に出てきた・・・あの少女の物とまったく酷似

している。

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

「教官は止めろ、ここでは私は一般教員だ」

「了解しました」

そしてこの声。ああなんて言う事だ、本当に正夢になるなんて・・・今、激しくここから逃げ出したい。千冬さんの言葉はそう言う事か・・・

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・」

今まさに夢の少女・・・ラウラ・ボーデヴィッヒは冷たい声で言い放った。次の言葉を期待する様に待つクラスメイトの中で俺は軽く混乱していた。

（何故だ。何故軍属のラウラがここに来ているんだ・・・）

ドイツ軍ＩＳ配備特殊部隊『黒兎部隊』こと『シュヴァルツェ・ハーゼ』の隊長、ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐。本来ならば今頃ドイツ本国で軍事資料と睨めっこしているはずの人間がこのＩＳ学園に来たという事は、それなりの理由が在る筈だ。

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔を浮かべてラウラに訊くが、取り付く島もない。そしてそんな山田先生に目もくれず、ラウラはツカツカと一夏の方へと歩いて行く。

「貴様が――」

「は？」

ラウラの瞳がスッと細まる。マズイ、そう思った時には俺は席を立っていた。

ヒュッ――パシッ

「止めろ、ボーデヴィッヒ」

振り上げたラウラの左腕を掴み、一夏の頬に触れる寸前で止めた。

「止めないでください」

「それは無理だな。俺は友人が殴られるのを黙って見ていられるほど冷酷な人間じゃない」

「あなたも・・・」

苦々しく呟き、ラウラは俺の手を振りほどく。そうした後、一夏を憎しみの籠った、燃える様な紅い瞳で睨みつけて口を開く。

「私は認めない。貴様も、この学園も・・・認めるものか」

唖然としている一夏にそう言い捨てるとスタスタと空いている席に座ると腕を組んで、瞳を閉じる。異質なモノを見るような視線がラウラに集まり、クラスはあっという間に新しい転校生に圧倒的距離感を感じ取ってしまっている様だった。

「あー・・・ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同で模擬選を行う。解散！」

千冬さんの鶴の一声により氷付いていたクラスが動き始める。俺は一夏の腕を掴み、席から立ち上がらせる。

「一夏、行くぞ」

「零司、今のは何だったんだ」

「いいから立て、それともこのまま呆けたまま女子の着替えでも覗く気か？」

「そ、そうじゃないけどさ・・・って、おい零司」

俺の言葉に応じるのを待たずに一夏の腕を引っ張り、クラスから出て行こうとする。その途中で千冬さんにすれ違う。

「逆らえないものですね・・・」

「ああ、お互いにな」

すれ違いざまに短く言葉を交わすと俺はクラスを後にした。もはや夢による苛立ちは無い。その代わりにとんでもない転校生の登場に対する驚きとこれから起こるであろう問題に対する緊迫感だけが、俺の心に残っていた。

・

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はいっ！」

第二グラウンドに集まった一組と二組の生徒達から気合いの入った返事が千冬さんに返される。実質的にＩＳを使った授業は今日が初めてだから、皆も緊張しているのだろう。おそらく、こんな中で他の事を考えているのは俺くらいか・・・

視線を動かし、俺との距離を数人挟んで立つ銀髪の少女、ラウラを見る。固く、冷たい雰囲気を保ったままでジッと千冬さんを見ている。

（軍事目的というわけでは無い様に見えるが・・・）

だが気になる。一体何の目的があってこのＩＳ学園に来たのか。あいつの性格上、学園なんてぬるま湯には進んで来たがらないだろうし・・・

「まずは実戦で試してもらう・・・凰！――それにオルコット！」

「「はい！」」

凰とオルコットの返事が耳に入り、俺は考えを止める。今は授業中だ、どうあれ俺はここの学園の生徒、授業は受けねばならない。ラウラの事を考えるなら後でも出来る。授業に集中しよう。

「面倒くさいわね、正直」

「こういう事は見世物の様な感じがして気が進みませんわ・・・」

「お前ら少しはやる気を出せ・・・あいつに良いところを見せたくないのか？」

うわっ、千冬さん自分の弟を餌に使いますか・・・それにそれくらいでさすがにオルコットも凰も食いつくわけ――

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せつける良い機会よね！専用機持ちの！」

・・・ものの見事に釣られたよ。落ち着いて考えてみろよ、二人共。あの一夏がお前らの活躍見ても「おお、凄いな」って感じで終わるに決まってるだろjk。まあ、やる気が在るのは良い事かもしれんけどさ。

「それで、相手はどちらに？私は鈴さんが相手でも構いませんが」

「ハンッ、返り討ちにしてやるわ」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は――――」

キィィィン――――

千冬さんのセリフを阻むようにして、天空から音がする。この音は風斬り音・・・てことは誰かこっちに飛んで来ているのか。

そう思い、空を見上げて俺は眉を顰める。飛んできたのは『ラファール・リヴァイヴ』そしてその乗り主は――

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

「ちょっ、山田先生っ！？」

こちらに向かって飛んでくる・・・否、落ちて来る山田先生。どうやら機体のバランスを崩しているらしい。あれじゃ止まれん。

「クソッ、『黒天』！」

ドカーンッ！

衝撃と衝突音が同時に俺に襲いかかる。だが、瞬時に展開された『黒天』によってそれは阻まれ、俺の肉体に被害を出すことはなかった。

「ふぅ・・・間に会ったか。大丈夫ですか、山田先生」

「あ、あぅ・・・ごめんなさい、黒瀬君」

落下を受け止めた事によって下敷きになっている俺に少し泣きそう

な顔で謝ってくる山田先生。

「こ、こんな初歩的なミスをするなんて・・・先生として恥ずかしいです」

「ミスは誰でもありますよ。たまにこんなフォローするのも、生徒の仕事ですから」

そう言って小さく笑いかけると、自分の不甲斐なさと恥ずかしさに負けたのか顔を紅くして俯いてしまう。まったく可愛らしい先生だ。年上には思えないね。こんな可愛さがチョッピリでも千冬さんに合ったらと思うよ。

「そうか、それは悪かったな」

「へ？」

首を動かし、上を向くとそこには腕組みをしてこちらを見下ろす千冬さんの姿。しかもその眼はなんだかちょっと・・・いや、物凄く怖い。

「ならば今度から可愛らしくお願いしてやろう・・・そうすれば色々と許される様だからな」

なんでだろう、凄い怒ってる。これは弁解をしないと今後の夜間訓練に多いな損害を来す（俺の肉体的な意味で！）。

「いや、やっぱり千冬さんには可愛らしさなんていらないですよね！やっぱり厳しく怖く容赦無くの三拍子揃ってないと！いやーさすがですね！この鬼女、悪鬼、羅刹！」

バキッ！

「すまんな、手が滑った」

飛んできた蹴りが俺をわき腹に直撃した。しかしおかしいな、蹴りは手が滑ると出るものなんだな。初めて知った。

「いいからさっさと立て・・・山田先生も」

「は、はいっ！」「は、はい・・・」

千冬さんに言われた通りに二人揃って立ち上がる。それを最後まで見もせずに、千冬さんは授業を進める。

「・・・では凰、オルコット、お前らは山田先生と戦ってもらう」

「いや、さすがにそれは・・・」

「安心しろ。お前達ならすぐ負ける」

負ける、その言葉が癪に障ったのかオルコットと凰は表情を一変させる。しかもオルコットにいたっては入試の時点で一度は勝っている相手。そんな相手に負けるはずがないという自信の所為もあるのだろう。

「では、始めっ！」

「手加減はしませんわ！」

「あたしの本気、見せてやるわ！」

「い、行きます！」

千冬さんの号令を受けて、三人が同時に飛翔する。その瞬間に俺は山田先生を見た。上ずった感じの声は確かに山田先生そのものだったが、その表情はあの『人形』との戦いのときに見せた元日本代表候補生山田真耶の表情だった。

こりゃ勝てないだろう。大体、オルコットにしろ凰にしろ、連携訓練もしていない。それに双方我が強い性格・・・おそらくお話にもならない。

「さてとどれくらい持つか・・・黒瀬、皆に山田先生のＩＳの説明を」

「わかりました・・・」

わき腹が痛くて押さえている俺に説明を要求するのかと言いたくなったが、口答えしても俺の立場が悪くなるだけなので言わない。それに生徒に対してこういうのを説明するのは教師の仕事だろうに・・・

「えー、山田先生の使用しているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』。第二世代開発の最後期機体だが時期的に第三世代開発が目安とされていた時期の所為もあり、初期第三世代型ともいい勝負ができる程度のスペック、安定した性能と高い汎用性、豊富な『後付武装（イコライザ）』が特徴的な機体となっている。各国の配置ＩＳの中でも世界三位のシェア持ち。魅力は操縦者を選ばない簡易性、それに多様性役割切り替え・・・マルチロール・チェンジだ。装備によっ

て格闘・射撃・防御と全タイプに切り替えられるところ。まさに量産機としてはこれ以上に無いほど魅力的だ。理解できたかい？」

「「はーい！」」

二クラス分の元気な返事が返って来た。ノリが良いなあ、最近の女子は。

「御苦労・・・そろそろ終わるぞ」

皆が空を見上げる。すると展開はほとんど俺が思っていた通りとなっていた。山田先生がアメリカのクラウス社製五十一口径アサルトライフル『レッドバレット』で射撃、それを凰は回避するがそれは誘導。ビット操作に集中していたオルコットには凰などほとんど眼中にない。つまり向かってくる凰を回避する事はまず不可能。

ぶつかり、完全にバランスを崩した二人に向けて、こちらもクラウス社製ロケットランチャー『アウトブラスト』から炸裂弾頭弾が射出され、命中と共に爆発。煙の中から絡み合う様にして二つの影が落下した。

「くっ、ううう・・・。まさかこの私が・・・」

「あ、アンタねぇ・・・何面白い様に回避先読まれてんのよ」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないですわ！」

「こっちのセリフよ！なんですぐにビット出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ・・・！」

「ぎぎぎぎっ・・・！」

・・・それにしても仲悪いな、こいつら。それに、どっちもそこそこ主張は的を射ているんだから、そこを気にして戦えばまだ勝機はあっただろうに。

「・・・なるほど、お前ら二人じゃ勝てないわけだ」

「なんですって！」「なんでよ！」

「今回の戦いは明らかにお前らスタンドプレイの思考がいけなかった。連携を完全に理解の範疇に入れてない。相手が合わせるだろう、だから自分から動いても大丈夫・・・いや、お前らの場合は関係ない、自分だけでやるって感じか」

図星だったのか、口を噤んで俺を睨む二人。だが俺はそれでも続ける、それがこいつらの為だ。

「オルコットはビットを使った範囲攻撃、だがその弱点は知られているんだからそこに凰がフォローに入るべきだった。衝撃砲を使うにしろ、もっと的確に使うべきだったんだ」

「それは・・・」

「・・・そうかもしんないけど」

「それに何より、お前らは相手を舐め過ぎだ。専用機の性能に自信

を持ち過ぎてる。山田先生はこのＩＳ学園の教師だ。腕前なくして、教師になれるはずもない。所詮は量産機、そう考えた傲慢な心が一番の問題だ」

「「・・・・・」」

俺の言葉を聞いて、黙りこくる二人。少し言い過ぎただろうか。だがな二人共、逆に言えば・・・

「落ち込むなよ、二人共。逆を言えば、それに今気付けたんだ」

そう逆に言えばここで気付けただけ、良しと考えるべきだ。これが大きな大会とかならば、それこそどうしようもないのだから。

「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥ってね・・・落ち込まずに次に生かす事を考えろよ、十五歳女子」

なんだか偉そうに言ってしまったと思いながらそう言うと、オルコットと凰はガバッと顔を上げる。

「わ、わかっていますわ！そんなこと！」

「そうよ！あんたなんかに言われなくたって、こんな負けから二度としないんだから！」

「そりゃあ安心だ」

噛みついてくるほどの元気は戻ったようだ。俺の言ったこと、そこら辺はやっぱり専用機持ち、代表候補生だ。ちゃんと理解はしているのだろう。やはりこういうところは優秀なんだとつくづく思う。

「さてと、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接する様に」

ぱんぱんと手を叩き、皆の意識を切り替える。というか、その口ぶりからすると千冬さん、オルコットと凰を見せしめに使っただろ。

「黒瀬先生のご教授も終わった、そろそろ始めるぞ」

「別にそんなつもりはありませんよ・・・まったく」

「専用機持ちは織斑、黒瀬、オルコット、ボーデヴィッヒ、凰だな。では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること、いいな？では別れろ」

若干の皮肉を織り交ぜながらの指令が言い終わるや否や、俺と一夏の元へと二クラス分の女子がなだれ込んでくる。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「黒瀬さん！ご指導してください！」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

おーおー、予想以上の繁盛っぷりである。一夏なんかはどうしていいかわからずにただ立ち尽くしている。もしこのＩＳ学園で俺と一夏が何か売り出したら偉く儲けが出るんじゃなかろうか。やってみるかって？俺は嫌だぞ。やればたちまち鬼が俺の頭を叩きに来る。

「この馬鹿者どもが・・・出席番号順に一人ずつ各グループに入れ

！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグランド百周させるからな！」

明らかに現実では不可能な事を口走るが、どうも教育の行き届いた生徒達には本当にやるとわかっているのか、それぞれが散々に動いていた女子達が即座に移動して、それぞれの専用機持ちグループは二分とかからずに出来上がった。

「・・・やったぁ。織斑君と同じ班っ。名字のおかげねっ・・・」

「・・・黒瀬さんかぁ。嬉しいけどちょっと緊張するな・・・」

「・・・うー、セシリアかぁ・・・。さっきボロ負けしてたし。はぁ・・・」

「・・・凰さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ・・・」

「・・・・・・・・・」

それぞれの専用機持ちに対するひそひそ話が聞こえて来る。ちなみに唯一まったくお喋りがないのがラウラの班である。

朝のＨＲでの一夏に対するビンタ未遂、学園を認めない宣言、そして何よりもその全身から発する張り詰めた他人を拒絶するオーラに十代乙女達はちょっと俯き加減に黙っている。

なんだかとても可哀想になってくる。できればこちらの班に加えてやりたいが、それは千冬さんが許してくれないだろう。すまない、名も知らぬ女子達よ。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

なんだか山田先生がいつもよりも輝いて見える。模擬戦で自信を取り戻したのだろう。テキパキと仕事をこなしていく姿はまるで山田先生じゃないみたいだ。

「黒瀬さん、山田先生ばかり見てないで、こっちにも集中してくださいよ」

「あ、ああ、悪い・・・って、最初は青嶋か」

山田先生から視線を外し、正面に戻すと見慣れた青い短髪の少女が立っていた。何かと縁が在るな、この娘には。

「機体は・・・『リヴァイヴ』か」

「はい、山田先生の戦いを見たら皆が『リヴァイヴ』がいいって」

「あ、青嶋さんが黒瀬さんと話してる！」

「ずるい！私も私も！」

単純に青嶋と話しただけだというのに他の女子からにょきにょきと手が伸びて来る。まったく、この行動力を他に生かせと言うに。

「はいはい、そんな慌てなくても相手はするから落ち着け」

「「「は～い！」」」

元気に返事をする女子達、それを見て苦笑をする俺。そしてそんな俺を睨むようにして見詰める紅い瞳を心の奥底で警戒しながらも、何事もない様に初めてのＩＳ実習訓練は過ぎて行った。

EP15　過去からの使者（後書き）

はい、十五話終了です。なんだか二巻の話は零司の過去と関係がありそうですね・・・どうなるのでしょうか・・・

いやあ、ついにラウラ登場ですよ。順番は原作ともアニメとも違いますが、展開はあまり変わりません。期待した方はごめんなさいm（＿＿）m。余談ですがラウラの階級、少佐って結構凄いですよね。ドイツ陸軍なら大隊長ですよ、大隊長。ラウラ、恐ろしい娘・・・。

さて次回は零司とラウラの関係は・・・そしてシャルルさんの登場です！

では、また（＾ω＾）ノシ

EP16　赤き瞳に映るは・・・（前書き）

十六話、始まるよ！（、・ω・´）（キリッ

二巻は話題に事欠かないから思いのほか楽です。更新ペースが上がるかもね。駄文であることには変わりませんが・・・（ーωー；）

では、どうぞお楽しみください

EP16　赤き瞳に映るは・・・

「・・・疲れたな」

「・・・まったくだな」

ＩＳの初実戦訓練は滞りなく終わり、現在はＳＨＲの始まりを待つばかりである。クラスメイト達はまだ訓練時の熱が引いていないのか、騒がしくざわついている。そんな中で訓練の間、引っ張りだこにされていた所為もあり、多大な疲労を被った俺と一夏はそれぞれ机に突っ伏していた。

入学から二カ月ということでそろそろ女子だらけの生活にも慣れたであろうと思っていたが、波の様に押し掛ける女子達の相手を一日中というのはさすがにキツイ。しかも俺は制限時間を気にしながらだったので、いつもの学園生活の倍は疲れているんじゃないだろう。

いや、疲労は肉体だけではない。精神的なモノもある。原因は・・・まあ、一つだろう。

「・・・・・」

突っ伏す腕の間から後ろに座るラウラを見る。結局、今日あいつに話しかけた女子はおらず、安定して孤立していた。間違い無く、今日の疲労はラウラの存在に対する気疲れだろう。

「・・・まるで首輪付けられているみたいだ」

息苦しい、刺さる様な視線が俺の背中に感じられる。一体何を考え

ているのかわからないが、少なくとも好意ではないだろう。

ある意味、俺はラウラを裏切った。理由を告げずに日本へと飛んでしまった。憎まれ口一つ叩かれてもしかるべきであろう。しかし、だからって何も転校してくる事ないんじゃないだろうか。あいつだって自分の仕事というものが在るだろうに。

頭が痛いな、まったく。多分、千冬さんも頭押さえているのだろう。あの人もラウラがこちらに来て、呆れにも似た感情を抱いているのだろう。

「なあ、零司。あの・・・・ラウラって奴、ずっとお前を見てるぞ」

「・・・知ってるよ」

さて、どうしたものか。残念ながら、こちらからラウラに話しかける様な事はしていない。というか、出来そうもない。大体、どんな面下げてあいつに話しかけろというんだ。気軽に「よう、久しぶり」なんて話しかけられるほど、俺のメンタルは強くない。そしてそれはあちら側としてもあまり話しかけられるのを望んじゃいないだろう。

「・・・一夏」

「なんだ？」

「興味本位であいつに近寄らない方が良いぞ」

「そんなのわかってるさ。というか、初対面でビンタしてくる様な相手なんて御免だ」

そう言うと一夏は肩をすくめる。あのビンタはおそらく『第二回モンド・グロッソ』の決勝戦が原因になっていると思うんだが・・・そこら辺はどうなんだろうか。

「まあ、あいつもこちらから干渉しなければそれほど向かってくる事も――」

「失礼します」

頭の上から下りて来る、冷たい声。なんだよ、言った側からこれかよ。そんなに俺の意見を否定したいのか、お前は。

「・・・どうした？」

頭を上げると、紅い瞳と目が合った。昔とは変わらない瞳、何処か無機物を思い起こさせる様な感覚。だがその瞳には確かに感情が籠っている様にも見えた。

「放課後、少しよろしいでしょうか」

「構わないよ・・・」

どうせ断ったら無理にでも引っ張って行くつもりなんだろからな。

「では、後ほど」

そう告げると自分の席へと戻って行く。礼儀正しく、歩幅も正しく、まさに軍人を体現している様で・・・久しぶり過ぎて懐かしさすら思える。

「さて、どうするかな・・・」

「諸君、ホームルームを始めるぞ」

厳しい鬼教師千冬さんの声がして、ホームルームが始まる。だがラウラに対する対応を考える俺には、まったくもって頭の中に入ってはこなかった。

・

「お久しぶりです」

ホームルームを終えた後、俺はラウラと共に学園の裏庭に来ていた。この場所は基本的に人通りが少なく、これから俺とラウラの交わす会話をするには持ってこいの場所だった。つまり俺達の会話とはそういうものだ。

「久しぶりだな、ラウラ・ボーデヴィッヒ少佐殿」

そう返すとラウラの瞳が細まり、何か言いたそうな顔をしていたが表情はすぐ元に戻る。

「こうして話すのは二年ぶりか？」

「二年と六カ月ぶりです」

「細かいな、さすがは軍属・・・いや、元からそう言う性格か」

「私がしたいのはそう言う話ではありません！」

会話を断つ様に叫ぶと夕焼けの光に照らされる俺達の間に風が吹き、一幕の沈黙が流れるとラウラは再び口を開く。

「ドイツに戻ってください・・・」

やはり、そう来たか。ある程度は予想していた。軍事的諜報目的でもない、他国のＩＳ調査でもない、かといって自国のＩＳ実稼働データ収集に対してもあまり乗り気ではない様にも見えた。だとすると、この学園に転校してくる理由といえば、織斑教官こと千冬さんか・・・俺だろう。

「あなたがドイツを去った理由は・・・あなたがＩＳに乗れなくなってしまったというのは知りました」

「・・・そうか」

あれから俺の情報でも探ったとしても良くも見つけられたものだ。仮にも軍事の機密文書くらいのものではあるはずなんだが・・・ここは成長したなと褒めるべきなのかね。いや、そんな空気でもないか。

「だったらわかるだろ。今更、ドイツに戻ったところでどうにも――」

「今だからです！」

教室での態度とは一変して、声を荒げるラウラ。ここに朝に見せた

冷たい雰囲気は無い。あるのは、あの夢に出てきた時の彼女そのものだった。

「今、あなたはＩＳに乗れているではありませんか！それなのに何故、このような場所で生徒などと・・・」

「俺が生徒でいちゃダメなのかよ」

「私はあなたの実力がこのような場所で腐るのを見たくはないと言っているんです！」

そう言うと、ラウラは一歩前に出て俺に詰め寄る。

「お願いです。どうかドイツへ戻ってください。こんな場所では、あなたの能力は半分も生かされません」

「半分も生かされないか」

「そうです。大体、この学園などあなたには不要のはずだ」

「不要？」

「意識が甘く、危機感に疎い。兵器足るＩＳをファッションか何かと勘違いしている。この様な程度の低い、低俗な者達と一緒にいるべきではありません」

「それが・・・お前の考えか」

一通り話を聞いてから、ため息を吐き出す。どうやら、俺とラウラの考えでは何処か決定的な違いがあるようだ。

「はい、ですから私は――」

「もういい、口を閉ざせ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

続けて何か言おうとしたところに俺は鋭く、睨みつけるとラウラはその視線に気押されたのか、口を噤んだ。

「止めだ、こんな話。こんな話をしても意味がない。もうお前の気持ちの押し売りは聞きたくない」

「なっ・・・わ、私は――！」

「持ち前の自論をぶつければ、俺が戻ってくるとでも思ったのか？だったら見当違いだ」

俺がドイツを離れた理由は、ＩＳもある。だが何よりも、俺にはあの地を離れなければならない理由があった。いや、離れなければならなかったのではない。離れたかった、逃げたかった。

何も無くなった、あの場所から・・・

「俺は望んで、自分の意志でここにいる。それに後悔もなければ、納得もしている」

「そ、その様な事は――！」

「お前の知る・・・二年前の黒瀬零司はもうここにはいない」

決別する様に言い切ると、俺は身を翻した。

「お前こそドイツへ戻れ。ここはお前の様な人間が来るような場所じゃない・・・いいな」

「黒瀬零司少佐っ！」

その場から離れようと足を踏み出した瞬間、ラウラが叫んだ。

少佐、それは俺が昔に捨ててきた、そんな呼ばれ名。もはや俺とは関係のない、そんな階級。そして思い出したくもない、過去の遺物。

「どうか・・・どうかお願いします、少佐！正規軍人ではなくても・・・指導教官としてでもいい！どうか！」

「もはや語る事は無い・・・去れ」

「少佐っ！」

「去れと言っている」

振り返り言うと少しの間ラウラはこちらを見ていたが、しばらくして目線を逸らし、速足に寮の方へと去って行った。その姿を見送った後、空を見上げて盛大なため息を零す。

「・・・ままならないな、まったく」

ままならない、本当にそう思う。やっと過去から離れられる、新たな道を歩める。そう思った矢先にこれである。どうしようもなく、運が悪いというか・・・なんというか・・・

「どうして、こんな時に・・・軍の話なんて」

「そういう娘だ・・・それはお前も知っているだろう」

ハッとなり、声をした方向を向く。一本の木、その影から姿を現したのは千冬さんだった。

「・・・尾行でもしてたんですか？」

「そんなに暇ではない。たまたま通り掛っただけだ」

嘘か真かは定かではないが、そう言う千冬さんは俺の隣までやってくるとラウラが走り去った道を見る。

「話、聞いてたんですよね」

「ああ・・・少佐とは、懐かしい響きなんじゃないのか？」

「止めてくださいよ、千冬さんが言うとシャレになりません」

それは思い出したくもない過去。同時に俺の記憶の中で大半を占めているであろう事実でもある。今でも鮮明に思い返せる、俺がどういう存在だったのかを。

俺、黒瀬零司は軍人だった。

俺を研究していた施設から千冬さんに連れ出されてから一年後、ドイツ政府からお達しが下った。

軍属になれという、ただそれだけのシンプルな内容だった。

本来なら俺は断固として拒否しただろう。千冬さんのもとでＩＳを訓練するならまだしも、その力を軍事利用するなんてもってのほかだと思っていたからだ。

しかし、俺は軍属になった。黙ってドイツ政府の赤紙に従った。否、従わなければならなかった。

奏というたった一人の家族をドイツ政府に人質に取られてしまったのだ。

自分が軍属になれば奏は救われる、従わなければどうなるかわからない。選択の余地はなかった。

そこからはまるで雪玉が坂を転がり落ちる様に。男性が使うＩＳのより豊富な実戦データ、それの為に戦地へと向かわされた。

戦わなければ倒せない。倒さなければ生き残れない。生き残らなければ護れない。それだけを思いながら、剣を振るい、引き金を引き、敵を倒し続けた。そうしている間に俺はいつの間にか最初に渡された少尉という階級から昇進して、中尉となっていた。

同じ軍属の人間から昇進を喜ばないのかと言われた事もあった。だが生き残る為に行っているだけであって、そこに勝利の栄光は無い。あるとすれば、生き残ろうとする渇望だけだった。

そして俺が大尉になった時、俺はラウラに出会った。

軍事目的の遺伝子強化されたデザインベイビーとして作られたラウラ・ボーデヴィッヒ。戦いの為に作られた少女。恐ろしいほどに機

械的に、その軍事行動を起こす。軍人である事が存在意義。

しかし、俺の出会ったラウラはそんな強いものではなかった。

『ヴォーダン・オージェ』。疑似ハイパーセンサーとも呼ぶべきそれを移植した彼女はまさにどん底にいた。共に訓練をしてきた部隊員達からは蔑まれ、『出来そこない』の烙印を押されていた。

たった一つの出来事、それだけで全てが崩壊し、暗闇に落ちてしまった、そんな少女。

そんな少女だったからこそ・・・俺は――――

「そういう千冬さんはどうなんですか？教官って呼ばれて」

「正直、鬱陶しい・・・私など必要としないで、一人立ちしろと言いたいがな」

過去に浸るのは止めて、千冬さんに問いかけると本当に鬱陶しそうな顔をしていた。

「ボーデヴィッヒの事はお前に任せる。どうにかしろよ」

「ここに来た理由の一端は千冬さんにもあると思うんですが？」

「元を正せばドイツでボーデヴィッヒを私に押し付けたのはお前なんだ・・・お前は男だろ、責任は取ってやれ」

そう言うと千冬さんは学園へと戻って行く。その後ろ姿を見ながら俺は考える。確かに千冬さんをラウラに紹介したのは俺だ。もしく

は押し付けてしまったと言ってもいい。だったらその責任を取らなきゃならないだろう。その上、ラウラの意識はこっちに向いているみたいだし・・・やはい俺がどうにかするしかないのだろうか。

「どうしてこうなるんだか・・・」

無駄な独り言を呟き、本日、もはや何度目かもわからない大きなため息をついて、俺は中庭を後にするのだった。

・

夜、深い闇の中にそれは立っていた。

「・・・・・」

誰もいない部屋。一切の明かりもないその部屋。普通の人間なら本能的に闇を恐れるものだ。だが彼女は違う。闇を恐れるどころか、その闇に同調し、むしろ安らぎを得ていた。影に呑まれながら生き続けてきた彼女はまず普通の人間と同じということ自体が在りえないのだ。

ラウラ・ボーデヴィッヒ、それが彼女の名前であり、存在を指し示す記号。

この記号は何の意味も持たない。無機質な名前。自分でも特別な感情など抱いた事もなかった。

そう、あの時までは――――

『ラウラ、か・・・良い名前だな』

良い名前、そう言ってくれたのは彼が初めてだった。それ以来、彼に呼ばれる時には何か特別な意味合いが追加されていた。生まれて初めて、名前を呼んで欲しいとすら思ったほどだった。

（あの人がいた・・・だから今の私が在る・・・）

織斑教官にも感謝している。今でも強い憧れも抱いている。彼女もまぎれもなく、私も目標だ。だが、彼はまたそれとは違う・・・また別な感情が渦巻いていた。

彼の存在、それはまさに私を闇から照らし出した救いの光。あの時、差し伸べられた手を取ったからこそ、今の私が在る。私にとって特別な・・・特別な存在。

彼の優しさに触れ――

彼の強さに憧れ――

彼の側にいたいと願った――

彼の隣で、彼の為に、ただそれだけの為に戦いたいと思った。

その思いが募る度に心の穴が急速に埋まり、それが全てとなっていった。

織斑教官が理想の姿とするならば、彼は理想の光。この闇を照らし、私を包み込んでくれる絶対的な存在。

しかし、その輝きは今遮られている。だとするならば、遮るもの全てを破壊する。

（この場所が・・・少佐の足枷）

窓の外に見えるこの場所が彼を縛り付けている。ここにいる者達が彼を惑わせている。

（排除する・・・全て・・・）

静かに、しかし確かに燃える暗い闘志の炎を真紅の瞳の奥で揺らしながら、ベッドへと倒れ込むと瞼を閉じる。必ず、光を手に入れる。ラウラはそう決意しながら、闇の中で深い眠りへと沈んでいった。

・

「くぁ・・・眠い・・・」

次の日の朝、俺はクラスへと続く廊下を歩きながら欠伸を噛み殺していた。眠い、完全に睡眠不足だ。昨日は月曜日だから別段用事も無く、普段だったら十二時には就寝して、朝は疲れはとれて気分爽快でこの廊下を歩いているんだが、昨日はどうも眠れなかった。理由は・・・まあ、昨日一日で寝不足になる様な原因なんて一つだけだわな。

昨晩はラウラの事を考えていた為に眠れなかった。千冬さんに任せると言われ、深夜三時頃まで考えていたのだが、結局ラウラに対す

る具体的な案は上がらなかった。というか、案も何も解決するものがはっきりしていないんだからどうしようもないんだがね。

「ねえねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！織斑君の話でしょ？」

「そうそう、なんでも今月の学園トーナメントで優勝したら織斑君と交際できるって話なんだよね！」

開きっぱなしの扉から教室に入ると俺は昨日ほどではないが若干睡眠不足で調子の悪い頭に聞こえてきたのは突拍子もない話だった。眠気で頭が回らないとはいえ、その話題は聞き捨てならない。

「織斑君と交際・・・なんだか大事ね」

「おはよう、女子諸君」

「あっ！？」

クラスの端で集まっている女子達へと歩いて行って挨拶をすると驚いたように俺を見た。

「く、黒瀬さん」

「あの・・・もしかして聞いてました？」

「聞いてたというか、耳に入った程度だがね・・・で、なんでトーナメント優勝すると一夏と交際できるんだい？」

「はい、何処からの情報か知りませんけど・・・先月篠ノ乃さんが寮で『もし学園トーナメント優勝したら織斑君と付き合える』って・・・」

「篠ノ乃が、ね・・・そうか、情報ありがとう」

「あ、あの織斑君には・・・」

「わかってるって、一夏には言わないよ」

ホッと肩を撫で下ろす女子達に苦笑を浮かべるとそのまま傍から見たら全然気にしていませんといった風の篠ノ乃の元へと歩いて行き、空いている前の席に腰掛ける。

「――と、言う事なんだが・・・篠ノ乃？」

「・・・はぁ」

俺の言葉に重苦しいため息を零す篠ノ乃。その為息から、どうも篠ノ乃は表面上は冷静を装っているが、頭を抱えたい気分であるのがわかった。

「なんか手違いって感じみたいだな」

「手違いというか、なんと言うか・・・」

そう言うと小さい声で俺にどうしてこうなったのかを篠ノ乃は説明してくれた。

なんでも、先月の終わりに俺が付き合った料理特訓。あの後、俺が

職員室に行っている間に篠ノ乃は一心の決意を抱き、一夏へと『月末トーナメントで優勝したら私と付き合ってもらう』と言ったらしい。だが寮で、しかも外でその宣言をした為に何処からか情報が漏れたのではないか、という話だ。

「・・・せめて部屋の中で言えよ」

「あの時は緊張で気が動転していたのかもしれません・・・」

そう言って篠ノ乃は項垂れる。

学年別個人トーナメント、文字通り学年別のＩＳ対決トーナメント戦だ。今月末にこれを一週間かけて行うのだ。二、三年生は置いておくとして、一年生だけでも大体二百名弱。これ全員をトーナメント式でやるのだから一週間規模でやるのは当然の帰結だろう。一年は先天的才能評価、二年は一年からの能力成長、三年は具体的な実戦戦力評価を行う。

特に三年生の試合はＩＳ企業からのスカウトや各国のお偉いさんがその実力を見定めにやってくる為に大掛かりなものらしい。

まあ、それはいいとして・・・

虎穴に入らずんば虎子を得ずとは言うが、それは無謀過ぎるぞ篠ノ乃。大体、その付き合ってくれってのだってあの一夏相手では玉砕する可能性だってあるぞ。

「と、とにかく…優勝すれば問題ありません」

「優勝ね・・・悪いが俺と当たっても棄権出来んぞ。全員強制参加

だから」

「わかっています・・・あ」

頷いた後、篠ノ乃が俺にギリギリ聞こえるくらいの小さい声を上げる。視線を追う。

「俺がどうしたって？」

「「きゃああっ！？」」

現れた一夏に悲鳴を上げる先ほどの女子達。噂の男、登場である。

「ま、広がってしまったんだからしょうがない。頑張れとは言っておくよ・・・それ以上の事は出来ないと思うけど」

「いえ、ありがとうございます」

小さく頭を下げる篠ノ乃に言うと椅子から立ち、自分の席へと戻る。

「おう、一夏」

「おう・・・じゃねえよ。毎日毎日先行くなって、たまには一緒に登校しようぜ」

「悪いな、男子と一緒に登校なんて花の無い事したくはない」

「いいじゃねえか、友達だろ」

「お前、朝飯食べるの遅いんだよ。朝っぱらから良く食うからな」

「朝食べないともたないんだよ、俺は。それを言うならお前、朝食べなさ過ぎだろ」

「俺はトースト一枚とハム一切れ、四つ切トマトが一切れあれば十分動けるエコロジー人間なんだよ」

「だからって少しは待ってくれる優しさってのが欲しいよ」

「地球に対する優しさは持ち合わせてるけどな」

そう言ってけらけらと笑う俺に一夏は肩を竦める。

「それはそうと、なんか眠そうだな。昨日は遅かったのか？」

「ああ、お前が寝た後もちょっとパソコンいじってた」

「おいおい、目悪くなるぞ？」

「学年トーナメントも近い。毎日のように奏から送られてくる情報から『拡張領域』に入れる新武器や『改良領域』に入れる改良データの吟味をしなきゃならないんでね。そういうお前はどうなんだよ」

「昨日、千冬姉に『このままじゃ月末トーナメントは初戦敗退だ』って言われたよ」

「容赦ないなぁ・・・ま、あの人らしいけどさ」

「言えてる」

そして二人揃って笑う。いいねぇ、このクラスでの他愛もない話。
学園生活の何よりの醍醐味だと思える。

ガラララッ・・・

「・・・・・」

と、そんな事を思っていると後ろの教室のドアが開かれ、教室内の女子達の喧騒が一瞬静寂する。ドアの方を見てみると、やはりというか・・・ラウラが立っていた。

「ラウラ・・・」

「・・・・・」

俺の視線に気付いたのか、何処か苦々しげな表情を浮かべた後、自分の席へとまっすぐに移動して席に着く。そしてそれを合図にか、女子達の喧騒が再び再開される。

『このような場所で生徒などと・・・』

「・・・あいつも、どうせなら楽しめばいいのにな」

ふと昨日のラウラの表情を思い出す。俺なんかに必死になって、どうしたというんだ。どうせこの学園に来たんだ。この場所の良さというものを見つけようとは思わないのだろうか。いや、思わないんだろうな。あいつはガチガチの軍属主義だし・・・まずこういう場所が好かないんだろうな。

「零司、どうかしたのか？」

「いや、同い年の少女でも・・・こうも違うものかなってね」

一夏に恋する篠ノ乃は周囲に少しばかりぶっきら棒で近寄りがたい感じはするが、勉強して恋して、青春を謳歌する少女だ。他の女子だってそうだろう。それと同じところに並ぶだけで、こうも違う者になってしまう。ラウラのいた世界を考えれば、妥当なんだろうが・・・それが少々、俺には寂しく思えてしまった。

「違うって・・・それって」

「ラウラ・ボーデヴィッヒの事ですわね」

「あの銀髪頭がそうなんでしょ？」

一夏の言葉を引き継ぐように現れたオルコットと凰。こいつらだって、各国の政府から任命された代表候補生。それでも周りの少女達とそう変わらない。そう認識してしまうと、ますますラウラがこの学園に取って異質なものである事を再認識させられる。

「いきなり一夏にビンタくらわせようなんて・・・良い根性してるじゃない」

「待て待て凰、何するつもりだ」

「いっちょシバいてくるのよ！」

「待て、落ち着け、大体シバくって何だよ。時代遅れの不良か」

「じゃあ素巻きにして東京湾に沈めてやるわ！」

「それじゃヤーさんじゃねえか。落ち着け、酢豚」

「酢豚言うな！」

放っておくとそのまま突進でもしそうな凰の腕を掴んで制止させる。まったく、一夏の事が大事なのはわかるが、相手の素姓も知らずに食いつくなよ。下手な事したら怪我じゃすまんぞ。相手は軍人なんだから。

「それにしても、一体何者なんでしょうか・・・ただの転校生というわけでもなさそうですし・・・一夏さんは何かご存じですか？」

「・・・さあ、どうなんだろうな」

頭を掻きながら、目を逸らして嘘をつく一夏。言えないよなぁ、自分の誘拐事件の所為でドイツ軍の教官やってた時の千冬さんの関係者、だなんてさ。

「でもビンタされそうになってましたわよね・・・何か因縁があるのではないのですか？」

「いや・・・」

「オルコット、そこら辺にしておいてやれ。しつこい女は嫌われるぞ」

追及されそうになり、少し困った顔をしていたので助け舟を出してやる。するとオルコットはハッとして追及を止め、それと同時に一夏のプライベートチャンネルが飛んできた。

（サンキュー、助かった）

（良いってことよ）

（やっぱ知ってるんだな、零司は俺が第二回モンド・グロッソで誘拐されたの）

（千冬さんから直接じゃないけどな）

そう一夏に嘘を吐く。第二回モンド・グロッソ。その決勝戦を控えた時に起こった誘拐事件。それに巻き込まれた一夏を助ける為に決勝戦を捨てた千冬さん。その千冬さんに情報提供したのはドイツ軍の俺の知り合いだった。だから本当はあの事件の全貌をほとんど知っているのだが・・・言ったところで何にもならないし、黙っておくことにしよう。

「しかし、やっぱり気に入りませんわね・・・一体どういうおつもりなのでしょうか」

「知らないわよ、そんなもん。」

見るからにラウラに対する敵意をむき出しにする二人。自分の想い人が殴られそうになったんだ、そりゃ怒りもするだろうが・・・

「まあ、そう言ってやるな。あの娘にも色々あるんだろ」

と、一応フォローを入れる。それが必要かどうかはさておき、なんだか一方的に敵意を向けられているみたいで少し可哀想と思った為に口に出しただけなのだが。

「色々って何よ。大体、転校初日からそんなこと使用ってのがおかしいのよ。バッカじゃないの」

「転校生をいじめるなよ。イジメ、カッコワルイ」

「それ相応の事をしたと思いますけれど」

「いいじゃねえか、結果的に俺が止めたんだしさ。クラスメイトとは仲良くしろよ」

「・・・黒瀬、あんた妙にあいつの肩持つのね」

「そういえばそうですわね・・・」

おおっと、オルコットと凰の対象が俺に移ったぞ。おいラウラ、どうしてくれる。お前をフォローした所為で飛び火が来たぞ。

「そういえば零司、お前昨日ボーデヴィッヒに呼び出されてたけど何かあったのか」

しかも一夏が今思い出したって感じに面倒くさい事を口走りやがる・・・一夏、お前さては狙ってるだろ。

「呼び出された・・・何か脅されでもしましたの？」

「何よ、そうならそうと早く言いなさいよ。今から私がとっちめて――」

「オルコット、それは誤解だ。凰、暴力の理由を見つけたからと言

って生き生きするな」

「じゃあ、なんで呼び出されたのよ」

「そうですわ、理由をお教えなってください」

そう二人に詰め寄られ、俺は押し黙る。さてはて、どうしたものか・・・・

「皆さーん、朝のホームルーム始めますよ」

救いの天使、山田先生登場。よし、とりあえずこれでこの場は切り抜けられる！

「ほら、ホームルーム始まるぞ。オルコットは席に戻れ、凰はクラスに戻れ。すぐ戻れ、即座に戻れ、脱兎の如く戻れ」

「そんなに言わなくてもわかったわよ・・・」

「黒瀬さん、この話はまた後ほど」

そう言い残して、オルコットは自分の席へ、そして凰はクラスを出て行った。よかった、これほど朝のホームルームに喜びを感じた事があっただろうか・・・

「・・・山田先生」

「あ、はい。なんですか、黒瀬君？」

「あなたは天使だ」

「え・・・あ、あうぅ」

感謝の極み、俺が浮かべられる最高の笑顔を向けながら山田先生に礼を言うと嬉しかったのか礼を言われたのが恥ずかしかったのか、山田先生が耳まで紅くして出席簿で顔を隠した。瞬間冷凍ならぬ瞬間沸騰だな、これは。

「そう言う事をいきなりやるな、山田先生が困る」

遅れて教室に入って来た千冬さんが俺に向けて言う。いや、でも今の俺にとっては救いの天使ですから。破壊の冥王の千冬さんとは天と地の差ですよ。ちなみに天は千冬さんです、冥王ですから

「塵芥もなく消し去ってやろうか？」

「ご勘弁ください」

シュッと何処からともなく取り出される出席簿を見て、俺は躊躇なく頭を下げる。これも次元連結システムのちょっと応用か・・・恐ろしいものだ。

「少し早いがホームルームを始めるぞ・・・山田先生」

「あ、は、はいっ！」

何処かへ飛んでいたのか、肩を叩かれて我に返った。千冬さんも山田先生のこの感じに段々と慣れてきたようだ・・・いや、諦めて来てるのか？

「えっとですね・・・今日も嬉しいお知らせがありますよ、皆さん」

戻って来たばかりの焦りを隠す様に、話し始める山田先生。今日も嬉しいお知らせ・・・一体なんだ。

「実はまた転校生がこのクラスにやってきます！」

ザワッと山田先生の言葉に反応してクラスが沸き立つ。二人目、か。いくらなんでもちょっと不審だぞ。なんでこんなに転校生が来るんだ。普通、もう少しクラスを分けるべきでじゃないのか？

「彼は昨日ボーデヴィッヒさんと一緒に転校してくるはずだったんですが、こちらの手違いで一日遅れの転校になってしまいました。けれど皆さん、仲良くしてくださいね」

一日遅れね。書類不備だというなら仕方ないのだろうか。もしかして、何処からかの国が妙な動きでもしているんじゃないだろうか。いかんな、ラウラが来た所為で少々疑心暗鬼になってしまっているな。早く治さないと――

・・・ん？ちょっと待て？

山田先生、今・・・『彼』って言わなかったか？

「では、入って来てください」

山田先生に呼ばれて、扉が開く。そして廊下側にいた人物が教室に足を踏み入れる。俺の眼に映ったのは首の後ろで丁寧に結ばれた濃いブロンドの髪、まるでアメジストの様な紫色の瞳、華奢にすら見えるスマートな四肢。だが何よりも俺の眼に止まったのは、着てい

る服装だった。

「マジかよ・・・」

それはＩＳ学園の男子制服。ここにいる人間にとって、これ以上なく不必要で着る必要のないもの。だがそれを着ている。目の前の人物はそれを着ているのだ。それが指す理由は即ち・・・

「シャルル・デュノアです。フランスから着ました。この国には着たばかりで、不慣れなところもあると思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生にして三人目の男、シャルル・デュノアは美しく微笑むのだった。

EP16　赤き瞳に映るは・・・（後書き）

はい、十六話終わりです。

零司の過去がだんだんわかってきましたね。まあ、多分予想できている人は多かったんじゃないんですかね。表現的に戦場っぽいのは多々出てきましたから。

そしてシャルル登場です。可愛く描けるかちょっと心配ですが、頑張ってみます。僕って言う女の子って可愛いですよね、僕っ娘ラヴ。

さてと、次回はシャルルと零司を積極的にからませていきます。さてはて、どうなることやら・・・

では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ１７　もう一人の転校生（前書き）

・・・ダークソウルやりてぇ・・・

はい、十七話です。いまいちな展開かと思いますが、これが限界です。許して下しあ。

では駄文ですが、どうぞどうぞ

EP17　もう一人の転校生

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生、シャルル・デュノアは一礼した。優しい顔立ちは中性的な顔立ち、そして何よりも礼儀正しい立ち振る舞いから『貴公子』という言葉は俺の頭に浮かび上がる。

だが、そんなことはどうでもいい。問題は――

「お、男・・・？」

そう、シャルル・デュノアは男だというのだ。ＩＳは女性にしか動かせない。それは周知の事実であり、その例外は今まで俺と一夏だけだった。それがさらに追加されたわけだ。となれば・・・

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方が二人ほどいると聞いて本国より転入を――」

「きゃ・・・」

「はい？」

「きゃあああああああああああーーーーーっ！」

クラスの窓が割れるんじゃないかと言わんばかりの悲鳴。衝撃波の様なその声が寝不足の頭を叩き起こすかのように俺の鼓膜を激しく振動させる。

「男子！三人目の男子よ！」

「三人目もうちのクラスなんて！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「新しい男子！これでバリエーションが増える！」

それにしても元気だな、うちのクラスの女子一同。これだけうるさいと他のクラスにも響いてるんじゃないだろうか。それにしても最後の女子、バリエーションって何だよ。深くは訊く気ないけどよ。

「あー、騒ぐな。静かにしろ、口を噤め。あまり騒ぐと口を縫い合わせるぞ」

至極面倒くさそうに千冬さんがぼやく。さらっと怖い事言っていたのはスルーの方向で。

「デュノア君ははまだ日本に着いたばかりですからあまり負担を掛けないようにしてあげてくださいね」

「黒瀬、お前がデュノアの面倒を見てやれ」

「・・・俺ですか」

千冬さんからの指名に苦い顔を浮かべてしまう。別に男子であるデュノアの世話をすること自体は嫌なわけではない。ただこのタイミングで俺にそれを任せますか、普通。

「俺じゃなくてもいいんじゃないですか？」

「このクラスの馬鹿共に任せたらどうなるか分かったものではない」

「じゃあ一夏でも・・・」

「こいつは自分の事で手一杯だ。それにお前は年長者だろう、年下の世話をしてやれ」

どうやら何言っても無駄の様だ。なんで俺がと少々腑に落ちないが、担任教師の命令となれば仕方がない。

「席は世話役に近い方が良いだろう。泉、隣を開けてやれ」

「はーい」

「ありがとうございます」

「いやいや、いいのいいの！」

俺の右隣に座っていた女子がデュノアの紳士的な笑みに顔を赤らめながら移動し、その席にデュノアが座る。

「では、このまま授業を始めるぞ」

俺はデュノアを一瞥する。すると彼は嫌みのない笑顔を向けてきた。だが俺はそれに笑顔を返すでもなく、小さくため息を吐いたのだった。

・

「・・・では二時間目の授業はここまでだ、三時間目からはＩＳの実施訓練だ。遅れるなよ、黒瀬」

「なんで俺にピンポイント注意なんですか？」

「授業中に半分以上寝ていたんだ。注意したくもなる・・・あと織斑、お前には渡す課題がある、一緒に来い」

「・・・はい」

そう言い残し、千冬さんは山田先生と一夏を連れて教室を後にした。ホームルームを終えた後、山田先生と千冬さんの視線を感じながらも俺は眠気と出席簿チョップの痛みに耐えながら必死に授業を受けていた。結果は・・・まあ、千冬さんの言葉通りですよ。恐ろしかな、人間三大欲求。

「あの・・・黒瀬さん」

「ん・・・ああ」

そんな事を考えながら身体を伸ばしていると声をかけられ、そちらを向く。そこには転校生シャルル・デュノアが立っていた。見れば見るほど、気品の良さがうかがえる。さすがはフランスの紳士。

「挨拶が遅れました。初めまして、僕はシャルル・デュノアです。よろしくお願いします」

自己紹介してくるデュノア。ちなみにデュノアが話しかけてきたのは今が初めてだ。一時間目の休み時間はこちらに話しかけようとするそぶりがあったが俺が眠そうだったので遠慮したのと女子に包囲されてこちらに話しかけられなかった様だ。

まあ、それはそうと。挨拶をされたなら返すのが礼儀ってもんだろう。わびさび大事、日本の美学。

「黒瀬零司だ。一応、お前の面倒を見る事なった。何かあったら言ってくれ、出来るだけの対処はする」

「はい、ありがとうございます」

「それと敬語はいい。男同士だしな」

「わかりま・・・わかったよ、黒瀬君」

「零司でいい」

「じゃあ僕もシャルルで」

「ああ、よろしくシャルル」

柔和な笑みを浮かべるシャルルに失礼かもしれないが返事だけで応える。

「さてと、簡単な自己紹介も終わった事だし・・・移動するか」

「移動？」

「話、聞いてなかったのか？　次はＩＳの実施訓練だぞ・・・それとも女子と一緒に着替えたいのか、お前は」

「・・・あっ！う、うんそうだね！」

なんだ、その「そういえばっ！」って反応は。フランスでは男女一緒に着替えていたのか？　けしからん。

「ともかく移動だ・・・さ、行くぞ」

シャルルの手を取り、すぐさま教室を出ると廊下を速足に歩き出す。

「俺達は基本的にアリーナの空いてる更衣室を使用する。実習する時はいつもそうなるから、早め慣れた方が良い。まあ、慣れるまでは俺がしっかりエスコートしてやるけどさ」

「う、うん・・・」

・・・どうしたんだ？　なんかちょっとよそよそしいな。落ち着きがないというか・・・

「トイレだったら恥ずかしがらずに言ってくれよ。ちゃんと案内するから」

「ち、違うよっ！」

「そうか、それはよかった。でもトイレの位置はちゃんと覚えておけよ。数少ないから」

話しながらも足を止めるわけにはいかない。速度を緩めて歩いてな

んかいると――

「来たっ！皆、こっちよ！」

「あ、黒瀬さんも一緒だ！」

「・・・さっそく来やがったな」

階段から顔を出してきた女子一団。男子転校生、そんなおいしい情報を噂が大好物の十代女子達が逃すわけがない。襲撃は必須だ。

「逃がさないわよっ！」

「目標はおそらくアリーナに向かってるわ！先回りして道を塞いで！」

指令を下してるのは二、三年の女子だ。一時間目は教室に入れずに外から見ていた為だろうか、やたら熱気が籠っている。

「黒髪も良いけど、金髪も捨てがたいわね！」

「きゃああっ！　見て見て！　二人！　手！　手を繋いでる！」

「年上の黒瀬さんが年下のデュノア君を引っ張って行くのね！」

「黒瀬さんと言ったら織斑君だったけど、デュノア君も似合いそう！」

「シャルル・デュノア・・・新しい素材、惹かれるわ」

津波の様に押し寄せて来る女子達から逃げるように走る。それはそうと俺と一夏のカップリングはもはや確定しているのか？　断固として訂正を要求する。というかお願いします、止めてください。

しかしどうしたものか。女子達の会話から聞くに通常の道は彼女らによって閉鎖されているだろう。強行突破するにしてもかなり時間がかかってしまう。もし遅刻なんてしてしまえば、千冬さんの地獄カリキュラムの餌食になってしまう。それだけは避けなければ！

「どうにか抜け道を・・・」

走りながら考えていると、俺の眼に逃げ道が見えた。

「シャルル！　右だ！　窓、窓！」

「ええっ！？窓って・・・！」

俺の発言に驚いている様だがそうしなければ逃げられない。今チラッと後ろを見たが女子達が手を伸ばし、夜の校舎でやったら完全なホラーになるような絵になっている。文字通り、もうすでに女子の魔の手はそこまで迫っているのだ。

「俺が先に入るから、後から入れ！」

「ちょ、ちょっと待って！」

「行くぞ！」

返事を待たずしてシャルルの手を離すと通路の突き当たりにある右側の窓へと全力疾走。到着したら即座に鍵を開けて、外へと飛び出

る。

「こちらへ逃げ込め！」

「う、うん！」

窓から廊下を覗き込んで手招きをすると、シャルルも覚悟を決めたのか走る速度を上げる。だが始まりが遅かった為か、その後ろスレスレを女子達の手が掠めている。

「跳べっ！」

俺の言葉を聞き、シャルルは廊下を蹴った。

「逃がさないわよっ！」

「あっ！」

だが飛んだ瞬間にとある女子の指が少しシャルルの制服に引っかかり、バランスを崩してしまう。届きはするがこのままじゃ・・・

「うわっ！」

「うおっ！」

ドシャッ！

飛び込んできたシャルルを衝突という形でキャッチした俺はそのまま勢いで地面へと倒れ込む。だが何はともあれ、校舎からは脱出できた。

「シャ、シャルル大丈夫か？」

「う、うん大丈夫だ・・・よ」

返事をして身体を起こすと、こちらを見てピタッとシャルルの動きが止まる。もの凄い至近距離にシャルルの顔が在る。その距離、数センチといったところか。

しかしなんだろうか、凄く恥ずかしい感じがする。元々シャルルの顔は中性な顔立ちをしている為かただの男に見られている気がしない。いかんな、これでは女子達の望んだ展開ではないか。

「おい、シャルル――」

「まさか初日からこんなハプニングなんて！」

「黒瀬×デュノア！これからのブームはこれね！」

「これが世界の選択なのね！」

そして俺の言葉を遮る様にして響く女子達の嬌声。クソッ、こう考えると窓からの脱出は失敗だったか。しかし、今はいらぬ噂よりも現実。鬼教官から地獄への片道切符を手渡されるのよりはマシだ。

「シャルル、とにかく移動だ！」

「・・・うぁ」

「は？」

「うあああああああっ！」

声をかけるとシャルルは叫び声を上げながら走り出す。一体どうしたというんだ、急に走り出すなんて・・・まあ理由は後で聞こう。とにかく今は――

「シャルル、ちょっと待て！そっちはアリーナじゃない！」

あのフランス人をとっ捕まえなければ！

・

「ゼェ・・・ゼェ・・・と、到着だ」

「ハァ・・・ハァ・・・う、うん」

バシュッと圧縮空気が抜ける音が鳴り、第二アリーナの男子更衣室のドアが開かれる。俺はとりあえず、近くにあったプラスチック製のベンチに腰を掛ける。疲れた・・・なんでこんなに走り回らなくちゃならないんだ。

「ご、ごめんね・・・零司」

「い、良いってことよ・・・とにかく、早く着替えよう」

息を整えながら、制服のボタンを外してベンチに投げると流れる様にシャツも脱ぎ捨てる。急げ急げ、このままでは本当にシャレにな

らない。ジョークとかそういうセンスは皆無だからな、あの人・・・・

「・・・で、なんでお前は着替えないんだ？」

「き、着替えるよ？」

「そうか、だったらその顔を覆う手を作業に回した方が良いぞ」

そう言ってシャルルの背を向けると着替えを続け、ものの一分もかからずして俺は着替えを終える。

「よっと、俺は準備できたぞ」

「うん、僕も終わったよ」

・・・やたらと早いな。制服の下にでも着ていたのだろうか。出来ない事は無いが、アレはなるべくしたくない。未だに治らぬ精神疾患、短時間ならまだしもＩＳスーツを一日中着ているというのは、結構キツイ。

「よし、行くか」

「あ、あのさ、零司」

ドアへと向かおうとすると呼び止められる。一体どうした、早く行かないと千冬さんにどやされるぞ。

「初日から、こんな風に迷惑かけてごめん」

そう頭を下げて来るシャルルに俺は頭を掻いて言った。それを見て、俺は肩を竦める。

「別にいいよ。ある程度は予想できてたし、あんなのそう連続してはこない。ほとぼりが冷めれば――」

「それもあるけど・・・なんだか零司、僕の面倒を見るのを嫌がってたから」

「それは・・・」

そう言って苦笑するシャルルに俺は少し戸惑う。どうやらシャルルは朝に俺が面倒を見るのを渋った事を気に掛けていたようだ。

「止めろよ、そんな風に頭を下げられたら俺が悪者みたいじゃないか」

「でも・・・」

「いいって、気にしてないから」

言いながら内心、俺は自分に呆れていた。まったく子供か、俺は。年下の面倒を見るのも、年上の、人生の先輩としての役目だろうに。それを身内の話でそれを渋るなんて・・・

「こっちの方こそ、いらない気を使わせたな・・・悪い」

とにかく面倒くさがるのは止めだ。ラウラの事もあるが、これは俺の事情だ。それを理由に彼の対処を変えてしまうというのはさすがに自分勝手だろう。

「これからはしっかり面倒見させてもらうけど・・・いいか？」

「うん。僕も面倒がられない様に頑張るよ」

差し出した手を握り、しっかりと握手をすると笑顔を交わす。彼、シャルル・デュノアがどういう人物かという疑いが在るにはある。だが、これとそれはまた別だ。この学園にいる限りが学園の生徒だ。ならば、しっかりと面倒を見よう。

「ま、改めてよろしくってことで――――」

「・・・ずいぶんと仲の良い事だな」

「・・・っ！？」

そう思った瞬間だった。俺の・・・いや俺とシャルル両方の心が凍った。ドアの方から聞こえてきた声はやけに冷静で一種の恐怖を覚えさせる。俺達は二人揃って、油の切れたブリキ人形の様にギギギ――――と声の主を見た。

「「お、織斑先生・・・」」

「時間を忘れて友情を深めたお前達には特別に訓練を追加してやろう。そこでさらに友情を深めるが良い・・・嬉しいだろう？」

「「・・・はい」」

反論する元気もない。俺とシャルルは揃って素直に返事をすると、がっくりと項垂れたのだった。

EP17　もう一人の転校生（後書き）

はい、十七話終了です。

う～ん、シャルルが可愛く書けない（＾ω＾；）。ほかの作者さん達はどんな感じなんだろうか・・・今後の課題ですね（ーωー；）。

ついに夏休みも終わってしまいました・・・いやぁ、早いもんです。今後は更新のペースが遅くなってしまいますが、読者の皆さま、どうかご了承くださいｍ（＿＿）ｍ。

さてと次回ですが・・・まだまだシャルルのターンは続きます。ラウラもからませたいんですが・・・あの娘自分から関わっていくタイプじゃないからな・・・どうしよ。

感想やご意見、質問などがありましたら気兼ねなくどうぞ。一つ一つが作者の執筆動力になりますｗ

では、また（＾ω＾）ノシ

EP18　信頼と疑い（前書き）

マッハで投稿してやんよ！（＃。д。）

カニス風に十八話投稿です。いやぁ、なんだかんだでそこまで時間は空きませんでした、よかったよかった。

表現の枯渇などで筆が進まない作者の駄文ですが、どうかよろしくお願いします（´д`；）

EP18　信頼と疑い

美しく配置された花壇、そしてそこに咲き誇る季節の花々、欧州風の石畳がなんとも落ち着いた風情を出している。ＩＳ学園屋上、俺とシャルルは昼休みに一夏に呼ばれてそこに来ていた。

「しっかし、災難だったな」

「「ははは・・・・」」

ついさっきまで続いていたＩＳの実施訓練の事を思い出し、俺とシャルルは乾いた笑いを浮かべる。遅刻した俺とシャルルに課せられた罰は実習で使ったＩＳを格納庫へと戻せという、思ったよりも軽いもので済んだ。転校初日、初実習というシャルルの事も考えて、少しはオマケしてくれたのだろう。なんだかんだで昔よりも優しいんだよな、鬼教官の称号も返上かな。

「・・・どういうことだ」

そんな事を考えていると、少し沈んだような声が聞こえる。篠ノ乃だ。

「天気が良いから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな・・・！」

チラッと篠ノ乃が横に視線をやる。そこにいるメンバーは俺、シャルル、それにオルコットと凰だ。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食べた方が美味いだろ」

「それはそうだが・・・」

何か言いたげにしながら拳を握り締める篠ノ乃。まあ、言いたい事は大体分かる。おそらくこの屋上での昼飯、元々は篠ノ乃が一夏を誘ったんだろう。「一緒に食べないか」って感じに。だけどそれを聞いた一夏はクラスに戻ろうとしたオルコットと凰を、そして遅れて格納庫から出てきた俺とシャルルを誘ったんだろう。

そして屋上に着てみれば、なんと篠ノ乃は手作り弁当を持っているではないか。早朝に介抱している食堂のキッチンを利用して作ったのだろう。薄桃色の手拭いに巻かれたそれを見てみれば当然の如く、二人分。

つまり篠ノ乃にとっては「好きなアイツと二人きりの昼食」ってのを邪魔されて少々ご立腹な心境ってところか。まずったな、そうと知っていれば断っても良かったんだが・・・

「・・・すまんな、篠ノ乃」

「いえ、悪いのは黒瀬さんでは無く一夏なので・・・」

「え？　俺、なんかしたか？」

「「・・・なんでもない」」

ため息混じりの声が篠ノ乃と重なる。篠ノ乃にとっては結構思いきった行動であっただろうに・・・ここまで来るとちょっと可哀想でもある。おい一夏、お前いい加減にしろよコラ。

「まあまあ、そんなに気を落とさないの」

「一夏さんの言う通り、食事は大勢の方がいいですわね」

「・・・お前らは元気だな」

「そう？　気のせいじゃない？」

「いつも通りでしてよ？」

見事な笑顔だよ、代表候補生のお二人さんよ。篠ノ乃の抜け駆け阻止がそんなに嬉しいか・・・嬉しいんだろうな、多分・・・

「はい一夏、あんたの分」

「おお、酢豚か」

「そ、食べたいって言ってたでしょ」

鳳の投げ渡したタッパーの中には酢豚が詰まっていた。肉もそうだが大きめに切られた玉ねぎやピーマンなどの野菜もとても旨そうだ。料理の練習をしていたというのは耳に入っていたが・・・結構やるな、鳳。

「コホンコホン――　一夏さん、私も今朝はたまたま偶然何の因果か早く目覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければお一つどうぞ」

「お、おう。あとでもらうよ」

オルコットも負けじとバスケットを差し出す。そこにはトマトサンドやタマゴサンドといった色とりどりのサンドイッチが綺麗に並んでいる。見た目は結構旨そうだが、何故か一夏が引いている。

「どうかしたのか、一夏」

「いや！どうもしてない！」

明らかにどうかしてるだろ。そして凰、なんでお前はうわぁ・・・って顔をしているんだ。何かあるのか、このサンドイッチに。

「ねえ零司、この食事に僕が同席してもよかったのかな」

一夏へと行われる女子達のアピールを見て、シャルルが俺の隣で遠慮がちに言ってくる。正直、俺も同じ心境だ。ここにいるだけで篠ノ乃はまだしもオルコットと凰からどんな攻撃が飛んでくるのかと、内心では小さくため息を吐いている。

「まあ、いいんじゃないのか・・・というか、今更席外すのもあれだろ」

「でも邪魔になってないかな」

「せっかくのお誘いだ、断るのも一夏に失礼だろ」

まあ、ぶっちゃけ一夏に失礼とかそう言うのは無いんだけどさ。

「それにこの学園に来て初めての食事だ。知った顔のほうが気楽だろ・・・な、皆」

同意を求める様に皆に言うと――

「まあ、黒瀬さんがそう言うのなら・・・」

「同じ代表候補生として、仲良くして行きませんと」

「ま、私はほとんど初対面なんだけどね・・・」

「あんまり気にするなよ、シャルル」

――と言ってそれぞれが了承する。だがな一夏、お前は気にしろよ、色々と。

「とまあ、こんな感じで・・・あんまり遠慮とかするなよ。せっかく同じ学園にいるんだ、仲良くしていこうぜ」

そう言って締める。すると少しの間、シャルルは呆気に取られた様になっていたが、すぐに表情を変えた。

「ありがとう、零司」

無防備な笑顔。綺麗と言うよりも、可愛らしいという言葉が似合いそうな笑みだった。女子達もこういう笑みがあるから、護って上げたいと思うのだろう。確かに母性本能を擽られそうな感じはする。

「礼を言われるような事じゃない。むしろ礼を言うべきは一夏達の方だろ？」

「そうかもしれないね・・・でも、ありがとう」

再び礼を言うシャルル。まったく、こういうところがシャルルの紳士足る所以なのかもしれないな。礼を忘れず、それをはっきりと相手に見せる。最近の若者達に見習わせたいくらいだ。

「まあ、話はこれくらいにして食事にしよう。午後の授業だってあるんだ」

「そ、そうだね。授業に遅刻したら大変だ」

慌てた様に頷くシャルル。俺は別に何か強調する様に言ったわけではないが、どうやら先の授業から遅刻＝体罰対象という公式が出来てしまっている様で、必要以上に遅刻に対して警戒する様になってしまったようだ。まあ、遅刻するのはいけない事だし、しなければしないで良いんだけど。

「よし、じゃあ箒。俺の分の弁当くれないか？」

「・・・・・」

弁当を求められ、それを無言で突き出す篠ノ乃。おお、緊張してる緊張してる。なんだかこういうのは見ていて微笑ましいのう。

「じゃあさっそく・・・おおっ！？」

開かれた弁当を見て、一夏が歓喜の声を上げる。覗き込んで見ると、鮭の塩焼きと鶏の唐揚げ、コンニャクとゴボウの唐辛子炒めにほうれん草の胡麻和えというバランスのとれた献立の数々が詰められていた。

「おお、これは凄いな！どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで。あくまで私が食べる為に時間をかけただけだ」

「そうだとしても嬉しいぜ。箒、ありがとう」

「ふ、ふん・・・」

鼻を鳴らしながらも、嬉しそうに自分の弁当箱を開ける篠ノ乃。しかし凄いな、俺が教えた時よりも明らかに腕が上がってる。味無しチャーハンを作っていたのと同一人物が作ったとは思えない。こんなにメキメキと腕が上がるものなんだな・・・これも愛ゆえの力か・・・

「何ニヤニヤしてるんだよ、零司」

「ん？　いやいや別に・・・なあ、シャルル」

「そうだね、仲睦まじくて何よりだよ」

顔に出ていたのか一夏に指摘されてしまったが、それを聞きながらも俺はシャルルと共に笑みを浮かべる。初々しい篠ノ乃を見ていたら、そりゃニヤニヤもしたくなるってもんだよ。はー、青春してるなこいつら。

結局、俺は終始その笑みを浮かべたままで昼の一時を過ごすのだった。

・

「お引越しです」

「はい？」

俺は眉を顰めて、ドアの前に立つ山田先生を見た。時刻は放課後、場所は学生寮の自室の前。帰りのホームルームが終わった後、部屋割りの話でシャルルが千冬さんに呼ばれた為に俺は一夏と共に帰る事にした。放課後に行っている訓練にどうも身が入らない為に、その理由を一緒に考えてくれとの事だった。それはお前の集中力の問題なんじゃないのかとも言いかけたが、話も聞かずにそれで片付けてしまうというのも無責任だと思い、部屋に戻って話し合いをする予定だったのだが・・・

「引越しって・・・どういうことですか？」

「ごめんなさい、主語を入れて話してください山田先生」

「あ、そ、そうですね。えっと、織斑君がこの部屋からお引越しです」

なるほど、それなら意味わかるよ。うん、なるほどね、一夏がこの部屋からお引越し・・・つまり部屋移動になるわけだ。よし、ならば次の質問に移ろう。

「・・・何故？」

「え、えっとですね。織斑君の代わりにデュノア君がこの部屋に住

む事になるからです」

「シャルルが？」

何か知っているかと言わんばかりにこちらに視線を送ってくる一夏。だが無論俺はそんなこと今聞かされた為にわかるはずもなく肩をすくめた。

「デュノア君の部屋は面倒見のいい黒瀬君と同室の方が何かとやり易いんじゃないかって織斑先生が言っていましたよ」

「ああ、なるほど」

ようやく理解できた。つまり寮生活でもシャルルの面倒見てやれってことか・・・

「俺は構いませんけど・・・」

隣の一夏をチラッと横目で見る。その視線に気付いて、一夏は苦笑しながら肩をすくめる。

「俺も別に良いですよ。じゃあすぐに準備します」

「はい、すぐに準備しちゃいましょう」

一夏と一緒に山田先生は部屋に入るとテキパキと引越しの準備をすると三十分程度で終わった。引越しの準備と言っても、アタッシュケースとボストンバックに荷物を積めるだけだったようだが。

「じゃあ零司、話は夕食にでも」

「おう、悪いな一夏」

「別にいいって」

「じゃあ部屋まで案内しますね、それでは黒瀬君」

そう言い残すと山田先生に連れられて、一夏は部屋を出て行った。
それを見送り、無意味に立ち尽くす。知っている顔とは言え、新しい人が同室に来るのを待つというのは少し緊張する。

「・・・っと、そんなことよりも」

良く考えたら丁度いい。一夏との話し合いも後になった事だし、元々やりたかった事をしよう。

奏にもらったノートPCの置いてある机に着くと電源を入れる。数秒してディスクトップが展開され、そこから三つだけあるアイコンの内の一つをクリックする。するとディスプレイにコード入力欄が現れる。そこにパスコードを入力する。

『コード入力・・・確認・・・・認証』

「よし」

『こんにちは、クロセレイジ様。ご用件は?』

「奏に繋いでくれ」

聞こえてきた電子音声に向かってそう告げると画面が暗転し、ディ

スクトップとは違う光景を映し出す。そこは無機質な銀色の金属壁と黒いデスク、そしてそのデスクでいつもの白衣姿のままで腕を枕にしてスヤスヤと寝息を立てる奏の寝顔が合った。

『すー・・・すー・・・』

「おやおや・・・安らかな寝顔だことで」

あまりに無防備な寝顔な為に無意識に笑顔が零れて来る。画面の向こう側の景色、それは奏の所属している研究所にある彼女の研究室だ。それは日本政府に厳重に隠された最重要機密の研究施設であり、普通だったらどんな手段を取っても外部からの通信手段は無いのだが、このノートＰＣには奏のパソコンへのアクセス権限がある為にこうやって通話などにも使えるのだ。

それはそうと、本当は奏に聞きたい事があったんだが・・・これじゃあ訊くに訊けないな。さてはてどうしたものか・・・

『お兄ちゃん・・・えへへ・・・』

どうやら夢の中に俺が出て来ているのだろう、俺の名前を呼んでいる。だがしかしどんな夢を見てるのだろうか。笑っているところを見るとそこまで悪い夢ではなさそうだが・・・というか笑みがちょっと幸せそうでありながら、ちょっと怖くもあるのが不思議だ。

「しかしどうしよう・・・起こすわけにもいかんしな」

『やっほー、かーなん。お邪魔しちゃうよ～』

ふとＰＣのスピーカーからドアが開くときの圧縮空気の音ととぼけ

た声が聞こえて来る。それは取っても訊き覚えがあり、無意識にゲッと声が出そうになるくらいには俺が苦手としている人物の声だった。

『束さんは暇で暇で国連にハッキング（イタズラ）したくなっちゃうよ～・・・あれれ？』

真っ青なワンピースにエプロン、腰には大きなリボン。そして頭にはウサミミのカチューシャを付けた、なんともその場には場違いな格好をしたその研究施設の大ボスが画面の端っこから顔を出した。

『れーくんじゃないか！おっひさー！ブイブイ！』

「はあ・・・お久しぶりです、束さん」

こちらに向けてダブルピースをする束さんに俺は微妙な笑顔を浮かべる。この無駄にテンションの高い女性、彼女の名前は篠ノ乃束。篠ノ乃箒の姉であり、千冬さんの親友、そしてＩＳの創造主である人物だ。

『本当に久しぶりだね～、十年ぶり？』

「一年ぶりくらいです・・・大体、十年前はまだ俺はあなたに会ってませんよ」

『またまた、れーくんったら照れちゃってさー・・・相変わらず可愛いねぇ』

「またまたってなんですか・・・それに可愛いっての止めてください、結構傷付くんで」

重苦しいため息が零れる。こんな人物が研究所の所長なのかと疑いたくなるが・・・現実とは小説よりも奇なり、案外事実はこんなものだ。

『かーなんにご用なのかな?』

「まあ、そのつもりだったんですけどね。寝てるみたいですし、日を改めて――」

『うっ・・・ううん・・・』

掛け直す、と言おうとした時だった。目を擦りながら奏が頭を起こした。

『はれ? お兄ちゃん?』

「ごめんな奏、起こしちゃったな」

『え? だってさっきまでお兄ちゃんは私の事・・・』

と、そこまで言って完全に目が覚めたのか、何故か顔をほんのりと朱色に染めて行く奏。待て、何故顔を赤らめる。

『おやおやぁ?かーなんはどんな夢を見ていたのかなぁ?』

『って、束さん!?なんで私の研究室にいるんですか!?』

『それは私が束さんだからだよっ!』

『どんな理由ですか！勝手に入らないでくださいって言ってるじゃないですか！』

『それは無理さ、何故なら私は束さんだからだよっ！』　（キラッ

『ですからそれじゃ答えになって・・・はあ、もういいです』

『それよりもかーなん、大好きなお兄ちゃんを置いてけぼりだよ？』

『そ、そうでした。何かご用ですか、お兄ちゃん』

相変わらずコント見たいなことしてるんだな、この二人は。仲が良い事は良い事なんだけどね。

「いや、実は少し調べてもらいたい事があってな」

『なんですか？　お兄ちゃんの頼みならなんでもオッケーですよ』

『エッチなお願いでも？』

『た、束さん！？そういう冗談は止めてくださいよ！』

『満更でもないくせにぃ～・・・ねー、れーくん』

「実はとある人物とその周辺の人達を調べて欲しいんだ」

『スルー！？　君は束さんをスルーするんだね！？』

何やら騒がしいが束さんはスルー進めさせてもらう。いつまでもかまってたら話が進みませんからね。

『わかりました、誰を調べるんですか？』

「デュノア社の社長、そしてその息子のシャルル・デュノアっていう奴だ」

『デュノア・・・ですか』

画面の向こうで奏が苦々しい顔をする。おそらく、奏的にはデュノアの名前を聞くこと自体、嫌悪の対象なんだろう。普通の人間ならこんな反応をする事は無いだろう、だが奏ならば理解できる。

俺とデュノアの関係を・・・因縁を知っていれば、なおさらだろう。

『どうして今更デュノアなんて・・・』

「必要なんだ、頼む」

もはや関わりたくもない。奏はそう思ってるに違いないだろう。だが、因縁があるからそれでも俺は知らなければならない。彼、シャルル・デュノアの事を知らなければならないのだ。

『ねね、れーくん』

「なんですか、束さん」

『なんでれーくんはそのフランス人に興味があるのかな～？』

「ＩＳを操縦できる男子としてこの学園に来てるんですよ、そいつは」

『・・・ふぅん』

俺の言葉を聞いて、束さんが少し眉を顰める。

『デュノアでＩＳ操縦者の男子・・・ですか。なんだか少しキナ臭いですね』

「俺が面倒をみる事になってな。良い奴だし、疑いたくはない」

昼間のシャルルの顔が脳裏を過る。屋上での言葉に嘘は無い。シャルルとは仲良くなりたいと思うし・・・何よりも優しい、少し癒される様な笑顔。あの笑顔が偽りの物ではないと信じたい。だが、彼は・・・

「だがあいつはデュノアだ。となれば念には念を入れておく必要がある」

冷静にそう言い放つ。デュノア、それは俺が最も警戒しなければならない名前の一つ。シャルルは大切な友人だと思っている。だがこれとは話が別だ。

「ま、アレに関わってなければ万々歳なんだがな」

『・・・わかりました。でも一つだけ、約束してください』

「なんだ？」

『絶対に・・・無理しないで』

訴える様な眼をして、奏は俺にそう言った。

「急にどうした」

『お兄ちゃん、なんだか昔の眼をしていました』

指摘されて、近くにあった鏡を見る。鋭く、温度が極端に下がっている瞳。それは俺の頭のスイッチが切り替わっている・・・昔の軍人だった頃の自分が表に出始めているという証だった。

『その眼をしてる時のお兄ちゃんはすぐに無茶して、自分の身を犠牲にしようとするから・・・ですから、お願いです。絶対に無茶だけはしないでください』

「・・・ああ、わかったよ」

奏を安心させる為にも微笑みかける。そんな俺と奏を見て、束さんが口を開いた。

『かーなんは心配し過ぎだよ。れーくんは本当に無理しなきゃいけない場面っていうのを心得ていると思うんだけどな』

「そうだぞ・・・他人よりもちょっと無理する場面が多いだけだ」

『お兄ちゃん・・・もう』

やれやれといった風に奏の頬が緩む。さっきの一言は束さんなりに気を利かせてくれたんだろう。ありがたい、後で何かお礼でもしなくちゃな。

『・・・一週間後くらいには結果が出ると思いますので、その時に情報を渡しますね』

「ああ、頼む・・・奏」

用件が終わり、通信を切ろうとした奏を呼び止める。キョトンとした顔をする奏に俺は口を開いた。

「お前も無理はするなよ・・・」

『わかってますよ』

「ならいいんだ・・・おやすみ、愛してるよ」

『・・・〜っ！　それ反則ですよ〜』

顔を紅く染めて俯く奏。相変わらず照れ屋だな、家族なんだから愛してるに決まってるだろうに。まあ、そんな顔を赤くする奏も可愛くて、とても俺得な感じだからいいんだけどさ。

『れーくんれーくん、束さんは？　束さんには愛してるコールは無いのかな？』

「はいはい、タバネサン、オヤスミナサイ、アイシテルヨー」

『うわ〜い、れーくんの愛してるコールで束さんは十万馬力で元気百倍、全力全開で頑張っちゃうよー！』

「何を頑張るのか知りませんけど、ほどほどにしてくださいよ・・・おやすみなさい、奏、束さん」

最後に挨拶を付け加えて、通信を切るとノートＰＣを畳んで椅子の背もたれに寄りかかる。

「それにしても・・・大変だな、色々と」

六月が始まってたった二日で状況の変わり様が凄まじい。二人の転校生、片やドイツ軍人であり、俺の過去を知る少女。片や因縁の多きデュノア社の社長の息子であり、三人目のＩＳ操縦者の男子。

狙ったかのような二人。まるで過去が俺に忘れるなと叫んでいるかのようにも思える。いや、それとも・・・

「乗り越えて見せろって事かね・・・」

コンコンッ

そして見計らったかのように部屋のドアがノックされる。一呼吸入れて、頭の中のスイッチを切り替える。

「どうぞ」

ノックに応じると遠慮がちにドアが開き、向こう側にいたシャルルが現れる。彼は浮かべる、にこやかに、そして優雅に、いつも通りに笑みを。

「こんばんは、零司」

「ようこそシャルル、話は聞いてるよ・・・改めてよろしくな」

横のトルソーの鏡、そこに映る俺のシャルルへと返した笑顔は瞳だけが冷たく笑っていなかった。

EP18　信頼と疑い（後書き）

はい、十八話終了。

零司が若干黒い感じになってます。普段は優しいお兄さんな感じですけど、仕事の時には結構容赦ない感じになるんですよ。モデルとしては黒（ヘイ）さんみたいな感じ・・・いや、それは言い過ぎか（＾ω＾；）。

ひょっこり束さんを出してみましたが・・・キャラにあってるか不安です。こういうハイテンションなキャラは好きなんですけどね・・・描き辛くて困る（ーωー；）。

さてと次回はどうなる事やら、来週から授業が本格化するので更新ペースが亀になるかもしれないです。どうかご了承ください。ｍ（＿＿）ｍ。

では、また（＾ω＾）ノシ

EP19　彼の思い、彼女の想い（前書き）

活動報告ってなんだっけ・・・

どうも十九話です。投稿が遅れてすみませんｍ（＿＿；）ｍ。今後はちゃんと守れるように頑張ります。

では、いつも以上にグダグダですけど・・・どうぞ

EP19　彼の思い、彼女の想い

目を開けると、そこはいつもの銀色の壁に囲まれた空間だった。

無機質な壁の部屋の中、そこには俺を含めた数人の子供達がいた。

年齢は十歳。白い、布切れの様な服を着た子供達。それぞれが笑い合い、今日行った事を話し合っている。

「今日はノルマを二つこなしたんだ。全部バラバラにしたんだよ」

「僕は目標の頭に命中させるのに成功した。これでもう打たれなくて済むんだよ」

「いいな、僕は失敗しちゃったから思いっきり殴られたよ。見てよ、鼻の骨が折れちゃった」

まるで学校のクラスに集まった友達と世間話をするように、その子供達は笑いながら語り合う。

一人、両耳をそげ落とされた子供は血塗られたナイフを持って

一人、片眼の抉られた子供は二つの拳銃を持って

一人、鼻の潰れた子供は手榴弾を持って

狂っている。誰もがそう思う光景。だがこの光景はこの場所では日常。もはやどれが正常でどれが異常なのか。それすらもずれそうな情景を目の当たりにしながらも、意識の奥で平静を保つ。

――俺は違う

――俺は普通だ

――俺は正常だ

「どうしたの×××？」

片眼の無い少年が心配した顔で俺を呼ぶ。止めろ、その名前で俺を呼ぶな。俺は×××じゃない！

「アウフ、どうしたの」

「×××が変なんだよ」

「しょうがないよ、×××はここに来たばかりだから」

五月蠅い！　黙れ！　俺は違う！　お前達とは違うんだ！

「怖がらなくてもいいよ、×××」

「そうだよ、僕たちはこんな姿だけど」

嫌だ！　訊きたくない！　お前らの戯言なんて意味がない！　だから黙れ！

「それでも・・・僕達は幸せなんだよ？」

・

「・・・ハッ・・・ハッ・・・」

目を開けると、そこには銀色の壁は無くなっていた。あるのは学生寮、自室の天井と窓から差し込む煌々とした陽光だった。視界に映ったそれを見て、荒くなっている呼吸を徐々に平常運航に戻していく。

「・・・ハァ」

身体を起こし、今日一発目のため息。ため息を吐くと、その分だけ幸せが飛んでいくと何処かの誰かが言っていたが、今のため息くらいは許して欲しい。

悪夢、今日のは研究所にいた時の夢だろう。夢とは現在ある精神状態から過去の体験を意識の中で再生させる事もあると訊く。だからと言って、ラウラやシャルルがこの学園に来たからって素直に影響を受け過ぎだろ。俺ってこんなに単純な性格だったのだろうか

「れ、零司・・・大丈夫？」

隣のベッドから身体を起こして、心配そうにこちらを見るルームメイトであるシャルルが声をかけて来る。

「なんだかずいぶんうなされていたみたいだけど・・・」

「・・・悪い、変な夢を見ただけなんだ」

「僕、タオル持ってくるね」

笑みに疲労の色が見えたのか、ベッドから出てシャルルはバスルームへと向かった。気が効くな、シャルルは。

「シャルル・デュノアか・・・」

呟いて、腕で目元を隠しながら再びベッドへと倒れ込む。彼とこの部屋で生活を始めて今日で五日目だ。学園での授業は難なくこなし、持ち前の紳士ぶりの所為もあってか何の問題も無しに生活している。なんでもない、ただの優等生の様に見えなくもないんだが・・・

「油断をするな、警戒を怠るな・・・でなければ――」

研究所の夢を見たせいだろうか、あの場所で教えられた教訓が頭の中でリピートされる。いかん、どうも朝一発目と言う事もあってか少々グロッキーになっている様だ。シャワーでも浴びて、頭をすっきりさせるか・・・

「零司、これタオル・・・って、何やってるのさっ!?」

「・・・何って、服脱いでるんだが？」

バスルームから出てきたシャルルは汗の吸った寝巻の上を脱いだ俺を見て、ギョッと目を丸くする。なんだ、その反応は。

「どうして服を脱ぐのさ!?」

「汗ばんでて気持ちが悪い。それにシャワーでも浴びようと思ってな。一夏に呼ばれた時間にはまだ余裕あるし」

「だったらバスルームで脱ぎなよ！」

「別に良いだろ、それとも俺が裸になると何か問題でもあるのか？」

「も、問題は・・・無い事もないというか・・・とにかく、早くバスルーム行って！」

慌てた様子のシャルルに急かされて、面倒だが俺はベッドから立ち上がりバスルームへと入室してから寝巻を籠の中に放り投げ、ジャグジーを捻る。心地よい温水が俺の汗を流していき、そんな中で睡眠の余韻を消し去ると同時に俺は思案を始める。

シャルル、あいつはどうも自室で俺と二人になると何かとやかく言ってくるのだ。先の様に「部屋の中ではもっとしっかりしろ」とか「パンツ一丁でうろつくな」だとかだ。そしてその度にシャルルは俺をバスルームへと追いやることが多い。まるで一人でいる時間を作っている様にも見えなくもない。

「だけど誰かに連絡している節は無かったよな・・・」

一昨日くらい前、いつも通りに首にタオルを掛けたパンツ一丁姿でＰＣをいじっていると部屋に戻って来たシャルルに注意され、今すぐ着替える様にとバスルームへと追いやられた。その時、こちらに視線が来ていない事を確認、そして俺がバスルームへと入っている時に何をしているのかを確認する為に扉を小さく開き、ドアに近い場所にあるトルソーの鏡を見てみた。だが、怪しい行動は微塵もな

く、ため息を吐いているだけだった。

「俺の思い過ごしなら良いんだがな」

奇行が多い割には、それほど怪しい面もない。ただ単純に俺の見ていないところで行動しているというならば話は別だが、それにしたって俺と一緒にいない方の時間の方が短い。だとしたら、それこそ学園側の監視カメラを見せてもらう・・・もしくはそのデータを拝借するしかないわけで・・・

「止めだ止め、こんなこと考えても埒が明かない」

どちらにしろ、今日か明日には奏からのシャルル・デュノアに関する情報が送られてくる。それを待つ事にしよう。現段階でシャルル自身が俺に対して何かしらの危害を加えて来てはいない。ならば今日一日、またいつも通りに接していこう。

そう思いながら、俺はバスルームを出た。

「ふぅ、すっきりした・・・シャルル、お前は浴びないのか？」

「僕は遠慮しておく・・・って」

こちらに振り向くシャルルの顔が引きつる。俺はシャルルの視線を追ってみる。すると、俺は自分がまたパンツ一丁である事に気が付いた。

「あ・・・」

「・・・〜っ！　零司っ！」

力強く叫ばれる俺の名前を口火にシャルルの説教タイムが始まった。
別に意識したやったわけではないのだが・・・いやぁ、慣れというものは恐ろしい。

・

「失礼します」

ノック二回、その後に扉を開く。朝食を終えた俺は電話で千冬さんに呼び出され、職員室まで赴いていた。

「何かご用ですか、織斑先生」

「ああ、渡すものがある」

そう言って千冬さんは机の引き出しから白い大きめの封筒を俺に差し出した。それを俺は受け取ると開けていいのかと千冬さんに目で訊く。すると千冬さんは小さく頷いたので、封を切った。

中身は数枚の書類と・・・俺の顔写真が付いたプラスチック製のカードだった。

「これは・・・」

「人民表にその他諸々・・・お前の身分証明だ、日本政府からのな」

「日本政府から・・・ですか？」

千冬さんの言葉に俺は首をかしげた。何故、政府が俺に国籍を渡すんだ。あまりに捕まらないから痺れを切らしたのだろうか。

「そんなに警戒するな、政府は悪だくみもせずに快く国籍を明け渡した」

「・・・何かしたんですか?」

疑いの・・・そして若干の呆れを含ませた視線を千冬さんに送る。数年間も隠されてきた男性ＩＳ操縦者、そんな問題の塊の様な人物である俺を素直に受け入れるわけもないだろう。すると彼女は肩をすくめて、言った。

「そんな人殺しを見る様な眼をするな・・・何もしていない」

「そうですか・・・」

「ちょっと二、三本、切り落としただけだ」

「これ、返させていただきます」

すぐさま封筒を返す。こんな極道もびっくりな血に塗られた住民票はいらない。どうせならもっと綺麗な方法で持ってきてほしい。しかし、どの部位を切り落としたのだろうか。

「冗談に決まっているだろう・・・こんな話を真に受けるな」

「・・・千冬さんが言うと冗談に聞こえない」（ボソッ

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

軽く睨まれ、俺は目を逸らす。大体、最初に冗談言ってきたのはそっちだろうに・・・

「で、どうやってこの住民票やらを？」

「私の昔の伝手、それに轡木理事長の助力もあってな。なんとか月末トーナメントまでには間に合った」

「・・・なんだか、お手数かけてしまったみたいですね」

「構わんさ。どちらにしろ月末トーナメントまでにはお前の素姓を記しておく必要があった。タイミングとしては好都合だ」

そんな事を言っているが、本来ならかなりの大事である。ドイツ軍属、しかも戦争行為が認められていない『アラスカ条約』が在る中で、戦争行為にも似た事をやっていた俺の情報を黙殺し、それでいて新たに国籍を作るなんて並み大抵の人が出来る事じゃないし、いくら千冬さんでも結構骨が折れただろう。

「・・・なんだかすみません、迷惑ばっかり掛けて」

「構わん、私はそう言ったばかりだがな」

さもつまらなそうに言う千冬さん。ここに来てから・・・いや、ここに来る以前からの方が正しい。この人には本当に迷惑ばかりかけてきた。だがこの人が一度だって見返りを求めた事は無い。心底思

うよ、あなたは本当に優しい人だってさ。

「何を笑っている」

「いえ、やっぱり優しいなって思っただけですよ」

「・・・・何を馬鹿な事を」

零れた笑みを指摘された事に返しを言うと千冬さんはフイッと顔を背けて、机に向かう。ちょっと照れてるのか、そんな行動をする千冬さんを見て、再び微笑んでしまう。

「そういう優しさを出してみれば、男なんてコロッと堕ちると思うんですけどね・・・」

「急になんだ」

「いえ、ただ単純にそう思っただけですよ・・・そう言えば、昔から千冬さん回りって男の噂がないなって」

三年前、俺と出会った時の千冬さんは恋愛とかそういうことをしている場合じゃなかっただろうし、今ならもう身を落ち着かせてもいいんじゃなかろうか。そう、何気なく思った。それなので訊いてみたのだが・・・

「下らん」

と、一言で一蹴されてしまった。

「生憎、今の私には専用機持ちという名前の問題児を多く抱えてい

る。そんな事をしている暇はない」

恋愛事など二の次、今やっている仕事を第一にする。ま、なんとも千冬さんらしいね。なんだかちょっと安心・・・って、なんで俺が安心するんだよ。

「そういうお前はどうなんだ？」

「どうと言いますと？」

「ここはＩＳ学園、選り取り見取りだろう・・・それとも、もう数人摘んでいるのか？」

「するわけないでしょ」

言い方がなんだか少し癪に障ったのでムッとした表情で返す。俺だって自身の恋愛をしている暇はない。ＩＳの疾患を治さなきゃならんし、篠ノ乃の恋も応援しなければならない。それに今はラウラやシャルルもいる。こんなに忙しいのに自分の恋愛などしていられるか。

「ラウラなんてどうなんだ。相も変わらず、お前しか見えていないようだが」

「冗談・・・それにあいつはそんな感情で動く様な奴じゃないでしょうに」

「・・・・・・」

なんだか呆れている様な、憐れんでいる様な、千冬さんはそんな視線を俺に向けて来る。なんですか、その皆が一夏を見る時の様な眼は。

「・・・ともかく、用事はそれだけだ。戻っていいぞ」

「最後に向けられた視線がどうしようもなく釈然としませんが、とりあえず戻らせていただきます。予定もありますので」

「何かあったのか？」

「ええ、あなたの弟さんからね」

言って、頭を掻く。それを見た千冬さんは俺の用事を悟ったのか、

「なるほど」と呟いて続ける。

「月末トーナメントに支障が出ない程度にしてやれよ」

「逆に言えば、支障が出ないならどこまでもやっていいと？」

「まかせるさ。私の口出しする事ではないしな。それに、あいつは簡単に死んだりしないだろう」

「わかりました・・・じゃあ、シャルル待たせているので、これで」

千冬さんの言葉を聞いて、俺は職員室を出る。奇妙な信頼を置かれているな、一夏の奴も。しかし、保護者からお許しが出た。最近、ちょっとばかしストレスが溜まっている。思いっきりぶつけさせてもらおう。

「さてと・・・覚悟しろよ、一夏」

確認はしていないが、この時の呟く俺の顔にはなんとも悪い笑みが浮かんでいたと思う。

・

「我儘言ってごめんね、零司」

第三アリーナの廊下を歩きながら、ＩＳスーツ姿のシャルルが言った。少しすまなそうにしているので、俺は笑顔で返す。

「いや、構わないよ。むしろ違う視点からの意見をもらえるならば助かるくらいだ」

「そう言ってもらうと助かるよ」

本日は日曜日、学園側もアリーナを全開放している為に実習にいそしむ生徒も多いだろう。しかし、俺とシャルルは実習とは別の理由でこのアリーナに来ていた。

「それにしても、なんでまた俺と一夏のＩＳに興味があるんだ？」

「日本製のＩＳは評価が高いから、デュノア社としてもいろんな比較対象として取り入れてるんだ。その日本製の新型第三世代、興味を持つのはおかしいかな？」

「いいや、よく考えたらそうだな。一夏の『白式』とか他に見ない

感じだからな、色々と」

つまり俺と一夏のＩＳの視察ってところだろう。何処の企業でもやっぱり何かしらの比較対象が必要だ。それはＩＳに限った事ではない。昔の軍事企業がアサルトライフルを作成する時にロシアのＡＫを比較対象に出した。大体、それと同じ様な事だろう。

「しかし、さすがは社長の息子ってところだな。企業の事もしっかり考えてる」

「社長の息子・・・ね」

シャルルの顔に影が落ちる。その瞬間を、俺は見逃さなかった。単純にカマかけるつもりだったが・・・やはりこの少年には何かあるな。だがここで深く聞いても、あまり良い情報は得られないだろう。下手に深入りして、逆上されても困る。

「ま、『黒天』の事で訊きたい事があったら言ってくれ。わかる範囲でなら、教えるからさ」

「うん、ありがとう」

そう言って、いつもの表情に戻る。確かに疑ってはいるが、やっぱりああいう顔は見ていて気分の良いものでもない。シャルルはこういう柔和な表情が似合う。

「それにね、他にも理由があるんだ」

「他の理由？」

「うん、零司にはお世話になっているし、何か手伝えないかなってね」

控えめな笑みを浮かべながら、シャルルは言う。優しく、何処か包まれる様な感覚を覚える様な落ち着く笑みだった。同性ながらも引き付けられそうになる。

しかし、こんな優しい笑みを浮かべる人間を俺は疑っている。

違うと信じたい、否定したい。だがそれを頭の奥底が拒否している。

疑え、見極めろ。次、顔を合わせる時は互いに引き金を指に掛けているかもしれない、と。

「零司？」

「・・・え？」

シャルルの声を聞いて、我に返ると目の前にシャルルの心配した表情が合った。

「大丈夫？　なんだかボーッとしてるみたいだけど・・・調子悪いの？」

「だ、大丈夫だよ。そんな顔するなって」

心配そうに言ってくるシャルルにそう返し、無意識にクシャクシャと頭を撫でてしまった。

「ふ、ふぁっ！？」

「わ、悪い」

ハッとなって苦笑を浮かべながら指通りのいいブロンドの髪から手をどける。しまった、シャルルの表情が奏を思い起こさせてしまい、つい癖で優しく頭を撫でてしまった。

「ごめん、妹がそういう顔した時に頭を撫でてやってたから・・・ついな」

うぁ、なんだこの言い訳は。というかどんな言い訳だよ。つまりお前は妹に何処となく似ていたとか言ってるわけじゃねえか。どんなカミングアウトだよ。そしてシャルル、お前もなんて声を上げるんだ。

「いや、これは決してお前が妹に似ていたとい事ではなく、表情が似ていたと言うだけであって・・・ほら、俺ってちょっとしたシスコンだろ？　だから・・・って――――」

自虐も含めた必死の言い訳を続けていると、シャルルの異変に気付いた。ポーっとしたまま、何故か反応がない。

「あのー・・・シャルルさん？」

「う、うわぁ！？」

今度はこちらから顔を覗き込んで見ると再び悲鳴を上げるシャルル。

「ど、どうしたというんだ？」

「あっ、な、なんでもないよ！ちょ、ちょっとびっくりしただけで・・・」

ああ、なるほど。そりゃあいきなり頭を撫でられたらびっくりする人もいるだろう。配慮が足りんな、俺は。

「そうだよな・・・悪い」

「だ、大丈夫だよ・・・」

男として、なんだか撫でられたのが恥ずかしいのか俯き加減に頬を染めるシャルル君。しっかし、こうみると本当に女子みたいだ・・・って、何を考えとるんだ俺は。

「・・・それに・・・」

「ん？　なんか言ったか？」

「な、なんでもないよっ！さ、さあ一夏も待ってるだろうし、行こう！」

「あ、おい。ちょっと待てよ」

恥ずかしさを誤魔化す様にスタスタと速足にアリーナ内に進んで行くシャルルの後ろを俺は歩を早めて追いかけてアリーナに入る。すると――――

「こう、ずばーっっとやってから、がきんっ！どかんっ！　という感じだ」

「なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。　・・・はあ？なんでわかんないのよこの馬鹿」

「防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ」

「正直に言わせてもらうと・・・全然わからんっ！」

という、なんとも不毛な四人の専用機持ちの会話が聞こえてきた。お前ら、アリーナの入り口付近で何をしているんだ。というか、専用機持ち達の会話とは思えない様な内容だ。

「苦戦しているようだな、手を貸そう」

「・・・遅かったじゃないか！」

声をかけるとまるで救いの神が舞い降りたかのような声で応える一夏。ちなみに今の会話を少し変えるだけで、俺と一夏はゲイブン指定にされてしまう。恐ろしいものだ。

「助かった、本気でどうしようかと・・・あれ、シャルル？」

「やあ、一夏。手伝いに来たよ」

「一緒に教えたいっていうんだが、構わないだろ？」

「ああもちろん！頼むぜ、二人共！」

心底嬉しそうに一夏は俺の手を取った。礼を言われるのは嬉しいんだが、他三人の視線が痛い。恨むなら一夏を恨めよ、こいつが誘っ

て来たんだからさ。

「ともかく、現状況を見たい。シャルル、ちょっと一夏と模擬戦してみてくれないか」

「わかったよ・・・じゃあ一夏、お願いできるかな」

「ああ、いいぜ」

一夏の返事を聞いて、シャルルが自身のＩＳを展開する。それを見て、俺は呟く。

「シャルルのは改良型『リヴァイヴ』か」

橙色のフレームをしたそれはいつか山田先生が使っていた『ラファール・リヴァイヴ』に何処となく似ているが、いくつか形状に違いが見受けられる。

まず一対の推進翼は中央で二つに分かれており、普通の『ラファール・リヴァイヴ』の多方向加速推進翼とは違った形を成している。

機体の装甲も小さくシェイプアップされ、アスカートには小型の推進翼を装備。

そして何よりも違うのは通常ならば装備されている四枚の装甲板が全て取り除かれており、代わりに左手の腕部装甲にシールドが一体化され、さらに右手は射撃の邪魔にならない様にスキンアーマーのみとなっている。これらを見るに高速射撃戦闘に飛躍的に特化した機体だと見受けられる。

「うん、この子の名前は『ラーファル・リヴァイヴ・カスタム？』。僕の専用機だよ」

「射撃特化型か・・・ちょっと厳しいかも知れんが、やれるだけやってみろ一夏」

「最初から負けが決定しているみたいに言うなよ」

不満げな顔をする一夏だが・・・ちょっとばかり相性が悪いかな、この戦闘は。まあ、結局は一夏の立ちまわり次第なんだがな。

「模擬戦だからって手加減はしないぜ、シャルル」

「うん、僕もそのつもりで行かせてもらうよ」

双方、小さく笑った後に真剣な表情を浮かべる。準備は整った様だ。俺は競技の審判の様にスッと手を上げ――

「では・・・始めっ！」

声を上げると共に振り下ろす。それを合図に白と橙のＩＳが空中へと飛び上がる。いつの間にか集まったギャラリー達が騒ぎ始める中で、俺は冷静に二機のＩＳ・・・否、『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』を見据える。

「ともかく、見極めさせてもらおうかね」

・

そして数十分後――

「つまり、お前は単純に射撃武器の特性を理解していないんだよ。だからあんなに狙い撃ちにされる」

「そ、そうなのか・・・一応理解はしているつもりだったんだが」

「うーん、知識として知っているって感じなんだよね。実際、さっき僕と戦ってみた時も全く間合いが詰められなかったよね？」

「うっ・・・確かに『瞬間加速』も読まれてたしな」

「お前のＩＳ、『白式』は格闘専用機体なんだから射撃武器の特性を深く理解していないと対戦じゃ勝てんぞ」

「特に一夏の『瞬間加速』は直線的だからね。反応が出来なくても軌道予測である程度は当てられちゃうからね」

「うーん・・・直線的、か」

「先に言っておくが『瞬間加速』中に変に軌道変更するのは止めておいた方が良いぞ。機体に負荷がかかるし、最悪の場合は骨がポッキリいくからな」

模擬戦が終わってから、俺とシャルルのレクチャーを聞いて一夏はうんうんと頷いていた。正直なところ、頭で理解するよりも感覚でやったほうが一夏には向いているのだろう。だが「習うより慣れろ」の一夏だが、説明を一回でも言っておくのと全く言わないのではまた全然違う。

「よし、とりあえず射撃武器の練習してみるぞ」

「え？　でも俺の『白式』には『拡張領域』は無いぞ？」

「使用できなくても、一発撃ってみるだけでも違うもんだ。特にお前みたいなタイプはな」

「はい、一夏」

シャルルに五十五口径アサルトライフル『ヴェント』を手渡され、それと同時に射撃訓練用の的が展開される。

「とりあえず一マガジン、感覚が掴み辛ければ五マガジンってところか」

「脇締めて、左手はこっち・・・そう、その構えて――――」

俺の言ったところにシャルルが補助、それに従う一夏。そんな感じに滞りなく一夏の訓練は続き、一時間程度で粗方のレクチャーが終わった。

「思った通り、呑み込みは早いな」

「だね、少なくともこれで射撃武器の特性は大体理解できたみたい」

「これも二人のおかげだ。本当にサンキューな」

素直な感想を述べる俺とシャルルに一夏は礼を言ってくる。やっぱり理論的に説明するよりも実戦だな、こいつの場合は。

「私のアドバイスはちゃんと聞かないクセに」

「あんなに分かり易く教えてやったのに・・・なによ」

「私の理論整然とした説明に一体何の不満があるというのかしら」

あー、そこの自称専属コーチ三人組。君達も今後教え方を変えた方が良いんじゃないのか？　行っちゃあ悪いが、正直なところあんな教え方では伸びるもんも伸びんぞ。

そんな事を考えていたら、何やら辺りが騒がしくなっていた。

「ねぇ、ちょっとアレ・・・」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど」

ざわめくアリーナの女子達の視線、その先に立つのは漆黒の機体。搭乗者は・・・まあ、この時期にドイツの第三世代型なんてものを乗り回しているのは一人しかいない。

「・・・ラウラ」

ラウラ・ボーデヴィッヒ、まるで重戦車を彷彿させる様な堅牢な機体に搭乗した彼女の冷たい眼差しはアリーナにいる生徒達を軽く見回した後、俺達の方・・いや、一夏へと向けられた。

「おい」

「・・・なんだよ」

とりあえず、といった風に一夏は受け答える。初日からビンタされそうになった奴から呼ばれたって返事しにくいだろう。だがそんな心境、ラウラにとっては知った事ではないのだろう。その証拠にか、全く気にも留めずに俺達の前に飛翔する。

「私と戦え、織斑一夏」

「嫌だ、戦う理由がない」

「貴様に無くとも、私にはある」

冷たかったラウラの瞳に熱が宿る。それは憎しみと怒り、双方の感情が入り乱れた炎だろう。

「貴様に・・・貴様程度の男の為に私の憧れは失われた。私は貴様を許さない、絶対に」

「憧れ・・・千冬姉か」

今度は一夏の方が表情を歪める。第二回『モンド・グロッソ』の時に起きた事件に巻き込まれてしまった自分の所為で千冬さんの経歴に傷が付いた事を、その原因となってしまった無力さを一夏は悔いている。そう思う彼には少なからず、ラウラの言葉に引っかかるところが在るのだろう。

「織斑教官の事もある・・・それ以外の理由もな」

そう言うとラウラの視線が俺を一瞥したが、すぐに一夏へと戻る。

「貴様は障害だ、故に排除する。是非もない」

「戦いたいなら、また今度にしてくれ。俺は訓練中だ」

「意地でも戦わないつもりか・・・ならば――」

瞬間、ラウラに動きが合った。右肩に取り付けられている大型のリニアカノンの砲口が前方にいる一夏を捉える。あいつ、ここでおっぱじめるつもりか。

「――戦わざるを得ないようにしてやる！」

刹那、リニアカノンが火を吹く。マズイ、そう思った瞬間には身体が動いていた。反応に遅れ、防御態勢も取れずにほぼ棒立ちになっている一夏とその砲弾の間に割って入る。

「っ！」

キュィンッ！

「・・・何をしている、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

右手に部分展開された『黒天』の手に握られた『Ｖｉｃｔｏｒ』によって逸らされた砲弾は明後日の方向に着弾したのを横目で確認した後、ラウラを睨み付ける。

「戦いをしかけるにしても、もう少し礼儀と言うものを弁えたらどうだ」

「礼儀が必要な相手とも思えません」

「それはお前の感情論だ。そんなことで引き金の重さを忘れる様な女だったのか、お前は」

「あなたは――――！！」

言葉を区切り、苦しげとも見て取れる表情を浮かべながらこちらにリニアカノンを向ける。

「退いてください・・・」

「退いたらお前がまたぶっ放すだろ。少なくとも、ＩＳを解除してから言うんだな」

「この者達に・・・あなたが護る様な価値なんてない！」

「それは俺が決める事だ。他人に指図される筋合いはない」

睨み合う俺とラウラ。会場全体が緊迫した空気に呑まれ、静寂がこの場を支配する。傍から見たら一触即発な雰囲気。事実、ラウラが撃てばこちらも反撃に出る。そう覚悟した心境で俺は彼女の前に立っていた。

『そこの生徒、勝手な私闘で危険行動を起こすな。学年とクラス、出席番号を言え』

その静寂を破ったのはアリーナのスピーカーから聞こえた教師の声だった。おそらくこの騒ぎを聞きつけてきたのだろう。ラウラは小

さく舌打ちをすると、クルリとこちらに背を向けた。

「興が削がれた・・・今日は引こう」

そう言い残すと、ラウラはアリーナゲートへと去って行った。まったく、どんな行動を起こすかと思えば、いきなり喧嘩をふっかけて来るとはな。十代乙女の行動力には恐れ入る。

「零司・・」

「お、大丈夫か一夏」

「俺は大丈夫だけど・・・」

「そうか、ならいい」

一夏へ向き直り、そう言って内心で渦巻く不安感にも似た感情を押し隠す様に小さく笑みを浮かべる。まさかあんな形でラウラと対峙するとは思わなかった・・・たかが喧嘩の仲裁、だが彼女が俺に銃口を向けて来るなんてことは考えたくもなかったのかもしれない。

「ねえ、零司」

「なんだ?」

「零司って、ボーデヴィッヒさんと何かあったの?」

シャルルの質問に俺は少し押し黙った。皆に俺が軍属であった事は知られたくない。俺が軍属である事を知るという事は、俺の最も知られたくない部分へと皆を近づける事になってしまう。

「昔、ドイツにいた時に知り合っただけだよ」

だから俺はそう告げて言葉を切った。悟られてはいけない。俺とラウラの関係を知られてはいけない。

「・・・そうなんだ」

俺の感情、この話題を持ち出して欲しくないという事を悟ったのかシャルルはそう言って追及を止めた。それを期に、俺は再び口を開く。

「あー、変な横やりが入ったが訓練再開するぞ」

「あ・・・ああ」

「おい一夏、そんなやる気のない返事でどうするんだよ。学年末トーナメント、初戦敗退だって千冬さんに言われたんだろ。だったらもっと頑張れよ」

「わ、わかってるって！」

俺が茶化すと一夏は調子を戻した様だった。それと同時に会場内の空気も元のそれに戻り、それぞれが再び実習を始める。

「よし、じゃあ最後に俺と模擬戦でもするか？」

「零司とか。お前と模擬戦したのって、まだ一回だけだからな。頼む」

「よっしゃ、閉館時間ギリギリまでやるか」

そう言って、俺は『黒天』を展開させようとした・・・が――

「おーっと、ちょっと待ってくれないかな、黒瀬君」

「は？」

ガシッ、と背後から肩を掴まれて振り返る。するとそこには笑顔を浮かべるイリア・ブルシロスカヤ先生の姿が在った。

「イリア先生、どうしてここに？」

「どうしてか・・・それは私が今日の第三アリーナ担当の教師だったからだろうな」

ということは、さっきの放送はイリア先生だったのか・・・いや待て、だったらなんでラウラを問い詰めずに俺の方に来ているんだ？

「イリア先生、ラウラは・・・」

「それが取り付く島も無しに逃げられてしまってな。いやあ、困った困った・・・そこでだ」

笑顔のイリア先生の顔がこちらに迫り、肩を掴む手の力が逃がさんと言わんばかりに強まる。

「君には彼女の代わりに反省文を書いてもらうと思うんだが？」

「な、なんで俺が・・・」

「この騒動の一旦は君にもあるのだろう？　それにこの中で一番訓練いらずだろう」

「それは理由になってなイテテテテテテテ！？」

ギリギリとまるで万力に握り潰されかかっているかの様に肩と口から悲鳴が上がる。良く見てみると、イリア先生の口先はヒクヒクと引き攣り、額には小さく青筋が浮かんでいた。あれ？　もしかしてイリア先生、怒ってる？

「さあて、職員室に向かうぞ。早く着替える事だ」

「だからそれだったらラウラを連れて行けばギャアアアア！？」

ギリギリと言う音が今度はミシミシという音に変わった。ダメージがついに骨にまで来ている。

「大丈夫だ、ちゃんと書けばモノの数時間で終わる。さあ行くぞ黒瀬君」

「お、俺は無実だーっ！」

悲鳴も虚しく、アリーナゲートまで引き摺られて行く。何が悲しくて、ラウラの尻脱ぐをしなければならない。だが何よりも悲しかったのは、第三アリーナにいた生徒が誰一人として連れて行かれる俺を止めなかった事だろう。

・

アリーナでの出来事から数時間が経った。第三アリーナは閉館し、生徒達はそれぞれ自室へと戻り残った休日の時間をルームメイトの会話や来週の予習などで自由に使っている時間。

「はい・・・その様です」

それは彼、シャルル・デュノアも違いは無い。彼も他人に干渉されない時間を、自分の為に使っていた。

だがその用途は、他者とは全くもって違うものだ。

「やっぱりドイツの人間の様です・・・」

部屋には鍵、室内には自分しかいない。隠しカメラは確認した、誰にも見られてはいない。そんな状況を整えた上で、彼は携帯電話で通話していた。何故ここまでしなければならないのか。理由は簡単だ。

この会話は・・・訊かれてはならないものだからだ。

「情報通り、彼で間違いありません」

冷静に感情の籠らない声で電話越しの相手に報告を続ける。そこにいつもの人懐こい笑みはなく、無表情に徹していた。

「・・・いえ、まだデータは取れていません。何分、彼の機体を見るタイミングが少なくて」

電話越しから重苦しいため息が吐かれた。そして続く言葉を聞き、そこでシャルルの表情に少しだけ動きが合った。

「・・・はい、理解しています」

それは苛立ち。眉を顰め、小さく唇を噛む。しかしそれを声には出さない。声に出したところで、自分の立場を危うくさせるだけだという事を、彼はしっかりと理解しているからだ。

「わかりました・・・では、後ほど」

最後のそう告げると、シャルルは通話を切り、ベッドへと倒れ込んだ。

「はぁ・・・」

今までため込んできたものを吐き出したのか、とても深く、重苦しいため息だった。

「何をやってるんだろう・・・僕は」

呟くその言葉にシャルルは馬鹿な事を、と思っていた。何をやっているかなんてことは理解している。理解していないんじゃなくて、理解したくないんだという事を。

「酷い人だよね、僕って」

仰向けになった状態、腕で自分の眼を隠す。闇を見詰めながら脳裏に浮かぶ人物の事を考える。それは・・・零司だった。

優しく笑みを浮かべる彼は、自分に仲良くしようと・・・自分を友達と呼んでくれた。少しだらしないところもあるけれど、それだって分け隔てない関係だからこそ見せる部分なのだろう。

「ごめんなさい・・・・零司」

だから余計に思ってしまう。彼に対する、謝罪の念を。友と呼んでくれた、それだけでこの胸がどれだけ温かくなっただろうか。屋上での昼食、あの時の「ありがとう」にどれほどの感情が籠っていただろうか。

「・・・ごめんなさい」

痛い・・・心が、痛い。信頼してくれている彼の事を裏切っているという、嘘吐きの自分が憎い。本当ならば、全てぶちまけてしまいたい。

「・・・ごめんなさい」

でもそれはできない、してはいけない。ああ、本当に情けない。まさに操り人形というのがお似合いだ。結局、自分の意志ではどうする事も出来ないのだ。そう

あの時だって・・・・

――――ごめんなさい

「・・・・っ！」

ふと零れそうになった涙を誤魔化す様に腕で目を擦る。誰も見ていないんだ、泣けばいいじゃないか。そう思うところもあったが、そういうわけにもいかない。

「・・・零司、返って来た時びっくりしちゃうからね」

誰に言うでもなく、呟く。零司、彼の事だ。本気で心配して、気を使ってくれようとするだろう。どんな理由で、自分がここにいるのかも知らずに。

だからまだ・・・でも――

――でも、もしこの呪縛から解放されるなら・・・・

「しゃ、シャワー・・・まだ浴びてなかったな」

自分の仕事はまだ終わっていない。甘い夢は見てはいられない。頭を冷やす意味でも、シャルルは急いでベッドから跳び起きると、着替えを持ってバスルームへと駆け込んで行った。

・

「・・・終わりましたよ、イリア先生」

「よし、どれどれ・・」

職員室、面談をする時の部屋として使われる所で向かい合わせに座

っているイリア先生に俺はびっしりと文字の書かれたレポート用紙を手渡す。それを眺めると、イリア先生はレポート用紙から顔を上げて、二カッと笑った。

「ミッションコンプリート」

「おっしゃー！終わったー！」

両腕を高らかに上げて、俺は歓喜に打ち震えた。反省文、レポート用紙二十五枚分を掻き終える頃にはすでに日は落ちていた。

「しかし、よくこんなに描いたな。感心感心」

「よく描いたなって・・・先生が描かせたんでしょ、先生が」

ムスッとした表情で言うと、イリア先生はケラケラと笑っていた。

「いや、おかげで有意義な暇潰しが出来たよ。君との会話は面白いからね」

「会話って言うよりは、そっちからの小言だけだった気もしますけどね」

「小言を吐き出すだけでもすっきりするものだよ」

そう笑うイリア先生。なんだかとても良い笑顔だったので、こちら釣られて笑ってしまう。まあ、部屋でゴロゴロしているよりかは、こうしてイリア先生の小言を聞きながら談笑するのも悪くないかな・・・反省文がなければ、だが。

「さて・・・どうする、すぐに部屋に戻るのか？」

「どうしてですか？」

「いや、どうせ暇なら少し早いが食事でもどうかと思ってね」

どうやら食事のお誘いの様だが・・・・

「いいんですか？　教師が生徒にそんなお誘いなんてしちゃって」

「男がいない職場と言うのも、我々としては結構花がない物でね・・・それに」

言葉を切り、椅子から腰を上げると身を乗り出して俺の顔に近付くとイリア先生は妖しい笑みを浮かべて俺の耳に囁きかけた。

「教師が生徒を誘ってはいけない・・・そういうルールは無い」

・・・なんとも魅力的な『お食事』のお誘いだ。健康な一男性として、色々と掻き立てられるモノが在る。

「えっとですね、お誘いは嬉しいんですが・・・ちょっと」

だが、そのお誘いを飲むわけにはいかない。今日くらいに奏からの連絡があるだろう。そうなれば、シャルルに対しての考えをまとめなければならない。

「おや、何か予定でもあるのかな？」

「そんなところです・・・お食事はまた今度で」

「わかったよ、また今度誘う事にしよう。しつこい女は嫌われるからな」

椅子から腰を上げる面接室から出ると、時間的に残り少ない教師達がこちらに気付いて声をかけて来る。

「あら、黒瀬君。反省分は終わったのかしら？」

「俺の所為じゃないんですけどねぇ」

「イリア先生、なんだか話してましたけど何かあったんですか？」

「いやね、仲良く食事でも洒落こもうと思ったんだが・・・フラれてしまったよ」

「あまり黒瀬君を困らせない方がよろしいと思いますけど・・・黒瀬君も無理に付き合わなくてもいいんですよ？」

「おいおい、それはどういう意味だ？　まるで私が無理に付き合わせている様じゃないか」

教師陣からの声に苦笑する俺と肩を竦めるイリア先生。人形との戦いの後から、ちょくちょく職員室に顔を出すのも相まってか、すっかり教員達と打ち解けてしまっていた。生徒の皆と話をするのも面白いが、こういう教師の人達と談笑できるというのは俺的に嬉しい。

「ほらほら皆、黒瀬君は予定が在るんだ。あまり止めてやるなよ」

「「「イリア先生に言われたくありません」」」

「ははは・・・じゃあ、俺はこれで」

「ああ、また問題起こしたら呼んでやろう」

「その時はよろしくお願いしますよ」

教師陣に手を振りながら、職員室を出て扉を閉める。一息吐き出すと廊下を進み、後者の外へ出るとそのまま学生寮を目指す。

――プルルルッ

「おっ・・・と」

不意にポケットに入れた携帯電話が鳴る。もしやと思い、ポケットから出して見るとそこには黒瀬奏と記されている。

「奏か？」

『お兄ちゃん、情報探ってきましたよ』

ついに来た・・・来てしまった。俺が奏に頼んでおいた、シャルルの情報が。さて、鬼が出るか蛇が出るか・・・

「どうだった？」

『一言で言うと、なんだか奇妙な人物ですね』

奇妙な人物・・・それは一体何を示しているのか。少し訊くのが怖かった。だが、ここまで調べさせておいて、何も聞かないというわ

けにもいくまい。

「・・・話してくれ」

『はい、簡単な説明を省くとして・・・おそらくお兄ちゃんが一番奇妙に思った部分から話しますね』

俺の一番奇妙に思っている部分、そう告げられて、小さく生唾を飲み込んだ。何よりも、俺が恐れている事は一つだ。これが白なら・・・俺はほとんど警戒をする必要はないんだが・・・

『・・・彼はあの施設の関係者ではありません』

「・・・そうか」

安堵の息が零れ、それと同時に全身を強張らせていた力がスッと抜けた。よかった。少なくともあの施設に関わりが少なければ、俺が直接手を出す必要もなくなる。

「男子でＩＳ搭乗者ってことだから、必要以上に警戒していたが・・・」

『大丈夫ですよ。ＤＮＡ情報、あとあの施設の人達を調べてみましたけど、やっぱりシャルル・デュノアに関するものはありませんでした。この件に関しては完全な白です』

この件に関しては・・・ね。という事は他にも奇妙な点が合ったってことだろう。安堵した意識を再び冷静なモノへと変える。

『ただ奇妙な点がもう一つだけ』

「なんだ？」

『デュノアの出生についてです』

「出生？」

なんでそんなものに・・・だが奏が目を付けたってことは何らかの事はあるんだろう。口をはさまずに話に耳を傾ける。

『彼、シャルル・デュノアの存在は公式に発表されているんですけど・・・昔の物と比べてみるとおかしいんです・・・今、画像を送ります』

そう奏が言ってから十秒としないうちに携帯電話にメールが届いた。それを開き、中身の画像を解凍する。すると液晶画面に映し出されたのは――

「これは・・・デュノアの家系図か」

『はい、ちなみに上のが最新の物で・・・下のがそれよりも一つ前の物です。見比べて見てください』

奏に言われた通りに、二つの画像を見比べる。すると、明らかに違う部分が目に入った。

「・・・無い」

『はい、古いほうの家系図には、シャルル・デュノアの名前が無いんです』

そう、名前がない。新しい家系図の方には現デュノア社長の下にしっかりとシャルル・デュノアの名前が在る。だが、古いほうの家系図にはシャルルの名前が記載されてなく、そこにはぽっかりと空白のみが在った。

「だとするとシャルルは・・・今回の為に用意された人間？」

『それはわかりません。何か他にも問題が在るのかもしれません。ただ胡散臭いのは確かです』

疑惑が一つ消えたと思ったら、また一つ胡散臭いのが出て来やがった。

「デュノアなんて掘り返せばいくらでも薄汚い情報が吐き出されるだろうが・・・これ以上はさすがにキツイか？」

『家系図を引っ張り出すのだけでも結構てこずりましたから・・・』

「となるとこれ以上は無理か・・・」

『あまり力になれくて申し訳ありません』

「いや、十分過ぎるよ。少なくとも施設の件ではシャルルが白だって事はわかったんだ。それだけでも大きな収穫だ・・・ありがとうな、それじゃ」

礼を言って、携帯電話を切るとポケットに戻す。そして思案する。内容は一つ、どうしてシャルルがこの学園に来たかという事だ。施設の関係者であるなら、なんとなく理解できる。だがそれが目的で

ないとすると・・・

「家系図に乗らなかった人物か・・・駄目だな、わからん」

どういう状況であれ、原因を考えるには元となるピースが少な過ぎる。現段階で出来る事と言えば、変わらず警戒してくくらいだろう。

「まったく、疑い続けるってのも辛いな」

そうやって考えながら歩いているうちに自室へと来てしまっていた。さてと、シャルルとはいつも通り接しなきゃならないからな。頭の中を変えなければ・・・

ガチャッ――

「ただいま」

いつもの調子にドアを開いて、いつもの声色で帰りを知らせる。これで自分の中のスイッチが切り替わっている事を再確認する。疑い続けるのが辛い、ね。だったら少しぐらいは揺れてみたらどうなんだろうな・・・

「帰ったぞ・・・って、シャルルいないな」

部屋を見回すがシャルルの姿が見えない。と、思ったが水音が耳に届いた。水音・・・ってことはシャワーか。

「って、あいつタオル持って行ってないじゃん」

やれやれと言った風にベッドの上に置いてあるタオルを取る。俺に色々言う割には変なところで抜けてるな・・・あいつは。

「シャルル、タオル忘れて――――」

「・・・えっ？」

水音が止まったところを見計らい、バスルームへと入った瞬間、俺の身体は硬直した。

「なっ・・はぁ？」

「れい・・・じ・・・？」

おかしい、あり得ない。どういうことだ・・・なんで・・・この部屋に――――

――――『女子』がいるんだ。

EP19　彼の思い、彼女の想い（後書き）

はい、終了です。お疲れ様で～す。

ようやくシャルルの正体がばれましたね。ね、ようやくですよ・・・なんか今回はやたら長かったからねぇ・・・（～ω～；）。それにしてもラウラの出番が・・・グギギギ・・・出したいんですけどねぇ、難しいね。

さて次話はシャルルの正体を知った零司がどういう反応を見せるのか・・・お楽しみに

では、また（＾ω＾）ノシ

EP20　望む場所（前書き）

ユニークが二万突破だぜヤッホーイッ！！＼（＾ω＾）／

はい、もう一つの翼、第二十話です。もう二十話ですよ、いやぁ時の流れとは早いですね。

前回、ついに正体がばれてしまったシャルル・デュノア。彼、いや彼女は一体どんな行動に出るのか。そして零司は・・・

いつもどおりに拙い文章ですが、どうぞよろしくお願いします。

EP20　望む場所

「お前は・・・」

場所はバスルーム、そしてタオルを持った俺と目の前にいる裸の少女。目を疑うような光景に俺の口から言葉が漏れた。脳神経を麻痺させるには十分過ぎるくらいの衝撃、それはその女子も同じだったようで目をパチクリさせてこちらを見ている。

「れい・・・じ・・・？」

「あ・・・えっと、とりあえず前を・・・」

半ば無理やりに神経を現実に引き戻して言った。ともかく、戸惑っている様な裸の女子の身体をマジマジと見るのも失礼だろうと思い、目線を逸らしてタオルを差し出す。すると――

「え・・・きゃあっ！？」

彼女も我に返ったのだろう。急いで俺の手からタオルを引っ手繰ると前を隠した。それでいい、淑女はそんな簡単に男性に肌をさらけ出すものではない。ちょっと損したとかそんなこと、全然思っていない・・・全然思ってない。

第一に今の展開が意味不明だ。そもそも何故、こんなところに女子が居る。ここは男子専用、俺とシャルルの部屋だ。普通の女子が間違えるはずもない。ワザと間違えてシャルルなんかにお近づきになりたいみたいな女子が居ないかと言われたらいるかもしれないが、それだったら相当の猛者か痴女かの二択だろう。

もしそうでないなら・・・違う答えになるだろう。

「なんで・・・ここに・・・・」

あり得ない、そう言わんばかりに見開いた瞳はアメジストを思わせる様な美しい紫色。髪はサラサラと流れる鮮やかなブロンド。そして湯上りの所為も相まって艶めかしさが感じられる細く、華奢な四肢。

多分、いや十中八九そうなんだろうと思っていたが俺はその答えを否定していた・・・いや、否定したかったのかもしれない。しかし、現実にそれは目の前で起こっている。だから俺は事の真相を確かめる意味合いも込めて、確信めいた言葉を口にした。

「お前・・・シャルルか？」

「・・・・っ！」

そこからのシャルルの行動は早かった。俺を突き飛ばす様な形でバスルームを出るとそのまま窓際の、シャルル自身のベッドへと飛び込み、その奥に置いてある荷物の場所へと転がり込む。

「シャルルッ！」

「動かないで！」

シャルルの一言で俺は動きを止めた。こんな現状だ、言葉一つで追及を止めるなど・・・ましてや疑っていた相手の正体、それが全くの見当違いだったのだから、問い詰める事を止める事は無い。だが、

シャルルの手にはそれを言わせられるモノが握られていた。

「おいおい、そんな物騒なモノを何処から持って来たんだよ・・・」

瞬時に頭が冷め、呆れた様に俺は呟く。それは拳銃だった。グロック１９、オーストラリア製の自動拳銃のコンパクトモデルで、プラスチック素材を使う事によって軽量化を図った拳銃でもある。

「そんなものを使う事ないだろ、一般学生は」

「そうだね・・・君が邪魔さえしなければこんなものを抜く事はなかったんだけど」

そう言って、ちらりと俺の背後にあるサイドテーブルを一瞥する。

俺も反応は遅れたが、即座にシャルルのＩＳ『ラファール・リヴァイヴ。カスタム?』の待機状態であるネックレストップの置いてあるサイドテーブルとシャルルの間に身体を滑り込ませ、ＩＳを取らせない様にしていた為である。

全く、結局こういうところで冷静に身体は動くんだよな。これも軍事訓練の賜物か。

「やっぱりこういう対応は早いんだね、さすがは元軍人ってことかな」

「・・・ずいぶんと深いところまで知ってるみたいだな」

シャルルのセリフに俺は心底、嫌な気分になった。知られたくなかった事を、いちばん身近にいた人間が知っていた。経緯はどうあれ、

その事実が俺の頭を痛くさせる。だが、今はそれよりもやるべき事が在る。

「それで、どうするんだ？」

「どうするって・・・」

「そのグロックの９ｍｍパラベラムで俺の額をブチ抜く気か？」

「・・・・・」

シャルルの顔が苦渋で歪む。その表情から、一目で悟る事が出来た。この娘は悩んでいる。引き金を引くのを躊躇っている。この娘には俺を殺す覚悟は無い。冷えた頭がゆっくりと熱を取り戻し、それと同時に違う感情が浮かんできた。

なんて・・・なんて似合わない物を持ってるんだよ・・・お前は・・・

「手が震えてるぞ」

「僕にだって・・・君を撃つ事は出来る」

「シャルル・・・そりゃ無理だ」

眉を顰めるシャルル、俺は小さく息を吐き出してから彼女の手に握られているグロックを指差す。

「安全装置（セーフティ）がかかってるぞ、射撃初心者（ルーキー）」

「え・・・」

そう俺が告げるとシャルルが俺から目を逸らして、グロックへと視線を落とす。

瞬間、俺の脚は床を蹴った。

「あっ！？」

シャルルが俺の初動に気付いた時にはすでに遅い。低姿勢、低空、自身の現段階で出せるトップスピードでシャルルに即座に近付くと手刀で右手からグロックをはたき落とす。そしてそれを左手でキャッチ、そしてシャルルがこちらの反応についてくる前に右手で彼女の首を掴み、ベッドへと叩き伏せる。

「キャッ！」

「チェックメイト・・・ってところだな」

小さな悲鳴を上げる、仰向けにベッドに押さえつけられたシャルルの上に跨るとグロックの安全装置を外して、銃口をシャルルの額に突き付ける。

「相手を殺すつもりなら、安全装置くらいバックから抜き取る流れでやれ。それに銃を構えているのに目標から目を離すなんて言語道断だ・・・ま、二度とやれないと思うけどな」

「・・・・」

「慣れない事をするからこういうことになる。暗殺企てるなら、も

うちょっと慣れてからするんだったな。シャルル・デュノア」

そうつらつらと言葉を並べて行く中で、シャルルは抵抗どころか身動き一つしない。黙って、俺の言葉を聞いていたかと思うと、ふと小さく笑った。

「・・・無理か・・・当り前だよね。君は熟練者（エキスパート）で僕は新米（ルーキー）、やっぱりレベルが違う」

その笑いは、明らかな諦めを込めた自嘲気味な笑みだった。そして、その笑みを浮かべながら、シャルルは次の言葉を口にした。

「零司・・・僕を撃って」

「何？」

「その方が、きっと君の為になる。僕は君にとって、厄介な障害でしかない」

笑みは消え、今度は懇願するかのように言いながら俺の右手を・・・グロックを握った右手を掴んだ。

「僕はもう・・・君を傷付けたくない」

言葉と右手を握る手の力強さがその真意を物語っていた。シャルルは本気で、引き金を引いてもらいたいと・・・自分を撃ってほしいと思っている。

それを感じ取り、理解すると俺の頭の中に「何故」という疑問と、さっきから俺の中で渦巻く感情が大きくなってくる。

それは憤りだった。何故、こんな事をこの娘がするんだ。そして何故、この娘は俺にそんな事を頼むんだ。これでは・・・まるで・・・

――――私を・・・撃って――――

「ふざけんな・・・」

カシュッ――

憤りの一部を吐き捨てる様に言うと、俺は上部のスライドに手を掛けてシャルルの目の前でグロックを分解した。

「俺はまだ殺人罪で捕まりたくはない。そんなことで、これからの人生を棒に振るいたくはないからな」

「で、でも・・・・・」

「撃たない・・・そう言ってるんだよ」

そう言って、シャルルの上から降りる。どうしてどいつもこいつも面倒で責任感のいる事ばかり俺に押し付けるんだ。いつもいつも、それで俺がどれだけ苦しんでいると思っているんだ。自分勝手なんだよ、まったく。

「お前みたいな奴を撃つわけないだろ」

「でも零司、僕は――」

「あーあー、言いたい事が在るのはわかったよ・・・それよりも、もっと気になる事もある」

「気になる事・・・」

「・・・ともかく、シャルルは何よりもやる事が在るだろ」

戸惑いと困惑が入り乱れ、首をかしげるシャルル。そんな彼女に俺は顔を押さえ、大きくため息を吐いて、言った。

「服・・・お前、裸だろ」

場違いな感じもあるが、ここでシャルルは初めて羞恥で顔を赤く染めたのであった。

・

「もういいか？」

「・・・・うん」

シャルルの了承を得て、俺は振り返る。そこにはいつも通りのスポーツジャージを着込んだシャルルの姿が合った。いつも通りの姿、

だが胸元へと目をやるとそこには確かにふくらみが在り、彼女が女性であるという事を再確認させられた。

「れ、零司・・・何処見てるの」

「いや、やっぱり女なんだよなってな」

適当な言葉で誤魔化すと、俺は電子ケトルへと向かい、湯飲みを二つと急須を用意する。

「茶、飲むか？」

「え・・・と」

「そんなに警戒するなよ、毒を盛ろうってわけじゃないんだ」

「別にそんなことは・・・思ってないよ」

「だったらもっと力を抜いてくれ、そうじゃないと話辛いだろう。それに俺に敵意は無い事を行動で証明したと思うんだけどな」

行動で証明というのは、着替え中に俺がシャルルに背を向けていたということである。もし敵としてシャルルを警戒するのならば、着替え中だろうとなんだろうと背中の見せずに常にシャルルを視界に入れておくだろう。そしておそらく、その事はシャルルも理解しているのだろう。

「それはそうだけど・・・」

「気を張り過ぎるのも良くないぞ・・・ほれ」

緑茶の入った湯飲みを差し出す。それを二、三度見た後シャルルゆっくりと手を伸ばした。

「えっと・・・ありがと――きゃっ！」

湯飲みを手渡す際に俺の指先と触れあい、シャルルが慌てて手を引っ込める。手渡すと思っていた俺は危うく湯飲みを落としそうになったが、間一髪のところでキャッチする。

「っぶねぇ・・・受け取るならちゃんと受け取ってくれよ」

「ご、ごめんなさい・・・」

そう言って今度はちゃんと受け取ってくれた。そんなシャルルと再び向かい合わせにベッドに座り、俺は緑茶を一口飲むと話の口火を切った。

「さて、じゃあいくつか質問するぞ？」

「・・・うん」

シャルルも緑茶を一口飲み、一息ついたところで俺はシャルルに最初の質問を投げかける。

「まずは・・・なんで男装なんかしてたんだ？」

「社長からの直接命令でね・・・零司は『イグニッション・プラン』の事は知ってるよね」

俺は頷いた。『イグニッション・プラン』、それは第三世代型ＩＳを主点に置いたイギリス、イタリア、ドイツの欧州連合によって立案された統合防衛計画の事だ。確かフランスは第三世代の開発の目途が立たなかった為にこの計画からは除外されているはずだ。

「デュノア社はフランスの代表的な企業だけど、第三世代型を開発するには圧倒的にデータも時間も・・・その他諸々、足りないものが多過ぎたんだ。元々、第二世代型の開発すらも最後発だったからね。それで政府からの通達で予算が大幅カットされたの。そして次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット、そしてその上でＩＳ開発許可も剥奪擦るって流れになったんだ」

「詰まるところ、事実上クビってわけだな」

ＩＳ開発っていうのは、莫大な時間と設備、そして何よりも金がかかるものだ。主にどの企業も個人でのＩＳ開発など行ってはおらず、国からの金銭的支援があってこそ成り立つ。それはフランスのデュノア社も例外ではなく、その支援が大幅カット、その状態で次のトライアルに選ばれなくてはならない。状況は絶望的である。

「だが、それがどうして男装と繋がる」

「簡単だよ。注目を浴びる為の広告塔・・・それに――」

こちらに向けていた視線を逸らして、シャルルは何処か苛立ちを含んだ声で続けた。

「同じ男子なら日本での得意ケースである零司に接触しやすい。可能であればその機体と本人のデータを取れるだろうってね」

「なるほどね」

つまり、シャルルは俺と『黒天』のデータを盗みに来たという事だ。しかしこんなことがバレてしまったら、企業として大打撃になるだろうに・・・デュノア社としても苦肉の策ってことだな。

「だが、それをする為にあのオモチャは必要ないと思うが？」

そう言いながらサイドテーブルに置かれた、分解されたグロックとマガジンを親指で指し示す。そんな俺とグロックを見て、シャルルは小さくため息を吐いた。

「そうだね、それだけなら・・・どんなに良かっただろう」

「つまり、男装の件とはまた別でアレが必要だったと」

「そうだよ・・・おそらく察しは付いていると思うけど」

目を閉じて、一息置いた後でシャルルは苦渋に満ちた表情を浮かべた。

「もう一つの指令・・・それは君の暗殺だよ」

俺は黙って、緑茶を啜る。俺の暗殺か、デュノア社も大きく出たな。まさかこんな強硬手段に出るとは思わなかった。

「データを収集後、もしくは正体がバレてしまいそうな時は君を殺す様にと言われていたんだ。理由は教えてもらえなかったけどね」

理由は・・・おそらく一番俺が理解している。そしてその理由をシ

ャルルが知らない事に、一番破滅的な自分の存在を知られていない事に、俺は内心で心底安心した。

「でも正直、君を殺せるなんて微塵も思ってなかった」

「俺の経歴を見たからか？」

「零司が軍人って事だね。深い経歴は見てないけど、少なくとも僕がどうにかできる相手であるとは思えなかったよ・・・でも、それ以上に――」

「多分、壊したくなかったんだ・・・この日常を・・・」

それはおそらくシャルルの正直な気持ちだったのだろう。甘美で依存したくなるような、優しい日常。それを壊したくない、それはおそらく俺が時折抱く感情と同じものであるのだろう。いや、もしかしたら俺の抱くそれよりももっと強い物なのかもしれない。だってこの日常は、本来ならばシャルルにも与えられていい日常だったはずだ。

「なんで・・・お前なんだよ」

だからだろうか、シャルルが俺と同じ様な考えを抱くのが・・・否、同じ考えを抱かせられる様な状況にあるのがどうしても許せなかった。

「なんでお前みたいな優しい奴が・・・拳銃なんて・・・ましてや人殺しなんて似合わない、そんな奴がこんな事をしなくちゃならないんだ」

引き金を引くべ人間というものは、限られていると俺は思う。だから思想とか理念とか野望とか、そういう小難しいものが関わって、シャルルみたいな奴が引き金を引かされる。そんなことはクソ喰らえだ。

「零司・・・」

「大体、お前は社長の娘なんだろ？　なんでこんな事をさせるんだよ」

「社長の娘・・・か。おそらくあの人はそうは考えていないんだろうな」

呟くシャルル。どういう意味だ、そう言いかけて俺の言葉は止まった。嫌な予感がしたのだ。そしてそれは次のシャルルの言葉で理解できた。

「僕はね、零司・・・愛人の娘なんだよ」

脳みそが凍り付く様な衝撃が走り、絶句する。だがそんな俺とは対照的に、シャルルは言葉を並べて行く。

「二年くらい前にね、お母さんが亡くなったんだ。それで父の部下が僕の元に来たんだ。それで色々と検査をやっているうちに、高いＩＳ適性がある事がわかってね。非公式にデュノア社のテストパイロットをやらされていたんだ」

それはおそらく、口にも出したくない事なのだろう。だが、それをシャルルは健気にも語ってくれた。だからか、それとも単純に言葉が出なかったのか、俺は黙ってシャルルの言葉に耳を傾けた。

「主には別邸で軟禁状態。もし愛人の娘だなんて知られたら、マスコミには美味し過ぎるネタだからね。それでも一度だけは本邸に呼ばれたよ、社交辞令程度には。でもそれも酷かったな、使用人には白い目で見られるし、本妻の人には打たれたよ。一言、言ってくれればよかったのに・・・それも言わずに酷いよね、お母さんも」

あはは、と愛想笑いを浮かべるシャルル。だが、俺は笑えなかった。笑えるはずもなかった。何故なら、そんな事を考える事が出来ないほどに俺の頭の中にはとある感情が渦巻いていたからだ。

「・・・これで全部かな、僕の隠していた事は」

「・・・・・」

「ごめんなさい・・・謝って済む事じゃない、それわかってるよ。でも・・・ごめんなさい」

そう言ってサイドテーブルに湯飲みを置くと、深々とシャルルは頭を下げた。その姿を見て、俺の中のブレーキが外れた。

「気に入らないな」

「えっ・・・」

「気に入らないと言ってるんだ」

頭の中のスイッチが無意識に入り、昔の自分に戻って行く。もはやそこには日常で見せている俺ではなく、素の自分が・・・感情で物言いをするガキの様な自分が存在していた。

「その指令も、理由も、何もかもが気に入らん。愛人の娘？　だからなんだというんだ。形や経緯はどうあれ、シャルルはテメエの娘だろうが。それをどうしてこんな事に巻き込める。どうしてこんな事を命令できる」

彼女はこの命令の為に用意されたわけではない。たまたま転がり込んできた、体の良い捨て駒。適性がある為に使われた、バレて散ればそれまでの廃品処理。それがデュノア社の社長の考えなのだろう。

「親の面して、それを楯に自分のエゴを娘に背負わせやがって。データを収集するならまだしも、人殺しをさせるだと？　それでもまだ親だと言い張るのか、ふざけるんじゃねえ。そんな奴、親でも何でもない。ただのクソ野郎だ」

「れ、零司・・・どうしたの？」

シャルルが怯えと困惑の入り乱れた顔をしている。だが、俺の言葉は止まらない。一度タガが外れた感情に対するブレーキが利かない。熱くなるのは俺の性分じゃないかもしれない。だが、こうなってしまったら話は別だ。今、この感情をぶちまける事しかできない。

「・・・シャルル、お前はどうしたいんだ」

「どうしたいって・・・僕には選択権がないんだ。どうもできない、仕方ないんだよ」

「仕方ないという言葉だけで、全部終わらせられるほどここの日常は安っぽいものだったのかよ」

俺の言葉にシャルルが俯く。選択権がないなんて事は、あり得ない。人間とは選択をして、自分の道を歩いて行く生き物なのだから。

「壊したくなかったんだろ？　大切だったんだろ？　だったらそれを得る為にも足掻き続けろよ。そしてデュノアのクソ社長に証明してやれ、ここが自分の居場所だって事を」

「でも・・・僕は・・・」

「・・・もし、それが難しいなら――」

言いながら肩を掴み、こちらに引き寄せて優しく抱き締める。そして慌てたように戸惑いながらも、抵抗しないシャルルの耳元で囁くように語りかける。

「俺が居場所になってやる」

居場所になる。それは俺の口から出ていい様な言葉ではないのかもしれない。だがそれでも、俺はシャルルの居場所になってやりたかった。彼女が笑えるように、少しでも笑顔で居られる様に。

なんとも不相応で弁えないセリフ。その為にどれだけ自分を削るかもわからない。だが、それでもいい。シャルルの笑顔の為に俺は犠牲になろう。

「それとも・・・俺じゃ駄目か？」

「そんなこと・・・ないよ」

訊くとキュッと俺の服が掴まれた感触と掠れた様な声が返って来た。

涙声・・・泣いているのだろうか。

「あれ？・・・お、おかしいな・・・なんで涙なんて・・・こんなに嬉しいのに」

誤魔化す様に笑いながら、ごそごそと俺の胸元で目元を拭う。そんなシャルルの行動を中断させる様に、抱き締める腕の力を少しだけ強くした。

「泣いてもいいじゃないか・・・涙は流す為にあるんだ」

「零司・・・」

「今泣いて、明日また笑おう・・・偽りのない、本当の笑顔で」

「僕は・・・僕は・・・・うぅ」

そこからはもう嗚咽で言葉にならなくなり、そして糸が切れた様にシャルルは泣き始めた。大きな泣き声が耳に聞こえる。それはまるで今まで溜め込んでいた悲しみを全て吐き出すかの様に、遠慮のない泣き声。俺はそれを訊きながら、ただただ優しく頭を撫で続けていた。彼女が子供の様に泣き疲れて眠りに落ちるまで・・・

・

『・・・そうだったんですか』

「ああ」

携帯電話越しに聞こえて来る奏の声に短く返した。シャルルが泣き疲れて眠った後、彼女をベッドへと寝かせてから、俺は奏に事の顛末を話していた。

『デュノア社・・・本当に嫌な企業ですね』

「あそこの性根が腐ってるのは知っているつもりだったんだがな・・・今回はいい加減、頭に来た」

これは俺の素直な感想だった。今でもその憤りは消えていない。もし俺に今からデュノア社の社長の元へと行けるのなら、一発ぶん殴ってやりたい気分だ。

『でも、これからどうするんですか？　シャルル・デュノアという人物が世間体に知られてしまっている以上、何かしらの対策をしないと・・・』

「そうだな・・・まあ、少なくとも学園にいる間の三年間は大丈夫だろう。その間に考えるさ」

ＩＳ学園は規則上、外部からの干渉が本人の同意無しでは行えないようになっている。だとすれば、学園にいる間はデュノア社からの干渉もないと考えられる。

「それよりも今は――――」

『笑って学園生活を送らせてやりたい・・・ですか？』

「・・・ああ、そうだな」

先読みされてしまったセリフに俺は小さく笑った。そうだ、考えるならこの三年でいくらでもできる。今は、ただ笑顔でいて欲しい。今までの不幸（マイナス）をかき消す様な、そんな笑顔で満ち溢れたものにしてあげたい。

「俺は・・・シャルルの居場所だからな」

『居場所・・・ですか』

「ああ、だから傍にいてやらなくちゃな」

傍にいて、あいつを笑顔にしてあげなければならない。平穏な日常を送らせてやる。俺はその為の居場所なんだから。

『あの、お兄ちゃん・・・つかぬ事を訊きますけど・・・』

「なんだ？」

『シャルルさんに・・・変な事言ってないですよね？』

変な事・・・はて、少なくとも言っていない気はする。というか奏、俺のこれまでの話の中で俺が変な事を発する要因が何処にあったというんだ。

「変な事ってなんだよ・・・」

『あ、いえ・・・その・・・お兄ちゃん、よく私に言ってくるじゃないですか・・・』

「なんて？」

『あ・・・・・・・・・愛してる・・・・・・・って』

・・・おお、我が妹よ、奏よ。お前は何を言っているんだ？　お兄ちゃんにはお前が何故そんな質問をしてきたのかわからないよ。

『だ、だからその・・・もしかしたらシャルルさんにも――』

「・・・・言うわけないだろ」

おそらく今日一番大きなため息が出た。なんで俺がシャルルに『愛してるぞ』って言うんだよ。お前とシャルルじゃ全く意味合いが違う物になってきちゃうだろうが。変に意識させる様な事を言うんじゃないよ、全く・・・・大体、変な事ってなんだよ。奏、お前は俺の愛してるという言葉を変な事と認識していたのか。

『そ、そうですよねっ！さすがにそんなことは言いませんよねっ！あ、あははは！』

「当り前だろ、馬鹿な事を訊くんじゃない」

『ば、馬鹿な事って何ですか！　私、これでもちょっとは真剣に訊いたんですよ！？』

「真剣ならなおのことだよ・・・」

まあ、なにはともあれ目の上のタンコブは一つ減った。残るはあと一つだけ。

「ラウラ・・・どうするかな」

残る問題、それは言わずもがなでラウラ・ボーデヴィッヒだ。あの中庭下での言い争い――まあ、一方的に熱くなってたのはあっちだが――以来、今日のアリーナでの一件があるまで全く口きいてなかったし・・・今度はこちらからも行動を起こしてみるか。

『・・・また問題ですか？』

「ちょっとな・・・だが奏の手を借りる様な事じゃないよ」

実際、ラウラの件は完全に俺とアイツの問題だ。奏の力でどうこうできる様な事でもない。それにできたとしても、俺は奏の力は借りないだろう。軍関係の事には極力巻き込まない様にしているし、結局これは俺がどうにかするしかないのだ。

『・・・わかりました、でも絶対に無茶だけは止めてくださいね』

「安心しろ、そんなことしたくてもしないからさ・・・おやすみ」

『はい、おやすみなさい』

ちょっと早めの挨拶を交わし、俺は携帯電話を切る。そして横でスヤスヤと寝息を立てているシャルルに視線を向けた。そこには先ほどまでの苦渋や悲しみに満ちた表情は無く、ただ安らかな寝顔だけが合った。

「それに・・・無茶できない理由も増えたしな」

綺麗なブロンド髪に指を通して、シャルルの頭を優しく撫でると擽

ったそうに笑みを浮かべる。その笑みに俺は誓う。お前の友として、
お前の居場所として・・・俺は――――

――――俺は君を護ろう――――

EP20　望む場所（後書き）

シャルル、陥落！

さて、今回二十話でようやく一ヒロインです。いやぁ、長かった。長かったよ。これでやっとこさ零司の恋愛事が出来るってもんです！

それにしてもなんという急展開、シャルルってこんな娘だったっけ・・・こんなにコロッと落としちゃいましたけど・・・いいのかな、これで（ｌωｌ；）。まあ、もう投稿しちゃったから遅いんだけどね☆。

いろいろ突っ込みどころがあるかもしれませんが、これが作者のシリアスを描いた結果です。シリアルとか言わないで・・・・（ノω＼）。

さてはて次回は・・・そろそろラウラちゃんの出番ですかね。というか二巻はシャルル無双で新キャラなのに出番が・・・なので結構なオリジナル展開になる予定ですので・・・覚悟しておてくださいよ？（いろんな意味で）

意見、感想等がありましたら送ってくださいまし。正直、皆さんがどのようなことを思って読んでいるかを知りたいです！改善点などを考える参考にもなるので、どうかどうかよろしくお願いします！

では、また（＾ω＾）ノシ

EP21　言葉（前書き）

お久しぶりです、皆様。二週間、長らくお待たせした事を深くお詫び申し上げます・・・・・マジ、すまんかったｍ（＿＿；）ｍ

今回からラウラちゃんの話になるのですが、実はこの話では全く出てきません。ラウラは次回からです。今回は触りだけって感じでお願いします。

長い間待たせた割にはいまいちかもしれませんが、どうかお許しを。

それでは、どうぞ

EP21　言葉

夕陽に染まる、広大な大海。それを見渡す小高い丘。そこに、私は彼と共に立っていた。

「どうだ、綺麗だろう？」

隣の彼が言う。しかし、私はその光景を見ても美しいとは思えなかった。どちらかと言えば・・・遠いという感想の方が目立ってしまっていた。

遠く、何処までも広がっている。水平線の先には何があるのか見えない。そんな先の世界に彼は旅立ち、そして戦う。

それを思うと少しばかりの恐怖が心の奥底で湧き出たが、馬鹿馬鹿しいとかき消す。

何に恐怖するというのだ。

戦う事に？　馬鹿な、我々は軍人だ。戦わずして、何とする。

だとすれば、彼が戦いで死ぬと？　それこそあり得ない。彼は強い、何処までも強い。彼が負けるはずなどない。

隣に立つ彼の顔を盗み見る。

黒い瞳に腰まで伸びた長髪。いつもの訓練で見せている凛々しい表情ではなく、優しいほほ笑みを浮かべている。私の胸が小さく高鳴る。

むしろ、私には・・・

「彼女は海よりもあなたの方に興味があるみたいよ」

背後からの声に私は慌てて振り返る。そこに立っていたのは私や彼と同じ黒いドイツ軍服に身を包んだ白髪の少女。自分のやっていた事を見られた私は羞恥の感情を覚え、口を開く。

「コ、コルネリウス大尉・・・私は――」

「大丈夫よ、わかってるから・・・フフッ」

クスリと笑う彼女はそう言われ、私の羞恥はさらに大きくなる。そんな私の事を余所に彼は笑みを消して、振り返ると彼女へと向かう。

「お前か・・・俺を呼びに来たのか？」

「ええ、ビットマン大佐が呼んでるわ・・・後はあなただけ」

「そうか・・・」

彼の顔に影が帯びる。一体どうしたというのだろう。何故彼がこんな表情をするのか、私にはわからなかった。そしてそれを訊く暇もなく、彼は表情を戻してしまった。

「少ない休憩時間を詰まらない事に使わせたな、悪かった」

「い、いえっ！私が大尉について来ただけですので！」

本当は他の事を言いたかった。どうして、何故と。だが私の口からその言葉が出る事はなかった。今思えば、何故あの時に問わなかったのだろう。問うて何かが変わったわけでもない。だが、それでも少しは彼の事を理解できたのではないだろうか。

「じゃあ行くよ・・・また会おう、ラウラ・ボーデビッヒ少尉」

「はい、黒瀬零司大尉・・・必ず」

私の肩を軽く叩くと彼は小さく笑い、彼女と並んで丘を後にする。その後ろ姿を見ながら、私は敬礼をして、立ちつくしていた。胸騒ぎはしていた。嫌な予感もあった。だが、その真意をもはや問う事は難しいだろう。

おそらくそれが、彼が私に向けてくれた最後の笑顔だった。

「・・・大尉っ！」

目が覚め、身体を起こす。眠気は無い。ただあるのは夢から覚めた事による言い表せない虚脱感。それに呑まれそうになる自身の意識を保護する様に眼帯をした左目に手をやる。

あの時、私が何をしても状況は変わらなかったであろう。私には彼を引き止める力はなく、ましてや彼と共に戦場へと赴く力もなかったのだから。

だが、今は違う。私は強くなった。今では彼と同じ様にＩＳ配属の特殊部隊の隊長にまで上り詰めた。力無き者だった、あの頃の私と

は・・・違う。

「今度は間違わない・・・絶対に――」

彼をドイツへと連れ戻す。毎日のように誓うその思いを胸に、私はぬくもりの残ったベッドから出て行った。

・

「へっくしっ！・・・うぁ」

寝起きに一発。目が覚めてすぐに出たクシャミは俺の寝ボケた脳みそをぐわんぐわん揺らし、軽い頭痛を覚えさせる。畜生、昨日深夜おそくまで起きていた所為でまだ眠い。どうも日曜日の夜というやつは明日が月曜日で授業が在るとわかっていても夜更かししてしまう。何故だろうか・・・

「しかし・・・誰か噂でもしてるのかね」

ベッドから出ると制服を掴み、そのままバスルームの前にある洗面台へ向かいながら独りでに呟く。噂と言えば、今月末の学年トーナメントの話があったな。確か優勝したら一夏と付き合える・・とかいうやつが。一体誰が優勝するんだろうか、ちょっと気になる。こちらとしては断然、篠ノ乃が優勝してくれればと思うが・・・専用機持ちが俺と一夏合わせないでも四人いるんだよな、確か・・・・行けるかなぁ、篠ノ乃・・・

「・・・というか、それって俺が優勝したらどうなるんだ？」

トーナメントで優勝、そして与えられる一夏への告白権利、それを妬む専用機持ち達の視線と新人類、ＨＵＺＹＯＳＩからの期待の眼・・・自分で考えて、なんだかゲンナリしてきた。何が悲しくてそんな権利を手に入れて、俺が苦労しなければならないんだ馬鹿馬鹿しい。

「こう考えると・・・辞退したいな、トーナメント」

着替えた後にバシャッと顔に冷水を掛け、タオルで拭きながらバスルームを出る。その時、たまたまシャルルの寝顔が目に入った。珍しく、ぐっすりと眠っている。ちなみにシャルルの正体を俺が知った後、眠っていたシャルルは一度目を覚ましたので夕食へと行き、後は二人で取り留めのない会話をして床に就いた。普段ならもうすでに目を覚ましてもおかしくないんだが・・・まあ、昨日あんな事が合った後じゃ無理ないか。

「・・・こう見ると本当に女の子だよな」

整った顔立ちを見て、俺は素直に可愛いと思った。まったく、どうしてこんな娘を男子と見間違えていたんだろうな、俺は。考える事が他にあったのはあるが、それにしたって・・・呆れてため息が出るぞ。

「良い寝顔だ・・・だが朝食に遅れるっていうのはヤバいからな・・・起こしてやるか」

安らかな眠りを邪魔するのはなんとも心苦しいが、遅刻して千冬さんにどやされるよりかはシャルルにとってもいいだろう。

「おい、シャルル・・・起きろ」

「ううん・・・むにゅ・・・」

ユサユサとシャルルの肩を掴むと優しく揺らすと奇妙な声をもらす。おいおい、起きないと出遅れるぞ。週の初めからあの人の説教なんて訊きたかないぜ、俺は。

「シャルル、起きなさい。遅刻するぞ」

「んん・・・零司ぃ・・」

俺の声を訊いていたからか、寝言で名前を呼ばれた。なんだろう・・・寝言で自分の名前を女の子に呼ばれるっていうのはなんともむず痒く、恥ずかしい。一体どんな夢を見ているんだ、シャルルよ。お兄さんはとても気になります。

しかし、なんだか起きそうにないな。仕方ない、ここはシャルルの目覚めがあまり良い物ではなくなると思うが、心を鬼にさせていただきましょうか。悪いな、シャルル。

「ンンッ！・・・織斑先生、シャルル君が居眠りしています」

「ね、寝てませんっ！僕、寝てませんよ！」

咳払い一つに言った俺の言葉に過剰反応とも言える勢いでシャルルがベッドから起き上がった。よし、起きた。さすがは鬼教官、名前だけでも効果は抜群だ。

「・・・って、あれ？・・・織斑先生は――」

「だまして悪いが、これもお前の為だ」

「れ、零司？」

「よう、寝ぼすけお姫様・・・目覚めは最悪かい？」

キョロキョロと回りを見て、俺を見つけたシャルルにそう言う。するとシャルルは状況を理解したのか思いっきり息を吐いた。

「・・・びっくりしたぁ。僕、織斑先生の授業で居眠りしちゃったのかと思ったよ」

「ははは、悪い悪い・・・ちょっと刺激が強過ぎたか」

「本当だよ・・・もう」

頬を膨らませるシャルルに俺は苦笑を浮かべる。まあ、俺は結構慣れてるけど、この学園で千冬さんの授業を訊かない命知らずなんていないだろう。転校初日から経験したシャルルにはなおさらだし。

「でも起きなかったのはシャルルだぞ？」

「えっ、それって・・・」

俺の枕元にある時計を顎でしゃくる。それを見たシャルルはあっと小さく声を上げた。

「ご、ごめん。寝過ごしちゃうところだったんだね」

「まあ、十分程度しか変わってないが、少しの遅刻も許さないからな。千冬さんは・・・」

そう言うと、俺はシャルルのベッドから腰を上げると自分の鞄を取って部屋のドアへと足を運ぶ。

「あ、何処に行くの？」

「何処って、先に食堂だよ。お前の着替えを見るつもりはないからな」

「そ、そっか・・・そうだよね」

そうだったと何度も確認する様に頷くところを見ると寝起きの所為か、シャルルは少し頭の回転が鈍っているみたいだ。そんなシャルルを見て、俺は少し意地悪な笑みを浮かべると口を開いた。

「それとも・・・着替えを見て欲しいのか？　それなら俺は大歓迎なんだがな・・・」

「なっ・・・零司～っ！」

そこまで言って、バフッという音と共に俺の口は強制的に閉ざされる。顔を赤くしたふくれっ面のシャルルにぶつけられた枕を投げ返すとクツクツと笑いながら俺は手を振って部屋を後にした。

・

「トーストとハム、お待ちどうさん」

「ありがとう、お姉さん」

「あらヤダねぇ、この子ったら・・・でも本当に食べないんだねぇ」

「低燃費ですから、地球に優しいんですよ」

いつもの低燃費メニュー・・・というか、もはやメニューですらない単品食材を皿に盛ってもらうとそれを乗せたお盆を持って近場の席へと腰を下ろす。それにしてもこの食堂は凄い。ただのトーストとハムだけなのに、なんだかやたら旨そうに見えるのだから。

「国立は良いねぇ・・・国立万歳」

そんな事を言いながら、トーストを齧りながら辺りを見回す。食堂はいつものように朝食を食べに来た女子達で賑わっている。いや、ちょっと違うな。賑わいがいつもよりも少し違う色に聞こえる。それはおそらく朝、俺が思っていた事・・・つまり月末トーナメントの事だろう。誰が一夏と付き合うってことで騒いでいるのだろう。

「大変だな、みんな・・・」

しかし、平和だ。この場所に、昨日一歩間違えれば死人が出ていた可能性がある出来事が起こっていたなんて知る人間などいないのだろう。それ以前にも、つい一カ月前にも人形（プッペ）と呼ばれるＩＳがこの学園を襲撃している。それなのに、この場所はいつも通り、事も無しげに日常を続けている。知っている人間には緘口令が敷かれているし、教師達もそれを知られる事を望んではいないのだろう。それは正解であるとも思うが、同時に少々気が抜けているとも言えるの

ではないだろうか・・・

「いや、それがある意味学園らしいのかもしれないがね・・・」

ただ昨日のシャルルの件が合った為だろう、そんなことがふと頭に過った。それと同時に――

『意識が甘く、危機感に疎い。兵器足るＩＳをファッションか何かと勘違いしている。この様な程度の低い、低俗な者達と一緒にいるべきではありません』

――――数日前にラウラが俺に言ってきた言葉も。

確かに・・・ラウラの考えもわからなくもない。低俗な、とは言わない。だが少々意識が甘い、危機感に疎いというのにはただ首を縦に振る事は出来ない。

一歩間違えば、相手を殺す兵器となってしまうＩＳという物を手元に置きながらも、それに対しての危機管理能力が少ない。

確かに競技用に使用されるＩＳは『絶対防御』が在る。

それがあれば搭乗者は死ぬことは無いだろう。だがそれは『絶対防御』が在る、という前提が在っての話。もしもそれが発動できない、もしくは発動しない状況になってしまう可能性だって否定できない。

良く分からないうちに『絶対防御』が発動しなくなり、誤って搭乗者を撃ち殺しました。

あってはならない出来事。だが、確実に無いとも言い切れない。俺達が使用しているＩＳとはそういう良く分からない事が起きる可能性を大いに秘めたブラックボックスの塊なのだ。

「まあ、だからと言って全部考えてたら何もできなくなるんだがな」

それに何より、そうならない為にも学園教師達が居て・・・彼女達の要望があれば俺もそれに赴く。そうやって問題は解決されて行けばそれでいい。そう思い、俺はラウラの言葉を否定した。まあ、それ以外の思いもあった・・・というか、その違う思いの方が大きかったのが本音だが・・・だがそれでも俺の意志は本当だった。だが今になってラウラの言葉に少しでも同調してしまうとはな。

「いかんな、どうも」

昨日でシャルルへの警戒は解けた。だが、どうも頭の中のスイッチが変わり易くなっているようだ。ここにいるべき自分といるべきでない自分。それを分ける、切り替える為のスイッチが。

「昔に・・・戻って来てるのかね・・・・」

「お、零司。今日は遅いんだな」

声をした方を一瞥すると、そこには篠ノ乃と二人の女子を引き連れた一夏が居た。

「一夏に篠ノ乃・・・それに布仏と青嶋か」

「おはようございます、黒瀬さん」

「くろりーさんだー、おはよー」

一夏と篠ノ乃の後ろで礼儀正しく頭を下げる青嶋の横、長めの袖をした制服を着ている女子がその袖をパタパタとさせている少女、布仏本音へと俺は問いかける。

「・・・布仏よ、俺のあだ名は「くろりー」なのか？」

「そうですよー、くろりーさんにけってーい」

言いながら、俺と向かい合わせに座った青嶋の隣の椅子に腰掛ける。珍妙なあだ名が付けられてしまった。まあ、あだ名付けられる位だからそれなりに好かれてはいるのだろう。それは素直に嬉しい。

「それにしても、朝から大所帯だな」

「ああ、箒から朝食一緒にどうだって言われてな」

「本当なら二人で食べるはずだったのに・・・」

「何か言ったか、箒？」

「・・・なんでもない」

向かい側に座る篠ノ乃がため息を吐く。一夏が相手だと相変わらず前途多難だな、彼女は。

「それにしても珍しいな、零司がこの時間まで残ってるなんて」

篠ノ乃のそんな心はつゆ知らず、一夏は俺にそんな言葉を投げかけて来る。もう少し気に掛けてやれよ、そういうツッコミを胸の奥にしまいこんで俺は一夏へと受け答える。

「そうだな、今日はシャルル待ちだ。ちょっとばかし寝坊したからな、あいつ」

「あーなるほど・・・俺の時は待ってくれた覚えがないんだが？」

「知っているか、一夏。人が平等だった事なんて今までないんだぜ？」

「せっかくの男同士なんだから、平等に行こうぜ？」

一夏は肩を竦める。そうだな、男同士ならそうかもしれん。だけどな、一夏。あいつは男じゃないんだよ。故に平等には扱わん。

「なんだか賑やかにだね、零司」

そんな話をしていると噂のシャルルが登場。つい数分前までのジャージ姿ではなく、いつもの男子制服姿で食堂へと現れると、俺の隣へと腰を下ろした。

「シャルル、おはよう」

「おはよう一夏。それに篠ノ乃さんと青嶋さんと布仏さんも、おはよう」

それぞれにいつもの紳士スマイルで挨拶を交わす。いや、正確には男じゃないから淑女スマイルか・・・うん？

「シャルル」

「・・・？　なにかな？」

「頭、ちょっと寝癖ついてるぞ」

「えっ、本当？」

ひょこんと頭部から出た可愛らいし寝癖。どうやら当の本人は俺に言われれるまで気付いていなかったようで、アセアセと髪をいじっている。

「えっと、何処かな・・・」

「あ、そっちじゃなくて・・・ちょっと待ってろ」

近場にあった布巾で手を拭くとシャルルの方を向いて、寝癖を直してやる。しつこい寝癖ではあったが、寝起きの奏に良く髪の手入れをしてやった事が在る俺にとっては朝飯前だ。

「・・・これでよしっと」

「あ、ありがとう・・・」

寝癖を指摘され、直されもしてしまった事があってか、シャルルは少し気恥ずかしそうに笑った。

「焦って髪の手入れを忘れたのか？　やっぱりシャルルは時々抜けてるよなぁ」

「ぬ、抜けてるって何さ・・・大体、今日は零司があんな過激な起こし方するから悪いんだよ」

「そいつは悪かった、今度はもうちょっと優しい起こし方をするよ」

「・・・まったくもう」

そう言って、笑い合う。本当に昨晩の出来事がウソだと思えてしまいそうな笑顔だった。偽らない笑顔、それはまさしくこの笑顔の事を言うのだろう。なんというか、見ていてこっちが温かくなる、まるで木漏れ日の様な・・・・って――――

「・・・どうしたんだ、お前ら」

「「「「・・・・・・」」」」

俺がそんな事を考えていると正面に座った四人・・・いや、四人だけではない。この食堂へと朝食を取りに来た女子達までもが俺とシャルルを直視している。しかも無言で・・・何このホラー現象、ちょっと怖い。

「シャルルよ、一体どうして皆は俺達の事を見てるんだ？」

「わ、わからないけど・・・なんだか嫌な予感がするよ」

「そうだな、それには激しく同意しておこう」

そんな事を話していると、直視は終わり、代わりに話声が聞こえてきた。

「う〜む、やっぱりフラグは黒瀬×織斑じゃなくて黒瀬×デュノアの方が濃厚みたいね」

「過激な起こし方って、どんな起こし方だったんだろ・・・キャー、気になる！」

「私はむしろ優しい起こし方ってのが気になるわね！」

「諸君、これは薄い本が出るぞ！至急、在庫の調整を！」

「うはｗｗｗｗおｋｗｗｗｗ」

ちょっと待て、待ってくれ、待ってください新人類共。一体何がどうなってそう言う話に展開されるのか脳外科でロボトミー手術でもして解析させてくれ。俺にはさっぱり理解できないぞ。

「零司、お前・・・」

「おいちょっと待て一夏、なんだその眼は。お前は本当に俺がそんな奴だと思っているのか？」

「今日も鮭が旨そうだ」

「テメェ、話を逸らすな！」

畜生、なんでお前にそんな目をされなければならないんだ。哀れみを帯びた視線を向けられるのも腹が立ったが、今のはその十倍は腹が立ったぞ！

「く、黒瀬さん・・・あなたの恋愛に口を出すつもりはありませんし、そんな資格は無いと思っていますが・・・さすがに同性はどうかと・・・」

「し、篠ノ乃さん!?　篠ノ乃箒さん!?　何故俺をそんな目で見ちゃうかね!」

「あ、安心してください!私は決して、その様な事であなたを軽蔑したりはしません!」

ああ、駄目だ。この娘もＨＵＺＹＯＳＨＩに脳をやられている。早急に病院に搬送が必要だ。むしろ病院が来い。

「くろりーさんとデュノアくんはラヴラヴだったんだー」

こら、布仏!そのラヴラヴって言うの止めなさい!君の場合は無邪気過ぎるから余計に怒り辛いんだから!

「ああもう、シャルルからも何か言えよ」

俺だけじゃなくて、シャルル的にもあまり良い話ではないだろう。男同士で、という話なら冗談で済むが、シャルルは女の子だ。好きでもない男と好いた惚れたで騒がれても嬉しいわけがない。だからシャルルからも何か反論が飛ぶと俺は期待していた。いたんだが・・・

「・・・・・」

なんでお前は顔を真っ赤にして黙ってるんだ!　騒がれて恥ずかしいのはわかるけれども、今反論しなければ後々後悔しても遅いぞ!

油断一瞬怪我一生、過ぎたるは及ばざるが如し、だぞ！（色々間違ってる）

「違うってのに・・・どうすれば」

そう天を仰ぎたくもなる様な状態で嘆くと、前に座っていた青嶋が急に椅子から立ち上がった。

「皆さん。本人達にその意識がないのに騒ぎ立てるのは失礼ではないでしょうか」

青嶋の大きめの声が食堂に響き渡り、女子達のざわめきがシンッと静まり返る。

「そう言う事は、ちゃんと本人の確証を取ってからするべきだと思います」

そう言うと青嶋は再び椅子に腰を下ろし、それと同時にさっきまでとは違う、朝の食堂のざわめきが戻って来た。それを見た俺は小さくため息を吐いて、青嶋に頭を下げた。

「・・・ありがとう、青嶋。助かったよ」

「いえそんな・・・ただ黒瀬さんが困ってたみたいなので、ちょっと出しゃばっちゃいました」

そう苦笑を浮かべる青嶋。案外、行動力があるんだなこの娘。今のはちょっと・・・いや、かなりびっくりしたぞ。

「デュノア君もちゃんと否定しなくちゃ、私達女子はその手の話は

敏感なんだから」

「そ、そうだね・・・今後は気を付けるよ」

シャルルも恐縮したように頷く。青嶋ってこんな女の子だったんだな、二カ月位同じクラスだったのに気付かなかった。

「本当に助かった、ありがとうな」

「お礼なんていいですよ、それにこれ以上黒瀬さんの悩みを増やしたくなかっただけで――」

「俺の悩み？」

はて、俺が悩んでいたなんて青嶋に言っただろうか？　少なくとも俺の記憶ではラウラの事もシャルルの事も話した覚えはないんだが・・・

「はい、なんだか難しい顔をしていたから・・・何か悩みでもあるのかなって」

・・・顔に出てたか。あんまりそういう風にはしない様に心がけているんだが、千冬さんにもよく心読まれるし、やっぱりわかりやすいんだろうか、俺って。

「・・・青嶋さんは零司の事を良く見てるんだね」

そして何やら不機嫌そうにジト目でこちらを見て来るシャルル。なんだね、その眼は。俺が何かしたかね。

「なあ、零司。悩みが在るなら相談に乗るぜ？」

「黙れ、裏切り者」

「・・・手痛いな、結構」

ズイッと身を乗り出してきた一夏へと冷静な言葉でピシャリと閉める。しばらくはお前とは敵対する事になるぞ、一夏。

「悩みってもしかして、ボーデヴィッヒさんの事？」

「・・・・」

シャルルのセリフに俺は黙って頷き、そして当たり障りのない言葉で置かれている状況を説明していく。

「ちょっと昔の知り合いでね。久しぶりに会ったんだけど、どうも考えが食い違ってさ。喧嘩・・・じゃないけど、硬直状態になっちゃってな。さてはて、どうしたもんかって考えてたんだよ」

「・・・昨日の状況から見て、それはなんとなくわかります」

篠ノ乃言う通り、昨日の昼の出来事、いきなり発砲してきたラウラを止めた時の現状を知っている人間なら俺とラウラが旧知である事はわかるのだろう。そして俺とラウラの仲が今は良好ではないという事も。

「くろりーさん、なんだか寂しそうだね」

「寂しい・・・とは違うと思うが、話は付けたいかな」

心配そうに言う布仏に向けて苦笑を浮かべる。寂しい・・・のかね、良く分からん。ただ弟子みたいなものだったからな、俺にとってのラウラは。

「だったら・・・ちゃんと話してみるべきだよ、零司」

「シャルル・・・」

「言葉にしないと、伝わらないことだっていっぱいあるよ」

それはおそらく、自分の事と重ねているのだろう。もし昨晩、言葉にせずに全てを終えていたら、シャルルはこの場所にいなかったのかもしれない。言葉にしたから、彼女はこの場所で、こうやって新しい朝を迎えているのだ。言葉には力がある。人の心を動かす力が、ある。だってシャルルを救ったのは、紛れもなく俺と彼女の言葉なのだから。

「だから・・・ね？」

「そう・・・だな」

悩むよりも行動、予測もなしに動くって言うのはあまり得意ではないんだが・・・たまにこういうのも良いだろう。そう、まさに昨日の晩の様に・・・

「そうと決まれば、何話すか考えておかなきゃな」

笑い、俺は席を立つ。そんな俺を見て、一夏は言った。

「また先に行くのか？　もう少しゆっくりしても――」

「お前、時計も読めないのか？」

そう言うと一夏は首を動かして自分の後ろの壁に掛けられた時計を見る。そしてそこに記載された時刻を確認して、見る見る顔が青ざめて行く。そして――

キーンコーンカーンコーン

予鈴が、なった。

「うわっ、マジかよっ！　皆急げ・・・ってぇ！？」

一夏に急かされる必要もなく、他の女子四名（一名男装）は立ち上がり、俺と共に走り出す。予鈴は鳴ったが、ここから今すぐ走れば間に合わなくもない。そう、今すぐ走れば。

「お、置いてくなよっ！」

「ごめんなさい、織斑君」

「教室で会おうねー、おりむー」

「お先に失礼するよ、一夏」

「私はまだ死にたくない」

「ていうか、死んでしまえ」

「ちょっと待て！　最後の！　そんなに俺が嫌いか、零司っ！」

後ろから追おうとする一夏から距離を離す形で始まった猛ダッシュ、おそらくそれぞれが遅刻の事で頭がいっぱいだったであろう。だが俺は違っていた。違う感情を、抱いていた。

（ちゃんと話して・・・決着させなきゃな）

そんな一つの決意を胸に、俺は自分の教室へと全力疾走するのだった。

EP21　言葉（後書き）

はい、二十一話終了です。いかがでしたか？（＾ω＾）

宣言通りに今回からラウラの話が展開されます。原作二巻はシャルル無双でしたからね。シャルルも好きなんですけど、ラウラちゃんも・・・ね。

今回は投稿が本当に遅れてしまって申し訳ありませんでした。全て・・・全てあいつが・・・課題が悪いんです！鬼の様なあの課題が！あとダークソウルが！あまりの厳しさに【心が折れそうだ・・・】ですよ！

まあ、そんなのに負ける私ではないですけどね。今後も頑張って行こうと思います。どうか応援よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ。

では、また（＾ω＾）ノシ

EP22　すれ違い（前書き）

どうもどうも、前書きのネタが無くなって来た緋星でございます（ｰωｰ）ノ。

皆さま、どうも最近鈍亀更新になりがちで本当にすみません。オリジナルな話を描こうとするとどうも筆が止まりがちになってしまうのです・・・え、皆そうだろ?言い訳すんな?・・・・ですよね～（；ω；）

というわけで、一応ラウラちゃんの話のつもりです。今回はいつにもましてアレな感じですが・・・どうかよろしくお願いしますm（＿＿；）m

EP22　すれ違い

Ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

朝、過去の夢から目覚めた後、私はいつもと変わらない時間に食堂に行くと朝食を取り、その足で教室へと向かう。廊下を歩くと、他の生徒達が忌避の視線をこちらに向けながら避けて行く。だからと言って何かが気になるわけでもなく、私はまっすぐに目的地の教室へと進んで行く。

「ほら、あの娘だって・・・」

「ああ、この前アリーナで問題を起こしたって娘でしょ？」

「なんだかクラスでも入学早々、あの織斑君を引っ叩こうとしたとか」

「ええっ！？　それって本当だったんだ・・・」

・・・耳障りだ。どうしてこう、ここにいる者達は噂を呟かなければ気が済まないのだろうか。情報戦をしているでもあるまいし・・・理解不能だ。

大体、恐怖を抱いているなら何故私の前に出て来る。隅に隠れ、怯えていればいいものを・・・恐怖よりも興味の方が勝っているのだろうか。

そんな状況のこの場所に呆れを抱くと共に、この場所に自分がいなければならない事が全くもって腹立たしかった。

自分は本来、こんな場所にいるべきではない。軍人として、祖国ドイツの為に部隊と共に訓練を行われなければならない。

そしてそれは私だけではない。あの人だってそうだろう。

黒瀬零司、あの人もこんな場所にいるべき人間ではない。あの人は我らドイツ軍でこそ、その能力を十二分に発揮できる。それは彼の過去の戦歴を見れば、誰だってわかる。今の状況を見ればドイツ軍の人間、十人に十人が彼の帰還を望むだろう。

しかし、彼はそれを望まなかった。私の前で、ハッキリと帰還する事を否定した。そしてこう言った。

――自分はこの場所に望んで・・・自分の意志で居るんだ、と・・・

ガララッ・・・

「・・・・・」

教室へと入ると、先に廊下で感じていたものと同じ視線を再び感じながらも自分の席へと付く。窓際の後部、丁度教室全体を見渡せる様な場所。そこから、私は彼の席へと視線を向ける。

私には・・・彼の言葉が理解できない。彼は戦士だった。勇敢で、有望な。手に入る栄光もあっただろう。誰もが彼を英雄として認めただろう。だが、彼は去った。全てを捨てて、こんな場所にいる。

この場所に何が在るというのだろう。過去を切り捨ててまで、この場所には彼が望むものがあるというのか。

わからない・・・考えても、答えが出ない。あの人がこの場所に何を求めているのか、理解が出来ない。

「私では・・・駄目だと言うのか」

呟いて、その言葉を頭の中から消し去る。弱気になるとは、私らしくもない。一度否定されたから、どうしたというのだ。その程度で引いてしまうほど、軟な精神では軍人などやってはいられない。

私は彼を連れて帰る。その為にはどのような方法でも労するつもりでいる。ならば、躊躇いも足踏みを必要ない。ただ目標に向けて動く、ただそれだけだ。

「よし、到着・・・っと」

「はぁ・・・はぁ・・・ま、間に会いましたね」

「そうだね・・・でも本当に一夏を置いて来てもよかったのかな」

「誰のＨＲか知っているのにあんなに遅くしているのが悪い・・・自業自得だ」

勢いよく教室のドアが開かれ、彼が友人であると思われる三人の女子と共に教室に現れた。そんな彼が浮かべる笑顔は二年前に見た笑顔と同じもので、私の胸の奥で懐かしさを湧き出させていた。

（あなたを連れて帰ります・・・絶対に）

懐かしさを覚悟へと変え、想いに新たなる火を継ぎ足すと私はただ

黙って彼を見詰めているのだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

「つまり、コア・ネットワークを使用したコア自身の自己進化に関して・・・」

千冬さんのＨＲが終わって、早くも授業は四時間目。テキパキと授業を進めて行く山田先生をしり目に俺は朝に食堂で宣言した通りにラウラとの話し合いをする為にその内容を考えて、そして悩んでいた。

（・・・話し合うって言ってもなぁ・・・）

何から話し合うべきであろうか。あいつはおそらく、口を開けば俺をドイツへと送り帰す事しか言ってこないだろう。下手をすると取り付く暇もない。そんな相手にどう話していいものやら。

（あの時、結構ハッキリと言っちゃったからな・・・）

あの時というのは、数日前に裏庭に呼び出された時の事だ。「話すだけ無駄」とか「お前は帰れ」とか結構キツイ感じでものを言ってしまった。それなのに話し合うって言ったところで今更なぁ・・・

（大体、あいつは強情なんだよ・・・今更、俺が帰ったってどうにもならんだろうに）

そう、今更俺がドイツへと帰ったところであっちの政府だって扱い

に困るだろう。何せ俺は十数年の間、ドイツ政府側が技術独占を目的にひたむきに隠してきた機密存在。下手に俺との関わりが復帰したなんて事になったら、他の国からなんて言われるかわかったものではない。

（しかも俺の過去が明らかになれば、酷い目を被るのはドイツ政府だけじゃないのに・・・）

政府側はなんで止めないのだろうかと考えたが・・・ラウラの事だ、おそらく俺が日本でＩＳ搭乗者として復帰した事を訊きつけるなり、部隊の人間も置いて独断単独でこの学園に来たのだろう。全く、そこまでして俺を軍属に引き戻したいのかね。

（・・・まあ、それはいい。それよりも今はラウラをどう説得するかだ）

ともかく今回の目的はラウラとしっかり話し合い、俺がこの場所にいる事を納得してもらうという事だ。そしてここで再び話を振り出しに戻るわけで・・・一体何を喋ったらいいのだろう。

（・・・そういえばラウラに出会ったばかりの時も何話すかで迷ったりしたっけな）

ふと、そんな事を思い出した。出会ったばかりのラウラは外からの接触を極端に拒んでいた。他人はもちろん、上司も仲間も・・・まさに自分の殻に閉じこもる様にして、何も見ず、何も語らず・・・そんな少女だった。

（だけど、なんだかんだでアイツとは良く話す様になったんだよな）

だが俺にはラウラをそのまま放っておく事などできなかった。出来損ない・・・まるで人間とは思えない、そんな扱いをされている彼女を見捨てられなかった。単なる同情か・・・いや、俺は多分ラウラに自分を重ねていたのかもしれない。

あの施設にいたら、自分もこうなっていたかもしれない。

だから、俺は救いたかったのかもしれない。俺の憧れた・・・あの人の様に。

『授業も訊かずに悩み事か?』

そう、この声の人物の様に・・・って――

『ち、千冬さん?』

いきなりのプライベートチャンネルを訊いて、俺は驚き戸惑いながら目立たない様に小さく辺りを見渡す。すると教室の扉の向こう側に黒いスーツを着た肩が見えた。

『こんなところで何をやってるんですか』

『何、校舎内を見回っていたらずいぶんと集中力のない生徒がいたのでな』

・・・確かにさっきから山田先生の説明は一つも訊いてない為に反論できない。

『どうせ、ボーデヴィッヒの事だろう?』

『・・・・・』

まるで俺の考えが読めるのであるかのように、千冬さんはさも当然の様に言い当てる。その言葉に俺は肯定する様に少し黙ると、ため息交じりに口を開く。

『・・・やっぱり、わかりますか？』

『お前が現状で悩む事と言ったら、それくらいだろう・・・大方、ボーデヴィッヒとの寄りを戻したいとでも考えていたのだろう？』

『寄りを戻すって、彼氏彼女じゃあるまいし・・・』

ちょっとした冗談を交えて来る千冬さんに小さく反論して、その後少し間を開けてから続ける。

『でも・・・仲直りしたいっていうのは本当ですよ』

仲直りというか・・・俺がこの場所にいる事を理解してもらいたいってだけなんだが・・・まあ、仲が直ればこっちの話にも耳を傾けてくれるだろうから・・・いいか。

『お前がドイツに戻れば、昔みたいに良く躾けられた犬の様に後ろからついてくるんじゃないのか？』

『戻れるわけないじゃないですか』

『まあ、それもそうだな・・・私もお前をドイツへと戻す事に関しては反対だ』

どうやら、千冬さんも俺をドイツに戻すという事の重大さを良く理解している様だった。

『だから、どうしたらラウラと険悪な関係から元に戻れるのかなって考えてるんです』

そして考えは再び振り出し。午前中の授業の間、何度このループを繰り返した事か・・・一向に答えが出ない状況にやきもきしながら頭を掻く。

『悩む事なんてない、お前が思っている事を言ってやればいいじゃないか』

『・・・え?』

虚を突かれた様に頭を掻く手を止める俺の声を訊いて、千冬さんは続ける。

『どうせあの裏庭以来、ろくに会話なんてものもしてないんだろう?』

『・・・はい』

『だったら、お互いの考えをぶつけるいい機会だ。腹の内を割って話し合え』

ずいぶんと大雑把なアドバイスに俺は一瞬、言葉を失う。だが、それが至極真っ当な正論であり、結果的にはそうやるしか他に無いという事を悟り、そしてラウラという少女にとって一番有効な手段だ

と思った。

『下手に小細工して、本音を言えない様では・・・それこそ文字通り、話にならないからな』

『そうですよね・・・』

『お前は昔から身内の事になるとちょっと考え過ぎる癖がある。だからこんな単純な事にも気付けなくなるんだ』

『ははは・・・』

まったく、耳に痛い。そうだよな、自分の考えもぶつけないで迷っていても仕方がない。それにラウラは目的を言っているのに、俺だけそれを濁すなんてフェアじゃない。朝、シャルルに言われたばっかりじゃないか。

――言葉にしなければ、伝わらない事もある。

『ありがとう、千冬さん』

『相変わらず手のかかる弟子だよ、お前は・・・いつまでも私がお前を支援すると思うなよ？』

『はい、重々承知しましたよ・・・師匠』

俺がそう返すと千冬さんはプライベートチャンネルを切った。ドアの方へと視線をやると、そこにはすでに千冬さんの気配はない。そして通話を終えたのと入れ替わる様に授業終了のチャイムが校内に鳴り響く。

「はい、今日の授業はここまでです。ここは次の試験に出しますから、しっかりと復習しておく様に」

そう言い残すと山田先生は教室から出て行くと、隣の席に座るシャルルがこちらに声をかけて来る。

「ボーデヴィッヒさんの事、考えはまとまった？」

「ああ・・・っていうか、俺がそんなに考え込んでいたってわかったのか？」

「そりゃあね。だって零司、全然授業訊いてなかったみたいだし・・・ずっと難しそうな顔をしていたからね」

「なるほどね・・・まいったな、こりゃ」

クスッと笑うシャルルにつられて、俺も小さく笑ってしまう。

「で、どうするの？」

「ああ、やっぱり面と向かって話し合うよ。本音を言わなきゃ、あっちだって理解できないだろうからな」

「そっか・・・」

おそらく、この答えに行き着くのをある程度予想していたのだろう。

俺の答えを訊いて、シャルルは小さく頷くと言った。

「どんな事を話すとかは決めたの？」

「いや、ぶっつけ本番。そっちの方が素直に話せそうだ・・・ま、どんな返事が帰ってくるかはわからんけどね」

口ではこう言っているが、十中八九で俺の言葉はラウラの中で否定されるだろう。だが、それでも俺は止める気はない。否定するならすればいい、だが俺の意識はそれが本音なんだ。

「なるほど・・、ちょっと惜しい気もするけど、今日の昼食は一緒じゃない方がいいね」

「ん？　なんでだ？」

「零司、シャルルも飯行こうぜ」

俺とシャルルの会話を割って、一夏が俺に声をかけてきた。俺はそれに対して、返事を返そうと席から腰を上げる。

「おう、じゃあ――」

「駄目だよ、一夏。零司は先客があるから」

――が、俺が何か言う前にシャルルはそう言い、一夏の背中を押して教室のドアまで押しやって行く。

「あ、おいシャルル！？」

「いいからいいから、昼食なら僕が相手なるよ」

「いや、わかったからそんなに押すなって！」

状況が良く分かっていない一夏の言葉を聞き流し、シャルルは一夏を教室の外へと押しながらこちらを向くと口パクで

――――頑張って

と俺に告げ、小さくウィンクをして教室から出て行った。なるほど、この昼休み中に話して来いって事か・・・

「・・・メルシー、シャルル」

親切な友人の気遣いに素直な礼を述べ、俺は教室を後にした。

・

「こんにちは、黒瀬さん。学年末トーナメント、楽しみにしてますよ」

「あ、黒瀬さんだ。今度新聞部のインタビュー受けて欲しいんですけど、月末の学年トーナメントについての意気込みなどを」

「黒瀬さん黒瀬さん！朝のデュノア君との件ですけど、どれくらい関係が――」

「あー、わかったわかった。あとで取材でもインタビューでも答えるから、とにかく通してくれ」

教室から食堂へと直行し、とりあえず食事を確保してからにしよう

と思って食券を買っていると、何故か大量の女子達に行く手を阻まれた。おそらく今月末にあるトーナメントが近付いている事と今年はそこに男子が参加すると言う事で、例年よりも盛り上がっているのだろう。

「はー、こんなことなら生贄に一夏でも連れて来るんだったな」

向かってくる女子の波をかき分け、ぼやきながら列に並ぶと辺りを見渡してラウラを探す。すると、食堂にいる女子達が俺の近くに出て来ている所為で案外早めに見つける事が出来た。ラウラは食堂の給仕係のおばちゃんからお盆を貰っていた。

「おはちください」

「おはち？・・・ああ、お箸ね」

「はい、それです」

何やらやっているが、無事に箸を貰えたらしい・・・というかラウラよ、お前は箸使えるのか？　少なくともお前が箸を使っているところを見た事がないんだが・・・

ヒョイ・・・ポロッ

「・・・・・む」

ヒョイ・・・ポロッ

「・・・くっ・・・」

ヒョイ・・・ポロッ

「・・・・むむむ」

近場の席に着き、箸を持って里芋の煮物に手を伸ばす。だが突っつき、コロコロと転がすだけでなかなか取る事が出来ない。良く見ると・・・いや、普通に箸の持ち方自体が少し危うい。何故箸を選択した。

「何やってるんだ、あいつは・・・すいません、スプーン一つ」

煮物に苦戦を強いられているラウラを見かねて、和定食なのにスプーンを受け取ると俺は取り巻く女子達に「静かに食事したいから」と言って離れてもらい、そのままラウラの元へと進んで行く。

「・・・ぐぬぬぬ・・・・」

「・・・ラウラ」

声をかけると、ラウラはハッとなって顔を上げる。そんな彼女に俺は一言だけ言った。

「スプーン・・・使え」

「ヤーッ！」

立ち上がってがっつり敬礼され、それに対して俺は額を覆ってため息を吐いた。なんだか初っ端から出鼻をくじかれた感じだ・・・だけど、おかげで少しあった緊張の糸が完全に切れた。思ったより崩して話ができそうだ。

「立つな、敬礼するな、静かにしろ・・・ここは軍じゃない」

「了解しました」

ラウラは素直に俺からスプーンを受け取ると、静かに座り直した。
それと向かい合わせになる様に俺も椅子に座る。余談ではあるが、
奇遇にも俺とラウラの頼んだ定食は同じものだった。

「よう、ラウラ」

「ハッ」

「だから敬礼は止せよ、そんな堅苦しく構えるな。ここでは一人の
学生だ、俺もお前も」

「しかし・・・」

「駄目か？」

「・・・い、いえ」

そんな俺の言葉を訊いて、ラウラは頷きながらも少し納得できない
様な顔をしていた。

「そんなに俺がこの学園にいる事が納得できないのか？」

「当り前です。あなたは勇敢な戦士であるべき人なのに・・・こん
なところで腐っているべきではないはず」

「・・・・ラウラ」

他者の視線など感じない、清々しいくらいにハッキリとした物言いに俺は小さくため息をついた。

「前・・・と言っても二年前くらいになるけどさ。俺はそんなに勇敢な戦士じゃないぞ」

「それは謙遜です。あなたほどの戦果をあれだけの短期間で上げた者など・・・あなたは英雄と讃えられるべき人物です」

尊敬の念がヒシヒシと感じられる様な、そんな力強いセリフ。だが俺は瞼を閉じて、ラウラの言葉を否定した。

「俺は英雄じゃないよ・・・今までも、そしてこれからも」

英雄、その言葉を訊く度に胸の奥底が締め付けられ、それと同時に軽い憤りを覚える。戦いは醜く、それでいて恐ろしい。英雄とはその戦闘を肯定し、他の物までも戦闘に駆り立てる。そんな存在で居たくはない。

「所詮、俺は孤独に耐えられなくて、あの場所から逃げ出した臆病者だ」

「そんなことありません！」

ガタッとラウラは椅子から立ち上がり、声を荒げる。

「あなたは臆病者だなどと・・・そんなわけが――！」

「ラウラ」

ラウラの言葉を遮ると、周囲に目を向ける。何事かとこちらを見ている女子はいたが、どうやら何の話をしているかまでは聞こえていない様だ。そして俺が何を気にしているのかを悟ったのだろう。ラウラも大人しく腰を下ろす。

「お前は信じたくないだろう。だけどな、もうあの場所に戻らずに済むと思うと・・・正直、ホッとするんだよ」

「・・・・・・」

「ここは確かにＩＳの置かれた場所だ。だけど、ここからは俺が引き金を引く度に感じる血と硝煙の匂いも悲鳴と警報の音も・・・無い」

ああ、なんだろう。語りながら頭の中で映像が巻き起こる。醜く、這いながらも生き残ろうとした、あの時の記憶。ただ目の前に存在する敵に向かって、引き金を引き続けてきたあの戦場。

――――ズキンッ

頭が・・・痛い。鋭い痛みが脳を電流の様に駆ける。駄目だ、こんな事を考えてるとまた疾患に引っかかる。

粘着質の記憶を振り払う様に息を吐き出し、水を飲むと話を続ける。

「では・・・」

「うん？」

「では、あなたはこの状況にいて・・・本気で満足しているのですか？」

絞り出す様な声でラウラは俺に問いかける。そんなラウラに、俺は迷わず答えた。

「ああ、そうだよ」

「・・・・ッ！！」

俺の本心を訊いて、ラウラは悔しそうに歯を食いしばる。そんな彼女に俺は続けて語りかける。

「お前もどうせここにいるなら、楽しめよ」

「・・・私は軍人です」

「戦争するだけが軍人じゃないだろ」

「私にはっ！・・・あなたの事がわからない」

荒げそうになる声を押さえながら、ラウラは俯き、顔を伏せる。

「あなたがどうしてこんなところで満足しているのかも、あなたが何故そんなに自分を臆病者だと言うのかも・・・・私にはわかりません」

「・・・そうか」

ラウラの答えに短く答え、沈黙が下りる。ガヤガヤとざわつく食堂の中で、この机だけがまるで違う場所にあるかの様に思えるほど言葉もなく、ただ静まり返っていた。

「・・・やはり私には納得できません」

そして沈黙を破ったのは、ラウラだった。それは俺の考えを了承しない、ある種の決別の言葉だった。

「納得できないか・・・だったら、どうする？」

「私は私のやり方で、あなたをドイツへと連れ戻します」

「もしそれを俺が許さないと言ったら？」

「私は・・・あなたと戦います」

ラウラはそう言うと、椅子から腰を上げて食堂から出て行った。大体、予想通りの受け答えに俺はため息を吐いた。やっぱり駄目か、そう簡単に納得してくれないと思っていたけが・・・やっぱりちょっとへこむな。

「俺は・・・お前にも楽しんでもらいたいだけなんだがな」

・・・いや、これも俺の自論を叩き付けているだけか。変わらんな、俺も。

「失敗しちゃったみたいだね」

声が聞こえたので、後ろを振り向く。そこには一夏と篠ノ乃、それ

に青嶋と布仏を連れたシャルルの姿が合った。俺はそんな彼女に向かって肩を竦める。

「まあ、十中八九無理だとは思ってたけどね」

「くろりーさん、だいじょーぶ？」

「大丈夫大丈夫」

隣に来た布仏の頭をポンポンと軽く叩く。良く見ると、シャルル以外の四人は心配そうな顔をしていた。

「黒瀬さん・・・・」

「零司・・・・」

「ああもう皆、そんな顔するなって・・・ほら、座れよ」

居心地悪さ半分、心配してくれる嬉しさ半分で苦笑を浮かべながら皆の椅子を引いてやる。そしてその椅子に座る中でシャルルが口を開いた。

「でも・・・なんだかボーデヴィッヒさんも辛そうだったね」

「そうですね・・・ボーデヴィッヒさんも本当は黒瀬さんと喧嘩なんてしたくないんですよ、きっと」

「確かに、望んで喰ってかかっている様には見えないな」

シャルルの意見に同意した、残念そうに肩を落とす青嶋と考え込む

ように唸る篠ノ乃。そして一夏が身を乗り出して、俺に訊いてくる。

「なあ零司、俺に手伝える事とかないか？」

「そ、そうですよ。私にも何か手伝えませんか？」

「私も、黒瀬さんには借りがあります。何かないですか？」

「くろりーさん、私もお手伝いするよー」

「手伝いって言ったってな・・・」

こちらに言い寄ってくる皆に対して俺は苦笑を返す。一夏や皆の申し出は素直に嬉しかった。出来るなら力を借りたいと思う。だけど・・・これは奏にも言った事なんだが・・・

「・・・いや、止めておく」

これは俺とラウラの問題で、俺がしっかりと向き合わなくちゃならない事だ。だから誰かの手を借りて・・・なんて事で済ませてはいけない。そんな気がするんだ。

「な、なんでだよ。俺だって零司の役に立ちたいぞ」

「私じゃ駄目でしょうか・・・」

「せ、せめて恩を返すくらいの事は出来るはずです！」

「でも私、くろりーさんが心配だよ」

「いや、申し出は凄い嬉しいんだがな」

いかんな、こうも食いついて来るとは思わなんだ。う～む、何か的確な言葉で断る事はできんのだろうか・・・ああ、良心の呵責が起きそう。

「まあまあ、四人共落ち着いて・・・そんな風に詰め寄っても、零司が困るだけだよ」

「う・・・」

「・・・それもそうですね」

「・・・口惜しいが」

「うーん・・・そうだね」

そんな事を考えているとシャルルが間に入ってくれた。いやぁ、助かった。友人の好意を蹴るほど心苦しい物はないからな。

「僕達は静かに零司を応援して上げよう。これは零司の大切な事なんだから」

「シャルル・・・」

「きっと大丈夫だよ、零司。ボーデヴィッヒさんならちゃんと仲直りできる・・・僕は信じているから」

木漏れ日の様な温かな、そして優しい笑顔を浮かべてシャルルはそう言った。

昔の様に戻れるか、それはまだ分からない。もしかしたら、今後起こる事によって完全に決別してしまうかもしれない。

だけど、不思議とそうは思えなかった。それはおそらく・・・

「俺も・・・そう信じてるよ」

そう思わせてくれる・・・信じさせてくれるものが・・・・そこにあるからと思う。

・

Ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

「・・・黒瀬少佐」

食堂を出た私はその足で裏庭に来ていた。学園の構造、そして通る人通りまでも計算して、もっとも人が来ない場所。そして私が彼を呼び出した場所であり、私が彼に否定された場所。

「・・・どうしてっ！」

近くの木に拳を打ち付け、強い憤りとそれ以上に感じる悲しみに無意識に声が漏れる。

彼は戦士だった。誰も寄せ付けない、絶対の力を持った戦士。栄光栄華を謳歌するはずだった人。そして何よりも・・・

私を暗闇から救い出してくれた・・・私の恩人だ。

それなのに・・・それなのにどうして・・・・彼は自分を臆病者と蔑む。

「違う・・・あなたは・・・あなたはそんな人ではないっ！」

あの人が自分を語った時の顔を思い出し、心が痛んだ。自身に対する侮蔑が本物である事を私に悟らせるあの表情に。

――――違う、私はあなたにそんな顔をして欲しくない。

「私は・・・あなたに・・・・」

思い起こされる、あの丘の情景。去って行く、後ろ姿。もう・・・失いたくない、側で・・・どうか側で・・・・

「・・・・絶対に」

感情に押し流されそうになるのを必死でこらえ、ＩＳ学園の校舎を睨む。彼は二年前の自分はもういないと言った。だが、私は信じない。私は絶対無比のあなたを信じている。あなたをこの呪縛から解き放って見せる。

「取り戻して見せる・・・」

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

EP22　すれ違い（後書き）

はい、終了です。今回も読んでいただき、誠にありがとうございます（＾ω＾）。

いやぁ、どうでしょうか今回の話。作者的には「う～ん」って感じなんですが・・・やっぱりオリジナルは難しいわ、うん。

というか、この時期のラウラちゃん絡みずれぇ・・・ま、そんなラウラちゃんも大好きです。むしろデレ期よりも（ｒｙ

今回から視点変更の時にＳｉｄｅを入れる事にしました。少しでも分かり易くなっていたら幸いです。

さてはて、次回は

自身の考えを告げるも、ラウラはそれを良しとしない。そしてついにラウラは行動に出る。最初の目標は・・・専用機持ち。

これで次回がどの辺の話か理解できたと思いますｗ。つまりそこら辺を描こうと思いますので・・・はー原作のところ描くの久しぶりな感じ。

では、また（＾ω＾）ノシ

EP23　狂行（前書き）

（、・ω・´）キリッ＜・・・・待たせたな

はい、読者の皆さま、本当にお待たせしました。ようやく投稿です。いやいや、もう活動停止とか思われてるんじゃないかな・・・なんて思いながら投稿してますよ。リアルが忙しくて・・・ごめんなさいｍ（＿＿；）ｍ。

今回はやたら長いですけど、もし飽きなかったら読んでいただけると幸いです。では相変わらずアレな感じですが・・・どうぞ

EP23　狂行

食堂での出来事が在ってから数時間後、もうすぐ五時間目・・・つまり今日最後の授業が終わる。耳に聞こえるカリカリという筆記音。皆、この授業に集中して静かに黒板の内容をノートに書き写しているのだろう。そう言えば来月にテストが在るんだったな。

いくら一年の勉強が昔やってあるものだとしても、さすがにノートも取らず、話を聞かず、これではテストなどで影響が出るだろう。だが今の俺には他に考える事が在る。

（学年別トーナメントか・・・）

もう皆が散々騒いでいる学年末トーナメント、学園側と企業にとっても生徒にとっても今月最大のイベント。クラスの・・・否、学園全体の生徒達が騒ぎ立てているこのイベント。だが俺が悩んでいるのは皆が気にしている企業からの注目とか一夏との交際がどういう形になるのだろうとか、そんな事ではない。むしろそんな事で悩めた頃の方がずっと気が楽だったのだろう。

まあ、俺の置かれている状況を理解している人物が居るとすれば俺が何に悩んでいるかなんて事は一目見ればわかるだろう。

（・・・ハァ）

心の内でため息を吐き、首を捻って窓際の列の最後尾付近にある自分の席に鎮座するラウラを横目で窺う。彼女もまた、俺と同じ様に考え込んでいるのか、難しい顔をしてノートを取っている様子は無い。全く、俺達二人揃って不真面目だな。

（自分の気持ちはちゃんと話した・・・結果がこの有様だよ）

食堂から走り去って行ったラウラは俺が教室に戻った時は自身の席についていた。てっきり今日の授業はもう出ないかな、なんて思っていたんだがそこら辺はしっかりしている。

（あいつは・・・俺と戦うって言ってたな・・・）

食堂から出て行こうとした時、ラウラは確かに俺にそう言った。戦う、それは一体どういう意味なのか。ラウラは一体、俺の何と戦うというのだろうか。

（一体何をするつもりなんだ？・・・・ラウラよ）

「随分と余裕じゃないか、黒瀬君」

バスッと頭に何かがぶつかった・・・いや、上から来たんだから叩かれたと考えるのが正しい。俺は声が聞こえた方、つまり正面の黒板の方へと首を戻す。

「それとも私の授業はよほどつまらないのか？」

「イ、　イリア先生・・・」

五時間目の授業、一般教養化学の担当教員であるイリア先生は俺の目の前に立ち、俺の頭頂部に向けてチョップを繰り出していた様だ。しかしあれだな、千冬さんの出席簿チョップと比べるとへっぽこチンピラのパンチと日本ヘヴィ級チャンピオンのストレートくらいの違いを感じさせるな。要するに全く痛くない。

「すみません、ちょっと考え事してまして・・・」

「なるほど、意中のあの娘に熱い視線を送っているくらいだからなぁ」

クツクツと笑いながらイリア先生がそう言うとクラスにどよめきが湧いた。

「い、意中の相手！？　黒瀬さんって好きな娘とかいたんだ・・・」

「なんだかクラスの皆の事は後輩みたいに考えてるんだと思ってた・・・」

「一体誰かな・・・気になる娘って」

「そりゃあ、デュノア君でしょ」

「薄い本ｋｔｋｒ！！」

騒ぎ出すと止まらないのがこの年代の女子。まるで山火事の様だな、広がり方が。あと最後の奴、お前とはいい加減決着をつけなくてはならない様だな。よし、今度校舎裏へ来たまえ。丁重に話し合いで決着を付けようではないか。

「いやはや、年頃の女子はこういう話に対して喰い付きが良いな」

「イリア先生、適当な事を言わんで下さいよ・・・彼女達だったら本気にしかねません」

「しかし、食堂で色々話していたじゃないか・・・私にはそう言う話で喧嘩していたのかと思っていたんだがな」

「どうしてそうなるんですか・・・」

俺にしか聞こえないくらいの小さな声で言ってくるイリア先生の言葉にゲンナリと返答しながら、俺は少し後悔していた。食堂なんて人目の多い場所で話していたらそりゃ人目に付くわな。他にも話しているのを聞かれてたってことだろう。迂闊だな、俺も。

「この前フラれたばかりで恐縮だがね・・・この時くらいは私だけを見ていて欲しいものだな」

ニヤリと笑いながら言うイリア先生。ねえ先生、ふざけて言うにはちょっとシャレにならないんじゃないですかね、そのセリフは。ほら、女子達のざわめきが一層大きくなっていますよ。

「そんなんだから千冬さんに怒られるんですよ・・・」

「まったく、君は何かにつけて織斑先生だな・・・別に嫌われているとは思ってないんだがな」

「いやぁ、良い比較対象・・・人のふり見て我がふり直せ、反面教師としていいんじゃないでしょうか」

「それはどっちに言ってるんだ？」

「自分の胸に手を当てて良く考えてみてください」

キーンコーンカーンコーン

俺がため息を吐くと丁度授業終了のチャイムが鳴った。余談だが、何故これをチャイムと言うのだろうか。これはどう聞いても鐘の音、チャイムとはまた別物だと俺は思う。

「よし、じゃあこの時間はここまでだ。今日書いたところもしっかりテストに出すからそのつもりで・・・あと、君は放課後になったら私のところへ来なさい。いいね、黒瀬君？」

「了解しました」

「うむ、よろしい」

満足そうに頷くとイリア先生は教室から出て行った。それを見届けた後に机に突っ伏す。ともあれ、今日も一日が無事に終わりそうだ。

「零司、お疲れ様」

そんな事を考えていると頭の上から声が降ってくる。それに応じる様に俺は頭を上げると、声の主であるシャルルに向かって苦笑しながら口を開く。

「ああ、疲れたよ・・・特にさっきのが効いた」

「イリア先生も妙な冗談を言うよね。ユニークな先生だとは思うけど」

そう言ってクスクスと控えめに笑う。こうやってシャルルと話しているとなんだか癒される。おそらくだが他のメンバーよりも我が強くは無いというのが良いのかもしれない。控えめで、相手を優先す

る様な謙虚な心。素晴らしい、実に素晴らしいね。

「・・・どうしたの、零司。なんだかずいぶんと優しい顔になっているけど」

「目の前の癒し要素が在るからじゃないか？」

「えっと、それって僕・・・かな？」

「他に誰が居るんだ」

「そ、そうだよね・・・僕が癒しか、そっか・・・えへへ」

若干照れながらも嬉しそうにはにかむシャルル。本当に高表情をしている時のシャルルは女の子だよな。よくよく考えると良くバレないものだ。ま、俺もわかんなかったんだけどさ。

「まあ、癒しも貰った事だし・・・何かご用かな、シャルル君？」

「あ、そ、そうだね・・・えっと、用事ってほどの事でも無いけどね」

俺が問いかけると少し慌てた様子のシャルルは一息置いた後に再び口を開いた。

「もし放課後暇なら、お手合わせ願えないかな」

「手合わせって・・・ＩＳでか？」

訊くと小さく頷くシャルルに俺は少し驚いていた。まさかシャルル

からそんな申し出が来るとは思ってもみなかった。

「簡単な模擬戦でいいんだ・・・零司も身体動かした方が気を紛らわせるかなって思ったんだけど、どうかな？」

「ああ、別にかまわないぞ」

しかしシャルルの言う通りかもしれない。少し身体を動かして、気分転換なんてのもいいだろう。

「ただイリア先生に呼ばれているから、ちょっとかかると思うが・・・それでもいいか？」

「うん、全然構わないよ」

了承してもらえたのが嬉しかったのか、再びパッと笑顔を浮かべるシャルル。なんだかそんな風に喜ばれるとこっちも少し嬉しくなってしまう。

「それにしても良く絡んでくるね、イリア先生」

肩をすくめて言うシャルルの言葉を聞き、俺は苦笑を浮かべた。

「そうだな・・・まあ、結構嫌いじゃないから良いんだけどさ」

「嫌いじゃない・・・」

「嫌いじゃないって言うか、結構好きかもな。話していて面白い。シャルルの言う通り、ユニークな先生だし」

まあ、未だに俺の何処が気に入っているのかはわからないのだが・・・なんだ、からかいやすいとかそんな理由じゃないだろうな。でもなんか前に妙に意味深な「お誘い」があったし・・・やっぱりからかわれてんのかな・・・うん？

「・・・どうした、シャルル」

「・・・別にどうもしてないよ」

ちょっとムッとして不機嫌な顔をするシャルル。なんだ？　急にシャルルの機嫌が悪くなった気がするんだが・・・さっきまであんな良い笑顔を浮かべてたのに・・・俺が何か言っただろうか。

「まあ、良いんじゃないのかな。零司が誰かを好きになるのは自由だしさ。それがイリア先生でも」

「いやいやシャルル、お前は一体何を言っているんだ？」

確かに俺が誰かを好きになるのは自由だろうけど、なんでイリア先生なんだよ。嫌だよ、あんな狡猾な狐みたいな人。いや、別に嫌いってわけじゃないんだけど・・・だけど教師を好きになるってのは色々と問題あるだろ、常識的に考えて。

「大体、俺が誰かを好きになるって事に関してなんでシャルルが怒るんだよ」

「そ、それは・・・」

「席に付け、ＳＨＲを始めるぞ」

教室の扉が開き、千冬さんが入って来た。お喋りしていた女子達が急いで自分の席に座り始める。それはシャルルも例外ではない。彼女も自分の席へと腰掛ける。ただ――――

「・・・零司の馬鹿」

――というセリフを残して。何故か馬鹿呼ばわり。ああ、わからん。何故怒ってるのか、最近の十代女子の考えはわからん。

「・・・ハァ」

「目の前でそんなため息など吐くな、黒瀬。こっちの気まで滅入る」

「織斑先生」

「なんだ」

「やっぱり女心ってのはわからんです」

「知るか、馬鹿者」

バスッといつもの出席簿チョップが入り、俺は再びため息を吐いた。やっぱり、こっちの方が痛い。

Ｓｉｄｅ　セシリア・オルコット　凰鈴音　ラウラ・ボーデヴィッヒ

放課後、第三アリーナのステージ内部。

「「あ」」

ＩＳスーツを着た二人、セシリアと凛はそれぞれ予想外の人物との遭遇に素っ頓狂な声を上げた。

「奇遇ね。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「奇遇ですわね。私もまったく同じですわ」

不敵に笑みを浮かべる二人の視線の間には激しく火花が散る。この二人、件の一夏の話を聞いて、絶対に優勝しようと自身の鉢巻きを締めるかの如く、この第三アリーナにて再訓練を行おうと参上した様だった。

「丁度いい機会だし、この前の実習の事も含めてどっちが上かはっきりさせておくのも悪くないわね」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらがより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうじゃありませんか」

そう言うと二人はそれぞれのＩＳを装着するとメインウェポンである『スターライトｍｋ？』と『双天牙月』を『展開』し、対峙する。

双方が目の前の相手に意識を集中させる。故にまだ気付かない。息を殺し、相手の喉笛を切り裂かんとする、獰猛で猛り狂う牙を。

「では――」

それは先に動こうとしたセシリアを捉えていた。動こうとした彼女

の初動に合わせる様にして号砲が大音響を上げて、撃ち出された。

「なっ・・・！？」

「セシリアッ！」

いきなりの事で驚愕もあったが、それ以上に正確すぎるタイミングの砲撃は完全にセシリアを捉えていた。回避も間に合わない。そう判断した鈴は即座に手に持っていた『双天牙月』投げ飛ばし、凶弾にぶつける。爆音がアリーナに鳴り響くと弾き飛ばされた青龍刀がセシリアを狙った射手の足元へと突き刺さった。

「あんたは――」

鈴とセシリアは揃って射手を睨み付ける。そこに佇むは漆黒の機体。アリーナの空気を瞬時に緊迫させる様な威圧感。ドイツ第三世代、機体名『シュヴァルツェア・レーゲン』、登録操縦者――

「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・」

セシリアは苦々しげに強張る。欧州連合トライアル機体、彼女にとってはまさにライバルという立ち位置にある機体だ。だが、彼女にとってはそれ以上の感情をぶつける相手でもあった。

いや、それは鈴にとってもそうだった。何せ自分の想い人を殴ろうとした人物だ。それなりの憤りがあってしかるべき相手であろう。

「・・・どういうつもり？　いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

『龍砲』を準戦闘状態にシフトしながら、ラウラを睨み付ける。しかしその様な視線に気兼ねをすることもなく、ラウラは口を開く。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』。データで見た時はまだ強そうに思えたものだがな」

せせら笑いながら発せられる明らかな挑発の言葉にセシリアと鈴の両方が口元を引き攣らせる。

「へぇ？　やるきなんだ？　わざわざドイツくんだいりからやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのがはやってんの？　ま、嫌って言ってもボコるけど」

「あらあら鈴さん、そんな乱暴な言葉を使ってはいけませんわよ。こちらの方はどうしようもなく愚かで人語を解さないようですから、あまりいじめては可哀想ですわ」

こちらを見下す視線も相まって、滲み出す様な怒りをどうにか言葉にしてラウラへとぶつける。だが当のラウラにはその言葉の効力は薄い様だった。

「愚か者か・・・所詮は言葉でしか力を発せぬ愚か者はどちらだ？　機体の能力も引き出せず、量産機に敗退し、所属国の面汚しになっている事にも気付かないのか。いや、気付くだけの頭すらないのか・・・貴様らには」

ブチンッ――と二人の堪忍袋の緒が切れた。即座に鈴とセシリアはそれぞれの武装の最終安全装置を外して、ラウラへと向ける。

「ああ、なるほど、了解、ご注文承りました・・・安心しなさい、完全にスクラップにしてやるから」

「手は抜きませんわ。穴だらけにして挙げましてよ」

「はっ！　二人がかりで来たらどうだ？　所詮貴様ら如き劣等種を束ねたところで薙ぎ払う事など造作もない。教官の弟というだけの下らない種馬を追い回すだけしかできないメス共に、負ける要素など無い」

その言葉がトドメとなった。自分への侮蔑も許せない、だがそれ以上に想い人を侮辱される事は一人の女として、許せる事ではなかった。もはや彼女達を止める理性という安全装置は完全に破綻してしまっていた。

「――今なんて言った？　あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」

「この場にいない人間を侮辱するとは欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですわね・・・その口、二度と叩けぬようにここで叩いておきましょう」

怒りを完全にあらわにした二人。それを興味なしといった風に流し、足元に刺さった『双天牙月』を引き抜く。そして――

「御託はいい・・・とっとと来い」

「上等っ！」　「上等ですわっ！」

鈴に向かって投げ飛ばす。それを掴んだ鈴と射撃体勢に入るセシリ

アがラウラへと向かう。そんな中でラウラはただその二人を冷たい視線で捉えていた。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

Ｓｉｄｅ　シャルル・デュノア

教室で零司と一旦別れた後、僕は校舎を出てすぐにある第三アリーナへと続く道を歩いていた。思っていたよりも人の通りは少なく、さっきから一人も学生とすれ違っていない。これならば、思いっきり模擬戦が出来るかもしれない。

「あ、デュノア君」

そう思っていると背後から声を掛けられた。振り返るとそこにはクラスメイトであり、友達でもある青嶋　雫（しずく）さんがこちらに歩いてきた。

「青嶋さんも第三アリーナに？」

「うん、今日は使用人数が少ないって訊いたから。学年別トーナメントも近いから、頑張らないと」

そう言って僕の隣に並ぶとそのまま歩き始める。

「デュノア君もアリーナで実習？」

「うん、僕は零司と模擬戦でもしようかなって思って・・・でも零司はイリア先生に呼び出されちゃったらしいから一足先にね」

「え、黒瀬さんと一緒に？」

少し藍色に近い蒼髪を揺らして、少し焦った様な表情を浮かべた。
どうかしたのだろうか・・・

「どうしたの？」

「あ、えっと・・・黒瀬さんと一緒の所で練習するなんて、ちょっと緊張しちゃうかなって」

誤魔化す様な笑いを混ぜて、青嶋さんは答えた。わからなくもない。
僕も零司の相手が出来るのだろうかと、結構緊張してしまっている。
何せ相手は公式発表されていないが、未だに軍事関係に情報が残るほどのＩＳ操縦者だ。

「確かに零司は凄いからね。クラス代表を決める時の試合も凄かったって聞いたよ」

「そうなんですよね、代表候補生のセシリアと互角以上に戦っていたし・・・カッコ良かったな」

その現状を思い出しているのか、青嶋さんは少し惚けた様に斜め上を向いていた。ああ、なるほど・・・

「青嶋さんって、もしかして零司を？」

「え、えええっ！？」

なんでわかったのかと言わんばかりの驚き様を見せる。やっぱりそ

うだ、青嶋さんは零司の事が好きなんだ。

「ち、違うよ！　そ、そんなんじゃなくて・・・えっと・・・憧れっていうか――」

「大丈夫大丈夫、わかってるから・・・零司はカッコイイからね」

「だから違うってば～！」

アワアワとする青嶋さん。なるほど、青嶋さんは零司を・・・クラスはもちろんのことながら学園全体で人気だって事は知っていたけど・・・そういえば今日の朝も零司の為に行動を起こしていたよね・・・ハァ・・・

「ハァ・・・」

「デュ、デュノア君？」

「・・・ごめん、なんでもないよ」

内心で出たため息がそのまま口から出ていた。まったく、零司はどうしてこうも女子の心を捉えちゃうのかな。しかもその割に本人には自覚がないんだよね・・・まあ、多分皆の事を「可愛い後輩」くらいにしか思っていないからなんだろうけど・・・

「でも零司を振り向かせるのは難しいかもね」

「そ、それは・・・多分・・・って、違うって言ってるのに」

少しムッとした表情で批難してくる青嶋さんに僕は軽く笑って返す。

そしてそうこうしている間にアリーナ入り口付近に到着した。すると――

「早く早く、こっちだって！」

「でも本当なの？　一年の代表候補生三人が模擬戦やってるって！？」

「見ればわかるって！」

急に人の通りが激しくなる。しかし、代表候補生が三人で模擬戦なんて珍しい状況だ。

「代表候補生・・・誰だろう」

「代表候補生と言えば、セシリアが教室から早足に出て行ったけど・・・」

三人・・・もしセシリアがここに来ていたとして、相手は誰だ？零司はあり得ない。教室から出る時にイリア先生に引っ張られて行ったのをこの目で確認している。そして一夏ってこともないだろう。失礼かもしれないけど、彼はまだセシリアと他の専用機持ちを相手にできるほどの腕前ではない。そしてそれはセシリアも重々に理解しているだろう。そして四組にいるという代表候補生とは模擬戦をする様な仲でもない。だとするとこの三人の組み合わせは・・・

「・・・行こう、青嶋さん」

「ええ・・・」

おそらく青嶋さんも僕と同じ様に考えたのか、さっきまでの表情は何処へやら、顔が強張っている。そんな青嶋さんと一緒に同じ様に駆けて行く女子生徒の間をすり抜けて行き、観客席へとたどり着く。

「やっぱり・・・」

「やっぱりってことは・・・あの三人が――」

ドゴォン！！

交戦する予想通りの組み合わせに声を漏らしたとほぼ同時に爆音が響き、ピットの中心部へと視線を向ける。立ち上る煙、その煙から抜け出す様に飛び出して来たのは二機のＩＳ。イギリスの『ブルー・ティアーズ』と中国の『甲龍』。見ると双方の機体はかなりのダメージを受けている。攻撃により各部のアーマーは砕け、ところどころ完全に装甲が剥げている部分さえある。

そしてそんな二人に向かって、追撃の轟音が鳴る。それは僕の視線と煙を挟んでさらに奥から聞こえた。煙に穴を開けて、飛んできた砲弾はセシリアを捉え、ダメージによりスラスターの反応が悪いのか、回避が遅れた『ブルー・ティアーズ』の左のスカート部分を吹き飛ばした。

「きゃあっ！」

「まだ来るわ！」

砲撃で開けた穴から飛び出す様に煙を吹き飛ばして怯んだセシリアへと急接近してくる機影が一つ。ドイツの『シュヴァルツェア・レーゲン』。ラウラ・ボーデヴィッヒの駆る第三世代ＩＳが容赦無く

追撃していく。セシリア、鈴、ラウラ・・・三つの国の代表候補生が模擬戦とは思えないほどの真剣さで戦っていた。

「なんであの三人が・・・」

青嶋さんの疑問はセシリア達にはもちろん届く事もなく、戦闘は次へと展開していく。

「『インターセプター』！」

接近されたセシリアは左手に近接用レーザーブレードを『展開』し、『シュヴァルツェア・レーゲン』の右手首に装着されたプラズマ刃を防御する。しかしそれと同時に肩に搭載された三角形の形をした物が射出され、本体とそれを繋ぐワイヤーが左足に巻き付き、ピットの地面へと投げ飛ばす。

「くらえぇぇっ！」

地面に墜落した瞬間を狙おうとしたのか、ラウラが右肩に装着されたカノン砲をセシリアに向ける。だがそれを予測してか、鈴の『甲龍』の双肩に装着された球体が開かれる。第三世代型空間圧縮作用兵器・衝撃砲『龍砲』だ。最大出力まで稼働させれば、訓練機を鉄塊に変えるほどの威力を弾き出す事が出来る代物だと聞いている。いくら第三世代のアーマーとて、直撃すればただでは済まないのはわかる。

だが、目標とされているラウラはまるで回避に転じる様には見えない。しかし、意識が向いていないわけでもない。だとすると、避ける必要すらないというのだろうか。

「無駄だ――」

短い空気圧縮音の後、撃ち出される不可視の弾丸。強力な破壊力を持ったその弾丸はセシリアから離れたラウラに向けて発射されたが――

「――この『シュヴァルツェア・レーゲン』の停止結界の前ではな」

そう言うラウラが『龍砲』の弾丸へと右手を向ける。するとまるで壁に激突した様に爆発を起こして消滅する。これは・・・

「『龍砲』が・・・デュノア君、今の」

「ＡＩＣだ・・・」

この学園に来る前に、資料で見た事が在った。慣性停止能力（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）、ドイツが第三世代兵器としてＰＩＣを転用したものだ。第二世代の頃から実用化の検討がされていたのは聞いていたけど・・・まさかあそこまで完成していたなんて・・・

「・・・くっ」

「デュノア君!?　何処へ行くの!?」

「今から僕は二人の加勢に入る・・・青嶋さんは教員の誰か呼んで来て」

「ちょ、ちょっと・・・！」

何か言いたげだったが、僕は青嶋さんの言葉を聞かずにアリーナの

待機所へと向かう。さすがにアリーナのシールドを破る様な武器は僕の『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』には搭載されていない。

もし手元にあったならば、破ってピットに乱入していたかもしれない。それくらいの焦りが僕の心の中にあった。普通の模擬戦ならば、二人がやられていてもここまで焦らないだろう。何かが違う。あの少女、ラウラ・ボーデヴィッヒは僕達とは違う。そして食堂での彼女の言葉――

『私は・・・あなたと戦います』

「・・・急がなきゃ」

大きくなる胸騒ぎを感じながら、僕は走る速度を上げた。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

Ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

「この程度か・・・」

私が最初に思った言葉を口にした。視界にいる二機の専用機、それぞれがイギリスと中国の技術力をつぎ込んで作られた第三世代。だが、同じ第三世代の専用機相手にここまで遅れを取るのか。

「くっ！　まさかこうも相性が悪いなんて・・・！」

私のＩＳ、『シュヴァルツェア・レーゲン』の第三世代兵器ＡＩＣ

によって攻撃を防がれた中国の代表候補生が苦々しげに口走る。それを見届ける義理もない、私は接近し、両手首のブレードとワイヤーを利用し、接近戦へと持ち込む。左横薙ぎに振られる『双天牙月』を受け止め、空いている方のブレードを右肩の『龍砲』へと突き立てる。ジジジッというエネルギーが装甲を焼き切る音が鳴り、『龍砲』が大破。そして大破時の爆発でバランスを崩した『甲龍』の片足をワイヤーで巻き取る。

「そう何度もやらせるものですか！」

イギリスの代表候補生が『ブルー・ティアーズ』の撃墜されていない残ったビットを展開すると援護射撃を行い始める。だが遅い。

「理論値最大稼働の『ブルー・ティアーズ』ならまだしも・・・この程度で第三世代兵器だと？　笑わせてくれる」

射撃を予測とハイパーセンサーから伝えられる情報を元に正確に回避し、両手からＡＩＣを展開。視覚外攻撃をしてくるビットの動きを止める。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

この時を待っていたと言わんばかりにこちらに向けられる『スターライトｍｋ？』の蒼い閃光のマズルフラッシュを見る前にカノン砲を構え、相殺させる為に撃ち出す。爆音が視界に広がった瞬間、ワイヤーに巻き付けていた『甲龍』を『ブルー・ティアーズ』へと振り子運動を利用してぶつける。

「きゃあああっ！」

「まず邪魔な小蠅を消すか」

吹き飛ばされるカノン砲にリロードされた特殊拡散砲弾を後方へと移動し、射程にビットを全て含めた状態で発射する。砲弾は撃ち出されて二秒とかからずに弾頭が開き、高密度を保ったままの無数のベアリング弾が二機のＩＳと共に残った全てのビットを巻き込み、それぞれを破壊する。

「くうぅぅっ！」

重なり合った状態でベアリング弾の雨にさらされ、防御に回っている二機。それを見て、私はスラスターを吹かし、『瞬間加速』による突撃を仕掛ける。

「このっ・・・舐めんなっ！」

接近戦闘を行う上で邪魔だと感じたのだろう、『甲龍』は『ブルー・ティアーズ』を押し出し、『双天牙月』の連結を解く。捌き切るつもりか、面白い。

前進を止める事なく、両腕のプラズマ刃を展開して接近戦へと持ち込む。『甲龍』は私の攻撃に合わせて、『双天牙月』によって弾く。だが、見たところ合わせるだけで精一杯の様に見える。

「ふん・・・」

そんな無様な『甲龍』を鼻で笑いながら、両肩と腰部左右に装着されたワイヤーブレードを射出する。その数、六。両腕のプラズマ刃

を合わせるならば計八つの武装を展開し、『甲龍』を追い詰める。

「捌いて見せろ・・・舐められたくないならな」

「くっ・・・このぉ！」

左肩の『龍砲』が稼働する。結局それか、他に手を知らないのか・・・この女は。

「甘いな。この状況でウェイトがある空間圧縮兵器を使うとは」

言葉を並べながら、カノン砲を『甲龍』本体ではなく『龍砲』へと向ける。そしてエネルギーを収縮し、射出する瞬間を狙って徹甲弾を撃ち出す。収縮し、高密度になったエネルギーに実弾を砲撃され、虎の子の『龍砲』が爆散した。

「もらった」

「っ！」

爆破の衝撃で体勢を崩した隙を狙い、プラズマを抉る様に『甲龍』の搭乗者の腹部へと突き立てる。

「させませんわ！」

だが間一髪のところで私と『甲龍』の間に滑り込んできた『ブルー・ティアーズ』が『スターライトｍｋ？』を楯にして攻撃を逸らす。同時にウェイトアーマーが開いたのが目に入った。そしてその中に何がしまわれていたのかも。

「ミサイルか」

「これで終わりですわ！」

即座の射出。至近距離の爆発に巻き込まれ、二機のＩＳは吹き飛ばされ、地面に転がる。なるほど、捨て身の攻撃とはな。なかなか味な真似をしてくれる・・・だが――

「無茶するわね、アンタ・・・」

「苦情は後で。でもこれで確実にダメージが――」

煙が晴れると私の視界に唖然とする敵の姿が在った。そう、だがやはりその程度だというわけだ。甘い、甘過ぎる。私と対等に戦えるという考えも、これで倒したと思える様な希望的観測も・・・

「これで終わりか・・・では、次は私の番だ」

隙だらけの『ブルー・ティアーズ』と『甲龍』に向けて、『瞬間加速』をして一気に距離を詰める様に移動。そのまま地面に転がった『甲龍』を蹴り飛ばし、『ブルー・ティアーズ』を踏みつけ、至近距離でカノン砲を当てる。そして先ほど蹴り飛ばした『甲龍』を引き寄せ、カウンターで拳を腹部に打ち込む。

「かはっ！？」

「はっ、どうした・・・この程度か」

地面に這いつくばる『ブルー・ティアーズ』の搭乗者の首にワイヤーを巻き付け、アリーナの壁へと叩きつけるとそのまま壁沿いに引き摺り回し、『甲龍』を地面へと叩き伏せる。

「あああああっ！」

「う・・・ぐ・・・・」

片方は悲鳴を片方は呻き声を上げ、破壊されたアーマーの破片が辺りに飛び散る。それを聞きながら、優越と共に沸々と怒りが湧いてくる。

弱い、なんだこれは。これで代表候補生だと？　これで国の誇りを背負っているというのか？　これで・・・これが・・・こんなものがあの人が・・・黒瀬少佐が護ろうとしたものだというのか・・・

――――こんなものの為に・・・私は・・・！――――

「貴様らなどに・・・あの人は・・・！」

私の視界を通しているハイパーセンサーが相手のシールドエネルギーほぼ無くなり、搭乗者生命危険域（デッドゾーン）まで到達している事を知らせている。だが私は怒りにまかせて、拳を振り上げる。躊躇いはない、このままこいつらを――――

「そんな事、させやしないよ」

「っ！？」

咄嗟に聞こえた声。それは上空から聞こえた。首を曲げ、上を見ると陽光を背負い一機のＩＳが銃弾の雨と共に舞い降りてきた。

「ちぃっ！」

予想外の不意打ちに多少虚を突かれたが、私は『シュヴァルツェア・レーゲン』のスラスターを使って、後方へと後退する。するとさっきまで私がいた場所に良く見知った機体が着陸する。

「これはいくらなんでもやり過ぎなんじゃないかな・・・ラウラ・ボーデヴィッヒさん」

「リヴァイヴ・カスタム・・・シャルル・デュノアか」

私を批難する様に睨むデュノアを睨み返す。

「フランス弱小企業の社長令嬢殿が何用だ。ここはお高く止まったお茶会広場じゃないんだが？」

「安心してよ。僕もこんな血の気が多い、野獣みたいな淑女とのお茶会なんて御免こうむる」

睨み合い、言葉を交わして、理解する。こいつはただ止めに来たわけではない。私と戦うつもりだと言う事を。

「ふん、まあ丁度いい・・・どっちにしろ叩き潰そうと思っていた相手だ。多少時期が早まっただけだからな」

言いながらカノン砲を『リヴァイヴ・カスタム』へと向け、それに応じる様に相手も六十一口径アサルトカノン『ガルム』と連装ショットガン『レイン・オヴ・サタデイ』を構える。早い・・・展開速度が他者と比べて圧倒的だ。

「随分と攻撃的だね・・・女の嫉妬ほど見苦しいものはないよ」

「・・・なんだと」

「嫉妬するにしても、もう少し可愛らしい方が零司好みだと思うけど？」

「貴様・・・フランスの第二世代（アンティーク）風情がよく吠える」

「今度は僕が相手だ・・・来なよ、第三世代（ルーキー）」

空気が凍り付いた様に相手は動かない。おそらくこちらの初動で出方を探ろうと言う事だろう。面白い・・・ならばその無謀な自身ごと粉々にしてくれる。

そう考え、脚部に力を込めた・・・その時――

「そこまでだ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」

目の前に二つの影が割って入った。片方は銀色の髪、白スーツを着込み灰色の腕部装甲を展開して三俣の槍を持つ女性。そしてもう一人は・・・

「・・・少佐」

「ここでそう呼ぶなと言ったはずだ」

スーツの女性と並び、女性と同じ様に腕部装甲を展開してこちらに近接ブレードを向けながら傍らにデュノアを庇う様にして抱き締める黒瀬少佐だった。彼の鋭い視線を受けて、私はカノン砲を非戦闘状態にする。

「まったく、あまり日を開けずに問題ばかり起こしてくれるな・・・今年の一年は」

「イリア先生・・・」

デュノアも戦意が削がれたのか、構えていた銃を『収納』する。それを見て、イリアと呼ばれた教員は口を開く。

「お前達の・・・というよりもボーデヴィッヒのやった行為は十分な危険行為だ。模擬戦をやるのは良いが、もっと節度というものを考えて欲しいものだな」

「・・・あなたには関係の無い事です」

「関係ないわけないんだよ、小娘」

「・・・ッ！」

短く言った言葉と共に視線を感じ、私は無意識に身がまえた。一介の視線とは思えない。まるで心臓に鋭い槍が突き付けられている様な背筋の寒気を覚えた。

「・・・ちゃんと躾けておいてくれないかな、黒瀬君。私の苦労が

絶えないんだが？」

「躾けるってなんですか・・・飼い犬じゃあるまいし」

「君の知り合いだろ」

「勝手に責任を押し付けないでください。元々イリア先生が持ち場の第三アリーナにいなかったのが悪いんでしょうが」

視線がそれ、黒瀬少佐と話し始めた時にはその感覚は無くなっていた。だが完全にこちらの戦闘意欲は削がれてしまった。

「そんなに猛っているなら、そのやる気を学年別トーナメントで出せ。こんなところで無駄遣いせずにな」

「くっ・・・だが・・・」

「ラウラ・・・いいな？」

咎める様に語尾を強くして言う黒瀬少佐の言葉を聞いて、私はＩＳの装着状態を解除する。それを見て、イリア教員はフーッと息を吐き出した。

「はい、これで終わりだ・・・ほら野次馬も解散。今日の第三アリーナは使用禁止だ」

いつの間にか集まっていた観客席の野次馬もイリア教員の声を聞いて、散り散りにアリーナを出て行く。もはやこれ以上、ここにいる理由もない。私は待機所に向かう為に歩き出す。

「これがお前のやり方か・・・ラウラ」

すれ違い際に黒瀬少佐は言った。少佐は私を軽蔑しただろうか・・・おそらく、怒りを抱いてはいるだろう。だが、それでも止めるわけにはいかない。私は・・・認めるわけにはいかないのだから。

「私は・・・諦めません」

ただ短く返し、私は歩を止める事はなく、そのままピットを後にした。彼の視線を背中に、確かに感じながら・・・

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

EP23　狂行（後書き）

はい、終了～。

今回はやたら長くて焦りました。しかも内容も・・・今一な感じだと思ってしまって・・・うぐぐ。なんだか零司君の出番がやたら少なかったですし・・・もしそっちで期待していた方はごめんなさい。

鈍亀更新、まさに鈍亀ですよ。原作にオリジナル展開を混ぜて行こうと考えた結果がこの有様です。本当はシャルルとラウラの戦いも描きたかったんですけど・・・力尽きてしまいました（；ω；）。

さてと、次回はラウラよりもシャルルの話になりそうです。ごめんね、ラウラちゃん。もうすぐ学年別トーナメントだから、その時にね。

強行な戦闘を仕掛け、二人の専用機持ちを戦闘不能にしたラウラ。今後、その様な被害者を出さない為にも、学年別トーナメントの仕様変更で学園が浮き立つ内で零司とラウラはとある契約を結ぶ。

課題に追い立てられながらも、今後も頑張りたいと思います。多分、次も鈍亀ですが・・・どうかよろしくお願いします（ー ωー；）。

では、また（＾ω＾）ノシ

EP24　決着は刻々と（前書き）

興く遅かったじゃないか・・・

緋くうるせぇ！（。Д。＃）

どうも、緋星です。鈍亀更新パート2！いや、まじすいませんホント。

今回もだらだらと長いです。なんでだろう・・・シャルル相手にすると長くなる気がする・・・

相変わらずのズタズタ文章ですが、どうぞ（ーωー）

EP24　決着は刻々と

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・いつまでムクれてる気だ、お前らは」

ため息を吐きながら、目の前で不服そうな表情を浮かべている二人に言う。場所は保健室。第三アリーナの一件から一時間が経った。問題を聞き付けて来た教師陣の対応のおかげで自体は大事にならず、アリーナの使用は明日からすでに行える予定らしい。

「別に助けてくれなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝てましたわ」

そしてあのアリーナでラウラ相手にボロボロにやられたオルコットと凰は打撲の治療が終えて、包帯に巻かれてムスッとした顔でこちらに視線を合わせようとしない。

「あれだけボロボロにやられてそんな事を言われてもな・・・」

「何かいいまして？」「何か言った？」

「いやいや、なんでも」

睨みつけて来る二人の視線を軽く流しながら、大事に至らなくて良かったという安堵の思いを込めて再び小さなため息をついた。そん

な事をしていると保健室のドアが開き、飲み物を持ってシャルルと一夏が入って来た。

「大丈夫か、二人共」

一夏が保健室に入るなり、俺の隣に丸椅子を手にとって腰を掛けた。一夏はアリーナの話を聞き、保健室に二人が運ばれてくるとすぐさま飛んできた。まあ、その辺りからさらに二人が膨れ面になってるんだが・・・

「大丈夫も何も、こんなの怪我の内にはいらな――いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味――つううっ！」

「あーあー、何やってるんだよお前らは」

「無理するなって」

起き上がろうとして全身に痛みが走ったのか、激しく顔をしかめる二人を俺と一夏で寝かしつける。少し動いただけでこれだ。二人の怪我はそこまで小さいものではない事が見て取れる。

「だけど・・・助かったよ、零司」

「俺は別に何もやってないぞ、一夏。礼を言うなら、シャルルに言え」

「僕だってたまたまその場に居合わせただけだから・・・それより

ごめんね、二人共・・・もう少し早く助けに入れていたら」

「別に謝る事でも・・・」

「そうですわ、大した怪我でもないわけですし・・・」

すまなそうに言うシャルルにベッドの二人はムッとした表情のままだったが、真摯に謝られて毒気を抜かれたのか、反抗する態度を改めて応える。やっぱりシャルル相手だとなんかそうなるよな。やはり癒し要素が強いのだろうか、シャルルは。アレだ、一イオンとかと同じ様に。

「でも・・・何だって二人はラウラとバトルする事になったんだ？」

「え、いや、それは・・・」

「ま、まあ、なんと言いますか・・・女のプライドと侮辱されたから、ですわね」

丸椅子に座りなおしながら、一夏は二人に問うと、ゴニョゴニョとハッキリとは言わなかった。それはまあ、大方ラウラが出て来て挑発なりしたんだろう。内容も二人と態度を見たところ、手に取る様にわかる。

「ああ、もしかして一夏の事を――」

「ああもうっ！デュノアはいっつも一言多いわね！」

「そうですわ！まったくです！おほほほほ！」

迂闊な事を言おうとしたシャルルを電光石火という言葉がよく似合う、怪我人とは思えない様な素早い動きで拘束し、取り押さえた。口をふさがれて息もできないのか、苦しそうにシャルルはもがく。

「む、むぐーっ！」

「おいこら二人、シャルルが苦しがってるだろうに・・・」

呆れながら俺はオルコットと凰の肩に軽くデコピンを打ち込む。

「ひぐっ！？」

「ぴぎっ！？」

すると案の定、鋭い痛みが走ったのだろう。奇妙且つ甲高い悲鳴を上げて、その場に凍り付いた。

「「・・・・・・」」

「ほれ見た事か。怪我人は怪我人らしく、静かにしてなさい」

沈黙と共に恨みがましい目を向けて来る二人に向けて、そう言い放つ。

「れ、れ、れいじ・・・あんた・・・ねぇ」

「あ、あとで・・・おぼえてらっしゃい・・・」

もし襲いかかる事が出来たなら、すぐさま噛み付こうという雰囲気を全身から滲み出す二人。まあ、これだけ元気があればすぐに回復

するだろう・・・だが学年別トーナメントは・・・

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら――」

ドドドドドッ・・・・

腰を上げて、そろそろお暇しようとするとドアの向こう側から地鳴りの様な音が聞こえて来た。これはおそらくそう思いたくはないのだが、足音なのだろう。俺はため息一つ吐いた後、腰を上げるとドアまで歩いて行き、開く。すると――

「織斑君！」

「デュノア君！」

「黒瀬さん！」

まるで土石流の様に女子生徒が雪崩れ込んで来た。危なかった、先にドアを開けておかなければドアごと吹き飛ばしかねない勢いだな、こりゃ。この保健室はベッド五つと教師の机が入るくらいには広いんだが、室内はアッという間に人間という波で埋め尽くされてしまった。そして伸ばされる手、手、手、手・・・新手のB級ホラー映画じゃないんだからさ。

「な、な、なんだなんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな・・・ちょ、ちょっと落ち着いて」

「おそらく・・・これだろう」

俺は状況が飲み込めない様子の一夏とシャルルの前に一枚の紙を見せる。そこには雪崩れ込んで来た女子の持っていたものと同じ学内の緊急通知だ。

「な、なんだこれ？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦闘を行う為に、二人組の参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選によって選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』――どうして零司がこれを？」

「イリア先生に呼び出された時についでにな」

「ああ、とにかくっ！」

シャルルに聞かれた俺が答えるのを強制的に止めると女子達が再び手を伸ばしてくる。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と組んでください、黒瀬さん！」

何故学年別トーナメントがいきなりペア制になったのかは知らないが、ちょっとばかり面倒な事になったな。男子を求めて、女子達が動き出すとは思っていたが思ったより対応が早い。心底侮れんな、女子の情報網。

「え、えと・・・」

やたら頼りない声が聞こえて、ふとそちらを見るとシャルルと目が合った。だがすぐさま目を逸らす。どうせずっとこっちを見ていたら助けを求めているのがバレて、俺に迷惑がかかると思って遠慮してるんだろう。全く、そんなことをされたら余計に気になってしまうだろうに。

「あー・・・・悪いが俺はシャルルと組むぞ？」

「えっ・・・」

ちょっと驚いた様にこちらを見るシャルルに小さくウィンクを送る。

「そんなわけだから、女子諸君は諦めてくれ。俺はシャルルと組む、大事な事だから二回言っておく」

俺の言葉を聞き、ザワザワと騒がしかった女子達がシンッと静まったが――

「まあ、そういうことなら・・・」

「他の女子に取られるよりはいいかな・・・」

「いや、むしろ黒瀬さんとデュノア君なら私達にとっては朗報・・・・ゲフンゲフン」

女子達は納得したのか、うんうんと頷く。納得のされ方がちょっとばかり不可解だが今日の朝であんな話が合ったんだから仕方ない。むしろこんな形でも素直に納得してもらえるならば、まあ妥協する

しかないだろう。

「じゃあ織斑君、私と組もう！」

「ちょ、ちょっと待てって・・・そんないきなり来てすぐ決めろって言われても・・・」

一夏は勢いに押されて、壁際に追い込まれる。そしてこちらに視線を向けて来る。しかもシャルルとは違って、必死にこっちに助けて欲しいとアピールしてくる。お前はもうちょっと遠慮をしなさい。いつでも人が助けてくれると思うんじゃないよ、まったく。

「えー・・・女子諸君、実は一夏にも先約が在るらしいんだ。なあ、一夏」

「お、おう！実はそうなんだ！」

「「えーっ！」」

女子達から不満の声が上がる。そんな彼女たちに制服のポケットに入れておいたもう一枚の申告書を取り出してみんなに見せる。

「ほれ、一夏はすでに篠ノ乃とペアを組む事になってるんだ。だから諦めてやってくれ」

その申告書には『織斑一夏』と『篠ノ乃箒』と書かれている。これはイリア先生にこの紙を貰った時に思いついて書き記したものである。ちなみに篠ノ乃にはすでに了承を取ってある。その辺りは問題ない。

「え、篠ノ乃さんと？」

「そういえば織斑君とは幼馴染だとか・・・」

「ハァッ！？」

「ど、どういう事ですの！？」

目の前の女子達よりも後ろで騒いでいる怪我人二人が何やら五月蠅いが今は無視させてもらおう。これも一夏と篠ノ乃の関係を一歩前進させる為にはもってこいのイベントなんだ。悪く思うなよ、二人共。

「というわけだ・・・な、一夏」

「そ、そうなんだ！俺は箒と組むからみんなとは組めないんだ・・・ゴメンッ！」

手を合わせて、頭を下げる一夏。そんな姿を見てさすがに勢いを無くしたのか、すごすごといった感じに女子達は保健室から出て行った。なんだか悪い事したみたいな罪悪感的なモノがない事もない、故に心の中で謝っておこう。すまないな、皆。

「・・・た、助かった。ありがとうな、零司」

「礼を言われる様な事はしてないさ。後でちゃんと篠ノ乃にも伝えておけよ？」

「わかってるって・・・だけど箒の奴が良いって言うかな」

「言うに決まってんだろ・・・ったく、お前は」

一夏の反応に呆れを通り過ぎて、もはやため息も出ない。ちょっとは気付いて良い様なもんだがな・・・この鈍感さは筋金入りだ。

「あ、あの・・・零司」

「うん？　どうした、シャル――」

「ちょっと、一夏！」

「ちょっと、一夏さん！」

話を終えて、ひと段落したところにシャルルが話しかけてきたのでそれに受け答えようとすると、一夏へとさっきの女子達とも勝るとも劣らない勢いで一夏へと飛びついて行く二人によって遮断された。

「なんで箒と組むのよ！あ、あたしと組みなさいよ！あたしだって幼馴染でしょ！」

「いいえ、クラスメイトとして！　そして何よりも遠距離型である私のＩＳの方が一夏さんの『白式』とも相性が良いでしょう！　ここは私と！」

それぞれが左右の襟を持って、ぐわんぐわんと一夏を振り回している。良く動くな、こいつら。本当に怪我人なのか？　まあ、それは置いておくとしてもこいつらは今回の学年別トーナメントには出れはしないだろう。

「そうは言うけどな、お前ら。今の状態でＩＳを動かせると思って

るのか？」

「黒瀬君の言う通りですよ」

ひょっこり顔を出したのは我らが担任教師山田真耶先生。いきなり登場した予想外の人物に俺以外の人物は目をパチクリさせている。

「気配がすると思ったら、山田先生でしたか・・・まだ女子群の残党がいるんじゃないかって思ってましたよ」

「通りかかったら何やら聞こえてきまして・・・お邪魔だったかな？」

「いえいえ、ここは山田先生の説明をお願いします。俺よりもよっぽど説得力があるでしょうから・・・俺の忠告なんて聞きやしないんだから、この二人」

「わかりました」

肩をすくめて言うと山田先生はとってもいい笑顔で答えてくれた。

「お二人のＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。当分は修理に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせてしまいますよ。ＩＳを休ませる意味でも、今回のトーナメント参加は許可できません」

スラスラと理由を述べて行く山田先生。やっぱりこういうところ、先生だよなこの人。

山田先生の言う通り、ＩＳのダメージが高過ぎる場合は稼働を許可

出来ない。それには理由がある。

ＩＳ基礎理論には蓄積経験という項目が在る。それはＩＳが戦闘経験を含む全ての経験を得る事で、進化する事が出来るという事を記している項目なのだが、この項目の『全ての経験』ってところに問題が在る。この『全ての』というのは損傷時の稼働も含まれている為に、損傷時に稼働する事によってそれを経験として認識し、ＩＳはその損傷時の状態に対する進化を行ってしまう。つまりダメージレベルがＣを超えた場合はＩＳを稼働させる事はＩＳに対して悪影響を及ぼしてしまう。故にこの二人には参加許可は下りる事は無い。

「ＩＳに無理をさせるとそのツケはいつか自分で払う事になりますからね」

「実際、今の状況でＩＳを動かしたところでお前らは実力の半分も出せないだろ？　実力を示すチャンスなら今後いくらでもあるんだから、そう気張るんじゃないよ」

「うっ・・・ぐっ・・・！　わ、わかったわよ・・・」

「不本意ですが・・・非常に、非常にっ！　不本意ですがっ！　トーナメントの参加は辞退します・・・」

俺と山田先生に諭されて、完全には納得していない様子だがトーナメントに参加できない事は理解しているのか、渋々ながらも引き下がった。

「さてと、俺はそろそろお暇するかな」

「なんか用事でもあるのか？」

「俺はちょっと職員室に呼ばれているから・・・千冬姉も少しくらい課題を減らしてくれればいいんだけどな・・・じゃあな、二人共。安静にしてろよ？」

丸椅子から腰を上げてゲンナリとする一夏はそう言うと、保健室から出て行った。どうやらまた千冬さんに課題を貰ったらしい。確か前回は基礎理論を全部暗記しろとか言われたらしい。いやはや、千冬さんの愛の鞭は痛々しいね。

「さっさと行っちゃうなんて・・・友達甲斐の無い奴」

「全くですわ・・・」

そして不平不満を言われる、と。いやぁ、いつも思うが一夏の立ち位置にはちょっと立ちたくないね。女子に好かれて嬉しいかもしれないが、いろいろ身がもたない気がする。

「それにしても・・・トーナメントは不参加かぁ」

「ええ、なんともおしい事をしましたわ・・・あんな挑発に乗らなければ」

ハァと思った以上に重いため息を吐く二人。一夏といえば、トーナメント優勝云々でこいつらも頑張っていたんだよな。それなのにここでトーナメントを辞退しなければならないというのは、結構悔しいモノが在るのだろう。

「すまなかったな・・・二人共」

そう思った俺は遅れながらも、二人に頭を下げた。それを見たオルコットと凰はキョトンとしていたが、少しして肩を竦めた。

「・・・別にあなたが謝る事ではありませんわ」

「そうよ。あんたとあのボーデヴィッヒとの間で何があったか知らないけど、今回の件はあたしとセシリアがやった事なんだし」

二人は俺に非は無いと言っているが、俺はそうは思えない。イリア先生に言われた事ではないが、俺も少しは警戒しておくべきだった。この前のアリーナの行動を見ているのに、この出来事が予測できなかったのは俺の汚点だ。

「・・・すまなかった」

「・・・まあ、そんなにすまないって思うんなら一つ約束しなさい」

ピッと人差指を立てる凰。俺がそれを見ると、ジッとこちらをにらみながら口を開いた。

「あんた、ボーデヴィッヒに絶対に勝ちなさい」

「・・・ラウラに？」

急な要求に俺は虚を突かれた顔をした。そんな俺を見ながら、凰は続けて言う。

「正直、一夏に言いたかった事なんだけど・・・正直、実力的に一夏がどうこうできる相手でも無さそうだし・・・」

「・・・非常に不本意ですが、ラウラ・ボーデヴィッヒの強さは私達一年ではおそらくトッププレベルでしょうからね」

どうやらここに付いた当初は負け惜しみばかり言っていたが、今は昇っていた血が頭から抜け、冷静な意見が出たらしい。確かにオルコットと凰の二人同時に相手にして、それに勝利するほどの腕前の相手を一夏と戦わせるのは少々分が悪い。

「だから、あんたがボーデヴィッヒを倒しなさい・・・いいわね？」

真剣な目をして、こちらを指差す凰。つまり、俺にラウラを私達の代わりに倒せってことらしい。正直、それで許されていいものかと思うところもあるが・・・

「わかった・・・」

どちらにしろ、今回の件で決着は付けなければなるまい。俺は凰の言葉に対して頷く。こうして学年別トーナメントに一つの目標が出来上がった。

打倒、ラウラ・ボーデヴィッヒ。

・

「ね、ねえ零司」

保健室を出てから、学生寮へと戻っていると途中で隣を歩いているシャルルに呼び止められた。気のせいか、その言葉にはどうも勢い

がある。

「どうした？」

「あの、遅くなっちゃったけど・・・助けてくれてありがとう」

助けてくれて・・・って事はアリーナの事を言っているのか。

「アリーナの件は青嶋に呼ばれたイリア先生について行っただけだから、礼を言われる様な事はしてないぞ？」

「それもそうだけど・・・ほら、保健室で。トーナメントのペアを言いだしてくれたの、凄く嬉しかった」

「ああ、アレか」

どうやら、シャルルが言いたいのは保健室でシャルルのペアに俺が名乗り出た事だったようだ。

「別にそんな気にするなよ。シャルルの事情を知っているのは俺だけなんだし、お前が危なくなったらサポートするのは当たり前だろ」

正直、シャルルが他の奴と組んで変に正体がバレたら大騒ぎになるだろうし、何よりもシャルルがそれを望んでいないならば手助けするのは当然の事だ。だがそんな事を考えていると、シャルルは熱心に感謝の意を述べる。

「そんなのことないよ。それが自然に出来るのは、零司が優しいからだよ。誰かの為に自分から名乗り出られるなんて、凄く素敵な事だと思う。僕は凄く嬉しかったよ」

「シャルル、それはちょっと褒め過ぎだ」

シャルルにそう言い返すと、俺はフッと自嘲気味の笑みを浮かべた。

「本当に優しい奴なら・・・こんな風になってないさ」

「・・・ボーデヴィッヒさんの事？」

シャルルからの問いかけに頷いて返事をする。

「あの時・・・もう少しあいつとしっかり話していればな」

二年前のあの時、ラウラは必死に俺を止めようとしていた。ドイツから出て行かないでくれと、ここでまた軍人としてやり直そうと。だが俺はそんなラウラに耳を貸さなかった。まるで拒絶する様にラウラの言葉から耳をふさいでいたんだ。

いや、様にじゃないな・・・拒絶していたんだ。

あの場所にいるのが苦しくて、次の戦場が怖くて・・・ラウラの様な人達からの言葉が辛過ぎて。何もかもを拒絶する為に逃げて、逃げて、逃げて・・・全てを振り切って、日本に帰郷した。

もし、あの時少しでもラウラの言葉に耳を傾けていたら・・・少しでも理由を告げていたなら、変わっていたのかもしれない。理由を聞いて、あの時のラウラが馬鹿げていると怒るなら、そこで盛大に口喧嘩でもすれば良かったのかもしれない。そうすれば、俺もラウラも、こんなことで悩まずに済んだのだろうか。

『全く、人生とはままならんものだな・・・お前もそう思うだろう、零司』

「ああ・・・全くその通り・・・ままならないもんだよ」

脳裏を掠める、戦友（とも）の言葉。口癖のように言っていたソレは今や俺の口癖になりつつある。

ままならない・・・本当にままならない。

「零司、どうしたの？」

「・・・ん？」

少し黙りこくってしまっていた様で気付くとシャルルが小首を傾げてこちらを見ていた。

「別になんでもないさ、シャルル」

「わっ・・・」

言いながら、誤魔化す様にシャルルの頭を軽く撫でるとシャルルは驚いたのか、少しアセアセと口を開く。

「れ、零司・・・ちょっと恥ずかしいよ」

「俺だって同じくらい恥ずかしい思いをしたんだ、我慢しろ」

「恥ずかしいって・・・僕が何かした？」

「まったく、この貴公子め。褒めるにしてもあんなふうに言われたら、小っ恥ずかしくて敵わないっての」

「そ、そうかな？　僕は本当に嬉しかっただけなんだけど・・・」

シャルルはちょっと困った表情をしていたが、心底嫌がっている節もなかった。それどころか、段々こちらに頭を預けて来る。

「・・・零司ってさ、そうやって撫でるのが上手いよね」

「そうか？　撫でるに上手いも下手もないと思うんだがな」

「なんだか・・・優しさが伝わってくるのかな。胸の奥が温かくなるんだ。こんな事をされるのは久しぶりだからってこともあるんだろうけど、こうやって撫でてもらえるのが・・・その、嬉しいっていうか・・・」

「もちろん、少し恥ずかしいけどね」と付け加えて、シャルルは少しはにかんだ様に笑みを浮かべた。久しぶり、か。おそらく母親の事を指しているんだろう。優しさを与えてくれていた人がいないっていうのは、結構堪えるものだ。両親を亡くして、研究所に回収されてから、優しさを得る事はなかった。もし、千冬さんが俺に手を差し伸べてくれなかったら、一体どうなっていただろう。

過去とは消せないものだ。そして戻りたいと思っても、戻れはしない。修正は効かない。だから俺達は過去を背負って、未来に生きるしか出来ないのだ。シャルルもラウラも、俺も。今まで起きてきた出来事を理解し、現実に受け止めて、進むしかない。

ただ、もしもそんな彼女達に優しさを伝える事が出来るなら、俺はそうしたい。

今の俺は生き残る為に戦い続けた、あの時の俺ではない。それを示す為にも、過去を乗り越える為にも・・・俺は・・・

「・・・そんなに撫でて欲しいなら、いくらでも撫でてやろう」

「え？」

こちらに顔を向けるシャルルにニヤリと笑いかけると、少し力を入れてシャルルの頭をワシャワシャと撫でる。

「わっ、ちょ、ちょっと零司！？」

「うりゃうりゃうりゃうりゃ」

「わ、わ、わ！　ス、ストップストップ！　もう大丈夫、大丈夫だから！」

「そうか、そりゃ残念だ」

パッと頭から手を離すと、逃げ出す様にシャルルは少し後退して、頬を膨らます。

「も、もう乱暴なんだから・・・もっと優しくしてよ」

「悪い悪い・・・クックック」

頬を膨らませて怒っているシャルルがちょっと可愛らしくて笑ってしまう。そして少しの笑みを残したままで、俺はシャルルに言う。

「・・・何かしてほしいって時には、遠慮なく頼ってくれよな」

「え？」

「保健室の時もそうだけど・・・今後もさ、もっと俺に甘えてくれよ。よっぽど無理な願いでもなければ、俺がしっかり叶えて見せるからよ」

俺の言葉を聞いて、シャルルは再び困った様な顔をする。

「えっと・・・でも、零司に迷惑がかかるよ？　それでも・・・いいの？」

「俺が頼られたいと思ってるんだ・・・忘れるなよ、シャルル」

そう言って、俺は少し目を閉じる。あの夜、シャルルの苦しみを知った俺が言った言葉。アレはシャルルを落ち着かせる為とか、同情で言っていた訳ではない。俺は自分から望んだ。俺は――――

「俺は・・・お前の居場所だ」

そう、俺はシャルルの居場所になった。この娘がこの場所に居られる様に、この場所で笑っていられる様になる為に。俺はシャルルがここに居ていいんだという事の証明となっているんだ。

「だからさ、遠慮なんかするなよ。俺はお前に素直な笑顔で、笑っていて欲しいんだからさ」

俺の言葉を聞いたシャルルは少し俯いた後、顔を上げて笑顔を浮かべる。

「うん・・・わかったよ、零司」

そう頷くシャルルの頬が心なしか朱色に染まっている様に見えた。
ちょっとクサかったかな、今のは・・・イカンな、なんか恥ずかしくなってきたぞ。

「さってと、そろそろ部屋に戻るかね・・・夕食も近いし」

「そうだね・・・行こっか」

恥ずかしさを誤魔化す様に頬を掻きながら、身を翻すとさっきまでと同じ様にシャルルが隣に並ぶ。それを見て、俺は学生寮に向けて歩き出そうとした。

「・・・ッ！」

だが一歩踏み出して足が止まる。そんな俺と同じ様にシャルルも足を止めた。横顔からはさっきの笑顔は消えて、警戒する様に強張った顔へと変貌しており、目の前に立つ人物を凝視していた。

「・・・ボーデヴィッヒさん」

「・・・・・」

俺達の前に現れた人物、ラウラはシャルルとは対象的に、いつもの様に冷静な顔のまま俺達を赤い瞳で見据えていた。

「・・・僕達に何か用かな、ボーデヴィッヒさん」

「貴様に用事などない・・・」

シャルルに短く言い放つとラウラはこちらを見た。俺か・・・まあ、予想はしていたけどさ。

「シャルル、お前は寮に戻っていろ」

「・・・うん。でも無茶だけはしないでね、零司」

「それに関しては安心しろ。毎回身内に釘刺されているから」

少し心配そうな表情を見せたが、俺の言葉を信じてくれたのか、シャルルは足早にこの場を去って行った。それを見届けた俺はラウラに背を向ける。

「・・・行くぞ」

「何処へですか？」

「裏庭、ここでする様な話でもないんだろう？」

ラウラにそう告げると背後から彼女の足音が聞こえ始める。それを確認すると、俺も裏庭へと向けて歩を進めるのだった。

・

「ここら辺でいいだろう」

裏庭に到着した俺はそう言って立ち止まると、ラウラへと向き直る。ラウラの表情はこの学園に来て、最初に俺と会話した時を思い出しているのか何処か苦い表情を浮かべていた。

「で、何の様だ？」

前置きなどを全て吹き飛ばして、さっそく本題に入る。するとラウラは表情をいつもものに戻し、口を開く。

「私が今、あなたへと懇願する用事など一つしかありません」

「・・・だからなぁ」

つまりまたあの問答を繰り返すつもりなのか・・・

「今日、ハッキリと証明できたはずです」

「何をだ？」

「あの連中の価値を」

この口ぶりと今日のラウラの行動から察するにあの連中というのはおそらくオルコットや凰、如いては一夏や篠ノ乃達の事を言い示しているのだろう。

「この学園に居るのはどうしようもない連中ばかり・・・それは専用機持ち達も例外ではないと思っていました」

今日のアリーナでの戦闘を思い起こしたのか、小馬鹿にした様な笑みを浮かべる。

「今日、認識する為にあの者達に仕掛けた戦いでそれがハッキリとしました。あの程度で専用機持ちとは、笑わせます」

「・・・・・」

「二人がかりで私に戦いを挑み、それですら敗北する弱者達。他も織斑教官の弟というだけで大した能力も持ち合わせていない劣等種。そしてそれに対し慣れ合う有象無象・・・」

「・・・結局、お前は何が言いたいんだ」

「ここには、あなたが護る様な者達など居ません・・・こんな場所で満足するべきではありません」

ラウラからは激情は感じられない。ただ単純に事実を叩き付けている、そう考えているのがラウラの表情から読み取れた。

「それはお前が決める事じゃないだろう」

「しかし、事実でもあります」

「何が事実だ。お前が今日やった事は単なる喧嘩だろうに、理由付けて正当化するんじゃない」

「あなたがここに居続ければ、そのＩＳ操縦技術が腐って行くのは目に見えています」

離しながら俺はラウラから、前にこの場所で話した時よりも強い意志が感じてため息をついた。あなたがそのつもりなら、自分も決して引くつもりはない・・・そんな感じだ。

「・・・それがお前の戦い方か？」

「はい」

「その為にオルコットと凰を襲撃して、怪我を負わせたと？」

「敵の将を撃たんとすれば、まず馬を射よ・・・この国のことわざだったはずですが」

「・・・なあ、ラウラ」

少し自分を落ち着かせる為に間を置いてから、自分の感情を口に出す。

「ふざけるなよ、貴様」

「・・・ッ！」

眼前のラウラが身構える。自分の中でスイッチが切り替わったのがわかった。まるで先ほどまでの俺が違う俺にすげ変わった様な感覚。その感覚と発している声の温度の無さに我ながら少々嫌気が差したがそのまま続ける。

「自身の考えを押し付け、そしてその次には俺の仲間を襲撃する・・・貴様のやっている事は命令を聞かないモノへと行われる暴力と同

じだ」

「その様な事は・・・私は、今あなたが置かれている状況をしっかりと理解してもらう為に――」

「理解？　ああしてるさ、俺はこの場所に満足している。満足して、それで護りたいとも思っている。だが、お前はそれを理解した上でオルコットや凰に対して攻撃を仕掛けた・・・ならば今、俺がお前に向けている怒りは正当なものだ・・・違うか？」

「その怒りなら、甘んじて受けましょう。ですが、理解してほしいのです。この場所は・・・あなたに相応しくない」

一歩も引く気はない。そんな意志を強調させる様に、ラウラは俺に向かって一歩踏み出して言った。

「私はあなたを心から尊敬しています。だからこそ、私はあなたに誰よりも強く合ってほしいのです・・・その為ならば――」

「俺と敵対するのも、構わないと？」

問いかけにラウラは頷いた。強い意志の宿った瞳がこちらを見ている。どうやらラウラは今の言葉を撤回するつもりもない、本気の様だった。どうして俺の事などで本気になるのかと思う。

「・・・ならば、こうしよう」

そう言って俺はポケットに入れてあった白紙の申告書を取り出して、ラウラに見せる。

「今月末にある、学年別トーナメント・・・ここで決着を付けよう」

「決着・・・？」

「ああ、おそらくこのままだと俺とお前の私情事で皆を巻き込んでしまう。お前としてはどうでもいいかも知れないが、俺にとっては重大な事なんでな、それだけは避けたい」

俺は離れたくない。ラウラは連れ戻したい。噛み合わない俺達の事情はおそらくこのままだと永遠に続くだろう。そうすれば、ラウラの暴走も止まらない。そんな事をしていたら学園にも、皆にも、この場所に呼び込んでくれた千冬さんにも迷惑がかかる。恩を仇で返す真似はしたくない。

「ならば、どうするつもりですか？」

「学年別トーナメント・・・そこでもし俺と当たった時にお前が勝ったら――俺はドイツに帰るよ」

「・・・本当ですか？」

「ウソをついて何になる・・・その代わり条件が在る」

そう言って、俺は学生寮の方を見る。

「・・・皆に手を出すな。お前と戦うのは俺だけでいい」

俺の身体は元々傷だらけで、もはや新しい傷なんて目立ちもしないだろう。だが俺の過去、それが原因でオルコットや凰が傷付き、次の犠牲者が出るなんて事はあってはならない。傷を得るのは俺だけ

でいい。俺なんかの為にこの学園の誰かが傷付くなんて、そんな事は認められない。

「この条件を飲むならば、俺はトーナメントでの約束を守る・・・どうだ」

「・・・その言葉に嘘はありませんね？」

「侵害だな、俺はお前の前で嘘をついた事は無いぞ」

俺がそう言うとラウラは瞳を閉じて、少し黙りこくった。何を考えているのか、その顔からは読み取れない。そして再び瞳を開いた時には、覚悟は決まっている様だった。

「・・・失礼しました。今の言葉、撤回します」

「ということは、契約は成立ってことでいいんだな？」

「はい・・・必ずあなたに勝って、ドイツへと連れ戻して見せます」

「意気込みやよし・・・だが、簡単に勝せはしないぞ」

そう告げて、俺はラウラに背を向ける。時刻はもうすぐ七時半を回ろうとしている。いくら夏に入ったとはいえ、この時刻になればさすがに空には星が煌めき、周囲に夜闇が侵食する。

「話は終わりだ、帰るぞ」

「・・・・・」

「何をしている。もう夜だ、外出時間を過ぎていたら千冬さんにどやされるぞ」

「はい・・・ですが」

「なんだよ」

「私は・・・少し後から行きます」

首を捻って見てみると、ラウラは視線を逸らしていた。どうやら俺と一緒に学生寮に戻るのを躊躇っている様だった。俺はそんなラウラの、学園に来て初めて見た年相応の女子らしい仕草を見せられ、すっかり毒気が抜かれてしまった。

「いいから、来いよ」

「わ、私は・・・」

「早く来いって、お前だけ千冬さんにどやされるのを見てるってのもあんまりいい気分じゃない。それに下手をしたら、俺だって何か言われるかもしれないからな」

なんだか少々言い訳じみた事を口走りながら、ラウラの隣に行くと背中を押して前へと進ませる。

「しょ、少佐、押さなくても歩けます」

「歩くんじゃなくて走れ。時間、結構ヤバいからな・・・あと少佐は止めろって」

俺の言葉にラウラは小さく頷くと駆け出す。それに合わせて走りながら、俺は少しだけ昔の・・・ラウラと一緒にいた時の事を思い出していたのだった。

・

「ただいま・・・」

帰宅の挨拶を口に出しながら、俺は自分の部屋のドアを開けた。結局、あの後に千冬さんに捕まった。ラウラは先に逃がしたから、あいつは叱られなかったが、俺はむしろそれの事もあって結構強く説教された。

「シャルル、先に帰ってるの――」

同居者の有無を確認する為に声を出したが、そこまで言って、俺は口を閉ざした。

「スゥ・・・」

「おやおや・・・」

安らかな寝息と穏やかな寝顔を見て、微笑を浮かべてしまう。寝巻であるジャージを着た同居者シャルルは布団も掛けずにベッドで横になって寝息を立てていた。

「今日も色々あったからな・・・疲れたのか」

朝は騒ぎたてられ、昼はラウラとの話し合いの為に色々気を回し、放課後にはオルコットと凰を助ける為にラウラと対峙した。今日だけでも結構なハードスケジュール、こりゃ疲れるのも無理はない。

「いくら夏だからって布団かけなきゃ風邪引くぞ、まったく」

シャルルの下から取るのは気がひけたので、俺は自分のベッドにある掛け布団を取るとシャルルの上に掛けてやる。本当にちょっとしたところで抜けているというか・・・まあ、そんなところがちょっと可愛らしくもあるのだが。

「今日一日御苦労様、ゆっくりと休めよ」

そう告げ、俺はシャルルから離れるとこの部屋に設けられたテーブルに着く。そして『黒天』専用に作れた黒いノートＰＣを起動すると、すぐさま奏への連絡を取り付けた。

『こんばんは、お兄ちゃん』

「悪いな奏、急に連絡入れちゃって」

俺が謝ると画面の向こう側にいる白衣姿の奏では優しく笑いかけてきた。

『ううん、大丈夫。丁度ひと段落したところだから・・・ところでどうしたの？　また『黒天』の『改良領域』の話？』

「いや、今日はそれじゃない・・・この前の話に出てた、アレの事なんだけど」

『アレ・・・ああ、この前のやつですね』

奏はポンと手を打つと、目の前にあるＰＣのキーボードを打つ。キーボードを目にも止まらぬ速さで打って行くのと比例する様に、俺の画面にとあるデータが配置される。

『データ展開完了・・・でも、これをどうするつもりですか？』

「今度の実戦に使ってみようと思うんだ。学年末トーナメントだからあと一週間くらいしかないけど・・・間に合うか？」

『はい、現物はもう出来ていますから・・・送るのに四日くらいかかりますけど』

「それでいい、調整はぶっつけ本番でやる」

そう言いながら、画面に展開されたデータを見る。それはとあるモノの設計図。次の戦いに備えて作られた、『黒天』の新たなる力だ。俺は記載された設計図の名を呟く。

「『黒天』専用近接戦闘型パッケージ、『素戔男尊（スサノオ）』・・・」

神の名を冠したそれをただ俺は細くなった眼で睨み付けるのだった。

・

Ｓｉｄｅ　シャルル・デュノア

「・・・う・・・うん？」

身体に温かさと零司の匂いを感じて、ゆっくりと目を開ける。すると僕の視界にいつもの部屋が飛び込んできた。

「あ、あれ・・・僕・・・」

身体を起こしながら、まだ緩い頭で状況を確認していく。僕は確か零司に先に戻ってろって言われて、言われた通りにこの部屋に戻った。それで部屋で零司の帰りを待ってから、夕食に行こうと思っていたんだけど・・・

「・・・僕、寝ちゃったのか」

ようやく自分が何をしていたのかを理解する。待っていようって思ったのに、疲れの所為で眠ってしまっていたらしい。良く見るとこの掛け布団、零司のだ。そっか、零司の匂いがしたのはコレの所為か・・・

「そ、そうだ零司・・・は」

ハッとなり、辺りを見回すとすぐに彼を見つけた。自分の腕を枕にしてテーブルに突っ伏しながら、眠っている様だった。

「教室でもやってたよね、それ」

そんな零司に少し笑みながら、起こさない様にこっそりと近付いて寝顔を盗み見る。いつもの優しい表情や、いざという時の凛々しい表情とも違う。まるで子供の様な寝顔をしていた。

「うわ・・・」

しまった、こんな顔を見るんじゃなかった。胸がキュッと鳴ってしまった。これはズルイ。もしも自分が本当に男で、零司が女だったら惚れてしまう様な表情だ。

「・・・ずるいよ、零司」

そんな事を呟いていると――――

『お兄ちゃん、今輸送させました――――って、アレ？』

点けっぱなしのノートＰＣから声と共にブラウン色の長髪に白衣姿の女の人が現れた。

『あ、あの・・・あなたは――』

「あ、えっと・・・シャルル・デュノアです、どうも」

小声で言った後、小さく頭を下げる。お兄ちゃんってことはこの人が零司の妹の黒瀬奏さんか・・・話には聞いていたけど、とっても綺麗な人だ。

『ああ、話には聞いています・・・お兄ちゃんのルームメイトで・・・デュノア社の令嬢さんですよね』

「・・・どうやら零司から話は色々聞いてるみたいだね」

令嬢って事は僕が男じゃないってことがバレてるという事だからね。でも妹さんにも話してるのか・・・よほど信頼されてるんだな、こ

の人。

『あの・・・お兄ちゃんがお世話になってます』

「そんなこと・・・僕の方こそ零司に世話になりっぱなしで」

ペコリと頭を下げられて、ちょっと焦ってしまう。なんだかとっても優しい雰囲気が画面越しに伝わってくる。そう考えていると、奏さんの後ろが少々慌ただしい感じになって来た。

『主任、ちょっと・・・』

『あ、はい・・・すみません、挨拶程度しか出来なくて』

「そんな事無いですよ。こちらこそ、貴重な時間を取らせてごめんなさい」

『いいえ、そんな・・・あの、シャルル・・・さん?』

「なんですか?」

『どうか兄が無理をしない様に良く見ておいてください。どうか・・・よろしくお願いします』

そんな奏さんを見て、ちょっと微笑んでしまう。ああ、この人は本当に零司が大事なんだ・・・そうわかった。なんとも仲の良い兄妹だね、二人共。

「・・・はい、わかりました」

『主任、お兄ちゃんタイムはそろそろ終了してくださいよ・・・』

『そ、その呼び方恥ずかしいから禁止です！　駄目です！　絶対駄目！』

そんな言葉を最後にブツッと通信が途切れた。僕は零れそうな笑いを押し隠しながら、ＰＣを閉じてスリープモードに切り替える。

「任されちゃったよ、零司」

寝ている零司にそう話しかけ、あの夜から今日にいたるまでの事を思い返す。

『俺が居場所になってやる』

脳内で零司があの時言っていたセリフが蘇る。その一言がどれだけ嬉しくて、どれだけ救われただろう。母親が死んで、僕の人生は暗い闇へと落ち込んだ。父親の命令で動くしかできない、実験用操縦者（モルモット）として生きていくことしかできなかった。生きて行くことが辛いと思った、死んでしまえば楽になれると思った事もあった。そしてあの時も・・・

『零司・・・僕を撃って』

死んで楽になろう。そうすればもう僕は傷付かないし、誰も傷付く事もない。そう思った。だけど零司はそんな僕に手を差し伸べてくれた。自分を殺そうとした相手にも関わらずに。優し過ぎる、甘過ぎるとも思った。だけどその考えは間違っていたんだ。

彼はその優しさも甘さも、全てをひっくるめて強い人間なんだ。ど

んな相手でも受け止める事の出来る、そんな大きな優しさ。そんなものが在るから、あんなストレートな事を言ってのけるんだ。

「奏さんは幸せ者だよね、こんな人がお兄ちゃんで」

僕ももっと早く出会いたかった。優しくて強くて、他人を引き付ける強烈な、ちょっと卑怯なくらいの魅力の塊の様な人物。青嶋さんが彼を好きになるのも良く分かる。彼の優しさに触れてしまったら、心を盗まれてしまったように惚れこんでしまうのだ。

「やっぱり卑怯だよ、零司」

（そんな零司にはちょっとだけ仕返し・・・）

呟いて、僕は零司の寝顔に顔を近付けると、額に小さくキスをした。小鳥がついばむ様な、そんな一瞬触れるくらいの軽いキス。ただそれだけで、全身に嬉しさと温かさが込み上げて来る。

「ありがとう・・・本当にありがとう、零司」

耳元で囁きかけると僕は気恥かしさ熱くなる顔を気にしながら、零司に先ほどまで自分の上にあった布団を掛けると急いでベッドに潜り込んだ。

「また明日、一緒に・・・おやすみなさい、零司」

冷めやまぬ身体の火照りを気にしながらも、満たされる様な心の温かさに身を任せ、ゆっくりとシャルルは瞼を閉じた。

ＥＰ２４　ＥＮＤ

EP２４　決着は刻々と（後書き）

はい、終了です。皆さん、いかがでしたでしょうか？

ラウラちゃんの出番すくねー！シャルルつえぇー！さすが「ＩＳのヒロイン」様ですよ。ぶっちゃけ二巻だけでもシャルルイベントが多過ぎる。今回だけでもアレなのに今後お風呂イベントとかあるんだから・・・シャルルのフラグ乱立が留まる事を知らない（ーωー；）。だが負けるな、ラウラ！過去フラグ的には結構有利だぞ！

新武装の名前がちょっとだけ出てきましたね。これは学年別トーナメントで使います。ちょっと描写が難しいかもしれないですけど、頑張りたいと思います（＾ω＾）。

次回のＩＳはおそらく学年別トーナメントです。

ついに始まる学年別トーナメント、組み合わせ表から一回戦目からラウラとの戦闘が在ると知った零司はシャルルにとある頼み事をする事になる。そして気になるラウラの相方は・・・

次回もお楽しみください

それでは、また（＾ω＾）ノシ

EP25　漆黒の咆哮（前書き）

干＜苦戦している様だな。尻をか（ｒｙ

緋＜来んなっ！（。Д。＃）

はい、緋星です。前書きが二回連続でゲイヴンネタだって?そんな事は気にするな。

今回は学年別トーナメントです。なんか長くてくどくて、戦闘はやっぱり苦手だ～い。まあ、ドラマパートもしばらく描きたくありませんけど・・・（ｰωｰ；）。

こんな文章ですけど、楽しんでいただけたら幸いです。では、どうぞ

EP25　漆黒の咆哮

六月の最終週。今まで散々騒がれていた学年末トーナメントの熱気は最高潮に達し、圧倒的熱気が会場を包み込んでいた。学園はまさにそれ一色。今から第一回戦が始まるという事もあってか、教員や今日の試合に出ない生徒達までも雑務や会場の整理、各国から集まった来賓の誘導を行っている。

試合のある生徒・・・詰まるところ一学年の生徒達は雑務などからは解放され、更衣室に待機している。無論、それは俺も例外はなく、だだっ広い男子更衣室に男三人――約一名女子だが――でベンチに座りながら対戦相手の公表を待っている。全く、贅沢なものだ。今頃女子達は更衣室がいっぱいでごった返しになっているだろうに。

「しかし・・・凄いなこりゃ」

更衣室に設置されているモニターを眺めながら、一夏が呟いた。モニターにはアリーナの観客席が映し出されていた。各国政府関係者、研究員、企業エージェント、その他諸々の顔ぶれが一堂に会していた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の所為かを確認にそれぞれ人が来ているからね。一年の僕達には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

さほど興味もなかったのか、何気ない返事を返す一夏。そしてそん

な隣に座った俺はただ静かにモニターを見詰め、トーナメント表の掲示を待つ。

「零司はボーデヴィッヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「ん・・・まあ、な」

シャルルの言葉に軽い返事をする。彼女の言う通りだ。今回のトーナメントの狙いはただ一人、ラウラのみだ。その理由は無論、あの時の契約だ。もちろんオルコットや凰の事もある。二人は今回のトーナメントの許可は下りず、客席にてその戦況を傍観する事になってしまった。一夏と付き合えるという件もあるが、彼女らは各国家の代表としてこの学園に来ているのだ。オルコットに関してはイグニッション・プランの事もあるし、中国とて専用機持ちがこのザマではという考えに至る。おそらく今回の件だけでも二人の立場を相当悪くしているだろう。だが――

「ラウラとは決着をつけなきゃならないからな」

そう、ラウラとの決着。それこそが今の俺にとっては最重要だった。ラウラはあの約束を交わしてから、一度たりとも他の生徒に手を出さなかった。ならばああ言った以上、俺もラウラとの約束を守らなくてはならない。負けたら、ドイツへと帰らなくてはならない。しかし、それはあってはならない事だ。つまり俺は必ず勝たねばならないのだ。

「零司」

そんな事を考えていた為だろうか、必要以上に力で握っていた手にシャルルの手が重なる。

「もっとリラックスした方が良いよ。零司は強いんだから、いつも通りにやって行こう」

「ああ・・・わかってる」

こちらの気を察してくれたのか、笑いかけて来るシャルルに俺は笑みを返した。あの日の出来事は後に必要な部分だけをシャルルには話した。ラウラが俺をドイツへと連れ戻そうとしている事と、それを掛けて俺がラウラと戦う事。深く聞かれたらどうするかという迷いもあったが、シャルルはそうしなかった。あえて俺の過去を詮索しようとせずにただ話を聞いて、納得してくれた。全く、今回の件ではシャルルに頭が上がらないな。

「ところで一夏、お前の方はどうなんだ？」

シャルルのおかげで少し気が楽になったついでに、少し気がかりだった事を一夏にそう問いかける。

「どうって？」

「篠ノ乃とだよ。ペア組んでから、演習とかちゃんとしたのか？」

「おお、バッチリだ。演習でも箒とは息がしっかり合ったし、そこそこのモノだと思うぞ」

「そうか、そいつは良かったな」

どうやら思った以上に組み合わせは良かったようだ。了承得たとはいえ、一夏的には急なペアの決定で程度戸惑いもあるかと思ったが、

そこら辺はさすが幼馴染といったところだろうか。

「そう言われると一夏と篠ノ乃ペアとも手合わせしたいところだが・・・」

「もし俺と箒が零司達と試合するとしたら・・・決勝だな」

組み合わせは発表されていないものの、ブロック別の配置のみは発表されていた。俺は今日の前半を占めるAブロックであり、一夏はBブロックとなっている。今回の学年別トーナメントの決勝はAブロックとBブロックの勝ち残って来た二ペアで決められる為にブロック別になってしまうと決勝までは試合をすることはできないのだ。

「ま、どちらにしろ一夏達と戦うまでにはラウラとはぶつかるから、肩の荷も下ろして戦えるだろう」

「そうだな・・・負けるなよ、零司」

「お前こそな・・・決勝で」

一夏と拳を軽く打ち合わせる。また一つ、ラウラに勝たなければならない理由が出来た。俺を目標とまで言ってくれた相手が戦いたいと言っているのだ、この言葉に応えないわけにはいかない。

「二人共、そろそろ発表されるみたいだよ」

シャルルの言葉を聞いて、俺と一夏がモニターに視線を向ける。すると会場の映像がトーナメント表に移り変わり、組み合わせが発表されていく。

「・・・・零司」

「・・・なるほどね」

こりゃあいい。喜べよ、ラウラ。どうやら運命の女神はいち早く俺達の戦いの決着を所望らしいぞ。さっきまでとは打って変わって、シャルルの真剣な声に俺は皮肉げな笑みを浮かべるながら、トーナメント表を睨みつけた。

学年別トーナメントAブロック一回戦
黒瀬零司&シャルル・デュノアVSラウラ・ボーデヴィッヒ&青嶋雫

・

第二アリーナ、Aピット。会場はまさに最高潮。数分後に開始される学年別トーナメント初戦を待ちに待った観客達の熱気で会場は先ほどの状態に輪をかけた様に騒がしくなっていた。

「さてと、そろそろだな」

「そうだね」

トーナメント表が発表されてから、すぐさまこのピットに移動した俺とシャルルは熱気に包まれたアリーナを見ながら、残り少ない待機時間の終了を待っていた。

「じゃあ、打ち合わせ通りに頼むぞ」

「・・・・うん」

俺の言葉に小さく頷くがシャルルの表情には何処か不安というか、納得していない色が見えていた。

「そんなに心配するなよ、大丈夫だって」

「でも、やっぱり心配だよ」

「ラウラのＩＳ、『シュヴァルツア・レーゲン』の仕組みは完全に知らずとも、ＡＩＣに関しての理解については俺のが上だ。だから、お前は青嶋の方に専念してくれ」

「それはわかった、理解もした・・・でも――」

「・・・シャルル」

俺はため息を吐いて、安心させる様に彼女の頭をポンポンと叩いた。

シャルルの不安。それはこの場所についてからしたとある提案・・・というより、懇願にあった。それは俺の単なる我儘であり、納得するには少々理論に欠けたものだ。しかし、それでも俺はその願いを聞き入れて欲しいと思った。

「確かに納得できないかもしれない。不安になるのもわかる。でもな、これは・・・要するにココの問題だからさ、理屈とかじゃないんだよ」

言いながら、自分の胸部を叩く。理論とか理屈ではどうにもできない、感情の問題。それに振り回されるのは戦いの中では邪魔なのか

もしれない。だがコレは礼儀でもある。ラウラに対する、正面からぶつかってくるであろう彼女への礼儀のつもりでもあった。

「・・・じゃあ、約束して」

「ああ、なんだ？」

「絶対に、負けないって」

俯き加減だったシャルルが顔を上げて、こちらを見る。そこには先ほどまであった不安げな表情は無く、真剣な、至極真剣な顔立ちだった。そんなシャルルに俺は彼女の頭から手を退けるとただ短く返した。

「・・・当り前だろ」

そう、当り前だ。負けるわけにはいかないのだ。俺はドイツに戻るわけにはいかない。俺の為にも、皆の為にも、そしてラウラの為にも。

「その為に『換装装備（パッケージ）』まで用意したんだ。ここで負けたら、奏にも示しが付かない」

「・・・それもそうだね」

そう付け加えて、小さい笑みを浮かべるとシャルルもようやく表情を崩した。どうやら、ちゃんと納得してくれたらしい。

『黒瀬君、デュノア君もそろそろ開始時間です。ＩＳを着用してください』

ピット内のスピーカーから担当教員・・・というか山田先生の声が響いた。それを聞いて、俺とシャルルは邪魔にならない様に距離を取るとＩＳを展開する。

「来い、『黒天』」

呟くと赤と黒の粒子が俺の身体を包み、俺の専用機『黒天』を構成する。しかし、展開された『黒天』にはいつもとは違うパーツがいくつも見られた。肩部や腕部、脚部の様々なところに取り付けられた小型ブースター。左右の腰部に二本づつ据え付けられ、鞘に納められた、反りのない細身の四本のブレード。脚部の丁度脹脛の部分には小型の近接用ダガー。二の腕に装着されていた小型パイルバンカー『Ｄｅｎｉｓ』は取り外され、小型の物理シールドに代えられている。そして何より『黒天』の特徴とも言えた大型のデュアルウィングはその姿を失い、中心に単調なバーニアと縦長のバインダーが左右均等になる様に二個つづ取り付けられているバックパックに取り換えられている。

専用近接戦闘型パッケージ、『素戔男尊（スサノオ）』を取り付けた、新たなる『黒天』の姿だった。

「じゃあ、行こうか」

「うん」

頷くシャルルをバイザー越しに確認した後、デッキから飛び立つ。会場に出た瞬間、大きな歓声が響き渡る。まるで会場を揺らす様なそれを感じながら、このアリーナの中心に立つ黒いＩＳ、『シュヴァルツア・レーゲン』の前に降り立つ。

「一回戦で戦えるとは、手間が省けて助かりました」

「それに関しては正直言って同感だ・・・ここで終わらせれば、今後の試合にも集中できる」

「それはあり得ません。あなたに次の試合などないのだから」

冷徹に言い放つラウラ。その瞳には一切の迷いがない。侮りなど微塵も存在しない様な、そんな瞳。敵意とも言い難い視線がしっかりと俺の事を捉えていた。

俺は腰に携えてあった鞘から近接ブレード『Ａｒｔｈｕｒ（アルトゥール）』を両手に抜き放ち、それに応じる様にラウラはカノン砲の最終安全装置を外す。ハイパーセンサーから送られてくる画面に開始五秒前を告げるサインが浮かび上がる。

――5・・・

「ここであなたに勝って、私は証明する。この場所の無意味さ、そして何よりあなたの間違いを」

――4・・・

「今度は・・・私があなたを救い出してみせる」

――3・・・

「ほう、それは楽しみだ。あの頃と比べて、どれだけ腕を上げたか俺に見せてみろ」

――2・・・

「ただし、容易には勝たせはしないぞ」

――1・・・

「来い、そして証明して見せろ・・・お前の思いを」

――0・・・

『試合、開始！！』

「「行くぞおおおおおおおおおお！！」」

Ｓｉｄｅ　黒瀬零司　ラウラ・ボーデヴィッヒ

「行くぞおおおおぉぉぉぉ！！」

先手、先に動いたのはラウラだった。開戦を知らせる号砲の如く、肩に装着されたカノン砲が即座に正面に立つ零司を捉え、装填されていた対ＩＳ用徹甲弾を撃ち込む。それに反応して零司はアリーナの地面を蹴り、ブーストを吹かして前進。すれ違う様にして徹甲弾を回避すると手に持った『Ａｒｔｈｕｒ』を構えて、ラウラの前に降り立つ。

「ハッ！」

「させるか！」

右からの袈裟斬りに対応して、ラウラがそちらへと意識を集中させる。すると零司の腕がＡＩＣ、アクティブ・イナーシャル・キャンセラーにより、強制的に停止させられる。そしてそのままラウラは次の部位の停止に取りかかろうとするが――

「遅いっ！」

左手に握られたもう一方の『Ａｒｔｈｕｒ』がラウラの左方向から襲いかかる。一歩反応が遅れながらもラウラはカノン砲を収めながら後方へと移る事でそれを辛くも回避。だが零司はラウラの回避先を先読みし彼女目掛けて右手に握られていたブレードを投げ付け、さらに接近を測る。

「グッ！」

ブレードが『シュヴァルツア・レーゲン』の肩を掠め、削る。まさかのブレード投擲に若干の驚きを感じながらも、すぐさまその感情を放棄。次の行動へと移る。零司はすでにもう一本のブレードを引き抜き、こちらに高速で接近して来ている。余計な事を考えている時間は無い。

「これならばっ！」

ラウラはワイヤーブレードと手刀のプラズマブレードを展開後、正面にＡＩＣを展開。正面から向かってくるならば止めるのは容易だ。そう考えての行動だったのだろう。だが――

「・・・っ！？」

ヴォッという鈍く破裂する様な音と共に『黒天』がラウラの視界から姿を消した。そしてハイパーセンサーに反応。

『左方向、敵ＩＳ接近！』

「何ッ！？」

ハイパーセンサーからの警告音を聞き、振り向くよりも早く展開していたプラズマブレードで左から来た斬撃をガードする。実剣がプラズマに打ち当り、火花が散る。そしてそこから零司の『黒天』の足がラウラの顎を目掛けて上がってくる。

「シッ！」

地面を蹴ってからのサマーソルト。ラウラはスライド移動をし、それを間一髪で回避すると八本のワイヤーブレードを『黒天』へと向かわせる。

「奇妙な兵器だな、全く！」

言いながら、零司は両手に握った『Ａｒｔｈｕｒ』で後退しながらも八本のワイヤーを、回転を利用しながら流し、弾き、去なす。そしてラウラはその状態の零司に向けて、再びカノン砲を撃ち出すとともにワイヤーを引き戻す。

「チッ！」

舌打ちをし、回避展開ギリギリに撃ち出された事を悟った零司はこちらに目掛けて飛んでくる徹甲弾を『Ａｒｔｈｕｒ』の腹の部分にわずかに当てる事により、軌道を逸らし、わずか数センチの間でど

うにか回避する。

「確かに腕は上がっているみたいだな・・・ラウラ」

手に持った『Ａｒｔｈｕｒ』を鞘に納めると背中に装着された左右バインダーの上部が開き、そこから腰に携えたモノと同じブレードの柄が射出され、それを掴むと引き抜く。全く同じブレードを両手に握り、零司はラウラを見据えた。

「・・・・・・」

ラウラは答えず、ただ零司に集中する。

ラウラは思う。手を合わせて、再確認させられた。相手がどんな相手かという事、そして絶対に手を抜いては倒せない相手である事を。

最初、ラウラは『黒天』の姿を見て、相手は確実な近接タイプである事を確信した。装備されている武器は全てが近接武装、そしてその考えは間違いではなかった。そう、間違ってはいなかった。

（こうも振り回されては、ＡＩＣが活用できない・・・）

本来、近接武装で固めている相手ならばその近接攻撃に対して、ＡＩＣのカウンターを入れる事によって『シュヴァルツア・レーゲン』は優位に戦闘を進められるであろう。だがそれは、ＡＩＣに捉えられればという話だ。ＡＩＣを使用するには多大な『集中』が必要だ。しかし今戦っている零司の戦闘にはその『集中』の隙が少な過ぎるのだ。次の行動に移る速度や咄嗟の判断、そして自身の視界から消える様な強力なサイドにおけるクイックブースト。

零司の動きがラウラの『集中』よりも早いのだ。

相手が近接タイプならば、ＡＩＣの格好の的である。ラウラの頭の中にはまるで教科書の内容の様に思い浮かぶ考えだった。だが、今相手にしているのが誰かという事をラウラは考えの中に入れ忘れていたのだ。

「俺に対してＡＩＣが活用できなくて、驚いてるのか？」

「・・・ッ！」

「そんなに驚く事でもないだろ。冷静に考えてみろよ」

見透かされた様な言葉にラウラが唇を噛むと、零司は『Ａｒｔｈｕｒ』の切っ先をラウラに向けて言った。

「レーゲンタイプの試作機・・・実験用ＡＩＣ初搭載ＩＳに乗ったのは俺だぞ？　そんな奴がＡＩＣの特性を熟知してないとでも思ったのか？」

迂闊だった。ラウラは改めて後悔する。侮るな、決して侮るなと思っていても、自分の中で少なからず驕りがあったのだろう。この人を相手にして、どうして自分が優位だと思えるというのだ。

「甘く見ていた・・・そう言う事か・・・」

「ん？」

「いえ・・・ここからは全力で向かわせてもらいます」

ラウラの瞳に、再度炎が灯る。敗北するわけにはいかない。故、自分の全力を出し切る。勝利の為に・・・何よりも――

「勝利（ヴィクトーリア）を！」

その叫びは会場の歓声に負けないほどに雄々しく、力強いものだった。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

・

Ｓｉｄｅ　シャルル・デュノア　青嶋雫

アリーナの空を橙色と紺色の風（ラファール）が走る。零司とラウラが地上での戦闘を繰り広げている間にも、空戦を行う二人のＩＳ搭乗者。シャルル・デュノアと青嶋雫は地上と負けず劣らずの戦闘を展開していた。

「これでっ！」

シャルルの駆る『リヴァイヴ・カスタム』はその手に握られたアサルトカノン『ガルム』とショットガン『レイン・オヴ・サタデイ』の引き金を引き、自分よりも低空に存在する青嶋の『リヴァイヴ』に向けて弾丸の雨を降らす。

「そう簡単にはっ！」

その雨の中を最小限のダメージで掻い潜りながら、シャルルに向け

てサブマシンガン『ラビット・ラピット』に引き金を引き絞り、弾をばら撒く。シャルルの軌道の先に向けて左手に、脇に抱える様にして持っていた大型バズーカ『エレファント・スレイヤー』を発射。ドゴンッという重厚な音と共に撃ち出された砲弾はシャルルの緊急停止から急降下によって回避される。

「さすがに当たらないね！」

「でも読みは良いと思うよ！」

射撃をしながらの急降下、そして射程を悟ると同時に『ガルム』を『収納』、そしてすぐさま近接用ナイフ『ブレット・スライサー』による接近戦に望む。『高速切替（ラピット・スイッチ）』、大量の『拡張領域』を利用し、事前呼び出しを高速化する事によって戦闘中に適した装備へと換装、変則的な戦いを行う。シャルルの十八番である。

シャルルは『ブレット・スライサー』で青嶋の肩部を捉える。しかし――

「甘いよ、デュノア君！」

「・・・クッ！？」

ガツンッと重苦しい衝撃にシャルルは苦い顔をする。青嶋は左手に持っていた『エレファント・スレイヤー』で向かい来るシャルルを横薙ぎに振り回したのだ。弾き飛ばされ、距離を置いたところに構え直した青嶋の『エレファント・スレイヤー』が火を噴く。

「今度こそ、当たれぇ！」

青嶋の叫びと共に撃ち出された弾丸。だがそれはシャルルへと着弾する前に空中で爆散した。『ブレット・スライサー』を持っていたシャルルの手にはアサルトライフル『レッド・バレット』が握られていた。

「さすがは代表候補生だね。ちょっとやそこらじゃダメみたい」

「正直言うと君がここまでやるとは思わなかったよ、青嶋さん」

空中で睨み会う二人。零司とラウラの戦闘が始まってからの間、空戦を繰り広げていた二人だが、双方が決定打を撃てずに射撃戦と近接戦を繰り返し、それなりにシールドエネルギーを疲弊した状況になっていた。シャルルの言葉に青嶋は不敵な笑みを返す。

「これでもＩＳ操縦でこの学園を入った様なものだからね・・・唯一、自分の誇れるところだから・・・代表候補生相手でも引けを取るつもりはないよ」

「そっか、でも・・・僕も負けるつもりは毛頭ないよ！」

会話を終え、空戦が再開される。実質、青嶋はシャルルと互角以上の戦いを繰り広げていた。シールドエネルギーもほぼ互角。それにシャルルの『高速切替』を使った戦法である『砂漠の逃げ水（ラージュ・デ・デザート）』が通用しないという状況なのだ。

「フッ！」

回る様に旋回を繰り返し、射撃を繰り返すシャルルは相手に悟られない様に距離を詰めると手持ちのマシンガンを『収納』し、近接ブレードを『展開』。そのまま近接戦に持ち込もうとするが――

「そう来ると思った！」

「なっ！？」

先ほどまで射撃戦を行っていたにも関わらず、青嶋の左手には『打鉄』の近接ブレードが握られており、こちらの攻撃は見事に受け止められた。そう、なんと青嶋はシャルルの『高速切替』について来ているのだ。本来、『砂漠の逃げ水』とは『高速切替』を利用する事で近接戦闘と射撃戦闘を切り替え、相手のペースを乱し、こちらは安定した戦いをするという戦闘方法だ。だが、その戦闘で『高速切替』に付いてこられてしまう。つまりはこちらと同じ様なスキルを持ち合わせている相手にはこの戦闘方では対応が可能となってしまう。

「まさか・・・青嶋さんも『高速切替』を！」

「残念だけど、そんな器用な事は出来ないよ！」

驚きに声を上げるシャルルに向けて、青嶋は言い放つと行動に移る。驚きに生じた一瞬の隙、その瞬間を青嶋は見逃さなかった。射撃戦にて使用していたヨットガン『ホウセンカ』に装填されていたスラッグ弾を『リヴァイヴ・カスタム』の胴体に至近距離で撃ち出す。

「グッ！・・・まだだ！」

弾き出される様に離れたシャルルは右手に持っていた『ガルム』で青嶋を撃つ。マズルフラッシュが光り、青嶋の『リヴァイヴ』に全自動射撃（フルバースト）の六十一口径弾丸が着弾。シールドエネルギーを消費させる。

「うっ・・・さすがにあの距離は無茶だったな」

『ガルム』の弾丸をくらい、自身のシールドエネルギーを確認すると青嶋はそう呟いた。双方、与えられたダメージは少なくは無い。シャルルはこのままの近距離戦闘は危険だと判断、ペースを戻す為にも一時距離を取るべきとスラスターを動かし、後方へと逃げる。

「逃がすかっ！」

瞬間、ワイヤーロッドがシャルルの腕に絡みつく。まただ、とシャルルは心の中で呟く。ワイヤーロッドの射出機が装備された右腕には先ほどの『打鉄』の近接ブレードは無く、左手はマシンガン『ラビット・ラピット』に代わっている。少しでも目を離せば、青嶋は即座に武器を変えて来る。しかも、青嶋の口ぶりを信じるとすると彼女は『高速切替』を使ってはいない。ならば、どうやってこちらに追いついて来ているのだろうか。

（こうも持ち味を殺されるなんてね・・・）

内心で毒づき、『ラビット・ラピット』から撃ち出される弾丸を肩のシールドで防御しながらワイヤーを近接ブレードで切り落とす。確かに『高速切替』が効かない相手かもしれない。だが、こちらも負けるわけにはいかない。

（僕が青嶋さんを引き付けないと・・・）

両手に射撃武器を展開し、シャルルは引き金を絞る。青嶋を引き付ける。それが今回のシャルルの役目。それが決められたのは、トーナメントの組み合わせが決まってすぐの事だった。

・

「ボーデヴィッヒさんと一対一で戦いたい？」

シャルルは驚き、そんな彼女に零司はただ頷いた。

「ああ、あいつとの決着はしっかりと納得する形で終わらせたいんだ。おそらく、あいつもそれを望んでいると思う」

「でも・・・いくらなんでも危険じゃないかな」

突然の提案に少々戸惑いを覚えながらも、シャルルは言った。ラウラの機体『シュヴァルツア・レーゲン』、アレのＡＩＣは単体対単体における戦闘では無類の強さを発揮する代物だ。その強力さは今もシャルルの脳裏に刻まれている。

「しかも、零司の『黒天』は近接戦闘仕様の『パッケージ』なんでしょ？　だとしたら、なおさら・・・」

「勝つ見込みもないのに、わざわざ奏から『パッケージ』を送ってもらうと思うか？」

零司が言うとシャルルは少し言葉に詰まった。ペア決定から数日間、シャルルは零司との演習を行った事が在る。その演習の回数は一回や二回ではない。故にわかる、黒瀬零司が行う事は結果的に戦闘に有利な方向に傾く。つまり相手が『シュヴァルツア・レーゲン』だから、ＡＩＣ使用機と知ってこの装備を用意したのだから、これも

全て考えの内という事になる。

「今回の戦闘、絶対に負けられない戦いだ。それはラウラも同じ思いだと思う。だからこそ、しっかり戦ってやりたいんだ」

真剣な眼差しがシャルルを捉える。その瞳はあの夜にシャルルに見せたものと同じ輝きが宿っている。どれだけ零司がこの戦いを大事にしているのか、シャルルはそれを見て理解したのだろう。

「わかった・・・じゃあ青嶋さんは僕が引き付ける」

「すまない・・・ありがとう、シャルル」

頷くシャルルに零司は精一杯の感謝の念を込めて、礼を言った。

・

（ちょっとズルイよね、あんな目で見られたら断れるわけがないのに）

青嶋を攻撃する手は止めない。だが零司と約束した時を思い出し、さっきまでの焦りが少々和らいだ。シャルルは思う。あの瞳、まるで人の心を射抜いてしまう様な、そんな視線。そんなものを向けられて、誰が断れるというのか、と。

（なんだか・・・ちょっと妬けちゃうな）

真剣に懇願してきた零司。つまりラウラはそれだけ彼に思われてい

るという事なのだろう。零司との間に過去に繋がりが在るとは聞いていたが、これだけ思われているならば彼女は幸せ者だろう。それなのに、自身の我儘でさらに零司を振り回している。贅沢もいいところである。

（まあ・・・今回はお姫様役を譲るよ、ボーデヴィッヒさん。しっかり騎士（零司）様に救われてもらってね）

「そこっ！」

青嶋の声が聞こえ、シャルルは現実に引き戻される。左斜め下方、七時の方向から大口径プラズマキャノン『フォルテ』がこちらに向けて光を放つ。回避行動に移るのが少し遅れた為に物理シールドを掠める。すると電磁フィールドが広がり、『リヴァイヴ・カスタム』のシールドエネルギーをキリキリという耳触りな音と共に削って行く。

「まったく、本当に強いな・・・青嶋さん」

「デュノア君だって、本当に凄いよ。今のは当てたと思ったのをほとんど回避しちゃうんだから」

心底楽しそうに青嶋の言葉には高揚の色が窺えた。それはシャルルも少なからず思っていた。ここまでギリギリの戦闘を行えるとは思わなかったし、正直楽しいとも思う。だが――

「でも、ちょっと出番が長すぎるかな・・・」

チラッと下に目をやる。そこには二機の黒いＩＳが休むことなくぶつかり合って、戦闘が激化している。そう、自分達は所詮脇役。本

命の戦いはあちらだ。前座はそろそろお引き取り願うところである。

「そろそろ終わらせようか、青嶋さん」

「なんだか気が合うね・・・ちょっと口惜しいけど、そろそろ終わらないと・・・ね」

シャルルと青嶋はフッと笑い合う。この現状を見て、察したのか。それともシャルルと同じ様な事をラウラから言われていたのか。それともシャルルとの戦いを終わらせるという意味なのか、それはわからない。だが確かに青嶋の言葉には本心があった。

「さあ・・・行くよッ！」

スラスターが火を噴く。繰り広げられる二つの風の空戦は、着々と終わりへと近づいて行った。

Ｓｉｄｅ　織斑千冬　山田真耶

「ふあー、凄いですねぇ」

そこは教員のみが入る事を許されている観察室で、モニター越しにアリーナにおける戦闘映像を眺めながら真耶は感心したように呟いた。

「黒瀬君、相変わらず物凄い戦い方ですね。まるで生徒の戦い方じゃないですよ」

「アレを生徒としてカウントする事が少々間違いではあると思うが

な・・・まあ、これくらいは出来て当然だろう。むしろ、初手で追い込めなかったところを見るとまだまだだな」

自身の弟子に対しても・・・いや、自身の弟子だからであろうか。辛辣な評価を下す千冬に真耶は苦笑いを浮かべる。

「でもあのクラスになってくると、もう教師陣とも十分戦えるレベルですよね。さすがは織斑先生の弟子といったところですか」

「まあ・・・そうだな」

少し納得いかなそうに、ぶすっとした感じで告げる千冬だったが、それが照れ隠しである事が最近真耶にもわかって来た。やはり自分の弟子を褒められるのは、師として悪い気はしないのだろう。真耶は内心でクスッと小さく笑う。

「それにしても学年別トーナメントのいきなりの形式変更は、やっぱり先月の事件の所為ですか？」

先月の事件、黒い全身装甲（フルスキン）ＩＳの襲撃は、一般に反政府組織によるテロという事になっている。ＩＳ学園への襲撃、そしてその襲撃を行ったのが無人機である事実はますます事態を混乱させるモノとして必要以上の情報には緘口令が敷かれており、学園内でも真相を知る者は教師陣だけという状況に落ち着いている。

「詳しくは聞いていないが、おそらくそうだろう。より実践的な戦闘経験を積ませる目的で、ツーマンセルになったのだろうな・・・ま、今のあいつらにはそんな教師陣の考えなど無駄なのだろうが」

それぞれが一対一で戦闘を続ける零司達を見て、千冬は呆れたよう

にため息をついた。そんな千冬に再び真耶は疑問を投げかける。

「でも一年生はまだ入学して三カ月目ですよ？　戦争が起こるわけでもないのに、今の状況で実戦的な戦闘訓練は必要あるのでしょうか」

「その考えはもっともだ。だが、そこで先月の事件だ。特に今年の新入生は第三世代兵器のテストモデルが多い。そこへ謎の敵対勢力が現れたら・・・何を心配すべきだと思う？」

「・・・つまりは自衛のため、ですか？」

「そうだろうな。操縦者はもちろん、第三世代兵器を積んだＩＳはその企業の顔だ。技術はもちろん、その性能に不信感を抱かせない為にも自社のＩＳを護らなければならない。しかし教師の数が有限である以上、いざとなれば自身の力で護らなければならなくなる。その為に実戦的な戦闘経験が必要となってくるのさ」

「ははぁ、なるほどなるほど」

疑問の氷解に真耶は何度も頷いた。

さらに理由があるとすれば、この場所がＩＳ学園である事が上げられる。ＩＳにおける技術は原則上では開発されると同時にその内容を各国に提示しなければならない。その原則を曲げ、デメリットを消し去ることができるこのＩＳ学園には様々な企業からのＩＳが送り込まれてくる。

三年間の稼働経験値と蓄積データというアドバンテージ。そして真の目的である第二形態（セカンド・シフト）と単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）。それらを見ても、企業体か

らすれば自社のＩＳが下手に機能停止に追い込まれたり、最悪奪取されてしまう事だけは絶対に避けたいのだ。

「それにしても・・・強いですね、ボーデヴィッヒさんと青嶋さん」

「そうか？　私には両方とも切羽詰まっている様に見えるがな」

千冬がそう言うと、真耶はえっと声を上げた。

「ボーデヴィッヒさんも青嶋さんもかなり良い試合をしていますよ。特に青嶋さんなんて、唯一専用機持ちじゃないのにデュノア君を追い込んでいる様にも見えます」

「ああそうだな・・・追い込んでいる様に見えるだけだ」

真耶は千冬の言葉に首を傾げ、千冬は上空でシャルルと撃ち合う青嶋を見る。『高速切替』に合わせる為に一足先に武器を抜く青嶋の姿は千冬にはとてもアンバランスなモノに見えていた。そして確信する。

「おそらく青嶋は負けるだろう・・・察しのいいデュノアの事だ、すぐに仕掛けには気付くだろう」

「仕掛け、ですか・・・」

「ああ・・・それにしても」

次に地上に目を向ける。最初は翻弄されていたものの、徐々に零司の動きに慣れてきたのかラウラは攻勢に出ていた。目の前の相手を叩き潰そうと向かうラウラに対して、正面から冷静に迎え撃つ零司。

「変わらないな、あのバカ娘は」

千冬は心底つまらなそうに吐き捨てる。相も変わらず力に溺れた戦闘方法、全てをねじ伏せようとするその戦歩。力とは攻撃力、そんな考えを持っている様では零司には届きはしないだろう。

「あの、そういえば織斑先生」

「なんだ？」

「黒瀬君の制限時間は・・・どうなっていますか？」

真耶の制限時間という言葉を聞いて、千冬はスーツ内からタイマーを取り出す。ここ最近では、毎日忘れぬようにスーツに入れっぱなしだった所為か、小さな糸の様なモノが付着していた。

「大体二十三分から二十五分・・・残り時間はあと六分程度といったところか・・・」

「あ、なら大丈夫ですね・・・よかった」

真耶がホッと胸を撫で下ろす。零司の病気である精神疾患、ＩＳに対する拒絶反応は千冬との弛まぬ夜間訓練の賜物か、学園に来た時の三倍以上に跳ね上がっていた。

「黒瀬君が苦しむ姿はあまり見たくありませんからね」

「・・・そうだな」

ワアアァァァ！

会場から震える様な歓声が湧き、それは観察室にまで響いて来た。

「あ、デュノア君達の方に動きがあったみたいですね」

「なるほど・・・そろそろ潮時だな・・・ん？」

二人が上空に目をやろうとしたその時、千冬の肩耳に付けた会場通信用のイヤホンに声が混じる。それは断続的で、酷く聞き取り辛いものだった。だが、その内容を理解した瞬間、千冬の表情が厳しいモノへと変わった。

「・・・織斑先生？」

「山田先生、少しここを頼めるか？」

「えっ・・・ど、どうしたんですか織斑先生！？　一体何が！？」

いきなりの事に慌てふためく真耶がたずねると、千冬は短くこう告げた。

「緊急事態だ」

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

Ｓｉｄｅ　シャルル・デュノア　青嶋雫

「ハッ！」

「クッ！？」

旋回と直行を繰り返し、銃弾が双方の装甲とシールドエネルギーを削って行く。それは先ほどまでと同じ様な展開に見える。だが、明らかに青嶋の顔には焦りの色が浮かび上がって来ていた。

「どうしたのかな、青嶋さん。的確に対応しないと、すぐにやられるよ！」

「・・・まだまだ！」

アサルトライフル『レッド・バレット』とマシンガン『ラビット・ラピット』による射撃により、青嶋は牽制を行う。その牽制へと『ガルム』により反撃しながら、左手に展開した『ブレット・スライサー』を持ち、青嶋へと接近する。

「それなら・・・！」

だがすでに加速に入る前に青嶋の手には『打鉄』のブレードがあった。このまま近接戦闘に持ち込む、青嶋はそう考えてブレードを握るが――

「引っかかったね」

「えっ！？」

シャルルは急に加速を止め、すぐさま『ブレッド・スライサー』を『レイン・オヴ・サタデイ』に展開し直し、引き撃ち行う。完全に不意を付かれた青嶋はその銃弾をモロに浴びてしまい、バランスを

崩す。

「くうぅ・・・」

回転し、どうにか前進の軸を自分の中心に戻すとそのままシャルルと同じ空域まで戻って行く。それに対して、後方へと逃げながらの引き撃ちを続ける。

「ネタは割れたよ、青嶋さん・・・どうして『高速切替』を使わない君が僕よりも早く武器を『展開』してたのか」

「・・・っ！？」

青嶋の顔が強張った。そんな表情の青嶋に向けて、射撃の手を緩めずにシャルルは言葉を続ける。

「それはとても単純な事だったんだよね・・・青嶋さん」

『高速切替』、それは単に『展開』と『収納』のスピードが速いという事だ。これだけでも十分な戦力にはなるだろうし、実質的にシャルルはこの戦術があってこその『リヴァイヴ・カスタム』だと思っている。つまり『高速切替』をどうにかしない限りは、青嶋はシャルルには勝てないと踏んでいた。どうにか考え、その差を埋める為に青嶋の考え出した答えは――

「君は武器を僕と同じタイミングでは抜いていない・・・最初から持っていたんだ、僕が展開するよりも先にね」

それは至極単純でなんともアンバランスな賭けだった。青嶋の取っていた行動とは『高速切替』で切り替える次の武装を予測し、先に

自分の手の内に展開を予定しておくという方法だったのだ。手を付けずに武器を抜くよりも先に手に持ってホルスターから抜いている状態。どちらが早いかは単純明快である。

「でもその戦法には重大な欠点がある・・・それは説明するまでもないよね？」

「・・・本当に察しがいいね」

苦々しげに青嶋は言った。欠点、それはこれまた単純な事だ。これは一種の賭けなのだ。青嶋には先見の才が在るだけであり、決して未来を予知する事が出来るわけではない。つまり、―予想が外れればそれまで《・・・・・・・・・・》なのだ。

「だからさっきみたいな予想外な出来事に弱い・・・僕みたいに抜きが早いってわけじゃないしね」

「そこまでわかっているなら、もう小手先は不要みたいね」

言うが早いか、青嶋は再びアサルトライフルとマシンガンを展開し、シャルルに向ける。もはやこの手は通用しないと理解したのか、スラスターを点火。真正面から突っ込んで来た。

「でもね、手の内が知られたからって負ける気にはならないの」

撃って、撃って、撃って、撃ち続ける。引き撃ちによって装甲を削られる事を恐れていない様に、ただ愚直に正面からシャルルを追い回す。

「私って、結構負けず嫌いなんだよね！」

その叫びを耳に聞きながら、シャルルは冷静に迎え撃つ。『ガルム』の弾丸が『ラビット・ラピット』へと着弾し、青嶋の手元から落ちる。その時の隙に『レイン・オヴ・サタデイ』を立て続けに連射。後少しで青嶋のシールドエネルギーはゼロになる。そうシャルルが考えた時だった。

「・・・っ！？」

シャルルは見た。不意に青嶋の口端が上がるのを。それを視界に捉えたシャルルは直感的に感じ取った。マズイ、この場所は何かマズイ。

「一旦離脱を――」

「遅い！」

周囲からピーッというブザー音が鳴り響くと、直感の原因が姿を現す。そしてシャルルは言葉を失った。シャルルの眼に映ったものは、機雷。空中にステルス状態で配置された、無数の対ＩＳ用空中機雷。それは青嶋が空戦の途中から空中に設置していたものだった。

「これで・・・チェックメイト！」

青嶋の声。そして次の瞬間、光と爆撃の連鎖が空中で咲き乱れた。爆破の勢いで出た煙はシャルルの姿を完全に覆い隠し、その中から細かなオレンジ色のパーツが地面へと落下していく。勝った、青嶋はそう確信した。

そう、その確信が油断となった。

『敵ＩＳ、急速加速！』

「そんなっ！？」

警戒音を聞いて、緊張感を取り戻すと同時に黒煙を切り裂いてその向こうから橙色の閃光がこちらに弾丸の様なスピードで接近してくる。

「『瞬間加速』！？　『リヴァイヴ』でやるって言うの！？」

『瞬間加速』、それはシャルルのもう一つの隠し玉。そしてその肩には機雷によって破壊された物理シールドが剥がれて、中から無骨なリボルバーと杭があった。六十九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレイ・スケール）』、通称――

「『楯殺し（シールド・ピアース）』・・・！」

「はあああああああっ！」

完全に油断していた青嶋には、もはやそれを止める事はままならない。回避行動に移ろうとした時には既にシャルルとの距離は零。そしてその瞬間、シャルルと目が合う。彼女は小さく笑う。

「これが本当の・・・」

ズガンッという鈍い音と共に青嶋のシールドエネルギーは急速に低下、『０』という数字を残して地上へと落下していく。その青嶋に小さな声でこの空戦の決着を告げた。

「・・・チェックメイト」

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

・

「青嶋をやったか・・・シャルル」

地上戦。地面に突き刺さり、散乱する複数の剣に囲まれて、『シュヴァルツア・レーゲン』のプラズマブレードを『Ａｒｔｈｕｒ』で受け流しながら俺は横目で空戦の終結を確認した。彼はシャルルに青嶋を任せるといったが、思った以上に消費してしまっている現状を見て、少しながら驚いていた。

「よそ見している場合ですか？」

バチィ――――！

「ぐっ・・！？」

ラウラの言葉を聞いて、俺は眼前に意識を戻す。今はラウラを相手にしている。下手に違う事に集中すればそれはそのまま敗北に繋がりかねない。それに先ほどからラウラの動きが急激に良くなっている。それは油断が完全に消えたって事を物語っていた。

「お前に注意されるとはな！」

両手に握られた『Ａｒｔｈｕｒ』でプラズマブレードと切り結びながら、ワイヤーブレードにも意識を怠らない様に戦う。それは『改良領域』における駆動系の反射速度とセンサーの最適化を行ってこそ続けられるものであり、『黒天』だからこそできる技となっていた。

「ハァッ！」

左手のブレードを『シュヴァルツア・レーゲン』の肩アーマーに突き刺す。そしてそのまま手を離し、右手で横一閃の薙ぎ払い。それを防御したラウラの隙を縫って、脚部に付属された近接用ナイフ『Ｋｕｒｔ（クルト）』を抜き取る。だがそれをラウラのワイヤーブレードが弾く。

「今度はこちらからやらせてもらう！」

ラウラの声に応じる様にワイヤーブレードが一斉にこちらに向けて襲いかかる。捌き切る為には一本では足りない。そう考えて二本目の『Ａｒｔｈｕｒ』を抜こうとするが、その隙を与えまいとラウラの猛攻が続く。

「チィ！」

舌打ちと共に高出力のサイドブースターを起動させ、クイックブーストを行う。ラウラはそれを負う様にカノン砲を展開、特殊砲弾を装填して回避方向の先へと撃ち出す。

「逃がすかっ！」

特殊砲弾が開き、大量のベアリング弾が俺に向かって発射される。

内心で「しまった」と呟くがもう遅い。回避不可能の面の攻撃にさらされた『黒天』は衝撃で大きくバランスを崩す。もちろん、その隙をラウラが見逃すはずもない。

「もらったっ！」

ラウラが手をかざすと、『黒天』の右腕が強力な力で停止させられた。捕まえた、そう睨んだのだろう。次の瞬間、ラウラは『シュヴァルツア・レーゲン』のスラスターを開き、一気に加速する。そうしている間にも左腕、右足、胴体と次々にこちらの全身をＡＩＣが捉えて行く。

そしてラウラが俺の眼前に辿り着いた頃には完全に動きを停止させられていた。そんなこちらにブレードを展開して手刀の切っ先を向ける。

「・・・勝負は着きましたね」

「零司！」

シャルルが叫び声を上げる。そちらを見ると機能停止した青嶋の『リヴァイヴ』の近くにシールドエネルギーの残量がギリギリ二桁というボロボロの状態の『リヴァイヴ・カスタム』が降り立っていた。

「待ってて、すぐに――」

「来るな、シャルル！」

俺の声を聞いて、ビクッと手を止める。これは俺とラウラの戦いだ。シャルルには悪いが、今は引っ込んでいてもらいたい。

「また奴を庇うのですか？」

「庇うとか、そういう問題じゃない」

「・・・あなたはどうしてそこまでこの場所を大事だと思えるのですか」

またその門答か。いい加減、聞き飽きたぞ。

「そんなの俺の価値観だろうが。それを理解できないっていうのは単純に俺とお前じゃ価値観が違うだけだ」

「じゃあ聞かせてください。あなたの価値観とは一体何だというのですか！？」

「聞かせてやるよ・・・この試合が終わったらな」

声を荒げるラウラに俺は瞼を閉じ、そして少ししてから不敵な笑みを浮かべてラウラに告げた。その時――

ガキュッ――――！

「な・・・に・・・！？」

金属が金属を貫く音と共にラウラの表情が変わり、視線が俺から外れる。ラウラの視線の先、それは右肩のアーマーだった。重厚な装甲の様なその場所に一本の剣が突き刺さっている。それは俺の『Ａｒｔｈｕｒ』だった。

「集中力が切れてるぞ！」

「・・・っ・・・ぐぅ！」

視界が外れ、ＡＩＣから解放された俺はラウラを蹴り飛ばして離脱。そして『シュヴァルツア・レーゲン』から一定の距離を取ると意識を集中させる。堅牢で鋭く、相手を斬り裂き、貫くイメージ。それは剣のイメージだ。

「来い、『Ａｒｔｈｕｒ』！」

俺がそう叫ぶと、地面に散乱していた六本の剣『Ａｒｔｈｕｒ』が一斉に勢いよく空中に浮き上がり、俺の周囲へと集まり、展開される。それを見て、ラウラは信じられないといった表情を浮かべる。

「馬鹿な・・・ＢＴ兵器！？」

「ほう、察しが良いな」

空中に浮き、俺の周囲に展開された『Ａｒｔｈｕｒ』にはとある仕掛けが施されていた。それはビットシステム・・・いわゆるＢＴシステムと呼ばれる、本来イギリスの『ブルー・ティアーズ』に使用されているソレだ。あらゆる方向からの攻撃に特化したこの武器を装備した『素戔男尊』だからこそ、俺は対ＡＩＣ用としてこの装備を選んだのだ。

「さてと、ここからが本番だ・・・行くぞ、ラウラ」

そう告げると、俺は腰から抜いた『Ａｒｔｈｕｒ』を持ち直し、二刀流の構えでラウラへと加速する。それと同時に宙に浮いていた『

Ａｒｔｈｕｒ』がラウラへと向かう。それに対応する為にラウラはワイヤーブレードを空中へ、そして手刀で俺を迎え撃った。

「さあ、捌き切って見せろ！」

ラウラは苦しげな顔で二つの斬撃を受け止める。だが六本内、ワイヤーブレードの間をかいくぐって来た二本が『シュヴァルツア・レーゲン』のカノン砲を内側から貫く。それを見た俺は右肩に手に持った剣を突き刺し、カノン砲に刺さった二本の柄を指の間に挟むとそのまま一気に下へと振り下ろす。

「このままでは・・・！」

カノン砲が大破すると近接戦闘の完全な不利を理解し、ラウラはブースターを開く。だが行かせはしない。右手の二本を『Ａｒｔｈｕｒ』を上空に投げ、それを操ってラウラへと飛ばす。正面から来たそれを弾くがーーー

バキッーーーー！

「クソッ！」

『シュヴァルツア・レーゲン』のブースターから鈍い音が鳴る。そこにはもう一本の『Ａｒｔｈｕｒ』が刺さり、機能を物理的に殺していた。引けもしなければ捌き切れもしない。ラウラをその状況まで追いこむと、俺は正面へとブーストを掛ける。これで・・・・・・終わらせる。

「おおおおおっ！」

腹を決めたのか、ラウラもワイヤーを展開し、全力で迎え撃つ姿勢へと入る。俺は肩のバインダーから先ほどの様に二本の柄を指の間に挟み、迎え来るワイヤーを弾いて接近する。

「・・・っ・・・・あああああっ！」

射程に入った瞬間にラウラが手刀を振りかぶる。だがそこに俺とラウラの間を縫うように振って来た剣によって、プラズマブレードの発生させていた二の腕のパーツが貫かれる。そのまま初手を損じたラウラに向かって、『Ａｒｔｈｕｒ』を突き刺していく。肩、二の腕、脚部、スカート部。反撃の隙も与えない、雷速剣舞。『シュヴァルツア・レーゲン』のあらゆるパーツに突き立てられた『Ａｒｔｈｕｒ』がその装甲を貫き、破壊していく。

「がっ・・・あ・・・！」

最後に一撃、腹部に撃ち込まれた蹴りによってラウラはアリーナの壁際まで押し出された。『Ａｒｔｈｕｒ』が突き刺さったその姿は無残で、機体からは青い紫電が走っている。ＩＳ強制解除が近い証拠だ。

「どうする・・・まだ続けるか」

手に持った最後の一本の『Ａｒｔｈｕｒ』をラウラに向ける。勝負はあった。誰もがそう思い、俺達の勝利を確信しただろう。

「私は・・・負けない・・・」

だが、異変の兆候が見られた。そのラウラの言葉にはあらゆる感情が渦巻いた様な重苦しい感覚が滲んでいた。

そして瞬間――――

「私は・・・負けるわけには・・・・・いかないんだあああああああ！」

アリーナに響き渡る咆哮と共に、ラウラは『黒』に包まれた。

ＥＰ２５　ＥＮＤ

EP25　漆黒の咆哮（後書き）

はーい、終了です。

ああ、なんだかラウラちゃんが思いっきりボコられている気がする・・・ごめんね、ブラッククラビッ党の皆さん。あとＡＩＣに関しては触れてやらないでください。単純に一対一での戦闘での攻略法が一つしか思いつかなかったんです。むしろシャルル対青嶋の方が無茶だって？　笑って許してください、マジで（ーωー；）。

では次回は

ラウラに勝利した、その確信は覆された。『黒』は新たなる姿になりて、零司に襲いかかる。

短い次回予告風なあれでした。では次もまたよろしくお願いします

では、また（＾ω＾）ノシ

ＥＰ２６　力（前書き）

こんなものを書いて喜ぶか・・・変態共め！

はい、どうも緋星です。

いきなりスミちゃんの罵倒から始まりましたけど・・・いいですよね、ｆｏｒ　ａｎｓｗｅｒのオペ子。あのツンデレっぷりはなんともいえな・・・おっと、二十六話ですね。

えー今回はＶＳ　ＶＴシステムです。正直、上手く描けなかったと思いますが、もしそれでもいいという勇者が居ればどうぞ（ーωー）

EP26　力

Ｓｉｄｅ　？？？　織斑千冬

『第二アリーナにて緊急事態発生！繰り返す、緊急事態発生！教員はただちに鎮圧部隊を向かわせろ！来賓と生徒は批難すること！繰り返す！』

けたたましく鳴り響く観客への避難勧告と教師達への出撃指令。今頃会場では何が起こったのか、その状況もあまり理解せぬままに人が雪崩のように出て行っているのであろう。

「Ｈ？ｎｓｃｈｅｎ　ｋｌｅｉｎ　Ｇｅｈｔ　ａｌｌｅｉｎ　Ｉｎ　ｄｉｅ　ｗｅｉｔｅ　Ｗｅｌｔ　ｈｉｎｅｉｎ．」

そんな時、会場とは別の場所で軽快に歌を唄う少女が一人。フリルをあしらった白いドレスに大きめのツバが目立つ帽子。そして流れる様な薄い桜色の長髪がこの広々とした密閉された暗闇のなかでひときわ目立っていた。

そこは学園地下に存在する保管庫。今までＩＳ学園に収集された危険物や解析不可能の遺物などを保管しておく為の地下施設だった。学園全体に鳴る警戒音の微かな響きを耳にしながらも、軽い足取りで奥へと進んで行く。

「Ｓｔｏｃｋ　ｕｎｄ　Ｈｕｔ　Ｓｔｅｈｔ　ｉｍ　ｇｕｔ，　Ｉｓｔ　ｇａｒ　ｗｏｈｌｇｅｍｕｔ．」

少女の口走るそれは単なる民謡。子供なら遊びながら唄い、それを

特別何とも思わない様なありふれた歌だ。だがこの少女のそれはまるで違うものだった。小さな口元から紡ぎ出される歌はまるで聖歌の様に神々しく、賛歌の様に心を掴む、人としてこれだけの美しさを醸し出されるとなると逆に何か魔的なモノすら覚えてしまう。そんなあらゆる歌手達を置いてけぼりにする様な歌声。

「う・・・あ・・・」

そんな歌声にかき消される様にして、絞り出す様な声が聞こえる。聞き惚れる様なソレの合間に現れた四つの不協和音。少女は足を止めると、クルリと長いスカートをはためかせながら振り返ると視線を下へとやる。

そこにあったのは、六つの影。それぞれが冷たい特殊合金でできた床に伏せ、血だまりに沈んでいる。年齢とＩＳスーツを見る限り、ＩＳ学園の教師だという事がわかる。その中の一つ、唯一意識が残っていたのだろう。苦悶の声を上げながら、少女に手を伸ばす。

「Ａｂｅｒ　Ｍｕｔｔｅｒ　ｗｅｉｎｅｔ　ｓｅｈｒ，　Ｈａｔ　ｊａ　ｎｕｎ　ｋｅｉｎ　Ｈ？ｎｓｃｈｅｎ　ｍｅｈｒ．」

ヒュッ――――――！

「あっ・・あああああああ！」

苦痛に女性教師が悲鳴を上げた。先ほど伸ばした手、それを少女が踏みつけたのだ。女性の手からはバキバキという生々しい音と共に骨が砕けていくのがわかった。少女は悲鳴を聞いて満足したのか、女性教師の手の上から足を退けると再び進み始め様と保管庫の暗闇へと向き直る。

「”Ｗ?ｎｓｃｈ　ｄｉｒ　Ｇｌ?ｃｋ!”　Ｓａｇｔ　ｉｈｒ　Ｂｌｉｃｋ，”Ｋｅｈｒ'　ｎｕｒ　ｂａｌｄ　ｚｕｒ?ｃｋ!”」

民謡の一部を歌い終えると同時に少女が扉の前に到着する。彼女はその扉を一瞥し、隣に存在するカード式の電子ロックへと手を伸ばす。すると電子ロックは狂った様な電子音を鳴らせ、しばらくすると煙を吹き始めるとロックされていた扉が圧縮空気の音を鳴らせながら開いた。

「えっと・・・どれだったかな」

呟きながら扉の中に足を踏み入れるとツカツカと進んで行く。周囲にある扉の数々、その中に存在するであろう積み上げられた学園側の手に余る様な機密物には目もくれずに進み、最奥近くの位置する扉の一つを迷うことなく開ける。

そこにあったのは数機のＩＳだった。ただしどれも活動可能な形を成してはいない。一つは胸部を貫かれ、もう一機は頭部と両腕が存在しない。そうこれはあの時、学園を襲撃し、零司と真耶が撃墜した『人形』だった。

「あったあった」

そう言うと少女の右手の手首より上部分に粒子が収縮し、ＩＳの腕部装甲が展開される。純白の装甲色に血の様な真紅のラインが入れられたソレはその色に反する禍々しい鉤爪を模した指先で――

バギギッ――――！

「Ｓｉｅｂｅｎ　Ｊａｈｒ　Ｔｒ?ｂ　ｕｎｄ　ｋｌａｒ　Ｈ?ｎｓｃｈｅｎ　ｉｎ　ｄｅｒ　Ｆｒｅｍｄｅ　ｗａｒ.」

『人形』の装甲を剥がし始める。自立起動の為に入れられた赤黒い内部燃料が飛び散り、まるで帰り血の様に白いドレスを汚していく。しかし少女は気にも留めない。むしろ鼻歌を再開させると、先ほどよりもご機嫌なのか声の高揚が高まって来ていた。

ビギギッ――――ブチッ――――ブシュッ――――！

「Ｄａ　ｂｅｓｉｎｎｔ　Ｓｉｃｈ　ｄａｓ　Ｋｉｎｄ，　Ｅｉｌｔ　ｎａｃｈ　Ｈａｕｓ　ｇｅｓｃｈｗｉｎｄ.」

その歌声の美しさは変わらない。しかしにじみ出て感じさせるモノが他にあった。それはまさしく狂気。相手を破壊する事に喜びを覚える人間の声色だ。

ブッ――――！

「Ｄｏｃｈ　ｎｕｎ　ｉｓｔ'ｓ　ｋｅｉｎ　Ｈ?ｎｓｃｈｅｎ　ｍｅｈｒ.　Ｎｅｉｎ，　ｅｉｎ　ｇｒｏ?ｅｒ　Ｈａｎｓ　ｉｓｔ　ｅｒ.」

胸部を破壊された『人形』の解体が終わったのか、右手を引き抜くとその手の中を見る。そこには翡翠色に輝く宝石の様な物体があり、少女はそれを確認すると右手を握り締める。するとその物体は翡翠色の粒子となり、消滅した。

「Ｂｒａｕｎ　ｇｅｂｒａｎｎｔ　Ｓｔｉｒｎ　ｕｎｄ　Ｈａｎｄ.

Ｗｉｒｄ　ｅｒ　ｗｏｈｌ　ｅｒｋａｎｎｔ？」

歌の二節目が終わり、少女はもう一機の『人形』の前に立つと何の迷いもなく、先ほどと同じ様に装甲を剥がし始める。

「ギッ――ギギッ――」

「あれ？　まだ起動できたんだ・・・さすがはあの娘のお人形」

とぎれとぎれに機械音を鳴らしながら、『人形』の頭が動いた。おそらくＩＳに取り付けられたＡＩの一種が、自身の機体の危機を感じで防衛として起動した者なのだろう。

「でもダメだよ？」

しかし少女がそう言うと『人形』は動きを止めた。否、止められてしまった。『人形』にはＡＩの積まれた頭部は無く、少女の左手には腕部装甲と共に大鎌が握られていた。一瞬の出来事、瞬時に展開された大鎌は『人形』の頭部と胴体を分断し、静かになった『人形』を解体していく。

「真っ赤・・・本当に人間臭い『人形』だよね。これもあの娘の趣味なんだろうけど」

クスクスと笑う少女。状況が違えば、どれだけ可憐な笑みだっただろう。だが血に塗られた様に赤く染まったドレスを纏った姿はどれだけ笑みを浮かべようと、その見た者の背筋を凍らせることしかできない。

「ごめんねぇ、フランチェスカ・・・アハッ・・・アハハハハハハ

ッ！」

まるで吹きだす様に上げられた笑い声が狭く、鼻も曲がる様な燃料の匂いで満ちた部屋に響き渡る。

「これも、これも全部ヨハンの為！　ヨハンの為なの！　だから許してね、可愛い可愛いフランチェスカ！　ああ、ヨハン！　ヨハンヨハンヨハンヨハン！」

再び『人形』の胸部から腕を抜くと鎌を持った手で自分を抱きしめながら、クルクルと回り始める。顔は高揚し、朱に染まって愛しい人の名前を叫ぶ。狂気、狂っているとしか見えない。それが愛しき者に対する愛ある行動だとしても、常人が見たら顔をしかめるだろう。

「はやく抱き締めたい！　ヨハン、私のヨハン！　私が救わなきゃならない！　私が、私が――――」

「動くな」

凛とした声が掛けられ、少女は動きを止めた。首から数センチにみたない位置に停止している『打鉄』の近接ブレードを横目に言葉を口に出した。

「あら・・・誰です？　ここの警備の者は全員動かなくなったと思っていたのだけど」

その声には先ほどの狂気じみた声と違い、歌を歌っている時の様に落ち着き払ったその声には眩暈が起こりそうな美しい響きがあった。だが彼女の首に剣を突き付けている女性、織斑千冬にとっては逆に

今の声色に軽い寒気を覚えさせる様なものに聞こえていた。

「何者だ・・・」

「名を名乗るならば自分からどうぞ・・・親から礼儀ぐらいは教わったでしょう？」

「生憎、礼儀を教えてくれる様な親にはあった事がない」

「それは不幸な事で」

「それに・・・侵入者の小娘に名乗る名など持ち合わせていないのでな」

「それは気が合いますね。私も礼儀の無い女に名乗る名前はありませんので・・・悪しからず」

ピリピリとした、肌に刺す様な何かを感じて本能的に千冬は理解する。この少女は危険だ。このエリアの警備に当たっていた六人の教員を負傷無しに倒したその力もそうなのだが、この少女の存在自体に何か言い知れない不安感を募らせる不気味な感覚を覚える。

「目的は何だ。事と次第によってはこちらも相応の対応をさせてもらう事になるぞ」

「後ろに倒れた仲間達を見れば事も次第もあったものではないと思うのですが・・・」

「質問に答えろ」

「私はあなた達が奪った物を返してもらいに来ただけですよ・・・織斑千冬」

声色を強めて問い質すと少女は薄い笑いを浮かべながら、ゆっくりと千冬へ向き合った。

「貴様・・・この『人形』の持ち主か」

「間接的にはそう言う事になるのでしょうね・・・それにしても織斑千冬、いつまでこんな物を私に突き付けているつもりですか？」

まるで羽毛に触れるかの様に柔かな手つきで千冬の持つ刀に指を這わす。すると次の瞬間、異変が起こった。

「物を断てぬ剣に意味などないでしょうに」

――刀が蒼白い電子発光を起こし、刀身が粒子となって消え去った。

折れたり、砕けるならばまだわかる。だが少女は触れるだけで刀を消滅させたのだ。文字通りにあり得ない光景に千冬は驚愕する。そんな千冬を横目に少女の左手に握られた一本の大鎌が鈍く光った。

「今のあなたは彼には相応しくない・・・あなたはもはや時代遅れなのですよ。『過去の』ブリュンヒルデ」

暗闇から告げる少女は狂気の色を孕んだ双眸を見開き、笑みを浮かべながらその手に持った大鎌を千冬の喉へと振るうのだった。

・

「私は・・・負けるわけには・・・いかないんだあああああああ！」

紫電の光と共にラウラが咆哮する。突き刺された近接ブレード『Ａｒｔｈｕｒ』を全て撃ち砕き、乱れ狂い、弾き飛ばされる雷光が『シュヴァルツア・レーゲン』を中心に破壊を周囲にばら撒く。俺は襲いかかる電撃に反射的に反応し、サブブースターを全開して後方へと飛ぶ。

「なんだあれは・・・」

心に思った事が声に出た。あんな電撃を使う兵器、『シュヴァルツア・レーゲン』には搭載されていないはずだ。

バチッ――――！

「チッ！」

電撃は留まらずに地上に降りていたシャルル達へと走る。俺はメインブースターを吹かして、シャルルと青嶋の前に立ちふさがると『Ａｒｔｈｕｒ』で弾く。

「零司っ！」

「シャルル、青嶋も早く退避しろ！これはもう試合どうこうって話でもない！」

この状況は明らかに変だ。あの『シュヴァルツア・レーゲン』が通常起動しているものとは思えない。少なくともＩＳをまともに動かせないこの二人をこの場に置いておくのは危険だ。

「・・・黒瀬さん！　あれ！」

青嶋に呼ばれ、彼女の指を指す方を見る。そして俺は絶句した。まるで融解したかのように『シュヴァルツア・レーゲン』がドロリと溶け、ラウラを包み込んでいたのだ。あれは・・・ＩＳなのか？いや、違う。あんなものがＩＳのはずがない。第二形態（セカンド・シフト）だってあんな変わり方はしない。

「いったい・・・これは――」

目の前の光景に困惑を覚えるが、ラウラを包み込んだものが形を成した時、俺はそれがなんだか理解した。

ソレが成したもの。それは一機のＩＳ。まるで騎士を思わせる様な甲冑にデュアルウィング。全身装甲（フルスキン）で成されたそれは敵意と殺意を込めた赤い光をクローズヘルムの向こう側に輝かせていた。

そしてその手に握る、一本の近接ブレード。濁りを孕んだ黒によって作られたそれは俺の良く知る剣。

「『雪片弐型』・・・？」

シャルルの声を聞き、俺は内面に浮き上がる激怒を感じた。これは――

「まさか・・・ＶＴシステム」

意識を黒いＩＳ本体から外していた、たった一瞬だった。『瞬間加速』を使ったそいつは自身の『雪片』の射程にまで近づくと逆袈裟斬りを繰り出す。それを刃に滑らせる様にして流し、青嶋を護る様にして抱き締めるシャルルを掴むとこちらも『瞬間加速』を使用して、一気に間合いを開ける。

「今の一撃、間違いない・・・ドイツ政府め、まだあんなシステムを！」

怒りのあまり、声が荒げた。これはあってはならない、あり得てはいけないシステムだ。

「人を傀儡にして、そんなに楽しいかよ！　クソッタレ共が！」

人が傀儡になっていいわけがない。だが、それをドイツ政府は平気でやりやがる。その事はもう嫌というほど味わってきた。ましてやラウラが戦闘行動の為に作られた遺伝子強化素体（アドヴァンスド）ならばなおさらそうだろう。

だが、傀儡にされてまで得た力がこれだと？　何故これほどまでに俺を巻き込んで行きやがる。何故これほどまでに、俺の大切な人を利用しやがるんだ。

「破壊してやる・・・俺がこの手で！」

「零司、待って！」

後ろからシャルルの声が聞こえたが、理解する前に俺と目の前に立つ黒いＩＳは動いていた。黒いＩＳの斬撃を受け止め、押し返す様

に攻勢に移ると力任せに横に薙ぐ。それに対して相手は受け立ち、『雪片』を打ち込む。

「・・・システム風情があの人を真似るな！」

相手は千冬さんのコピー。そのせいなのか、動きには付いていける。同じ、まったく同じなのだ。斬り方も受け方も、まるで千冬さんを真似た動きばかり。だがそれが逆に俺の怒りをさらに募らせていった。

「はあああああっ！」

吠え、意識を高ぶらせながら剣を振るうとそれを打ち払う様に相手も『雪片』を振るう。移り変る攻防。俺は決定打の入らない剣劇を繰り返していく。だが――

――ギ――――

軋む様な音が鳴り、相手の動きがほんの一瞬だけ止まる。その隙を見逃すまいと俺は上段からの一撃を受け流したばかりの『Ａｒｔｈｕｒ』をその流れのままに一閃。腕部装甲と肩のアーマーの一部が切り裂かれ、宙へと舞った。このまま破壊してやる・・・このままこいつを――

――――――少佐・・・――――――

「――――ッ！？」

一撃を与えて、次の行動へと移ろうとした瞬間にガクンと足の力が抜けて、前のめりに倒れそうになるのを必死に抑える。まさか、このタイミングで時間切れだと！？

「黒瀬さん、前っ！」

激しい眩暈を覚えながらも、青嶋の声に誘導され視界を前に向ける。そこには『雪片』を振り上げる黒いＩＳの姿があり、回避しようと頭では思っているものの身体が思う様に動かせない。だが無情にも相手は動きを止める事は無く、『雪片』は迷いなく俺を目掛けて振り下ろされる。

「あああああああっ！」

だが『雪片』が振り下ろされた瞬間にシャルルの叫び声が聞こえたかと思うと俺の身体が物凄い勢いで引っ張られ、刃は俺のバイザーの半分と左肩のパーツを砕いたが俺の命まで奪う事はなかった。

「ぐっ・・・」

「シャ、シャルル・・・・」

壁に激突する様に停止したシャルルを赤く染まりかけの視界で見る。おそらくさっきの一撃が当たったのだろう、俺の事を掴んでいた右腕から鮮血が流れ出ていた。

「シャルル、すまない・・・」

「ぼ、僕は大丈夫・・・だよ」

痛むのだろう、苦痛で顔が歪んでいる。その表情が今、俺の眼に移っているものと重なり、頭の中で過去の光景がフラッシュバックする。まるで頭に心臓があるかのように頭痛が脈打ち、吐き気を催す様な嫌悪感が全身を支配している様だった。

「零司、あれは一体・・・」

「簡単に言えば・・・ドイツが生んだ最悪の産物、その一つだ」

そう、最悪の産物だ。ＶＴシステム、正式名称ヴァルキリー・トレースシステム。かのＩＳ全国競技大会、『モンド・グロッソ』における各部門優勝者には『ヴァルキリー』という称号が与えられた。このＶＴシステムとはその名の通り、『モンド・グロッソ』における『ヴァルキリー』達の戦闘経験をそのまま再現、実行するプログラムの事だ。

だがこのシステムはＩＳ条約である、『アラスカ条約』であらゆる国家ないし企業での開発、生産が禁止とされている。その理由としては、性能面での異常性からもあるが、問題はその使用者に対するリスクだ。

このＶＴシステムの起動条件としてレベルＤ以上の損害と使用者の負の感情に反応するとある。この際に使用者に対しての精神リンクを行い、その感情を感じ取るのだが・・・

「使用者があまりにも深く呑まれれば、ＶＴシステムに精神を乗っ取られてしまう」

「・・・助からないの、それは」

「運が良くても廃人だろうな・・・」

「ボーデヴィッヒさんはこの事を知って、『シュヴァルツア・レーゲン』を――」

「馬鹿な・・・」

このシステムができた時、俺はまだドイツにいた。あの様な兵器は兵士を侮蔑するものだと、ラウラも言っていたんだ。そのラウラが、こんな力に自分から頼るはずがない。

「助け出さないと・・・」

ふらつく足元をなんとか支えながら、立ち上がる。眩暈や吐き気で相手を捉えるのもままならない。だがそれでもやらなくては・・・ラウラをあそこから救い出さないといけない。

「俺が助け出さないといけないんだ・・・」

「駄目だよ、零司・・・」

「俺が・・・俺があれを壊さなくちゃいけないんだ・・・じゃないと、ラウラが！」

「零司ッ！」

パァンッと弾ける様な音と共に俺の頬に痛みが走った。あまりに唐突な出来事だった。シャルルが俺の頬を叩いたという事実を理解するのに、数秒時間がかかったほどだ。

「駄目だよ・・・そんなんじゃ駄目だ」

「シャルル・・・なんで止める！なんで・・・」

「零司、今自分がどんな目にあってもって思ったでしょ？」

図星を付かれ、俺は押し黙った。シャルルは厳しい視線でこちらを見ながら、黙った俺に向かって続ける。

「僕はどうしてあのＶＴシステムにどんな因縁があるのかは分からない。でも、それでもこれだけはわかるよ」

「シャルル、お前・・・」

「そんな風にして、もしも零司が酷い目にあって、それで助かったとしてもボーデヴィッヒさんは喜びやしないよ」

必死過ぎるくらいのシャルルに気押されて、俺は言葉を失っていた。シャルルの言っている事はわかる。多分、俺にもしもの事があったら、あいつは自分を責め続けるだろう。自分を恨み続けるだろう。

「ボーデヴィッヒさんを助けくちゃならないって？　わかってるよ、それは。でも今のままじゃ行かせない・・・だって――」

痛みをこらえながら、悲痛な笑みを浮かべるとシャルルは言った。

「誰も幸せにならない助けなんて、そんなものは誰もいらないから」

その言葉を聞いて、俺は虚を突かれて唖然となっていたがゆっくりと瞳を閉じた。そうだよ、何一人で気張ってるんだ。また俺だけ犠

牲になればいいとか思っていたのか？　自惚れもいい加減にしろってんだ。

「ああ、そうだな・・・そうだよな」

まったく、失笑モノも良いところだ。護るんだろ、皆を。この学園を。だったら、命を張るとか言う前にこんな障害くらい余裕で乗り越えて見せろ。お前にはその為に授けられた剣（ちから）があるだろう。

「零司はボーデヴィッヒさんの騎士（ナイト）なんだから、ちゃんと受け止めてあげないと駄目だよ」

「ああ、そうだよな・・・悪いな、シャルル・・・おかげで目が覚めた」

「そっか・・・それはよかった」

ふとシャルルが力が抜けたのか、俺の方へと倒れてきた。俺はシャルルをアリーナの壁へと寄り掛からせる。

「少し待っててくれ、シャルル。助けなきゃならない奴がいるんだ」

無言で頷くシャルルに背を向けて、黒いＩＳ・・・ラウラを視界に捉える。赤い世界が鮮明になって行く。頭痛も眩暈も消え、完全に元の状態に戻っている。まだ行ける、俺はあいつを・・・ラウラを助ける事が出来るんだ。

「なあラウラ、聞こえてるか？」

届いているのかは定かではない。いや、おそらく届いていないだろ

う。だがそれでも俺はラウラに告げる。

「ちゃんと理解したよ・・・大丈夫だ、お前を悲しませたりはしない」

絶対にお前を悲しませはしない。そしてその力からお前を解放してやる。

「そこで待ってろ――――」

決意を新たに、俺は地面を蹴った。

「――――今、そこに行くから」

ブースターから赤い粒子を撒き散らしながらラウラへと突っ込む。シールドエネルギーは残り少ない。おそらく相手の攻撃はシャルルの傷を見るに『絶対防御』を貫通するものだろう。ああ、もしミスったら死ぬ可能性だってある。だがそれがどうした。だったらミスるな、今この瞬間に全力を見せろ。そして誰も悲しませるな。何故剣(ちから)を持つのか、それは俺の大切なものを護る為だ。だったら、結果は一つしか認めない。

――――『さあ我らが英雄よ、私に見せてくれ・・・君の力を』――――

「うおおおおおおっ！」

『瞬間加速』により、全てが鈍速に感じられる世界の中でブリュンヒルデの幻影は自身の剣を掴むと下段から逆袈裟斬りを抜き放つ。

迫る鋭く、触れたものを全て切り裂く様な鮮明な太刀筋。それは確かに俺を捉える。

――――ブシュッ！

「そいつは俺の大切な人なんだ・・・・」

噴き出た鮮血と共に『黒天』の胸部装甲が剥がれ落ちた。しかし、止まらない。止まりはしない。その様な剣で俺を止められるとでも思ったのか、幻影よ。ならばその違いを・・・俺とお前の思いの違いを見せてやろう。

「返して貰うぞ！」

上段から振り下ろされる、先ほどの斬撃と交差して斬り出された袈裟斬りが両腕ごとそのＩＳの胸部を叩き切る。『雪片』を持った腕がはじけ飛び、斬られた線から零れ落ちる様にして出てきたラウラを俺は優しく抱き止めた。

・

Ｓｉｄｅ　ラウラ・ボーデヴィッヒ

私は・・・戦う為に作られた遺伝子操作素体だ。名前は私を指し示すコード。性別だって、たまたま女だったからそうなっただけ。私の全ては祖国であるドイツの為に戦う事が使命であり、それ以外の

理由はいらなかった。

そしてあの忌まわしき『境界の瞳（ヴォーダン・オージュ）』の移植実験以来、私の存在意義は失われた。全てにおいて優れていたはずの私は消え去り、部隊の人間は敵となった。あの嘲りと侮蔑の視線を今でも鮮明に思い起こす事が出来る。

そして与えられた出来損ないの『烙印』、それを恥じ、隠す様に眼帯をしていた。この瞳が憎かった。私の全てを奪った、この瞳が。目が見えない、基本兵士以下の遺伝子強化素体。軍人としてはもはや除隊、そして廃棄処分までもが決定していたらしい。

しかし、その話を聞いた時には私は何の疑問すら感じなかった。使えないならば、切り捨てる。当り前の事だ。栄光あるドイツ軍人であれば、なおさらそうだろう。もはや消される覚悟はできていた。生き残る理由などなかった・・・そう、なかった、のだ。

『ラウラか、良い名前だ』

彼が現れてから、私の全てが塗り替えられていった。黒瀬少佐と出会ったのは、彼の受勲式の時だった。この時には存在を隠されながらもすでに彼はドイツ軍でも有数のＩＳ搭乗者だった。数多の戦場を駆け抜け、そしてアフリカで起きた内乱を終結まで持って行った英雄だった。

最初に彼に抱いた感情は『嫉妬』に近いものだった。私はどうして彼の様になれない。自分には力があった。それなのにどうして、と。だから私は問い詰めた。彼に、私とあなたの違いは何なのかと。

『俺は俺で、お前はお前だからだよ。お前はどうやったって俺には

なれないし、俺はお前にはなれないだろう？　だから、お前はお前の望む・・・お前になればいいんじゃないか？　その為だったら、俺はいくらでも協力するぞ』

単純明快だった。何を問うんだという様な顔をされた。だが、私の心は何か付き物が落ちた様な感じだった。それからだった。私が彼と時間を共にするようになったのは。

彼は私を余すことなく鍛え上げた。別に特別な訓練を行ったわけではない。彼は自身の持っているＩＳの技術を私に叩き込んで行った。そして私はＩＳ専用部隊へと入隊する事になるレベルにまで叩き上げられていた。

嬉しかった。出来損ないだった自分がここまでできるのだという事を証明できた。だがそれ以上に彼に喜んでもらえたのが、何よりも嬉しかったのだ。

おそらく、この頃からだろう。私の心に『黒瀬零司』という存在が住み始めたのは。彼に褒めてもらえるのが、彼と共に居るのが・・・そして彼の笑顔を見るのが嬉しかった。だからこそ、私には理解できなかった。

『お前には理解できないだろうし、理解させたくもないんだよ・・・ラウラ』

あの丘で別れて、私と再開した少佐はそう言った。全てに絶望し、私の声はもう届く事はなかった。嫌だった。彼の輝きを、彼の温かさをもう一度、私は感じたかった。

『良くやったな、ラウラ』

褒めてもらえて、嬉しかった。

『行くぞ、ラウラ』

側にいるのが、誇らしかった。

『お前は可愛いな、ラウラ』

柔かい笑顔が、眩しかった。

失いたくない。失いたくなかった。だからここまで来た。この場所で来たんだ。彼を取り戻したくて、あの笑顔がまた見たくて・・・

そしてこの場所で彼は笑っていた。私がいない、この場所で。

私はおそらく、それが許せなかったのだろう。何故、その笑みを向けてはくれない。どうして、またあの場所で笑ってくれないんだ。

自分の中の黒ずんだ感情が流れ出るのがわかった。恨みは妬みに、怒りは嫉妬だった。私は・・・この場所を許せなかった。この場所が少佐を縛り付けている、だからこの場所を憎み続けた。だが・・・違った。

彼はこの場所で満足していると言った。縛り付けられてなどいなかった。むしろ望んで、この場所にいたのだ。

私は認めたくなかった。理解はしているのに、止まらなかった。そして私は今、最悪の形で彼の前に立っている。

これは私にとっての罰なのかもしれない。事実に目を瞑り、耳を塞いで、関係のない者達まで傷付けた私に対する罰。その罰ならば、私は受け入れよう。それが少佐に対する罪滅ぼしとなるならばこれでいいのかもしれない。

だけど・・・もし許されるのならば・・・

あの優しい笑顔の元へ・・・もう一度――――

「なあラウラ、聞こえているか？」

――――少佐？

「ちゃんと理解したよ・・・大丈夫だ、お前を悲しませたりはしない」

――――・・・私は・・・

「そこで待ってろ――――」

――――・・・えっ？・・・

「――――今、そこに行くから」

不意に聞こえた少佐の声。その声に私は目を瞑る。あなたは・・・あなたという人は。あなたに罰せられて、それで良いと覚悟を決めた次の瞬間にはこれだ。罪を認め、罰を受ける・・・それなのに・・・あなたは私をその罰からも救おうというのか。あの暗闇に手を差し伸べた様に。また私を救うというのか。

――――・・・少佐・・・私は・・・

心が温かくなる。それは彼の居た時にこの感じたものと同じ。心地よくも、擽られる様なこそばゆさを感じさせる。側にいたいと思い続ける、その原因ともなったこの感情。これは・・・まさか・・・

そう思った瞬間、点から光があふれ、私を照らし出した。そこに見えるのは剣を持ったＩＳ。それはまるで黒騎士の様に力強く、点を線へと変えた。そしてそこに見えたのはとても優しい笑顔。それを見て、私は確信した。

「すまない・・・」

「ごめんなさい、少佐・・・」

「謝るな・・・お前は悪くないさ」

ああ、なんだ。単純な答えじゃないか。またあなたに笑われてしまうな・・・

「おかえり、ラウラ」

「・・・はい」

私はただ、あなたの事が好きだったんだ。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

・

Ｓｉｄｅ　織斑千冬

「おおっと、そこまでだ」

保管庫に金属同士のぶつかる音が鳴る。見ると、私の首に迫っていた大鎌は背後から突き出された三又の槍によって防がれていた。少女はその背後を見ると、口端を釣り上げた。

「あら、他にも居たみたいですね」

「また気付かれなかったよ・・・前も思ったけど、私って影が薄いのかね」

左手で口に咥えた煙草を持ち、紫煙を吐き出すと同時にイリア・ブルシロフスカヤ教員はぼやくように言い大鎌を外側へと弾くとそれと同時に私は彼女と共に少女から距離を取った。間一髪とはまさにこの事、ブルシロフスカヤ教員の登場は私にとっては思ってもみない援軍であると同時に命を繋いだ事を意味していた。

「ちょっとヤバかったみたいだね、織斑先生？」

「ええ・・・今のは助かりました」

そう短く言葉を交わすと、ブルシロスカヤ教員は一本の近接ブレードを『展開』し、私に渡す。そして二人は赤く染まったドレスを着た少女を睨み付ける。先ほどの不可解な現象を見るに、相手は何か隠し玉を持っていると思っていいだろう。だとすると、油断はできない。

「さてと、侵入者さん？　大人しく掴まってくれないかね」

「まあ、この状況はそうはならないだろうがな」

「・・・・ハァ」

私とブルシロフスカヤ教員を見て、少女はため息を吐くと両手を広げた。

「あなた達と戦うのは構わないのですが、私達も生憎時間がないもので・・・」

そして先ほどの鎌と同じ、赤い光が瞬時に彼女の背後の収縮し、クジャクの様な九枚の羽の様なものが形成される。何をするつもりかは分からない。だがこのまま行動を許すつもりもない。私とブルシロフスカヤ教員の奇しくも同じものだったらしく、私達は少女へ向けて床を蹴り、それぞれの得物で攻撃する。

「ハッ！」

「シッ！」

迷いのない、的確な斬撃と刺突。だが少女はそれを大鎌の刃と持ち手の部分で華麗に弾くと、部屋の奥へと後退。そして次の瞬間に展開された羽の先が赤く輝いたかと思うと――

「失礼させていただきますよ・・・お二人共」

収縮した光は破壊エネルギーとなって射出され、天井の一点に九発

のレーザーが命中。地下六百メートルにあるこの場所に天空をあらわにさせ、光を降らせた。その光に照らされながら、少女は私達に笑いかける。その笑顔は寒気がするほど、美しいものだった。

「それでは、お二人共・・・さようなら（アウフヴィーダーゼン）」

「待てっ！」

「逃がすかっ！」

飛ばせはしない。その思いを込めた電光石火の突きが少女の両肩へと打ち出される。そしてそれは確かに少女の両肩を貫いた・・・かに見えた。

「・・・なっ！？」

「・・・これは・・・」

ブルシロフスカヤ教員の表情が驚愕の色に染まった。おそらく、私も同じ様な顔になっているのだろう。確かに、私と彼女の刀と槍は少女の肩を捉え、貫いていたのだ。だが、結果はどうだ。外していない・・・いや、外していならまだ納得できた。

「これはどういうことだ・・・」

「・・・居ない・・・だと？」

そう、少女はすでに私達の目の前から居なくなっていたのだ。貫く瞬間はこの目に移っていた。疑似展開として眼前にハイパーセンサーを起動してまでして、しっかりと確認していたのだが・・・

「まったく、自分の眼を疑いたくなるな・・・」

「考えるにあの少女のＩＳのシステムか何かか・・・」

苦々しく、言いながら千冬は天井に開けられた大穴を見上げる。侵入者に逃げられ、その上に解読終了していないＩＳのコアまでも盗まれてしまった。自分の不甲斐なさに刀を持った手を握りしめる。そんな千冬の背中をポンとイリアが叩いた。

「ま、そうカリカリするな。確かに逃げられたが、私達は最善を尽くした・・・」

「・・・しかし――」

「ほら、それよりも私達がしなくちゃならない・・・というより、君がしなくちゃならない事が他にあるだろ？」

そう言うとブルシロフスカヤ教員は自分の耳元をトントンと叩く。それはおそらく、私の耳にある通信用イヤホンの事を指しているのだろう。自分の耳に入った通信用イヤホンを第二アリーナ会場と繋いだ。すると――

「やったー！　やりました！　やりましたよ、織斑先生！　黒瀬君が、黒瀬君が――――！」

ブツンッ！

あまりにも大音量で鼓膜が破れるのではないかと思うほどの山田先生の叫び声に私は即座に通信を切った。そんな私の背中をブルシロ

フスカヤ教員は笑いながら押した。

「さあ行こう。今年の学年別トーナメント唯一の勝者だ。せめて我々でしっかり祝ってやらなければ」

「あなたに言われなくても、そのつもりです」

「そうか・・・では行こう」

内心ではブルシロフスカヤ教員も不安が絶えないのだろうが、彼女は笑う。ならば私もこの事は胸の奥へと秘めて、零司に会いに行こう。せめての最高の賛美を我が弟子に送る為に。

Ｓｉｄｅ　ｏｆｆ

ＥＰ２６　ＥＮＤ

EP26　力（後書き）

はい、終了です。

ＶＴシステムの終わりはこんな感じです。まあ、これは・・・もしかしたら書き換えるかもしれません。こんなんでいいのかなって感じなので・・・うわ～ん、なんだか駄目な感じだ～、ごめんよ～ラウラ～（ＴωＴ）。あ、もしこんな感じでも良いと感じたならば感想をいただけると幸いです。

あ、あとＶＴシステムの設定はちょっと緋星オリジナルにしてみました。理由は・・・私の好みの問題です。

また変な新キャラが登場です。こいつは・・・まあ、なんか狂ってる感が伝われば幸いです。狂気狂気って書いてるからなんとな～くは伝わってるとは思います。

えーと次回はついに二巻の〆に入るわけですが・・・先にいますとほとんど原作通りです、はい。

えーこれで今年の投稿は終わりです。さて、どうかできれば来年もよろしくお願いします。

では、また（＾ω＾）ノシ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5215u/

ＩＳ　もう一つの翼

2011年12月31日03時57分発行